

# 刀使ノ武芸者一修羅流転録

重曹とクエン酸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日本には古来より人に仇名す荒ぶる神―【荒魂】とそれを鎮め祓う巫女―【刀使】がおり、両者は今の世にも存在する。

しかし、この世界には森羅万象を喰らい貪り災厄をもたらす異形の存在―【天魔】とそれを覆滅する為にその生涯を捧げ、修羅道へと堕ちる人柱が存在する。

彼らは【武芸者】と呼ばれ、後の世までそう記されることとなる。

これは刀使と武芸者、決して相容れぬことのない者達の記録。

# 目次

## 公開情報

【キャラ・オリジナル】プロローグ<sub>く</sub>風雲再起 | 1

【キャラ・原作関連】プロローグ<sub>く</sub>風雲再起 | 24

## プロローグ

1. 始まりの腹鳴 | 66

2. 欲に勝つ人間などいない | 70

3. 初めての立ち合い | 75

4. 折れた花 | 88

5. S装備 | 102

6. 帰着 | 123

## 風雲再起

7. 初任務 | 142

8. 火柱 | 154

9. 模擬戦 | 其ノ壺 | 168

10. 狂犬と妖精 | 198

11. 正道から外れた道 | 荒魂変異体 | 221

12. その来訪者は相識ではあるが | 238

13. 獣の情緒 | 251

14. 刃、血濡れて | 262

15. 紅蓮旋改 | 271

16. 兄妹 | 276

17. 雛鳥は雷花（かみなりばな）のもとで | 288

18. 刀使へとなるため | 305

19. 編入 | 317

2 0.	餞別	323
2 1.	変わりゆく世界の変わらない朝	343
2 2.	武装試験	359
2 3.	修羅は突然やって来る	372
2 4.	酔いどれ強者ども	385
2 5.	一触即発前 — 其ノ壱 —	400
2 6.	一触即発前 — 其ノ弐 —	405

## 公開情報

【キャラ・オリジナル】プロローグ〜風雲再起

美濃関学院

平城学館

鎌府女学院

長船女学院

綾小路武芸学舎

## 【男主人公】

東西南北

中央

1.

年齢 20代

一人称 俺

所属 折神家（雇われ）

御刀 長巻（銘……??）

## 備

考 男で在りながら御刀を扱う武芸者。

焰燃型が得意な師匠がいる。

食欲、性欲には抗えない。Mの可能性。

女装している為、折神 紫、親衛隊のメンバー以外には東西南北  
中子と名乗っている。

型 髪

☒ 1. ～ 2. ☒ 肘まで届きそうな程の長髪。  
手入れはしていない為、ボサボサに乱れたベタつきがある黒髪。

☒ 3. ☒ 黒髪ストレートロング

☒ 7. ～ ☒ 黒髪ポニーテール

☒ 9. ☒ ポニーテールを解く

☒ 10. ～ ☒ 後頭部から三等分に分けた毛束を一本に束ね

た

いわゆる三つ編み。

服

装

☒ 1. ～ 2. ☒ 所々に解れや破れた袴 ☒ 3. ☒ 支給さ

れたジャージ

☒ 7. ～ ☒ 黄枯茶を基調とした親衛隊専用の制服（半着仕

様）

靴はタクティカルブーツ

☒ 9. ☒ 支給されたジャージ

☒ 10. ～ ☒ 黄枯茶を基調とした親衛隊専用の制服（半着仕

様）

流派 百千万億流

技 第一式 第二式

イカツチノカタ  
雷電型

しでんせん  
紫電閃

カグツチノカタ  
焰燃型

ひばしら  
火柱

ぐれんせん  
紅蓮旋

ドコウノカタ  
土公型

荒神 岩喰

虚空型  
オボロノカタ

複合技 紅蓮旋 改

(紫 電 閃×紅 蓮 旋)

人名 呼び方 フラグポイント (累計)

折神 紫 御当主

折神 朱音 折神 朱音√ 1

獅童 真希 獅童 獅童 真希√ 1

此花 寿々花 此花 此花 寿々花√ 1

皐月 夜見 皐月 皐月 夜見√ 1

ノア ノア

ハジメ ハジメ

【女主人公】 百合園 小百合 ☒4. ☒

年齢 ??

一人称 私

所属 特劍

御刀 七支刀 (形状に変化有)

劍種類 腰 銘 ??? 納刀場所

## 短刀

備考 元美濃関学院のOG

サイズはAである為、少なからずコンプレックスを抱く。

## 髪型

☒ 4. く ☒ 枝毛の無い綺麗に整えられた漆黒のポニーテール

## 服装

☒ 4. ☒ 上下共にグレーのスーツジャケットと下は動き易い様にパンツタイプのボトムス。

腰には御刀を帯刀する金具を装着し、鞆の鐙こじりを地面に向けて帯刀。

☒ 5. ☒ ロングカーディガンとメンズタイプのミリタリーウオッチを着用。

流派  
?????

技  
????

人名 呼び方 フラグポイント (累計)

古波蔵 エレン 古波蔵さん 古波蔵 エレン√ 1

益子 薫 益子さん

氏名不明の少女√ 1

折神 朱音 朱音様

真庭 紗南 真庭学長  
金城 董 金城さん

【武芸者】 ノア  1 2.

年齢 ??

一人称 ワタシ

所属 ??

備考 中央曰く、胡散臭く関わり合いになりたくない武芸者。

人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げる癖がある。

アマゾンナイト  
天河石やグラウンディエライトといった青緑色のケイ素を形成し  
荒魂についた『ナニカ』を結晶体へと変貌させる事が可能。

ハジメと連絡を取り合い不穏な動きをみせる。

瞳の色

1 2.  黄色

髪型

1 2.  黄金色の丸刈りクルーカット

服装

1 2.  スーツに革靴を着用

流派  
技  
????  
????

人名 呼び方  
東西南北 中央 キミ (彼<sup>カレ</sup>)  
ハジメ ハジメ (彼<sup>カレ</sup>)・アナタ  
折神 紫 折神氏<sup>オリガミ</sup>・紫嬢<sup>ユカリ</sup>

【武芸者】 ハジメ ☒ 1 2. ☒

年齢 ??  
一人称 オレ  
所属 ??

備考 軽薄そうな声の『アイツ等』の内の一人。  
中央とノアの知り合いで、武芸者であることは間違いない。  
酒飲みな模様。  
バケモノとの戦闘ではある得物を二本使う。

瞳の色 ???  
髪型 ???  
服装 ???  
流派 ????

技  
????

人名 呼び方  
東西南北 中央  
ノア アンタ  
中央アイツ

【????】  
ミヤコ ☒ 1 2 . ☒

年齢 ??  
一人称 ??  
所属 ??

ある。  
備考 中央とノアの知り合い。名前からして恐らくは女性で

瞳の色

髪型

服装

流派  
技  
????  
????

人名 呼び方  
東西南北 中央  
ノア

【???

降魔ごうま

辞世じせい

☒ 16.

く ☒

年齢

???

一人称

吾われ

所属 降魔家

備考

旧姓：折神おりがみ

星藍しょうらん。

折神 紫と折神 朱音の兄。折神家の長子だったが、ある事情と女系家系ということもあつて折神家の分家たる降魔家に出家する。

頭部と顔の輪郭までをガスマスクのように覆うプラチナ製のマスクを着用している所為で発声はくぐもる。

紫の中に潜む大荒魂タギツヒメの存在を認知しているが刀使としての能力がない為、見逃しており、

本人曰く、祓うことは出来なくとも苦痛を与えることはできると言う。

ナニカを探している為、変装した女と共に暗躍している。

身長

瞳の色

髪型

総髪

服装

白衣びやくえに白地の紋入りがある白の袴

(特級：白固織有紋)

流派

技

人名

呼び方

折神 紫 お前

変装した女 貴様

大荒魂タギツヒメ

貴様

【???

【美濃関学院の生徒に変装した女】

☒16.

☒

年齢 ??歳

一人称 わたし

所属 ???

備考

既婚者。だが恥じらいは皆無の様。

伍箇伝のどこかに子供がいるが、自分の才能を全く受け継がなかつ

たという理由でその子供をゴミ扱いしている。

愛車を保有しており、運転は可能。辞世と何かを搜索している。

アマゾンナイト  
天河石やグランディエライトといった青緑色の結晶体を足から形成することが可能。

身長

瞳の色

髪型

服装

折り返しのあるニット帽を被り美濃関学院の制服とその上からスウェットシャツを着る

流派

技

人名 呼び方

降魔 辞世 アンタ

【元刀使】 ヒルデガルト・V・リッター  21

年齢 20代

一人称 ウチ

所属 ???

御刀 返還済み

備考 関西訛りのドイツ人。

元綾小路武芸学舎のOGで現在は教育実習生として平城学館に赴任している。

かなりのヘビースモーカーだが好みの銘柄はなく、その日の気分で吸う銘柄が変わる。紙巻<sup>シガレット</sup>（ライター）・葉巻<sup>シガー</sup>（マッチ）派。

国内にサイレンサー込みの拳銃を所持しているだけでなく国籍不明の航空母艦を所有することからかなりの金持ちの可能性。

甘いモノが苦手だがそれしか無い場合は致し方なしと食す。

身長

瞳の色

碧眼

髪型

暗いブロンド

服装

流派

技

人名

呼び方

百合園

小百合

小百合

聖 聖

※基本相手を貴様呼び

【武芸者】 天地あまち 静音しずね ☒ 2 3 . ☒

年齢 40代

一人称 わたし

所属

武器

???????

備考 修羅に到った武芸者の一人。自分の遺影を持ち歩く故人。

二年前に起きた【北極決戦】に参加、?????に同化される前に死亡（小百合が確認済み）したが生き返り小百合達の元へと姿を見せる。肉体年齢が実年齢よりも若く見られる。

身体能力の高さとある一門である聖に目を付け標的として狙いを定める。

身長

瞳の色

金色

髪型

亜麻色の三つ編みを胸元に足らす

服装

喪服

流派

技

人名 呼び方  
百合園 小百合 小百合

【刀使】

美濃関学院

平城学館

【刀使】 一刀 雷花  
「かみなりばな雷花らいかと書いて雷花らいかと読むように」

年齢 ??  
一人称 わたし 己  
所属 平城学館  
御刀 ??

備考 チェーン付きのメガネを掛けた刀使。左耳にはデルタ  
六面体のイヤリングを着けている。

芝居好きだが自身の演技力が皆無なのは自覚してはいるが、各映画  
祭を総なめにする。と談する。(自称)

大荒魂に憑かれた折神 紫や柊家の事、姫和の『ひとつの太刀』などいろいろと情報を得ておりそれなりの大食女。(炭水化物中心)

間違えられる為か初対面の相手には自己紹介で「雷かみなり花はなと書いて雷花らいかと読むように」と言う。

中央が扱う流派の五つの型三式まで使用ができる。  
度々偽名で名乗ることがある。

平城学館の卒業前に姫和へ自身の技を伝え折神家へ出向した。

### 使用した偽名一覧

Pablo Diego・Jose・Francisco・De・Paula・Juan・  
Nepomuceno・Maria・de・Los・Remedios・Cipriano・de・  
ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・シプリアーノ・デ・  
ラ・サンテイシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカチュウ ≪/le  
ft ≫

ひらいたいら へいべい  
平平 平平

おおぎまちさんじょう ライチユウ  
正親町三条 雷丘

らいでん ライチユウ  
雷電 雷丘

らいでん  
雷電 ピチュー

バイ アグラ  
ジェネリック・倍・胡坐 (用法用量は守れよ)

身長 ???

瞳の色

翠色

髪型

青色の肩上まで伸びたミディアムヘアで毛先は水色で  
開花した彼岸花の雄しべや雌しべのように外にハネている。

服装

平城学館の制服の上から研究用白衣を羽織る。

????????????????????????????????  
オリジナル技  
(突き)

虚オボロノカタ空ノカタ型

???

???

???

岩いわ荒あらが土ドコウノカタ公ノカタ型  
喰く神がみ

???

水ミズ龍チノカタ型

???

???

???

紅ぐれ火ひ焰カグツチノカタ燃し型  
蓮ん柱しら

旋ん

???

紫し雷イカツチノカタ電ノカタ型  
電でん閃せん

閃ん???

???

技 第一式 第二式 第三式

鎌府女学院

【妖精】 佐等 さとう イチイ（小柄の刀使） ☒9. 〽☒

年齢 ??

一人称 儂

所属 鎌府女学院高等部一年

御刀 くれたけさやしようとう 呉竹鞘御杖刀

備考 ☒9☒に登場した老人語で喋る『小柄の刀使』

失明しているか定かではないが瞼を閉じ切って御刀を杖代わりにしており、逆手居合術の使い手で写シを張るときは抜刀をしない。

光枝同様に小さな音や中央の気配に気付く。

武芸者については知見があり中央を武芸者であることを看破している。

大抵の場合、会話する相手をお主呼びする。

身長 140にも満たない

瞳の色

???

髪型

髪色は黄色味のプラチナブロンドで大きく波を打つような所謂スーパードロングウェーブは胸下付近まで伸ばし、制服の襟カバーを覆い隠す。

服装

上下ともに魔改造した制服を着用。

ブレザージャケットの袖口はウィザードスリーブのように円錐形に、又プリーツスカートはマキシ丈に仕上げている。（白いラインが

くるぶし付近を覆うまで伸ばしている)

流派  
????流

(逆手居合)

技  
????

人名 呼び方

東西南北 中央 お主

此花 寿々花 お主

裏隠居 光枝

(短気な刀使)

光枝

(お主)

【刀使】

新木<sup>あらき</sup> 聖<sup>ひじり</sup> □21. ㄣ□

年齢 ??歳

一人称 聖<sup>ひじり</sup>

所属 鎌府女学院 高等部

御刀 ???

備考 鎌府女学院の刀使。単独(同伴有り)で行動している為、  
実力はかなりのモノである可能性有り。

人助け、社会貢献活動と称しては犯罪行動を起こしよく警察に捕ま  
る。その度、余計な言動で度々ヒルデガルトに説教を喰らう。

語尾を伸ばす癖に加え御刀を忘れることがある。

夜目でも獣並みに利く目と銃弾を回避できる身体能力の高さを有

し、とある一門に連なるとされる。  
タバコの臭いは無理。

身長

瞳の色

髪型

服装

流派

技

人名

呼び方

百合園 小百合 ゆりちゃん

ヒルデガルト・リッター ヒルちゃん

長船女学院

〔メカクレ・口隠し系巨女〕

金城<sup>かねしろ</sup>

董<sup>すみれ</sup>

☒4.

く  
☒

年齢 15歳

一人称 ワタシ

所属 長船女学院中等部三年

御刀 破邪の御太刀はじやおんたち（全長465センチメートル、重量75キロ）

備考 単独行動が許された数少ない刀使の一人。親衛隊入り  
が確実とされていたが個人的な理由により辞退している。

エレン程ではないバストを持つ。

マフラーで口元を隠し、独自の喋り方（前置きでカカカ、ククク等、主に力行）で話す。

相対する相手を強者と認識すると暴走する。

暴走を収める為には自身が満足するか飽きる、はたまた別の荒魂を認識するかの三択。

御前試合では一刀に敗北している。

小百合4・折れた花と中央14・刃、血濡れての事を知っている？

身長 2 m

瞳の色

瞳色

髪型

やや青みの濃い紫である瞳色

・普段は前髪で目が隠れている

・暴走時、口元以外は確認できる

服装

???

流派 ??流

技 第二式 第三式

焰燃型 紅蓮旋

人名 呼び方

百合園 小百合

先輩

古波蔵 エレン

古波蔵

益子 薫 益子

益子

獅童 真希 獅童

獅童

此花 寿々花 此花

此花

皐月 夜見 皐月

皐月

## 【刀使】

前園

栄子

☒6.

☒

年齢 行年17歳

備考 長船女学園高等部二年（舞草非構成員）

生前では教員から模範的でとても優秀と評価されていた。

刀使としての力量も平均以上であるが志が低い。（刀使以外の進路を模索中）

写シを張れる回数は平均以上で、八幡力と金剛身は三段階まで可能。

索敵能力も秀でており、『明眼』と『透覚』技術も習得済みであった。

刀使と思われる少女に殺害され、蔵島 伝恵と共に爆発事故に巻き込まれたとして

処理される。

## 【刀使】

蔵島

伝恵

☒6.

☒

年齢 行年14歳

備考 長船女学園中等部二年（舞草非構成員）

相棒バディを組んでいた前園 栄子への評価は高い。

特別任務中、小型の荒魂を単独で討伐しようとしたところ

刀使と思われる少女に殺害され、前園 栄子と共に

爆発事故に巻き込まれたとして処理される。

### 綾小路武芸学舎

【狂犬】 裏隠居うらいんきよ 光枝みつえ（短気な刀使） ☒9. ~☒

年齢 ??

一人称 アタシ

所属 綾小路武芸学舎高等部一年

御刀 二刀一对（鞘・制服を限界まで巻き付け、袖で縛り上げて固定している）

備考 ☒9☒に登場した『短気な刀使』

頭に血が上りやすく怒り心頭に発すると誰も手に負えず、収まるまで放置される。

五感が鋭いのか小さな音や中央の気配を察知し、対面する中央を強者と捉える。

過去に自身が認めたとある刀使とナニカがあった模様。

身長 ???

瞳の色

???

髪型

鮮やかな黄赤のある蜜柑色のラインバレイヤージュで短髪

服装

同学の指定ジャージたる淡い灰色のジャージの襟を立て、

フアスナーを閉じ切っているがプリーツスカートは指定の制服。

右耳にイヤークフを一つと指に着けたアクセサリを嵌めている。

(どちらも銀色)

流派

????

技

????

人名 呼び方

東西南北 中央 アンタ

此花 寿々花 此花

佐等 イチイ 佐等

「????」

「????」

「6」

「」

「<sup>テ</sup>「<sup>ー</sup>「<sup>タ</sup>「<sup>寄</sup>「<sup>越</sup>「<sup>せ</sup>」<sup>ザ</sup>「弱い……」

年齢 ??

一人称 ??

所属 ??

備考 金属製の刃の鞭を扱う刀使と思われる少女。

どこかで長船女学園の制服を入手し、ミツヒロ・バートランドの手引きでS装備<sup>ストームアーマー</sup>研究施設に入り込む。

御刀の柄巻を人差し指だけ、もしくは人差し指と中指でトントン、トントン、と一定のリズムを刻み続ける癖があり、小型の荒魂を握り潰す握力がある。

特別任務中の前園 栄子と蔵島 伝恵を加減したにもかかわらず殺害した。

### 【その他】

※近日中に原作関連（刀使ノ巫女、我間乱―修羅―、蒼穹のファフナーEXODUS）を作成、移動します。

⇒移動済みです。

【キャラ・原作関連】☒プロローグ〜風雲再起☒

目次

―	〔伍箇伝一覧〕	―
―	〔誕生日一覧〕	―
―	〔御刀一覧〕	―
―	〔登場人物〕	―
	(刀使ノ巫女)	
	(蒼穹のファフナー)	

―	〔伍箇伝一覧〕	―
---	---------	---

美濃関学院

平城学館

鎌府女学院

長船女学院

綾小路武芸学舎

折神家

その他

美濃関学院

学 長

羽島はしま

江麻えま

教 師

田中 妙子  
たなか たえこ  
刀匠専科

高等部

三年 服部 達夫  
はっとり たつお

研師

二年

福田 佐和乃  
ふくだ さわの

一年

稲河 暁  
いなご あかつき

舞草（日高見派）

中等部

二年

須原 里香  
すばら りか  
神職専科

安桜 美炎  
あさくら みほの  
調査隊

衛藤 可奈美  
えとう かなみ

柳瀬 舞衣  
やなせ まい  
可奈美の友達

友紀 可奈美の友達  
ゆうき かなみ

昌 可奈美の友達  
あきら かなみ

莉子 可奈美の友達  
りこ かなみ

一年

寺下 てらした  
長江 ながえ  
ふたば

塗師

卒業生

恩田 おんだ  
累 るい  
青砥 あおと  
陽司 ようじ

鞆師

平城学館

学 長

五條 ごじょう  
いろは

高等部

三年 さんねん  
小池 こいけ  
彩矢 さいあや

警邏科

二年

成瀬 なるせ  
実紀 みき

一年

鎌府女学院

長

卒業生  
獅童 真希

二年  
六角 清香

調査隊

中等部  
三年  
十條 姫和  
岩倉 早苗  
姫野 志保  
丹羽 協夢  
鴨 ちなみ

研ぎ師見習い

松永 衣里奈  
辰浪 桃  
朝比奈 北斗

技師科  
琉球剣風録

学

高津たかつ  
雪那ゆきな

高等部

三年わたぬき  
綿貫  
和美かずみ

二年

播ばん  
青砥あおと  
つぐみ  
陽菜ひな

研究班 (オペレート担当)  
研師

一年

玉城たまぎ  
藤卷ふじまき  
真梨江まりえ  
みなぎ  
みなぎ  
さくら  
和歌子わかこ  
苗場なえば

衛生科  
親衛隊の直属

中等部

三年しちのさと  
七之里  
呼吹こふき

研究班・調査隊

二年

伊南いなみ  
栖羽すう

琉球剣風録

一年  
糸見 いとみ  
沙耶香 さやか  
澄 すみ  
長崎 ながさき

卒業生  
梶月 さつき  
夜見 よみ

長船女学院

学 長

真庭 まにわ  
紗南 さな

高等部

三年  
瀬戸内 せとうち  
智恵 ちえ  
渡邊 わたなべ  
エミリー  
菅野 ささの  
美也子 みやこ  
日高見 ひたかみ  
麻琴 まこと

調査隊・舞草

材料技術者

技術科・舞草

舞草（日高見派）

一年  
益子 ましこ  
薫 かおる

舞草

古波蔵 こはぐら エレン 舞草  
西梢 にしこうえ 技師科専攻

中等部

三年  
丸山 まるやま 茜 あかね  
新多 にった 弘名 ひろな  
下石井 しもいしい 千夏 ちか

調査隊（進級後）  
刀匠科所属（技師科・研究科の講義も履

修）

二年

新多 にった 弘名 ひろな

進級前

一年

加賀美 かがみ ミミ

舞草 よねむら  
米村 よねむら 孝子 たかこ  
小川 おがわ 聡美 さとみ

綾小路武芸学舎

学

長

相楽そうらく

結月ゆづき

高等部

三年

浦賀うらが  
水科みずしな

奈緒なお  
絹香きぬか

特祭隊作戦参謀

二年

木寅ぎとら  
仲野なかの

ミルヤ  
順じゆん

一年

森下もりした  
水科みずしな  
國頭くにがみ

きひろ  
綿香わか  
与あとう

装備科

『とじとも大賞』受賞キャラ

中等部

三年

土師はじ  
鈴木すずもと

景子けいこ  
葉菜はな

工科予科

舞草

二年

折神家

局

長

折神おりがみ

紫ゆかり

卒業生  
此花このはな  
燕つばくろ 結芽ゆめ  
寿々花すずか

?

桐生きりゆう

葉月はづき

アニメ十五話

一年

内里うちさと  
田辺たなべ

歩中あゆむ 中等部1年  
美弥みや

山城やましろ  
蓮井はすい  
鳥喰とりぼね

由依ゆい  
麻由美まゆみ  
優稀ゆうき

調査隊

親衛隊

第一席  
 第二席  
 第三席  
 第四席

獅童しじゆう 真希まき  
 此花このはな 寿々すず花か  
 皐月さつき 夜見よみ  
 燕つばくろ 結芽ゆめ

舞草

折神おりがみ  
 朱音あかね

その他

警察  
 得賀うるが  
 健介けんすけ

神奈川県警機動隊（小隊長）

古波蔵家

リチャード・フリードマン

元DARPA（国防高等研

究計画局）研究員・舞草↓特別希少金属利用研究所（特別顧問）

任

古波蔵 こはぐら 公威 きみたけ

父親・特別稀少金属利用研究所（研究主

古波蔵 こはぐら ジャクリーン

母親・特別稀少金属利用研究所

（研究員）

柳瀬家

柳瀬 やなせ 孝則 たかのり  
柳瀬 やなせ 柊子 しゅうこ  
柳瀬 やなせ 美結 みゆ  
柳瀬 やなせ 詩織 しおり

父親  
母親  
次女  
三女

衛藤家

衛藤 えとう 美奈都 みなと

母親

十条家

十条 じゅうじょう 篝 かがり

母親

―― 誕生日一覧 ――

1月	1月17日	岩倉	早苗
7月	7月19日	木寅	ミルヤ
1月	1月22日	十条	姫和
7月	7月24日	獅童	真希

2月 2月7日 瀬戸内 智恵  
 8月 8月13日 衛藤 可奈美  
 2月14日 柳瀬 舞衣  
 8月30日 六角 清香

3月 3月3日 燕 結芽  
 9月 9月9日 此花 寿々花

9月10日 折神 朱音

4月 4月9日 山城 由依  
 10月 10月10日 播 つぐみ  
 4月28日 稲河 暁

5月 5月15日 古波蔵 エレン  
 11月 11月17日 糸見 沙耶香  
 5月31日 安桜 美炎

6月 6月13日 折神 紫  
 12月 12月4日 七之里 呼吹  
 6月16日 益子 薫  
 12月24日 皐月 夜見

「御刀一覽」

千鳥 ちどり

小鳥丸 こがらすまる

孫六兼元 ましろくかねもと

妙法村正 みょうほうむらまさ

衾々切丸 ねねきりまる

越前康継 えちぜんやすつぐ

薄緑 うすみどり

九字兼定 くじかねさだ

水神切兼光 すいじんぎりかねみつ

ニツカリ青江 あおえ

童子切安綱 どうじぎりやすつな

大包平 おおかねひら

鬼丸国綱 おにまるくにつな

三日月宗近 みかづきむねちか

大典太 おおでんた

数珠丸 じゆずまる

加州清光 かしゆうきよみつ

ソハヤノツルキ

北谷菜切 ちやたんなきり

二王清綱 におうきよつな

小竜景光 こりゆうかげみつ

蓮華不動輝広 れんげふどうてるひろ

実休光忠 じつきゆうみつただ

螢丸 ほたるまる

水口レイピア みなぐち

三条吉家 さんじようよしいえ

延寿国村 えんじゆくにむら

備前三郎國宗 びぜんさぶろうくにむね

山姥切国広 やまんばぎりくにひろ

千手院力王 せんじゆいんりきおう

登場人物 (刀使ノ巫女)

折神 紫 おりがみ ゆかり

☒ 1. ☒

年齢

身長

168cm

一人称

私

御刀

大包平 おおかねひら

所属

折神家

童子切安綱 どうじぎりやすつな

流派

二天一流

瞳の色

髪色 / 髪型 青みがかった黒色で膝下まで下ろして  
た長髪

服装 白を基調とした衣服

趣味 将棋

好きな食べ物 カップ焼きそば

備

考 『折神家当主』で『警視庁刀剣類管理局局長』を務める。

中央とは以前から面識があり、とある人物からの依頼により彼を親衛隊に引き入れ護衛に付かせる。

現在、18年前の相模湾大災厄で討伐できなかつた大荒魂——タギツヒメに憑依されているが肉体の支配権は紫かタギツヒメかは現在のところ不明。

二振り以外にも鬼丸おにまるくにつな国綱みかづきむねちか・三日月宗近おおでんたみつよ・大典おおでんたみつよ太光世じゆずまるつねつぐ・数珠丸恒次じゆずまるつねつぐの四振りの御刀を有する。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方

東西南北 中央 中央

百合園 小百合

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
呼び方				
衛藤 可奈美	獅童 真希	獅童	羽島 江麻	
十条 姫和	此花 寿々花	此花	五条 いろは	
柳瀬 舞衣	皐月 夜見	皐月	高津 雪那	
糸見 紗耶香	燕 結芽	真庭 紗南		
益子 薫	折神 朱音	朱音	相楽 結月	
古波蔵 エレン	ねね			

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box:po. 8, vertical》

美濃関学院  
人名 呼び方

平城学館  
人名 呼び方  
一刀 雷花 一刀

鎌府女学院  
人名 呼び方

佐等 イチイ 佐等  
新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 董 金城

前園 栄子

蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎

人名 呼び方

裏隠居 光枝 裏隠居

《box》

【親衛隊第一席】 獅童<sup>しじょう</sup> 真希<sup>まき</sup> 3. 5

年齢 身長 174cm

一人称 ボク 御刀<sup>うすみどり</sup> 薄緑

所属 折神家 流派 神道無念流

瞳の色

髪型 淡香に似た髪色に左側のもみあげは三つ編み状に整えられている。

服装 親衛隊服。その上から白いジャージを肩に掛けている。

半袖仕様の為か露出した両腕には覆うように包帯が巻かれ、動き易いようにスカートの下にはスパッツを履いている。

趣味 勝利のための努力

好きな食べ物 鶏の唐揚げ

備

考 『折神家親衛隊第一席』

御前試合では一刀 雷花や金城 堇が出場している中、優勝且つ連覇を達成している。

紫の命で最初は中央の事を渋々受け入れていたが護衛中の襲撃や堇との戦闘で彼の実力を目の当たりにしてからは親衛隊の仲間として認め始める。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方 ↓ 最新話

東西南北 中央 ↓ 東西南北 ↓ 中央（キミ）

百合園 小百合

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
----	-----	----	-----	----

折神	紫	紫様	衛藤	可奈美	羽島	江麻
此花	寿々花	此花	十条	姫和	五条	いろは
皐月	夜見	皐月	柳瀬	舞衣	高津	雪那
燕	結芽	糸見	紗耶香	真庭	紗南	
折神	朱音	益子	薫	相楽	結月	
古波蔵	エレン	ねね				

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box:po.8, vertical》

美濃関学院  
人名 呼び方

平城学館  
人名 呼び方  
一刀 雷花 一刀

鎌府女学院  
人名 呼び方

佐等 イチイ 佐等  
新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 董 金城

前園 栄子

蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎

人名 呼び方

裏隠居 光枝 裏隠居

《box》

【親衛隊第二席】

此花 このはな 寿々花 すずか ☒ 3. ☒

年齢

身長

158cm

一人称

私 わたくし

御刀

九字兼定 くじかねさだ

所属

折神家

流派

鞍馬流

瞳の色

髪型 臙脂えんじに近い赤い髪色で頭頂部の辺りから後ろ髪を白  
い紐で結び、  
ゆるふわ状のポニーテールで仕上げる。

服装 親衛隊服。

スカートの下にはレギンスを着用。

(赤を基調とした一本の黒いラインが入っている)

趣味 クラシック音楽

好きな食べ物 湯豆腐

備考 『折神家親衛隊第二席』  
獅童真希同様、親衛隊に入る前、御前試合で準優勝且つ連覇を達成  
している。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方  
東西南北 中央 東西南北さん  
百合園 小百合

—— 原作呼び方一覧 ——

人名 呼び方 人名 呼び方 人名

呼び方

折神 紫 紫様 衛藤 可奈美 羽島 江麻  
獅童 真希 獅童さん 十条 姫和 五条 いろは  
皐月 夜見 皐月さん 柳瀬 舞衣 高津 雪那  
燕 結芽 糸見 紗耶香 真庭 紗南  
折神 朱音 益子 薫 相楽 結月  
古波蔵 エレン ねね

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box：p0.8, vertical》

美濃関学院

人名 呼び方

平城学館

人名 呼び方

一刀 雷花 一刀さん

鎌府女学院

人名 呼び方

佐等 イチイ 佐等さん

新木 聖

長船女学院

人名 呼び方  
金城 董 金城さん  
前園 栄子  
蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎  
人名 呼び方  
裏隠居 光枝 裏隠居さん

《／box》

【親衛隊第三席】

皐月さつき 夜見よみ  1.

年齢 身長 160cm  
一人称 私 御刀 水神切兼光すいじんぎりかねみつ  
所属 折神家 流派 深甚流

瞳の色

髪型

毛先が僅かばかり黒いセミロングの白髪

服装

親衛隊服

趣味 お茶を入れること

好きな食べ物 紅茶、きりたんぽ

備

考 『折神家親衛隊第三席』

ノロの入ったアンプルを体内へ注入、御刀で斬った切り傷より小型の荒魂を放出することができるとは、その自傷行為に対して躊躇がない。

それらは主に偵察に用いられる。

中央と荒魂討伐中、白い親衛隊服を着た自分を見る。

自分や中央が死ぬ光景を何度か見ている。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名	呼び方
東西南北	中央
東西南北さん	
百合園	小百合

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
折神	紫	紫様	衛藤	可奈美
折神	紫	紫様	衛藤	羽島
折神	紫	紫様	衛藤	江麻
獅童	真希	獅童さん	十条	姫和
獅童	真希	獅童さん	十条	五條
獅童	真希	獅童さん	十条	いろは
此花	寿々花	此花さん	柳瀬	舞衣
此花	寿々花	此花さん	柳瀬	舞衣
此花	寿々花	此花さん	柳瀬	舞衣
				高津
				雪那

燕 結芽 糸見 紗耶香 真庭 紗南  
折神 朱音 益子 薫 相楽 結月  
古波蔵 エレン ねね

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box: p0. 8, vertical》

美濃関学院

人名 呼び方

平城学館

人名 呼び方

一刀 雷花 一刀さん

鎌府女学院

人名 呼び方

佐等 イチイ 佐等さん

新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 董 金城さん

前園 栄子

蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎

人名 呼び方

裏隠居 光枝 裏隠居さん

《box》

【親衛隊第四席】

燕つばくろ 結芽ゆめ

☒ ☒

年齢

一人称

身長

御刀

145cm

ニツカリ青江あおえ

所属

折神家

流派

天然理心流

瞳の色

髪型

服装

趣味

強さの証明

好きな食べ物 苺大福

備考 『親衛隊第四席』

入隊前から病床に付している少女。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方

東西南北 中央

百合園 小百合

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
----	-----	----	-----	----

折神 紫	衛藤 可奈美	羽島 江麻
------	--------	-------

獅童 真希	十条 姫和	五条 いろは
-------	-------	--------

此花 寿々花	柳瀬 舞衣	高津 雪那
--------	-------	-------

皐月 夜見	糸見 紗耶香	真庭 紗南
-------	--------	-------

折神 朱音	益子 薫	相楽 結月
-------	------	-------

古波蔵 エレン	ねね
---------	----

折神おりがみ 朱音あかね  4.

年齢 身長 170cm

一人称

所属 舞草もくさ

瞳の色

髪型

服装 和装

趣味

好きな食べ物

備考 『舞草』を組織し、代表を務める。

刀使ではないが旧鎌府に在籍していた。

小百合とは以前から面識があり『S装備』の運用試験の為、薫、ね、ね、エレンと共に同行させる。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方

東西南北 中央

百合園 小百合 小百合さん

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
呼び方				
折神 紫	衛藤 可奈美	羽島 江麻		
獅童 真希	十条 姫和	五条 いろは		
此花 寿々花	柳瀬 舞衣	高津 雪那		
皐月 夜見	糸見 紗耶香	真庭 紗南	真庭学長	
／なーちゃん				
折神 朱音	益子 薫	益子さん	相楽 結月	
古波蔵 エレン	古波蔵さん	ねね		

十条<sup>じゅうじょう</sup> 姫和<sup>ひより</sup> ☒17. ☽☒

年齢 身長 158cm  
一人称 私 御刀 小烏丸<sup>こがらすまる</sup>  
所属 平城学館 流派 鹿島新當流

瞳の色 赤紅色

髪型 前髪はぱつと切り揃えられていて、後ろ髪も背を撫でるようなサラサラとした濡羽色ぬればいろのロングヘアー。

服装 革色のセーラー服

趣味 読書

好きな食べ物 煮物 チョコミントアイス

備

考 一般校に通っていたが平城学館学長五条 いろはの計らいにより同学校の刀使である一刀 雷花に連れられて平城学館に転入する。

父親と母親とは死別後、母方の親戚である柊家のもと形見の小烏丸とともに修練に励む毎日を送っていた。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方

百合園 小百合

東西南北 中央

—— 原作呼び方一覧 ——

人名 呼び方 人名 呼び方 人名

呼び方

衛藤 可奈美 折神 紫 折神 紫 羽島 江麻  
柳瀬 舞衣 獅童 真希 五条 いろは 五条学長  
糸見 紗耶香 此花 寿々花 高津 雪那  
益子 薫 皐月 夜見 真庭 紗南  
古波蔵 エレン 燕 結芽 相楽 結月  
ねね 折神 朱音

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box:po.8, vertical》

美濃関学院

人名 呼び方

平城学館

人名 呼び方

一刀 雷花 雷花

鎌府女学院

人名 呼び方

佐等 イチイ

新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 堇  
前園 栄子  
蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎  
人名 呼び方  
裏隠居 光枝

《／box》

益子ましこ 薫かおる  
☒4. ☒  
☒

年齢 身長 135cm  
一人称 オレ 御刀 衾ねねきりまる切丸  
所属 長船女学園 流派 薬丸自顕流

瞳の色

髪型 黒いリボンでピンク色のツインテールを結び、前髪には  
ピョコツとケモノの様なケモ耳が天井へ向いている。

服装 両手には五本とも解放された黒いグローブを、両脚には

ワンポイントとして小さいリボンが入った白色のオーバーニーソックスを着用。

サイズが合っていない為、ジャケットもだらしなく肩から滑り落ちる。

襟に付けるリボンは制服に取り付けている。

趣味           ねねと遊ぶこと    食べること（大食い）

好きな食べ物    ローストビーフ丼

備

考           中等部二年の時点で八幡力の五段階目を扱えるようになって  
ている。

悪意的なモノの気配には敏感。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名	呼び方
百合園	小百合
先輩	
東西南北	中央

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
呼び方				
衛藤	可奈美	折神	紫	羽島
江麻				
十条	姫和	獅童	真希	五条
いろは				

柳瀬 舞衣 此花 寿々花 高津 雪那  
糸見 紗耶香 皐月 夜見 真庭 紗南  
古波蔵 エレン エレン 燕 結芽 相楽 結月  
ねね ねね 折神 朱音

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box:po.8, vertical》

美濃関学院

人名 呼び方

平城学館

人名 呼び方

一刀 雷花

鎌府女学院

人名 呼び方

佐等 イチイ

新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 董 董

前園 栄子  
蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎

人名 呼び方

裏隠居 光枝

《／box》

古波蔵 こはぐら エレン ☒4. ☒

年齢 身長

172cm

一人称

ワタシ

御刀

越前康継 えちぜんやすつぐ

所属

長船女学園

流派

タイ捨流

瞳の色

ている

髪色 / 髪型

金色の長髪を黒いカチューシャで纏め

## 服

### 装 長船女学園の制服

(黒いリボンタイに白いブラウス、山吹色と桑茶に近い二色の変則的なジャケットを着用。プリーツスカートには焦茶で一本のラインが入る)

右足にはサイハイソックスを履き、ガーターベルトで止める。

左足はブーツソックスなのかルーズソックスなのか、若干弛んでいて左右非対称に履いている。

趣味 身体を動かすこと全般

好きな食べ物 銀鱈の西京漬け ケーキ

## 備

考 日本人の父とアメリカ人の母を持つハーフ。初対面の小百合をサユリンと渾名で呼ぶ。

中等部二年の時点で金剛身の五段階目を扱えるようになってい

主人公呼び方一覧

人名 呼び方

百合園 小百合 サユリン

東西南北 中央

原作呼び方一覧

人名 呼び方 人名 呼び方 人名

衛藤 可奈美 折神 紫 羽島 江麻

十条 姫和 獅童 真希 五条 いろは

柳瀬 舞衣 此花 寿々花 高津 雪那

糸見 紗耶香 皐月 夜見 真庭 紗南 紗南センセ

イ

益子 薫 薫 燕 結芽 相楽 結月

ねね ねね 折神 朱音

—— オリキャラ（刀使）呼び方一覧 ——

《box:po. 8, vertical》

美濃関学院

人名 呼び方

平城学館

人名 呼び方

一刀 雷花

鎌府女学院

人名 呼び方

佐等 イチイ

新木 聖

長船女学院

人名 呼び方

金城 董 スミスミ

前園 栄子

蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎

人名 呼び方

裏隠居 光枝

《box》

ねね ☒4. ☒

好きな物 巨乳

備

考 <sup>マスコット</sup> 荒魂であり代々、衾々切丸の継承者と常にいる益子家の守護獣。

巨乳好きではあるが貧乳の小百合には何故か懐く。

【学長】 真庭<sup>まにわ</sup> 紗南<sup>さな</sup>（旧姓：新見） ☒ 4. ☒

年齢 身長 180 cm前後

一人称 私 御刀 返還済み

所属 長船女学園 流派

瞳の色

髪色 / 髪型 銀髪

服装 スーツの上に羽織を着用。

備考

『長船女学園学長』

やや褐色の肌色をした女性。18年前の相模湾岸大災厄時、紫と共に戦った特務隊の1人

（当時中学三年生）。

現在は長船女学院の学長を務める傍ら舞草にも属している。  
折神朱音とは刀使時代からの親友であり学長職に就いた今でも交  
友関係は続いている。

小百合のことを以前から知っており、薫への愛の鞭を行使した動き  
からまだ現役でいられると評される。

—— 主人公呼び方一覧 ——

人名 呼び方

百合園 小百合 小百合

東西南北 中央

—— 原作呼び方一覧 ——

人名	呼び方	人名	呼び方	人名
----	-----	----	-----	----

衛藤 可奈美	折神 紫	羽島 江麻
--------	------	-------

十条 姫和	獅童 真希	五条 いろは
-------	-------	--------

柳瀬 舞衣	此花 寿々花	高津 雪那
-------	--------	-------

糸見 紗耶香	皐月 夜見	相楽 結月
--------	-------	-------

益子 薫	薫 燕 結芽	ねね ねね
------	--------	-------

古波蔵 エレン	エレン	折神 朱音 朱音様
---------	-----	-----------

／あかねちゃん

—— オリキヤラ（刀使）呼び方一覧 ——

美濃関学院  
人名 呼び方

平城学館  
人名 呼び方  
一刀 雷花

鎌府女学院  
人名 呼び方  
佐等 イチイ  
新木 聖

長船女学院  
人名 呼び方  
金城 董  
前園 栄子  
蔵島 伝恵

綾小路武芸学舎  
人名 呼び方  
裏隠居 光枝

—— 登場人物（蒼穹のファフナー） ——

ミツヒロ・バートランド  5.

年齢                      身長

一人称

所属                      ???

役職

部長

瞳の色

髪色                      /                      髪型

装 服

考 備  
『S装備』開発担当

日野 洋治  5.

年齢 身長

一人称

所属 ??? 役職 ???

瞳の色

髪色 / 髪型

装 服

考 備  
『S装備』 開発担当

## プロローグ

### 1. 始まりの腹鳴

「ああーこれからどうするっかなー」

神奈川県某所――

とある公園にて大股を開きベンチの背にもたれだらしな顔で空を仰ぐ男が一人呟く。

ベンチの隣に建てられた時計からは正午を知らせる電子音がついさつき鳴り終えたばかりだというのに、彼以外の人はおろか犬や猫といった動物すら見当たらない。

しかし、この男にとつては別段気にする程の事でもない。

ただ、気にする事と言えば日本に来て早二週間。

財布の中身もコンビニやらスーパーやらで購入したモノのレシート束が収まるだけの入れ物に成り果ててから一時間が経とうとしているということ。

「まさか日雇いのバイトにすらロクに受からんとは……全く、一体何がダメなんだ？」

社会は俺の何が不満なのかと自身の身なりを見回す。

少しボサボサに乱れ、肘まで届きそうなベタついた黒髪も――

僅かにではあるが所々に解れや破れた袴も――

多少汗臭い身体も――

「気にする程でもねえだろうに」

自分には何も問題は無い。

気にする余裕など微塵も無い。

向こうで活動していた時には同じような出で立ちの人種は大勢いたのだから。

「なら……」と、隣に視線を向け、ベンチに支えられたそれを見る。

「ううん…… あー、コイツ等が原因？」

首を捻り、一つの回答を導き出す。

男の瞳に映し出された二つの竹刀ケース。

街頭インタビューでこの男の人が持っているケースの中身は何？  
などと通行人に聞けば誰もがこう答えるだろう。  
竹刀かひよつとしたら摸造刀の類が収納されている、と。

だが、違う。

その中に納めているのは紛うことなき真剣。

一つは一振りの脇差。

もう一つは一振りの御刀。

命を奪う剣と命を守る剣。

だが、この二振りの所有者に言わせればつまるところ、どちらも変わらない。

どちらも殺人の道具でしかないのだ。

だからなのか何故彼が二振りもの真剣を所持しているかについて誰に問われても閉口し続け、

仮に重い口を開いたとしても彼はこう答える。

関係ない――

知らなくていい――

聞いてきた奴には等しくそう返す。

誰も彼もこちら側には入らせない。関わらせない。絶対に。

それが彼が決めた彼自身の信念なのだから。

その信念を嘲笑うかの様に快晴の空の下、見上げていた顔の下から空腹の胃がギュルルルと空しく鳴り続ける。

「此処にいたか」

グウー。

胃の悲鳴が男の代わりに返事を成す。

声が聞こえる。女性の声だ。それも若い女性と思わしき声。

声のする方へゆつくりと顔を下ろす。

目の前には二人。女性と少女が立っている。

女性の方は膝下まで下ろした艶やかな黒髪と白を基調とした衣服に身を包んでいる。

背丈も170センチはあるだろうか。座つても立てば自分と

同じ目線になるのは想像に難くない。

年齢は十代後半位だろう、明らかに自分よりも若く見える女性が二振りの御刀を帯刀し男を見ている。

そしてもう一人の少女もこちらに一振りだが御刀を帯刀している。制服と思われる衣服を着用している事からこの少女も刀使だと思われる。

だが伍箇伝のどの学園でも見たことがない黄枯茶のような色を基調とした制服だ。

二振りの御刀を持つ女性とは対照的でセミロングの白髪で毛先が僅かばかり黒い。

「中央よ」

「……なんだ、アンタか」

中央と呼ばれた男は直ぐ様女性から目を離し空を見つめる。

「文無しの俺に何か用ですかー？折神家御当主様……いや、折神 紫様」

「私も暇ではなくてな。単刀直入に言うぞ。中央、お前に仕事を持つて来た」

「仕事？」

「そうだ。今のお前に必要な仕事だ」

「ふうん、仕事……ですか。しかし、まあ、良く俺の居場所が分かりましたね。」

結構色んな所を移動していたのに」

「この手紙の差出人からお前が何時何処で何をしているかを書き記してくれていてな」

そう言っ一枚の便箋を中央に差し出す。

それを受け取り文字を目で追う。

見覚えのある筆跡と差出人の名に諦めの入り雑じった溜息が吐き出される。

紫の方へと再度視線を向けると彼女の後方で人ではないモノの影が蜃気楼の如くゆらゆらと揺らめいていた。

「ああ、監視みらされてたのね」

ガツクシ、とわざとらしく顔を落とす。

合点がいった。だから仕方ない。そう自分に言い聞かせてたところで再度それを視認しようとする。それはその場から姿をくらし  
ていた。

まあ暇じゃないのは分かるんだけどさあ、回りくどいことせず俺の  
方に接触すればいいのに。

「それでどうする。仕事は引き受けるのか？」

紫の問いに中央は熟考する事なく立ち上がり開口する。

「取り敢えず、まあ……飯、食いながらでいいっすか？」

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第2話 欲に勝つ人間などいない

## 2. 欲に勝つ人間などいない

「……随分とまあ、高そうな店に連れて来ましたね」

とある食事処のとある個室にて一組の客が通された。

店内にはその一組だけの貸し切りとなり店の外には臨時休業の看板が掛けられている。

「食事をしながら、と言うのがお前の要望だからな。それに周りに人がいない方がいいだろう」

「まあ、確かに言いはしましたが……」

イヤ、真剣<sup>マジツ</sup>で飯食う事になるとは思ってたよ……。

個室はやけに広く、モダンで落ち着きがある内装となっており出入口は引き戸の作り。

中央と紫は椅子に腰かけ、刀使と思わしき少女は扉の出入口に目を閉じ待機している。

「依頼内容を話す前に何か聞きたい事はあるか？」

「あー、んじゃあ、そっちの刀使の娘<sup>むすめ</sup>について聞いてもいいですか？」

顔と視線を白髪の少女に向ける。

「皐月<sup>さつき</sup>のことか」

「ええ。伍箇伝の制服ではないにも関わらず刀使見たいだし、側近か何かですか？」

「皐月は私直属の親衛隊だ。皐月以外にも後二人いる」

互いに互いを見合う少々重苦しさを感じさせる空間の中、それでも皐月と呼ばれる少女は目を瞑り微動だにしない。

「後の二人については折神家に戻ってから紹介することになるが、皐月。簡単な自己紹介をしてやれ」

「……はい」

今まで沈黙を貫いていた寡黙な少女が紫の後方、数歩下がった場所に歩み寄る。

「……皐月<sup>さつき</sup> 夜見<sup>よみ</sup>です。親衛隊第3席です。宜しくお願い致します」

「ああ、俺は東西南北<sup>よもひろ</sup> 中央<sup>なかも</sup>だ。まあ、ヨロシク」

互いに軽い自己紹介を済ますと中央は紫に意識を戻す。

「それで、仕事についてですが……」

「ああ、言い忘れてたが食事が済んだら次はホテルで身体を洗い綺麗にしろ」

置かれていたグラスに手を伸ばし、口元で傾けて水を一口飲むとテーブルに戻す。

ふう、と一息つく。

「……この距離からでも臭う」

「……ええ、臭います」

「いや、二人してそこ強調しないで下さいよ………そんな臭います?」

自分の身体から多少臭う自覚はある。だがどうだろう。そこまで気にする事なのか。

「ああ、案内してくれた店員も数秒程だが顔を引き攣っていた。成人であなのだから

未成年の者達には余計に堪えるだろう」

「……直ぐに手配します」

そう言つて夜見は個室から退室した。

二人の会話の邪魔にならない様に入出口から少し離れて携帯端末を操作する。

「では注文をするぞ」

「え、いや、俺まだメニュー表貰つてn——」

中央の端に置かれたボタンを押すと数秒も経たず男性定員が失礼します、と落ち着いた声で

入室して来るが今度の定員は中央から漂う異臭にも眉一つ動かさず紫の側に歩み寄る。

「この特上黒毛和牛の鉄板焼きと——」

フム、イヤ、絶食は良くないな。異議を唱える前にしても先ずは腹ごしらえからだ。

生物として生きとし生けるものとして空腹には抗えない。

ならば流れに身を任せてみるしかない、中央はそう自分自身を納得させた。

畏まりました、と一礼し、男性定員は個室から退席した。

「——それで、仕事というのは？」

運ばれた料理を全て平らげ、口の中で租借が終わりかける頃。話を切り出したのは中央の方からだった。

「刀剣管理局の刀使として私の親衛隊に加わってもらおう」

ピタツ、と手に持っていたグラスが止まる。

紫から放たれた言葉に耳を疑う。

刀使として……だと？ 親衛隊と言ったな。公の場に男の俺を晒し出すのか？

「主な依頼内容は私の護衛と事務処理、親衛隊の指示などだ」

「刀使として、ですか？」

「不服か？」

「不服も何も、何故オレが刀使として活動しなければならぬんですか？ 男であるオレが」

「お前の持つソレは御刀だろう？ なら、刀使として活動する事に何ら問題はあるまい」

「伍箇伝の関係者や刀使達にはどう説明するつもりですか？ まさか説明もなしに男であるオレを秘匿し続けるつもりで？ ハッ、それともまさか女装でもしろというつもり何て言うんじゃ——」

「——ああ、お前には女装して貰う」

「フオワアアアアッ!」

真剣だ！ 真剣で言いやがった！ イ、イヤ、まだだ。まだ冗談の可能性も——

「丁度髪も長いし髪型次第では中性的な顔立ちに見えなくともない。服装も露出を抑えたモノであれば男だと判らんだろう。体型など個人差があるものだ、然したる問題でもないだろう」

冗談や聞き間違いじゃなかったかー！

「ぎ、拒否権は……」

「拒否したいならしても構わんぞ。お前の胃に詰めた品々を寸分の狂い無く元の提供前の状態に戻してくれるならな」

彼女の言葉に中央は皿を見つめ想像する。鉄板や小鉢へ一面に広がるモザイク処理を施された光景を思い浮かべ額からは脂汗が流れ落ちる。

中央の脳内にはその先の情景が容易に思い浮かべる事が出来た。クレームの雨霰。清掃費の請求による借金。それに伴う借金返済生活。

仕舞いにはスタッフが美味しく頂きましたなどと定型文のテロツプが流れる始末。

まさに飯テロ。この場を逃げ出そうものならその他十数件の容疑で指名手配される未来が見え、そして、ここにいる二人の刀使によるゴミを見るかのような視線に晒されること間違いなし。

あ、それは良いかもしれない。クールな女性達に蔑まされる、何故か嫌じゃない……寧ろ心地良いかもしれない……。

ゾクゾクツ、と身体と精神が高ぶりを肌で感じていると中央が不純な事を考えている事を悟ったのか、夜見はジトーツ、と目を細め彼を見据える。

「それに、この支払いは経費で処理するからな。手をつけてない状態ならその分はキャンセルできる。こちらムダな金を出す訳にもいかんのでな」

それに、と続け、  
「もし引き受けるというのならお前の今後の生活や性生活も保障しよう。」

何だったら妹の朱音を嫁なり何なり好き勝手にしてもいい。何より好きだろう？ 年上の女は」

そのとき中央に電流走る。

刹那、紫の言葉——妹の朱音を嫁なり何なり好き勝手にしてもいい——を反芻する。

いい。何をしても。

中央の脳裏に一糸纏わぬ折神朱音の姿が浮かぶ。

耳まで真っ赤にしながらか猫耳メイドで萌え萌えキュンなんて言う折神朱音。

畳の部屋の中、膝枕で耳かきをしてくれる折神朱音。  
一枚の布団の中、身体を寄せて耳元で囁いてくれる折神朱音。  
裸エプロンで朝食を支度する折神朱音。  
恥じらいながらも刀使時代の制服に身を包む折神朱音。  
急な夜這いにも応じてくれる折神朱音。  
自分から求めて来る折神朱音。

など、108の煩悩では足りないくらい中央の思考は色欲に支配された。

兎に角、朱音が恥じらう顔を、姿を、唯々見たい。

その欲望と衝動が中央を突き動かす。

それと同時に、ある事象が起きた。

体内の血流が一気に駆け巡り下半身に集中する。

この2年、処理する暇などなく抜刀する事などなかった下腹部より下に

存在する小刀が大太刀へと変貌する。

スペツナズナイフの如く今にも刀身を射出しそうな勢いである。

煩惱？ 除夜の鐘？ 何それ美味しいの？

「是非！」

「お、おおう……返事が早くて助かる」

若干表情が引き攣っている紫を気にも留めず中央は立ち上がり彼女の眼前に顔を近づけると。

「契約書は何処っすか!？」

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第2話 初めての立ち合い

### 3. 初めての立ち合い

折神家本家――

コン、コン、と丁寧に木製のドアからノックする音が鳴る。  
「入れ」

目を通していた書類を机の端に置き、訪れた者達を促す。  
「失礼します。お呼びでしょうか紫様」

紫が折神家当主に就任してから今日に至るまで使用している執務室に入室してきたのは二名の刀使。

この二人も夜見同様の黄枯茶のような色を基調とした制服に身を包んでいる。

先に入室した少女は凜とした佇まいであり、制服の上に白いジャージを肩に掛けている。

半袖仕様の為か露出した両方の前腕には覆うように包帯が巻かれ、動き易いようにスカートではなくスパッツを履いており、髪は淡香に似た色で彼女の左側のもみあげは三つ編み状に整えられてはいるが少女、というよりも少年ぽさが見受けられる。

名を獅童 真希。親衛隊第一席となる刀使。

後に入室してきたのは臙脂に近い赤い髪色の少女。

髪型はというと頭頂部の辺りから後ろ髪を白い紐で結び、ゆるふわ状のポニーテールに仕上げられている。

先程の少女とは違い、スカートは履いてはいるがその下にはトレーニングウェアに用いられているレギンスを着用しており赤を基調とし一本の黒いラインが入っている。

フィットした下半身からは10代の少女らしくスラットとしてはいるが正された姿勢に重心の移動の仕方が真希同様、日々研鑽を積んでいる事が伺える。

名を此花 寿々花。親衛隊第二席となる刀使。

刀使という絶対条件を除けば両者共に共通しているのは自身の剣技と刀使であることに誇りを持ち、自信に満ちている事。同じ刀使であれば両者互いに自分は負けはしないという自尊心がある事。

「来たか獅童、此花、それと臯月。早速で悪いがお前たち親衛隊の今後の方針を伝える」

「……紫様、申し訳ありませんがお話の前に一つ宜しいでしょうか。そのソファに座っている男は一体どなたなのででしょうか？」

「オイオイ、瞬殺だな。髪下ろすだけじゃダメかよ、もう男だつてバレてるじゃねえか。」

食事と洗体を済ませ、渡されたジャージに着替えた中央なかおは紫の指示に従い髪を散髪する事なくストレートロングにしていた。にも拘らず、獅童 真希に男だと一目瞭然に看破される。

男だと見破られた理由を模索する。

上半身のジャージは前腕部が露出するよう腕を捲り、下半身のジャージも上半身同様に脹脛を露出している。そのお陰で薄つすらと生えたすね毛が目につく。

寛ぐ様に公園で座っていた時と同様に背もたれの裏に腕を回す。

座り方も大股を開き、履いていた靴も来客用のスリッパに履き替えている。

これでバレるのか。イヤ、ね。もうこれ以上どうしろと？

「……ご自身の所作を見直して是正して下さい」

思わぬところから指摘が来た。ソファの隣にいた臯月 夜見が視線のみを中央に向け喋りかけてきたのだ。

「心を読まれた!? 読唇術でもあるのか、この娘は」

「……声に出していましたよ。今もですが」

「オウ、マジかよ」

「……大真剣です」

寡黙な娘と思っていたが喋る事が嫌いという訳ではないらしい。ちゃんと受け答えしてくれる。

取り敢えず現段階で臯月かのじよとは同僚として上手く職務遂行やっしているようだ。

心の中で少し安堵すると今度はハア、と溜め息を漏らし体勢を変えらる。御刀がその重さでソファを軋ませる。

倒れるように傾けられた御刀は移動用に使用していた竹刀ケース

から取り出されており封をするかの様に布に巻かれていた。

一方、脇差はというとやはりこちらも竹刀ケースから出されていた。

御刀とは違い布で巻かれず中央の隣に置かれている。

「それも含めて話す。先ず親衛隊には後日もう一人加わる者が予定されていると言ったが更に一人増え、二人加わる事となった」

「まさか!？」

「そうだ。臯月は既に顔を合わせているがそこに居る男、東西南北中央を加える。そして第零席として中央を親衛隊隊長に任命、今後私の指示は中央を通す」

「なっ、そんな!?! 刀使でも何でも無い、それも男をですか!?!」

「これは命令だ獅童」

「ッ……………!?!」

「紫様、わたくし 私からも一つ宜しいですか」

「なんだ此花、と真希に向けていた視線を寿々花に向ける。

「刀使でもない外部の人間を刀剣管理局が受け入れる……………御当主である紫様の御命令とはいえ、説明もない状態でその男性から指示を受けると云うのは今後の指揮に少なからず影響が出ますわ」

「フム、そうだな言葉足らずだったな。獅童、此花。中央は刀使だ」

「なっ……………!?!」

瞳孔が開き開口したまま真希と寿々花は中央を凝視する。

「続けるぞ。中央は私以上に実戦での経験がある。中央と行動を共にすれば」

「何れお前達の糧となるだろうし、今後の事を考えれば損はない」

「なっ、バカな! 男、それも刀使であるだけではなく紫様以上の実戦経験があるだど!?! 18年前の相模湾岸大災厄以降、荒魂が大量に発生する事は無かったハズ。にも拘らずこの男は紫様以上の……………!」

「イヤ……………待てよ。必ずしも経験イコール強さとは限らない。なら

「俄かには信じられませんかね」

「ならば、一度手合わせしてみるといい。お前達も中央の実力がどれ

程のものか知っておきたいだろう」

「しかし……」

「此花、紫様の提案を受け入れよう」

「本気ですの獅童さん!？」

「思いもよらない言葉が真希から発せられた。自分に続き、紫の言葉に彼女も否定すると思っていたからだ。

「何れ任務で共に行動する事になるんだ。遅かれ早かれ互いの実力は知っておかなければならない。いい機会じゃないか」

「えっ？ イヤ、俺普通にイヤなんすケド……」

食事の時は流れに身を任せることを良しとした。

だが、この事態はそれとはまた別である。

グウツ……！ この男……！ 紫様の御言葉だぞ！

眉間にしわを寄せる。誰が見ても苦々しい表情に変わり、真希の中央への認識は異端者イレギュラーから排除対象者レジェンダリーへと認識を変える。

「中央、これも仕事の内だ。従え」

えーイヤな仕事だなあ。同僚とやり合うのなんて……。

「あーまあ、仕事なら」と仕方なさそうに言うと、あー面倒くさ、とポツリと零す。

真希はその言葉を聞き漏らすことはなく、この男は絶対に！ 完膚なきまでに叩きのめす！ と握り拳を作る。

### 折神家構内――

急な立ち合いに親衛隊の三名は紫と中央の後ろ姿を追う形で二人に付いて行く事となった。

当然紫が先頭に立ち、中央がそれに続く。

「此花、彼の御刀についてどう思うっ？」

声を小さく抑え、ひっそりと寿々花に声を掛ける。

「獅童さんも気になってましたのね」

ああ、と頷く真希に同じく声を抑えて寿々花は答える。

「彼は男性で刀使……極めて異例でもありますし、あの右手で持っている大太刀と思われるモノが彼の御刀だと思いますわ」

「キミもそう思うか。しかし何故鞘に納めていないんだ？ わざわざ布に覆わなくていいハズだが」

「さあ、分かりかねますわ。大方、鞘を無くし代わりに布を代用したのではなくて？ズボラそうな方ですし」

二人の刀使の視線の先には中央の右手に向けられていた。柄を含む全体を布で覆われた御刀に注視する。

布で覆われている為か刀身の形状が薄っすらとではあるが視認でききる。

紫を除き刀使は切先を上に向けた状態で御刀を帯刀する。

移動や抜刀のし易さ、第三者からの認識、周囲への配慮を考慮され帯刀方法が今日に至る。

だが中央の腰回りには御刀を帯刀する為の金具が一切見られない。伍箇伝に所属する刀使なら御刀を授かる際に帯刀金具も支給されるハズである。

本当に鞘を無くしただけなのか？ 伍箇伝には美濃関学院、平城学館、綾小路武芸学舎の三校が共学であることは周知の事実ではあるが、在籍中の男子生徒が刀使になったなどはボクが平城に居た時には聞かなかった。

過去にそういった事例もあつたとは聞かない。

「臯月の見解は？ どう見る」

真希の声に耳を傾けると夜見は中央の方へ視線を向ける。

「……私は腰の脇差だと思いますが」

「そうか。臯月は脇差の方か」

真希も夜見の視線の先へ目を追う。

脇差は紐で括りつけられており彼の左肩に掛けられている。長さは左手で直ぐに掴めれる位置にあるが、咄嗟の行動に支障をきたすだろう。何より不恰好である。

フム……と少しばかり考え込む。

だが幾ら考えても答えは出ず、出たとしてもそれは憶測でしかな

い。

思惑する事を止め、立ち合いについて考えることとした。

自分が出るのは当然として此花も出るのだろう。しかし皐月はどうだろうか。ふと思う。

「ところで皐月は今回の立ち合いはどうする？　こういった事は余り好ましくなさそうに見えるが」

「……私は見学させて貰います。獅童さんか此花さんが立ち会えば東西南北さんの実力は分かります。何より、私の実力では他の方の力量は推し量れません」

「分かった。ならボクと此花の二人で立ち会うとするよ」

五名の刀使が向かっていった目的の場所に着く頃には真希は中央の戦い方について考えだしていた。

大太刀……か、なら薬丸白頭流……イヤ、新陰流の可能性も……。

――  
折神家構内講堂――

折神家が所有する施設内には立ち合いが可能な場所が幾つかあり、此処もその内の一つである。

迅移―刀使の攻撃術―に対応できるよう中は広々とした作りとなっており決勝戦に至るまでの御前試合本選は此処で行われる。

「あーお前らー。今右手に持つてる方が御刀だからなー。あと、コイツは大太刀じゃなくて長巻だからなー」

聞かれていた!?!　しかも、長巻!?!

まあ、地獄耳ですこと。

「そんじゃあまあ、誰からヤルよ」

「……ではボクから行かせて貰う」

名乗り出ると中央がいる講堂の中心へと真希は向かう。

白いラインテープで示された立ち位置の手前で立ち止まり、一礼する。

だが中央は御刀を持ったまま真希を見据える。

御刀——薄緑うすみどりを抜き、正眼の構えを維持し写シ——刀使の防御術——を張る。

白いオーラ状のモノが真希の身体を包み込む。

「……どうした、早くキミもその布に巻かれた御刀を出して写シを張ったらどうだ」

「イヤ、別にコイツ等を抜くのも写シを張る必要もないんだが。それに今のコイツの状態だと写シは物の数秒で剥がれちまうし」

写シが数秒で剥がれる？ 何を言っているんだこの男は。

真希が中央の真意を見出そうとしていると、中央はおもむろに左肩に掛けられていた脇差を床に置く。

「何のつもりだ？」

「コイツは御刀じゃねえし、ただの刃物なんだから危ねーだろ？」

まあ、御刀も危ないっちゃ危ないんだが」

真希の問いかけに気の抜けた声と締まりのなさそうな顔を見せる。

そうか、これは挑発だ。そう彼女は判断した。

油断とムダな力みを生じさせる為の行為。だから高ぶる気持ちを抑える為自分に落ち着け、と言いつ聞かす。が、

「まあ、別に必要ないだろう、写シも御刀も。直ぐ終わるだろうし」

次に男は小さく欠伸を漏らす。

フウ……そうか、そうか。なら……この男に手加減など、無用……

初撃で終わらす!!

沸々と沸き上がる怒りに判断は断定へと切り替わる。

侮辱。これは紫様を、刀使である者達への侮辱であると真希は捉えたのだ。

何よりこれまでの自分の血の滲む努力を踏みにじられる発言にも聞こえる。

立ち合い前の所作といい、先程の言動、目に余る行為に親衛隊第一席は怒り心頭に発する。

構えを変え、中段から上段に御刀を振り上げる。

ミシリツ、と小さく音が漏れる程に柄を握る指に力が籠められる。「では始めろ」

紫が放つ開始の合図とともに真希は4段階目の迅移で加速する。瞬く間に中央との距離を詰め、切先を上段から振り下ろす――

「!?」

――ハズだった。確かに立ち合い者である中央は居たハズなのだ。だが眼前にいるであろう相手の姿は居ない。

そればかりか自分は御刀を上段で構えたままにいる。

どういうことだ……?」

今の今まで気付かなかった。

経験する事などなかった。

理解できないし、思考が追い付かない。

まるで意味が分からない。

真希は自身に起きていることの情報整理が困難な状態に晒されていた。

自分の意思でどうすることもできない程全身が石造にでもなったかの様に硬直しているのだ。

しかも振り上げていた腕の下には刃が在り、そのまま御刀を振り下ろしていれば刃の軌道から両腕は勿論のこと首も落ちていた。

額から流れ出る汗が頬を伝い、滴が落ちる。

もう30分は経つただろうか。それとも1時間か。

真希の体内時間ではそう錯覚するに至るが、実際は十数秒程度である。

落ち着きを取り戻し思考も徐々にクリアになり、現実を正しく認識できるようになる。

肉体も少しずつではあるが感覚が元に戻ってきた。

自身の身体を切断しようとしていたモノの正体は刃ではなかった。

それは一本の鞘。自分の愛刀である薄緑を納める筈の鞘であるが、刀使である少女は一つの気配に気づく。

その気配を恐る恐る辿るように目だけを動かす。

気配のする方向には薄緑の口金物を握る手が見える。

ま、さ、か……。

気配の正体を確認すべく今度は顔を動かす。

そうして漸くジャージ姿で長髪の男の姿を視認できるようになった。

気配の正体、つまりは東西南北 中央が鞘を持ち立っている。

紫様がお認めになつているとはいえ、相手は写シも張っていない人間だぞ……それが何で？ ボクの隣にいるんだ……？

何故この男は自分の隣に立ち、薄緑を納めていた筈の鞘を持っているのか。

何故この立ち合い者からここまで異様な圧が放たれているのか。

何も分からないまま、御刀を握る少女は得体の知れない恐怖を肌で感じていた。

「んで、どうするー？まだ続けるかー？」

気の抜けた声だが未だに得体の知れない恐怖が真希に纏わりつく。

「つく……ボクの、負けだ……」

なっ、あの獅童さんが何もできずに負けを認めさせられた!? この方、一体何者？

傍観者であつた寿々花と夜見には一瞬の出来事だつた。

真希が迅移を発動し御刀を振り下ろす所までは動きがあつた。

だがそこから先は真希が動かずただ悪戯に時間を消費していただけだつたのだ。

そして、次の動きがあつたときには一方的に真希が敗北を宣言した。

その一部始終は当事者以外では一人を除いてそう認識している。

ほう、早いな。手加減しているとはいえコレが中央の実力か……。

立ち合いなどどうでもよく、冷静に自若に。唯、男の動きを一挙手一投足に至るまでを観察する。

これがヤツ等の、武芸者と呼ばれる者の動き。

「我等とは動きの質が違うな……」

ボソリと呟くと、紫はにんまりと笑みがこぼれた。

「んで、次はどうするよー」

「では私とも一つ立ち会つて下さるかしら」

今度は寿々花自らが名乗り出ると歩みながら彼女は思案する。

今の獅童さんとの立ち合いで私が左右の側面を警戒し何かしら対応をとると思っているのですが、恐らく東西南北さんは裏をかき私が警戒していない後方がお留守になる、そう考えているのでしよう。

しかも相手は御刀を抜かずこちらの鞘を奪いそれを攻撃手段として用いる。

なら、鞘を奪われるという前提で動けばいいだけの事。

「準備できたかー?」

鞘から御刀——九字兼定——を抜刀、それと同時に左手で鞘の帯刀金具を弄る。

これで迅移後、着地点に到達した瞬間に鞘を身体から解放する事が可能となった。

一瞬の躊躇いの隙を付き、更なる迅移で相手の懐に回り込む。

仮に斬られても写シがある以上、肉体は一時的にエネルギー体に変換されているのだから斬撃による痛みを耐えればコチラが勝機を見出せる。

これが寿々花がとれる勝利の方程式であり彼女が思い描くビジョンでもある。

切先を天井に向け八相の構えで写シを張る。

「ええ。いつでも」

こちらは相手を侮っている。そう思わせる為、寿々花は不敵な笑みを浮かべる。

再度紫が「始めろ」と合図を出すと寿々花は迅移で加速する。

真希同様に距離を詰める寿々花。中央に接近したところで狙い通りに鞘が身体から離れる。

左側に重心を乗せフェイントを仕掛けると透かさず右側へ迅移による移動を即座に実施。

下段からの一閃が迸る。

「なっ……!?!」

一体何が?

決して驕っていた訳ではない。

だが、確かに感触はあった。御刀が触れた感触が。だが弾かれた。何に？

先程の真希の様に鞘を奪う訳でも、彼が右手に持つ御刀を使う訳でもない。

彼が使ったのは人差し指と中指。

八幡力―御刀を媒介にして筋力強化をする術―を使わずにして中央は寿々花の初太刀をたったの二本の指で弾き、斬撃の軌道を逸らしたのだ。

そんな芸当をできる者が存在するのか？

刀使の頂点に君臨する折神 紫だつて出来るとは思えない。

こちらの攻撃を読んでいた……!?

御刀から放った一閃は進行方向とは逆の方へと軌道を変える。

弾かれた衝撃で寿々花は体制を崩し、足元がおぼつかなくなる。

御刀による一閃を防がれてからやけに時間の感覚が長い。まるでスローモーシヨンの様に周りの景色がゆっくりと見える。

そんな事を考える余裕が出来た所為のか、寿々花の目には中央の顔が映る。

随分と平然とした顔をするんですね……。

その表情は喜怒哀楽などなく、いつも通りと言わんばかりに顔色を変えず唯々、冷たい。

ああ、次元が違い過ぎる……。

差が埋まらない、如何ともしがたい現実を突きつけられ、驚愕よりも諦観に近い感情が寿々花を満たす。

そして目の前に居たはずの中央が寿々花の視界から姿を消す。

確かに寿々花の読みは正しかった。

音もなく中央は寿々花の後ろに回り込み、彼に気付かない少女の頭に勢いよく左手で手刀を打ち込む。

「ハッ、ッ」

刹那―彼女の頭部に強い衝撃が襲う。

「あ、痛、つ、た、あ、ー」

レギンス娘の手からガチャン、と九字兼定が床に落ちる。

足を屈め膝小僧と顔が触れるか触れないかという距離で頭を両手で抱え込むと十本の指に力を入れ、痛み元となる箇所を揉み解す。少しでも痛みが和らぐようにと入念に。

今でも中央がいるで在ろうとする後方に上半身を捻る。

彼女の目が涙目となり痛みを耐えるのと同時に加減を知らないバカ野郎に訴えかける。

なぐんでこごごまで強く叩いたんですの!?

痛みに支配され声が出せず、金魚の様に口をパクパクさせる。

痛みで淑女然としたお嬢様らしからぬ鼻汁が顔を出し講堂内の照明で光り、鼻孔から垂れそうになる。

中々痛覚が和らぐ事がない頭部を擦り、更なるプレッシャーを愚者に与える。

引かない痛みを与えた当の本人というと、別に死にやしないんだ、それくらい大丈夫だろ？ と、言わんばかりに飄々としている。

一方、蚊帳の外である二人の刀使はというと――

「……………」

――終始無言で佇んでいる。

……鬼ですね。

立ち会った者と見物人に東西南北 中央という人物は恐怖と痛みをまだ十代半ばの少女達に植え付けた。

「どうやら終わった様だな」

「……………その様ですね」

「よし、中央の実力も測れたこ――」

紫の言葉は聞き漏らさない様にすべきなのだが、この日の寿々花は痛み以上に勝るモノがなかった為、今日という日に初めて敬うべき人の言葉を取りこぼしてしまふこととなった。

すつかり日も暮れた頃、立ち合い後に中央は紫の執務室に呼ばれていた。

残りの書類を片付けておけとの命令が彼に下されたからだ。

室内に誰もいない事が前もって分かっているが失礼しまーす、と一応声を掛ける。

「……………えっ？ 何、今からこの量の書類整理するの？」

執務室中央にある机に積み重ねられた書類の山という山を見つめ、中央はひっそりと呟く。

「こ、これが、日本が世界に誇るブラック企業というヤツか……………」

東西南北 中央、来日して初めての労働を開始――

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第4話 折れた花

## 4. 折れた花

長船女学園学長室――

「うん？　どうかした、あかねちゃん」

やや褐色の肌色をした女性が長船女学園学長室のソファで対面に座る和装の女性をあかねちゃんと呼び、声を掛ける。

「う、ううん、何でもないよ、なーちゃん。ちよつと悪寒がしただけだから」

和装に対してスーツの上に羽織を着ている女性、なーちゃんにあかねちゃんと呼ばれる女性は、ぞつと寒いものを背筋に這わせながら今尚、身体をブルブルツ、とふるわせながらそう返答する。

手に持っていたティーカップから紅茶が零れそうになる。

誰かが噂をしている？　でも今のは噂されている様な感じじゃなかった。何か、第六感の様な……。

嫌な予感しかない。

何故だか分からないがあの日……実姉から感じた気配とは別のナニかが青みがかった黒い長髪の女性の不安を掻き立てる。

「ひよつとして風邪？　ちよつと止めてよね、今の時期に風邪なんて」

背中に薄っすらと汗が滲む。

命を脅かす様なモノではなく、ただ、こう、不快感が漂う。

どちらかというど貞操の危機が迫る、そんな女性としての本能が訴えかけてくる。

心配してくれている数年来からの親友に対し、

「本当に大丈夫だか――」

言いかけたところで、コン、コン、とドアをノックする音が扉の外から聞こえてきた。

小さくもなく、大きくもない、けれども聞き逃すことのない丁度よい音が。

「時間通りですね」

「そうですね。よし。いいぞ、入れ」

雑談を交えていた二人は飲みかけのティーカップをソーサーに戻し、職務に戻る。

「失礼します」

学長室に入室したのは一人のスーツ姿の女性。

枝毛が無く綺麗に整えられた漆黒のポニーテールを揺らし、目尻が上がったキリつとしたつり目をしている。

ムスツとし顔色一つ変えないではいるが表情金が壊死している訳ではなく生来のモノであり別段機嫌が悪い訳ではない。

ただ彼女を見た者は口をそろえてこう言う。

キツそう。と。

又、だがそれがいい、とも。

上はグレーのスーツジャケットに下は同色のボトムス。動き易い様パンツタイプのモノで、腰には御刀を帯刀する金具が装着されているが、帯刀方法が刀使と違い鞘の鑑が地面へ向いている。

御刀と背広を着用している為か、より一層近寄りがたい雰囲気がある。年期を迎えた女性から醸し出される。

「お久しぶりですね、小百合さん」

「お前も元気そうで何よりだな、小百合」

「ご無沙汰しております、朱音様、真庭学長」

小百合と呼ばれ帯刀する女性があかねちゃんと呼ばれた和装の女性——折神 朱音となーちゃんと呼ばれたやや褐色に銀髪の女性——真庭 紗南に挨拶を交わした。

「世間話はまたの機会にして頂き、早速本題に移って頂いてもよろしいでしょうか？」

久方ぶりの来訪者の言葉に互いの顔を見合わせる朱音と紗南の二人。

少しばかり複雑な心境が表情に表れる。

咳払いし、仕切り直すかの様に朱音は口を開く。

「では、百合園 小百合さん。貴女には二名の刀使と共に沖縄に向かって貰います」

入口を背に向けて立つ女性を百合園 小百合と呼び、岐阜から岡山

まで彼女に足を運ばさせた理由を伝える。

「沖繩に、ですか？ 確か沖繩には『S装備』スチームアーマーの開発に関わる重要な施設が在った筈ですが……まさか私にテスト装着者になれと仰るのですか？」

「イヤイヤ、違う違う。今回お前に依頼するのはコッチで選抜した刀使二名の護衛。

それに伴う『S装備』開発に係わっている研究所職員の警護と施設防衛だ」

小百合が明後日の方向へと思い至った為、紗南はすぐさま正す。

……依頼される仕事の量、多いわね。

「表向きは日米合同による開発ですが18年前の事もあります。余り考えたくはありませんが人命が最優先です」

「ウチの生徒の他に職員全員を護衛するのはお前に負担が掛かり過ぎている事はこちらも重々承知している。だが、少数、ましてや単独でそれを遂行できる優秀な人材は残念ながら後にも先にもいない」

「施設内にいる米軍と外部から来る産業スパイに注意しつつ、『S装備』暴走にも備えろ、ですか。分かりました、承ります」

「良いんですか!？」

快く了承した小百合に朱音は驚きを隠せない。

彼女にもやらなければならぬ重要な任務がある。数日間彼女をこちらの都合で拘束する事になるのだから何かしら条件が提示されるばかりだと思っていたのだ。

「良いも悪いもありません。『阿修羅』あすら殿からは今回の依頼に助力する様にと仰せつかっています。何も問題はありません」

「ヨシ！ なら、今回同行する刀使を紹介するでしょう……あーエレンか、薰かおると一緒に入ってきてくれ」

室内正面のデスクに備え付けられた受話器を元の場所に戻すと学長室の一つしかないドアからノック音が鳴り、「エレンと薰かおるです！」と少女の声が続く。

「おう、入っていいぞ」

学長である紗南が二人の入室を許可する。

「失礼します！」

「失礼します！」

「あー紹介する。そっちの明るくて胸がデカイ金髪娘が古波蔵こはぐら エレ  
ンだ」

「古波蔵 エレン、デス。長船女学園中等部二年デス。よろしくデス  
！」

紗南が紹介する長身の刀使いエレンに小百合は振り向き、視線を注  
ぐ。

黒いカチューシャで金色の長髪を纏め、制服は黒いリボンタイに白  
いブラウス、山吹色と桑茶に近い二色の変則的なジャケットを着用し  
ている。

プリーツスカートには焦茶で一本のラインが入り、右足にはサイハ  
イソックスを履き、スカートとの間からガーターベルトが垣間見え  
る。

左足はブーツソックスなのかルーズソックスなのか、若干弛んでい  
て左右非対称に履いており真っ先に目に付く金髪以外にも彼女は印  
象に残り易い。

何より注目すべきは彼女の豊満な胸部にある。

伍箇伝の制服はどれも特徴的なデザインだが胸部を強調している  
為かデザイナーが意図的にそうデザインしたかは不明だが余計に視  
線を注視させる。

中等部……二年？

どこからともなくボヨンと効果音が鳴るのが聞こえて来る。

疲れてるのかしら、幻聴が……。

聞こえる筈はないのだが、エレンの明るい性格がそうさせるのか不  
思議とそう聞こえる。

金髪の所為で派手に見えるが長船女学園の制服をしゃんと着こな  
している。

御刀は越前康継えちぜんやすつぐであるが客人と顔を合わせる事と構内で待機する  
事もあり、今は帯刀していない。

「んで、そっちのちっこいピンク髪と胸、そして何もかもちっさいのが

益子 薫、それとソイツの頭上にいる益子家の荒魂もとい、守護獣のねねだ」

「ちつさいを強調すんな！ あー同じく中等部二年の益子 薫だー。ヨロシくふつ——！」

瞬間の刹那、薫の頭頂部に紗南の拳が落ちる。

荒魂の中でも小型サイズのねねはサツ、と薫の頭を踏み台にしてエレンの胸に飛び乗る。

よくあることなのでエレンは気にせずねねを受け入れる。

「ゴウラツ！ 薫！ なんだその挨拶は！ こう見えて小百合は美濃関のOGなんだぞ！ 後輩らしく先輩を敬え!!」

……こう？

一瞬、引つ掛かる所があったが小百合は一先ず受け流す事とした。それにしても真庭学長、益子さんへと移動する動きが速いわね。まだ現役で刀使やれるのでは？

「痛つつ……！ そ、そうならそうと言え、おばさん——グエエエツ！」

「ああ、いつもの事なので気にしないで下サーイ」

「ねね——！」

バンツ！ バンツ！ と紗南の腕を何度も何度も意識が続く限りタッチする薫。

紗南の片腕は薫の首を絞め付け、もう片方の腕でしっかりとホールドされている。所謂チョークスリーパーだ。

紗南の身長は180cm前後、対する薫は135cm程しかない。その所為で体格差により、薫の身体は宙に浮き足をばたつかせる。

紗南と薫。そして朱音の雰囲気から察し、「その様ね」と、小百合は答えた。

「……改め、まし、て、益子、薫、death………」

辛うじて窒息を免れ紗南の腕から解放された薫は短い自己紹介の後にバタリツ、とその場で倒れ込む。

益子 薫。先に紹介された古波蔵 エレンと同学年、つまり、中等部二年であり長船女学園に在籍する刀使である。

黒いリボンでピンク色のツインテールを結び、前髪にはピョコツとケモノの様なケモ耳が天井へ向いている。

眠たそうなジト目と両方の指先が五本とも解放された黒いグローブ、それと両脚にはワンポイントとして小さいリボンが入った白色のオーバーニーソックスを着用。

同じ長船女子園の制服を着ているのだがエレンと決定的に違うのが胸囲である。

僅かに膨らみかけてはいるが制服の上からではストーン、と平らに見え、サイズが合っていないのかジャケットもだらしなく肩から滑り落ちていく。

襟に付けるリボンも薫の場合、制服に取り付けている。

長船女子園の生徒——先輩、同級生、後輩——や学長に至るまで周囲が抜群のプロポーションを誇り、克、彼女自身が小学生じみた体型である為、小さな刀使は思春期で成長期真っ只中な自分に僅かながら希望と絶望を抱いている。

背丈は違えど彼女と同じように慎ましい胸部を持ち合わせるポニーテールの女性は腹ばいの少女に手を差し伸べ、丁寧に身体を持ち上げて起こすと、一方的に争われた形跡が残る乱れた制服とピンク色の頭髪を小百合は直す。

「い、言うておくが、貧乳は、希少価値だからな……」

放っておいてもその内自分で如何にかしたのに。

そう言いたげな少女は照れ隠しでそっぽを向く。

「大丈夫よ。私と違い、貴女はまだ成長期なのだから」

「ね〜ね〜」

ねねと呼ばれる荒魂は姿形は小動物ではあるが尻尾にも両目と口に酷似した顔があり、遠めから見ればそれはコンセントプラグに見える。

刀使である以上、薫も御刀を持ち、銘はねねきりまる称々切丸と呼ばれる御刀を持つがエレンと同様に今は構内という事で保管している状態だ。

ねねと称々切丸、荒魂と御刀、この二者は縁も所縁もあるがそれは後日語られる事となる。

「装着テストの予定日は二日後。向こうに着いてからの詳細はこの用紙に記載されていますので、一度目を通して置いて下さい。チケットは手配してありますので明日ここでチケットを受け取り、公用車で空港まで行き、飛行機で沖縄に向かつて下さい」

「何か質問はあるか？」

「空港まで直接向かってはいけないのですか？」

立ち上がった小百合は朱音からスケジュールが記載された用紙を受け取り目を通す。

沖縄に到着後の翌日からテストは実施される。

向こうへ着いてから直ぐにテスト開始、ではいくら刀使とはいえ未成年の彼女達には少々酷であるというもの。

滞在するホテルや施設周りの確認をしたい小百合にとっては学長達の配慮は有難いものである。

だが、朱音の発言にもある様に当日の移動時に此処長船女学園から公用車を使うことが腑に落ちない。

「ああ、今回は任務だし何より薫の御刀がな」

小百合は僅かに首を傾げる。御刀なら本人が帯刀していけばいいだけの事。何を問題視するのだろうか、と。

「薫の御刀は衤々切丸といって2メートルを超える代物です！ 移動に時間を要する場合には乗り物が必須です！」

ああ、成程。それならば仕方ない。と小百合は納得する。

「分かりました。では明日定刻通り此方に伺わせていただきます」

「失礼します」と、一礼を済ますと彼女は来客用のスリッパで踵を返す。

静かに閉められた扉と御刀を持つ女性を見送ってから朱音や真庭学長と雑談をしていると「あ！ 思い出しマシタ」と、不意にエレンの抜けていた記憶がよみがえる。

「朱音様、紗南センセイ、失礼します。ほら薫、行くデスよ！」

「わかっ、てっ、うお、おおお……!!」

薫の短い腕を引っ張り、慌てて学長室を出るエレン。

紗南にチヨークスリーパーを掛けられた時以上に身体が宙に浮き、

寝そべる様に水平に固定され走る度上下に揺れる。

余程急いだのか扉の蝶番からギーギーと悲鳴が漏れ、閉まる際にラッチボルトからもカチャリ、と音が鳴る。

扉が閉まったにも関わらず「サユリン！ 待って下サーイ！」と、エレンの呼び声が妙齢の女性達の耳に入る。

——  
長船女学園構内通路——

……荷造りは終えているし今は職務中。明日には出立する訳だし、岡山を観光する気になどなれないわね。さて、どうしたものかしら……。

「……！——ん！——……！」

真庭学長に頼んで学園内の講堂を借りて鍛錬をするべきかしら？

「——リン！——プ！——スト——……！」

でもそれだと警備員の仕事が増えるだろうし。真庭学長も私が帰るまで学園に残る可能性も……。

「——ユリン！」

第一、此処では私は部外者。帯刀している私が町を出歩けば目立つ……。

「つと、ああ！ 待って！ 待って下サイ、サユリン！ s t o p ! s t o p !」

古波蔵さん……いつもあんなに声が大きいのかしら。

自分が呼ばれているとはつゆ知らず、後ろから足音が大きく近づいてくる。

ガシツ、と小百合の手が勢いよく捕まれる。その拍子に「ぐえっ！」と後ろから短い声が聞こえる。

捕まれた手には痛みは無く、伝わる感触も柔らかいモノであった。

「……古波蔵さん？ どうかしたのかしら？」

「サ、サユリンッ！ 呼びかけたのに止まるどころか、どうして振り向いてもくれないのデスか!？」

この子は何を言っているのだろう。私は名前どころか名字も呼ばれていな――

そこで小百合は気付く。

「サユリン、とは私の事？」

「他にいませんよ」

曇りのない澄んだ目でハニカミながらそう答える。

飄々としているのに真っ直ぐな目で自分を見つめる少女。

少し……苦手かな、この子の事。

「ところで、何あったのかしら」

「えつとデスね」

「短期間とはいえオレ達と行動を共にするんだ。そこそこ親睦は深めておかないとな！」

紗南とエレンに負わされたダメージが抜けきらないままだが、彼女の頭上や顔にはキラキラと小さな星々が出ているかの様に薫は握り拳を固めてジトつとした目を輝かせていた。

「薫はサボりたいだけデスけどねー」

「ねー」

ねねはエレンに同調すると「ねねー」と、薫の頭上からねねが小百合に飛びつく。

両の手で小皿を作る様に反射的にねねを受け止める。

あつ、この子荒魂だったわね……。

「どうかしたのかー？」

「いえ。私に懐くとは思ってもいなかったから」

手の平で屈託のない笑顔を見せる小さい荒魂。

無邪気そのものである小動物に不思議と小百合も張り詰めていた表情が和らぐ。

「んじゃ、決まりだな」

「そうですネ。善は急げというヤツデスね」

長船女学園校門前――

「あつ!?」

「どうかしたの? 古波蔵さん」

「ん、ああ董すみれか」

進行方向から董と呼ばれる一人の刀使が歩いて来る。

身長は200センチを超える超高身長と口元を覆い隠すマフラーを巻いており、一目見ただけで彼女だと分かる風貌の刀使。

「おや、益子しこに波蔵はぐらじゃないか。こんな時間にどうした? 二人そろってサボりか?」

「違いマスよ。それよりスミスミこそ任務終わったんデスか?」

「カカカ、ああ、正解。それよりソツチの来客はどなたかな?」

「コチラは百合園 サユr……小百合さんデス。こんどの任務で一緒に緒するデスよ!」

今、あだ名で呼ぼうとしたわねこの子。

「百合園 小百合です。美濃関学院に在籍していた元刀使です。宜しくお願いします」

「ケケケ、卒業した先輩でしたか。ワタシは金城かねしろ董すみれ。そこにいる益子しこ、波蔵はぐらの一つ上の学年。御刀は破邪はじやおんたちの御太刀。ヨロシクです」

董は会釈せず、言葉だけを述べる。とてもじゃないが会釈できる状態ではないのだ。

何せ彼女の御刀――破邪の御太刀は全長465センチメートル、重量に至っては75キロもあるのだから、無理な話である。

今も破邪の御太刀をバーベルを担ぐように肩甲骨上部に乗せ、両手で支えている。

それに加え、動き回ることを可能としているのが日々欠かさず剣技を磨き続けた鍛錬と筋力トレーニングの賜物。

長船女学園に入学する前から鍛え続け、そして鍛え抜かれた身体は重量物を軽々と扱えるにまで彼女を変貌させた。

お陰で全身の隆起した筋肉に合わせ彼女の制服は特注サイズである。

天は二物を与えず、というが彼女にはそれが当て嵌まらない。

身体を鍛え成長させる才能、刀使として御刀に選ばれる才能、並みの刀使にはない剣術の才能。そして、戦闘センス。

だが、必ずしも怪我をしない訳じゃない。

人である以上何かしらの怪我は負う。

だから彼女は慎重を期して行動する。

この子も中等部、それも三年生……。

董の超高身長に目が行きがちだが、エレン程ではないにしろ例に漏れず彼女もビッグなモノを持つ。

極力、長船には来ない様にしよう。

サイズがAの女性は決意を固める。

「スミスミは凄いいんデスよ！ 何とツ！ 単独で荒魂討伐の任務を請け負っているデスから！」

「確か二年前からだったから、中等部一年の頃からか？ 若い内から良くやるよ、ホント」

「若いって、薰もワタシもまだまだ若いじゃないデスカ」

「それより金城さん、貴女此処にいて大丈夫？ 何か用事があったのでは？」

「ククク、ええ。ワタシはこれから任務完了の報告に行くからココで失礼させて貰いますよ」

「ええ、コチラも引き留めてしまいごめんなさいね」

「oh, sorry。また今度ネ、スミスミ！」

「おうーじゃあなー」

「ケケケ、ああ、じゃあな。益子しこに波蔵はぐら、ねね。それに先輩も、またなー」

別れを告げると董はゆっくりとした歩調で歩き出す。

小百合達三人と一匹もそれにつられる形で地面を蹴る。

元刀使を含む御刀使いの声が聞こえなくなったのを確認すると董は立ち止まる。

「ソッフ、フフ、アレが百合園 小百合、か……ヒヒ、かなり楽しみ甲斐のありそうな人だな」

マフラーの内側でほくそ笑み、舌なめずりする。

「獲物を見つけた野獣のように眼光を鋭くし、口角を吊り上げ、巨女は笑う。」

「そういや、元刀使なんだよな?」

ええ、と小百合は答える。

「だったらなんでまだ御刀持つてるんだ? 返納してないのか?」 薫は更に質問を投げかける。

「あつ、それワタシも思ってた! ひよつとして返納した後、又授かったのデスか?」

そんな事あるのだろうか? 薫は首を捻る。

「いえ、学院生時代も今も同じ御刀よ」

「ンン? 変デスねー。サユリンの御刀、確か七支刀しちしとうだった筈デスけど……」

「しちしとう?」

「ねー?」

薫とねねが頭上に疑問符を浮かべながら同時に尋ねる。

「剣身の左右に三本ずつ段違いで枝刃が付いている御刀デスよ。特殊な御刀としてサユリンと一緒に以前授業で紹介されたじゃないデスカ」

「ああーその時寝てたからなー」

「薫、授業中はちゃんと起きてなきやダメ、デスよー」

「ねー!」

「授業なんてやってられん」

「……私、授業で取り上げられてたの?」

「Yes! 写真以外にも稽古の動画も撮影されていましたヨ! 凛々しくてとてもcoolでした!」

「ああ、思い出してきた。そういえば授業中に動画を見せられてたな。途中で寝たが、アレ、先輩が撮影されてのか」

「……………確かに当時、授業中なのにビデオ撮影していたわね……………まさか、私を撮るだけならまだしも、剩れ後輩の教材にされるなんて思いもよらなかつたわ……………」

「それにしても、二人とも仲がいいのね。入学してからの付き合いなのかしら?」

長船の凸凹コンビを目の当たりにして元美濃関のOGは湧き出た興味を言葉にする。

「Yes! 薫とは入学してからのBest Friendデス! 勿論、ねねもデスよー!」

「ねねー!」

「サユリンにとってのBest Friendは誰なんデスか?」  
「私は——」

エレンの隣にいた小百合は今まで彼女達に向けていた顔をおもむろに正面に向ける。

「——いないわ。美濃関にいた時はずっと一人で過ごしてたから」

「……………オイ、どうするんだ。空気が重くなっちゃったぞ」

気だるげなピンク色の少女は晴れ晴れしい金色の少女の左わき腹を咎めるかの様に小突き、自分の顔まで引き寄せ、声を抑えヒソヒソと話す。

「Sorry. まさかボツチだっただなんて思いもよらなかつたデスよ」

「ねー」

空気を讀んだのか、この時ばかりはねねも声を潜める。

「Sorryデス、サユリン。気を悪くしないで下サイ」

「構わないわよ。貴方に悪気があった訳じゃないもの、気にしてないわ」

特に気にすることもなく、グレースーツの女性は淡々と言葉を口にする。

「それで、話を戻すとその七支刀ってのと先輩が今もってる御刀が違

うってのはどうゆう事なんだ？」

「oh, そうデシた。サユリンの鞆の形状を見る限り七支刀ではなさそうなのデスが、そこのところどうなんデスカ？」

人差し指を顎へ置き、上目遣いで考え出すと小百合に問いかける。

「そうね、色々とあつて形状が変わつたのよ。学長達から口止めされているから形状が変化した事については答える事ができないわ」

「それよりも」と、一言付け加え、

「本当に良かったの？ 授業に参加しなくて私に付き添うだなんて」

「気にしなくていいぞ。今回の『S装備』開発は任務扱いにされてるからな。昨日から準備期間で授業や他の任務は免除される事になるんだ」

「本当は薫がサボる口実が欲しくて紗南センセイに口八丁手八丁使つて免除させたんデスよ。サボる事に関して薫の右に出る者はいませんネ」

ふう、と一拍置き「分かったわ。なら、エスコートお願いしようかしら」

「Yes!」

「おうー！ 任せろ！」

「ねー！」

二人の刀使と一匹の荒魂は一人の刀使を連れ立ち町へと繰り出す。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第5話 S装備

## 5. S 装備

ストームアーマ  
S 装備装着テスト 前日――

長船女学園の通用門に一台の黒塗りされたワゴン車が止まっている。

国内外ともに人気のある車種で、公用車として使われている為か窓ガラスからホイールに至るまで汚れは見当たらず、日差しにより光沢さが際立つ。

ルーフキャリアに固定された全長324センチある御刀も自身の主が現れるのを今か今と待ちわびている。

エンジンが止められた乗用車の周りには三人の女性が佇んでいた。

「それじゃ、二人の事ヨロシク頼むぞ」

「はい、真庭学長」

銀髪の女性は漆黒の髪を持つ女性に言う。

次いで、隣に居る和装の女性がスーツジャケット姿の女性に声を掛ける。

「もし不測の事態が発生した場合は小百合さんの判断で動いて下さい」

「分かりました、朱音様」

これから沖繩へ向かう三人の身を案じ、朱音の眼差しは真剣そのものであった。

「おっ、来たな……んん？」

待ち人たる刀使がゆったりとした歩調で近づいて来たのを目視してきた所で、紗南は目が細まる。何かがおかしい。

エレンが後ろ歩きでこちらに來ている。

キャリアケースやポストンバックといった滞在に必要なモノは予め称々切丸同様ワゴン車に積んである。だから小百合を除き、手荷物となるモノは無いはずなのだ。

だが、どうだろうか。何かを引き摺っている。

目を凝らすと金髪の少女が髪色がピンクで染まる少女の両脇を掴み、ズルズル、と踵を擦り減らしながらアスファルトに線を描き、確

実に距離を詰めている。

そして、漸く二人の少女は通用門の前まで辿り着く。

「お、お待たせしマシたく」

「お早う、ごさうじ、ます……」

「お、お早う……お早う」

生気が消えぐったりとした薫と熟睡するねね、それと愛想笑いを浮かべるエレンに、紗南は何とも言えない表情を浮かべる。

任務の前日だというのにだらしない顔の薫を怒るに怒れない。

集合時間も遅刻した訳でもなく、定刻よりも二分程早い。途切れ途切れだが挨拶も出来ている。

「……大丈夫？ 益子さん」

ぐったりとしたピンク髪の少女に小百合は彼女の顔を覗き込む。

誰が見ても分かりやすい黒ずんだ部分が目の下部にできていた。

「アハハハ。ダ、ダイジョウブ、デスよ！ ほ、ほら、薫シャキツとするデスよ！」

「ね、眠い……」

全く大丈夫そうじゃないわね……。

「益子さんはいつも朝は弱いのですか？」

「いや、夜更かしして特撮モノを見てたなありや」

特撮モノ？

聞き慣れない単語が小百合の耳に届く。

見てたということは何かの深夜番組だろう。彼女はそう断定した。

「薫はヒーローが大好きなんデスよ。それが高じて刀使になったのデスから」

「……ヒーロー……？ えっ、趣味のお陰で刀使になれたの？ この子。」

「まあ、益子家は代々刀使として歴史在る家系だからな。刀使としての在り方や荒魂とどう向き合うか、とか色々引き継いできた訳なんだが。コイツの場合、刀使になれたのは家柄それだけじゃないんだよ。いつかヒーローに絶対になるんだ！ 絶対につ！ つて目を輝かせてたんだ。小さいときからな」

凄い執念ね。私と大違い……。

「ほら、薫。シャキツとしろ、シャキツと」

完全に熟睡しているねねを掴まむと、エレンに預け、寝ぐせの付いた薫の髪をわしゃわしゃと掻き乱す。

「あばばば……」

「……昨日みたいな状況にならないのですね」

「今日は『S装備』のテスト任務ということもありますので真庭学長も気を遣っているでしょう」

口に手を当てクスリ、と微笑む仕草を見せ、朱音は言葉を紡ぐ。  
羨ましそうでもあり、寂しそうな、そういう表情を孕んでいた。

「叱咤激励をするだけが上司の役割ではありませんから」

「エレン、薫。快く引き受けてくれたんだ、あまり小百合に迷惑かけるなよ」

「分かってマスよー！」

「うお、おお……」

「では、改めて。小百合さん、お二人を宜しく願います」

「はい」

公用車に乗り込むと三人の刀使と一匹の荒魂は二人の元刀使に見送られる。

沖縄県とあるホテル内――

地域間輸送用旅客機リジョナルジェットの車窓から一人を除き景色を楽しむことなく沖縄県に到着した刀使一行は空港に着くと、これまた沖縄の？華街や海を楽しむことなく宜野湾市ぎのわんのとあるホテルに直行することとなった。

無論、ホテルの移動にはタクシーやハイヤー等ではなく、真庭学長が手配した研究施設が保有する公用車である。

ロビー内で受付を済ましフロントクラークから部屋のキーを受け取ると、小百合はロビー内に備え付けられたソファに座るエレンと

思う存分ソファアに体重を乗せ、睡魔から覚醒することに成功した薫、そして充分な睡眠時間を得て主と同じように寛ぐねねの待つ方へと足を進める。

「ごめんなさい。少し時間が掛かったわ」

「No problem, 大丈夫ですよ」

「このソファ、中々の座り心地だぞー。先輩も少し座ってみたらどうだー」

「ねー」

「部屋は何階なん德斯か？」

「部屋は3階のトリプルルームね」

カードキーに書かれた4桁の数字を見せる。

確かに下3桁に3の数字が印字されている。

「何だ、スイートじゃないのか。あのオバサン、ケチってんじゃないやねえよ」

「薫、遊びで沖縄に来てるんじゃないん德斯よ。それに、ビジネスホテルじゃないだけでも有り難い德斯よ？」

「分かってるよ。ただ、公務員とはいえオレ達肉体労働している学生なんだ。少しぐらい贅沢してもバチは当たらんだろ？」

少々、辛口な事を言ってみせると、近くで待機していたベルスタッフが近づいて来る。

小百合はベルスタッフから荷物を預かる様声を掛けられるが、「有難う御座います。大丈夫です」と、片手で断り遮るかの様に手に持っていたアタッシュケースを遠ざける。

それでも笑顔を崩さずにベルスタッフはエレベーターまで三人と一匹の案内を続け職務に努める。

エレベーターから降りると、先導者の如く床を蹴るベルスタッフに小百合は、「有難う御座います。此処からは大丈夫ですのでお引き取り願います」と、伝える。

「何か御座いましたら何なりとお申し付けください」そう笑顔を絶やすことなくベルスタッフは一礼を持ってフロントへと向かう。

「良かったのデスか？」

「真庭学長が手配してくれたホテルとはいえ、何が起こるか分からないわ。念の為よ」

カードキーをドアノブの上にタッチすると小さな丸状のLEDが青緑色に点灯し、ドアロックの解錠音と共にチューブラ錠を開ける。

「ちよつと此処で待ってて」

そう言っ同行者を制止すると年長者である彼女は客室へと入る。

室内の安全を確認すべく素早く行う。

玄関を、バスルームを、並べられたベッドの下を、備え付けられた冷蔵庫を、果ては天井まで隅々と。手早く安全を確認すると二人と一匹に入る様促す。

そんな神経質にならなくてもいいだろうに、そう思いながらも小百合の用心深さに感心する薫はポストンバックを放り出し、一番手前のベッドにダイブする。

「とおっ！」

「あっ!? 薫、ズルいデス！」

薫に負けじとエレンも彼女と同じベッドに勢い良く突入する。

二人分の体重がベッドに寄りかかり、悲鳴を上げる様に小さく軋む。

女性しかいない為かそれとも彼女自身の性なのか、スカートが捲り臀部にフィットした空色の布地が顔を覗かせる。

若いわね……。

「先輩もどうだー？」

「私は遠慮しておくわ。それに……見えてるわよ、下着」

「What!?! あ、ありがとうございます……」

指摘した途端、頬と耳が紅葉ししおらしくなる様は年相応の羞恥心を持ち合わせているようで少しばかり小百合は安心した。

小百合の中ではエレンと出会ってから今の今までの印象は天真爛漫でとにかく明るい。中等部の中でも体つきが良い為、少し心配にはなっていた。

遠出したのと女子同士だから、というのもあるのでしょうけど、羞

恥心があつて良かったわ。もし無かったらホント、どうしようかしら。

おもむろに腕時計に目を向ける。メンズタイプのミリタリーウォッチを身に着けている。短針と長針が1の字を重なり掛けている。

「少し遅くなったけど食事にしましょうか」

「ハイ、ハイ！ ワタシ、ゴーヤチャンプルーがいいデス！」

赤面していた少女はいつも通り太陽のような明るさを取り戻すと、目一杯腕を伸ばす。

「ラフティーが食いたい」

「ねねー！」

……そういえば。

小さな疑問が芽生える。

荒魂のこの子は一体何を食するのかしら？

まさに三者三様。いや、十人十色と言うべきか。

スマホからグルメ情報サイトを検索する。

なるべくホテルの近隣にある方がいいだろう、画面をスライドさせて目を泳がす。数分も掛らずして数件の店がヒットした。値段も先ず先ずといったところだ。

「では、行きましようか」

三人と一匹は繁華街へと繰り出す。

— S 装備装着テスト 当日 —

予定されていた時間に予定されていた場所へ何事もなく辿り着く引率者兼保護者とその同行者達。

山吹色と桑茶に近い二色のジャケットと焦茶のプリーツスカート  
をビシッと着こなす二人の長船女学園の刀使と、彼女達同様にシワ一つ見当たらないグレーのスーツジャケットとボトムスの他にロング

カーデイガンを着用する一人の元美濃関学院の刀使。

当然ながら今回は薫もキッチンと御刀を帯刀している。

彼女の身長が135センチと中等部どころか初等部高学年の平均身長にも満たない所為もあり、衿々切丸は腰ではなく背中で帯刀することとなる。

小百合も研究施設の職員を含む警護任務の為、御刀の柄の頭が<sup>かしら</sup>天を差す形で帯刀してる。

「ここが『S装備』の開発場所かー」

「以前はグランパが責任者だったんデスけど、今はパパとママが責任者になってマス」

昨日の羞恥心が？の様に恥ずかしげのない、寧ろ誇らしげな表情を見せる金色の長髪娘。

腕を組み、口角を上げ、ムフー、と白い鼻息がマンガの表現の様に吐き出される。

所謂ファミコン。ファミリコンプレックスと呼ばれるものなのだろう。勿論、良い意味で。

「――直ぐに迎えの方が来るそうよ」

入口に居る守衛にアポイントメントがある旨を伝えると、職務を遂行する制服姿の中年者は固定電話の受話器を耳に当てる。

数分も掛らず受話器がカチャリ、とフックスイッチを鳴らし定位置に収まる。

「少々お待ちください」と抑揚のない声でそれ以上の言葉を紡ごうとはしない。

だから小百合は待たせている二人と一匹の許へと足を向けたのだ。守衛所近くで待機する自衛隊も特に彼女達、それと小さな荒魂を気にする事はない。

時たま見える長船の刀使が軽く手を振るが任務中ということもありみだりに彼女達に接触してこない。

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

若々しい声が鼓膜に届く。

待たされた感覚がない程の短い時間で研究所職員は姿を現した。

新品同然かと思われる真っ新な白衣の出で立ちをした若年者が。

彼に先導され、火の点いた導火線の様に後ろをついて行く。

中に入ると外の温かさが嘘の様に薄れていくのが分かる。

少し歩くと迷彩色の制服と自動小銃を携えた二人が巡回している。警護内容に含まれていないのか立ち止まっただけの挨拶や会釈は今の所ない。

米国との協力を経て『S装備』を作り上げているのだから彼ら米軍が見回りをしているにも不思議ではない。

通路内は厳重で、二人一組ツーマンセルで施設内の確認や連絡を取り合っている。誰も彼も職務に忠実でサボるような挙動は見受けることがない。見渡せばまた米軍の一組が通り過ぎ、まるで此方が監視されているかの様な錯覚を覚える。

そうこうしているうちに若い職員が扉の前に立つと首に掛けたネックストラップに入ったカードを扉の端の端末に翳すとREDランプが解除音と共に変色する。

「バートランド部長、長船女学園の方々をお連れしました」

「ああ、ありがとう」

連れて来られた一室に入ると若い研究所の職員とは違い、部長と呼ばれた男はキーボードを叩くのを止め落ち着いた声で返事をする。

ブロンドの短髪でスーツに白衣を羽織っており、日本人離れしているが年相応の顔つきをしている。室内には彼一人しかいない。

「初めまして。『S装備』開発部長のミツヒロ・バートランドだ。宜しく」

「初めましてバートランド氏。私は——」

差し出された手を握り返そうとしたが、

「——ああ、知っているよ。『特剣』とっけんに所属する百合園 小百合さん、だろう?」

敵対している訳じゃない。敵意もない。此処では彼らは協力者だ。確かに掌同士合わさった。

だが、この言葉で遮られる。

『特剣』——その二文字で。

折角組み上げたパズルが崩される。いや、もつと言い換えるならば鏡が、そこに映る自分が割れるような錯覚が襲う。

小百合が言いかけた所でミツヒロは遮る様に小百合の情報を口にしたのだ。開示しなくても良い情報を。

国外の人間だから知っているのは当然で、研究職の人間なら尚の事だろう。

しかし、国内の人間は知らない。知る事は先ずないし、世界の事など知らなくていい。

特に、刀使の娘達には。

「……よく、ご存じで」

一瞬、ピクリと時が止まった——ハズは無く、けれども彼女の心は凍てつく。

ここ数日で後方にいる彼女達刀使に見せていた表情が嘘かの様に冷たいモノに変わり果てる。

生気など無い、無表情ではなく無感情そのもの。それが今、百合園小百合というかつて刀使として従事した者が見せる顔。

それを知ってか知らずか、青年期の刀使達はヒソヒソと声を抑える。

「……薫、『とっけん』って聞いたことありませんか？」

「……イヤ、初めて聞いたぞ」

「ねー？」

『特剣』というワードと小百合という女性が刀使を続けられている理由。これは繋がっているんじゃないか。

そして、何かヤバい事に係わっているんじゃないか。

憶測ではあるがそう断定したくなる何か、エレンだけじゃなく薫にも刀使としての、いや、人間として沸々と第六感が訴えかけてくる。

「ふう」と、一呼吸置いた後、

「それと、今回の『S装備』開発に協力するテスト装着者の古波蔵 エレンさんと益子 薫さんです」

「ああ、宜しく頼むよ。エレンさんは古波蔵所長、並びに副所長のご息女だと伺っている」

「ハイ、デス！」

先程の、短時間とはいえ重苦しい空気を壊すかの様に明るく返事をしてくれるエレン。

この時ばかりは底抜けの明るさが有り難く、時折お姉ちゃんと呼びたくなる位には何だかんだで頼りになる。実際には口が裂けても言わない事だが。

そして薫には真似のできないことだ。

「では、案内するよ」

「あの〜一ついいデスか？」

「何かな？」

「パパとママは」

「何でも、外せない急用が出来たとかで内地に向かったよ。ああ、いくら君が古波蔵所長達のご息女で、協力してくれている刀剣管理局の刀使だとしても業務内容を話す訳にはいかないからね。聞くんだったら直接所長達に聞いてくれ。こちらも職務上の守秘義務があるのでね」

「分かりマシタ」

しよぼくれる事なく、古波蔵夫妻の娘は特に深い意味もなく、ただ確認した。

それから「バートランド氏。私からも宜しいですか？」と小百合が声を掛け、「何だね？」と、ミツヒロは答える。

「研究所の内外の警備についてですが、施設外で巡回しているのが派遣されている刀使と自衛隊の方々で、施設内には米軍の方々しか見えませんでした。何か理由がございでしょうか？」

この施設に足を踏み入れたときから感じた違和感。警備する人間の違い。それと雰囲気。

あからさま過ぎる区別に小百合は問てみる。

「ああ、その事ですか。なあに簡単な事です。日米、お互いに協力関係を築いていてもこの研究が終われば研究所の警護も軍はお役御免。『S装備』の生産も国内であれば内地で、国外であれば……ともすれば態々連携が拙い状態で警護して貰うよりも連携の取れ易い状態の方

が良いでしょう」

狙いはソレか……。幾ら向こうにいる大半が活動を休止している状況とはいえあからさまな……。一体『S装備』に何を組み込んだ？……彼ら米国側の思惑が分からない。日本国民への情報統制とはいえテスト当日に責任者である古波蔵氏兩名を外させるなんて事、普通じゃ考えられない。

「さあ、着きましたよ」

疑念が膨らむ中、ミツヒロに連れられて来られたのはある研究室の一室。

先程のミツヒロが居た研究室とは違い、重々しい扉が目の前に広がる。

扉の右隣に設置された液晶モニターに手を翳すとテンキーが浮かび上がり暗証番号を慣れた手付きで打ち込む。

その様子を小百合はミツヒロの背中越しから凝視する。

打ち終わると直ぐに数字を反芻する。

「ドクター日野。協力して頂けるテスト装着者の方々が来てくれましたよ」

「ああ、済まない……。『S装備』開発を担当する日野ひの洋治ようじだ。宜しく頼む」

ミツヒロと同じ様に右手を差し出す。白髪の連珠毛を生やし白衣を着用する洋治は少なくともミツヒロよりかは歳をとっているだろう。

「初めまして、日野博士。刀剣管理局より護衛任務を承りました小百合園 小百合です。そして——」

軽く上半身を捻り、紹介を進める。

「——本日の『S装備』テスト装着者で刀剣管理局に所属する刀使、左に見えるのが古波蔵 エレンさんと、同じく右に見えるのが益子 薫さん。彼女の頭に乗っているのが荒魂のねねさんになります」

「ヨロシクお願いしますー」

「あーよろしくお願いしますー」

「ねー！」

「ああ、こちらこそ宜しく。では、早速テストについて話をさせて貰うが、今回は『電力稼働型』と『珠鋼搭載型』の二種類の『S装備』を装着して貰うよ」

『S装備』には開発当初から二つのプランが立案されていた。『電力稼働型』と『珠鋼搭載型』の二種類である。

『電力稼働型』——その名の通り、電力を使用して作動させるタイプの物であるが、短所が立案当初から懸念されていた。それは刀使としての戦闘術の発動と引き出せる能力についてだ。

刀使以外の戦闘訓練された者が装着すれば絶大な効力を発揮する事が可能となるだろう。戦闘機や戦車よりも遥かに優秀な兵器と成り得る。歩兵の時代に遡る事になる。

だが、今までの試験評価により刀使がこの『電力稼働型』を装着して戦闘術を発動しても一段階、若しくは二段階までが限度であった。更にそれだけではない。何よりの問題は稼働時間の短さである。バッテリーの容量に対し稼働開始から三〇分も持たない事が今日までのテストで判明している。

『珠鋼搭載型』——御刀の素材である珠鋼を使用するタイプの物。珠鋼からエネルギーが供給される為、無尽蔵で稼働できる、その点でいえば『電力稼働型』に対して大きなアドバンテージを得ている。

暴走という最大の欠点を除けばではあるが。

安全性を重視した短期運用か、はたまた暴走を容認した長期運用か。

開発者も現場の人間も頭を抱える内容であり、表向きはその二種類が開発されている事となっている。

今回『S装備』装着時の八幡力と金剛身、迅移の発動と荒魂との戦闘データを採る」

「では、先ず『電力稼働型』からテストを行おう。準備してくれ給え」  
洋治とミツヒロの両名が言い終わると待機していた彼らの助手が二人の被験者に歩み寄り、『S装備』装着の補助を行う。

つつがなく『S装備電力稼働型』のテストを終え、二時間の休憩の後、『珠鋼搭載型』のテストへと再開される。

「ところで……」

『S装備』テスト最中だというのに背広姿の男性は同じくスーツジャケットの女性に声を掛ける。

「何でしょうか?」

ミツヒロは小百合に話しかけるも、当の本人は横に居る彼を見ようとしない。モニターを注視したままだ。

『百千万億』氏は今どうしているのかね?」

「……貴方方に守秘義務があるように此方にも守秘義務がありますのでお答え出来かねます」

「そうか、それは残念だ」

一瞬の間、僅かだがただならぬ気配を感じ取る。気配の正体はモニター内——つまりは『S装備』からである。

荒魂とは違う……でも、これは知っている。

「ねねさん、貴方は此处で見張っていて。貴方の主人とお友達は私が守るから」

「ねねー?」

自身の肩にちよこんと佇んでいたねねを丁寧に作業台に乗せると、小百合には性別がまだ分からない小さな性別不明の彼女の頭を軽く撫でる。

すると、小百合の言葉を理解したのか「ねね!」と、敬礼して見せる。

その姿を見せられ、氷は僅かながら氷解し、小さく微笑むと行き来した扉とはまた別の扉を解錠する。急いで彼女達の許へと向かう。次々と鋼製の足場板を蹴り出し、奔る。

ステップを一段、二段、と飛ばし飛ばし下る。

だが、それでも彼女達の許には遠い。

「何か異常は見受けられるかね?」

マイク越しからスピーカーを伝い、テストルームに日野博士の声が

循環される。

これでは遅い!!

その判断が、一人の人間として、刀使の先輩として、かつて戦場に起ったモノの一人として行動を起こさせる。

踵が足場板に着くよりも前に手摺りを掴み、身体を引き寄せる。

全身が宙に浮くがそんな事は関係ない。

片方のつま先のみで全体重を支え、そしてまた、蹴る。前へと。

足はバネ。向かう方向は対角線上の下。

同じ形状の銅管を繰り返し蹴る。

下に進む度に心臓の鼓動が、血流が早くなる。バクツ、バクツ、と。

これは落下による恐怖ではないし、自死が身近に迫っているのではない。誰かの死が間近に迫っている、その感覚だけが全身を纏わりつく。

もう誰も、死なせない……!!

脳裏にあの日の光景が甦る。

老若男女問わず、人間の――

――血と、

――死肉と、

――砕け散った欠片の山が辺りに広がる、戦場となった一面を。

「先程と同じでno problem! デス!」

「右に同じく」

「評価項目は先程と同じだ。始めてくれ給え」

日野博士は続ける。雪景色の様に無菌状態が保たれた一室で二人の被験者は御刀を構え写シを張り直す。

「いつき、マス! ―オヨ?」

「キエエーえ……?」

本来なら猿叫が木霊したハズであった。

セーフティーが働いたのか、ピクリとも動かない。

「コ、コレ、マズくないデスか……?」

『S装備』の駆動部分から金属が無理矢理擦れる音が断続的に鳴り続ける。

「チョツ!? オイ! どうなってるんだ、コレ!」

オペレーターである彼女達から制御を離れた『S装備』は命令系統を無視し、新たに駆動し始める。AIが埋め込まれているのか、『S装備』はSF映画を彷彿とさせる様にAIが自己判断で演算、行動を起こしているんじゃないかと思わせる程、内部からは勿論、外部からの信号も受け付けない。

お互い、対面へと向き合う。

制御が利かない。ならやる事は一つ。少女は冷静に頭を働かせる。自分の所為で相棒<sup>オレ</sup>を傷付かせはしない。

薫は八幡力の発動を試みた。

薫は伍箇伝の高等部に極僅かしかいないとされる八幡力の最大値、限界である五段階目まで引き出せれる逸材。

中等部であれば尚の事、そこまで引き出せれる者などいはいはしない。

一芸の限界に到達できたからこそ、命の際の際で試す。

たかが機械、されど機械。

これから近い将来、何れ必要とされる『力』。

先の未来の為、ここが踏ん張りどころ。

『ヒーロー』だろ? オレは……『ヒーロー』、なら……! 諦めんなっ!!

上段で構えは固定されていることに変わりはない。

ならば少しでも身体を、向きを横へずらす。腕は遥か後ろへ。

出来なくても、ヤレツ!!

歯を食いしばる。その拍子で下唇を切り、小さな血流が靴を跳ねる。

前など振り下ろすものか。絶対に。例え腕や肩が砕けても入院するだけだ、構うもんか。後のことなんざ知ったことじゃ――

金属音は更に軋みを増す。

「——ねえーっ!!」

咆哮と軋む音が真つ白なテスト場に響く。

「制御が、聞きま、セン………」

どうにかして制御を取り戻そうとしているがビクともしない。

薫は？ 彼女を見やる。

互いに正面を向いていたはずだったが、僅かに切先が斜めに向いている。無理矢理体勢を変えているのだ。

今自分が動かそうともアンカーを地面に打ったかのようにビクともしない。

しかし薫は動いている、動かしたのだ。無理矢理。

導き出される結論は一つ。八幡力だ。

相棒も藻掻いている。ならばコチラがやる事は決まっている。

エレンが考え実行に移したのは金剛身による防御。

写シと『S装備』に身を包んでいるとはいえ、防御性能は完全ではない。

『S装備』の制御下でとはいえ衿々切丸の一太刀は八幡力で限界値を引き上げられた

状態であり、薫の繰り出す一太刀でなくても唯では済まされない。

それにこの距離であれば彼女の、衿々切丸の間合い。

今から横に動いても数ミリが関の山。

ならば、持てる技術、持てる能力全てを防御に費やす。回避など以外の外。

金剛身を五段階目まで引き上げる。

気休め程度にはなるだろう。

薫は、泣かせませんよ……!!

自分は傷ついても良い。でも薫の心に傷は負わせはしない。何としても。

身体の傷は時間と休養でどうとでもなるが、心まではそうはいかない。当事者がどうこう言っても一生残る。

薫は大切な親友！ 守り抜く!!

「クッ、ソガーアッ!!! マジでヤベエって!!!」

極めた八幡力も、極めた金剛身も、機械をせき止めるには限界があった。

彼女達の意図しない反する挙動が実行される。

袈裟切丸は地面へ、越前康継は天井へ振り放つ。

『S装備』の悲鳴音とは比べ物にならない程の金属音が火花と共に鳴り響く。

何とも、ない……??

御刀を振るう瞬間、二人の刀使は貝のように目蓋を閉じた。

親友をこの手に掛ける瞬間を、親友に罪の意識を植え付ける瞬間を、見たくない。

その思いがまだ未熟な刀使らを幼い少女に戻した。

でも、何も起こらない。起こらなかった。

確かに御刀と御刀が触れ合っているし、その感触はまだ続いている。『S装備』が振りぬけと身体に命令する。

今だってほら、自分が打ち負けている。

壁にぶつかつた様に御刀が前に行こうしない。

う、うん……??

御刀が押し返されるのに自分の身体に痛みが無い。

斬られて、いない。だが、そんなハズはない。

何かがおかしい。状況が整理出来ていない。

恐る恐る、少女は目を開く。

目の前には薫の袈裟切丸が自分の頭上で止まっている。

そして、見覚えのある漆黒のポニーテールの女性が左手の『短刀』を逆手で越前康継を止めている。いや、抑え込んでいる。それも微動だにせず。

ああ、良かった……。

心の底から安堵し、大粒の涙が雨のように溢れ出る。

そして、薫は薫で驚愕の表情で啞然としている。  
何が起きたのか事態を飲み込めていないらしい。

彼女が放つ柵々切丸の一太刀は割って入った女性の介入により止められたのだから。

エレンと同様に右手で受け止めているそれは『剣』<sup>つるぎ</sup>で、小百合が帯刀している鞘から抜けられている紛うことなき御刀。

エ、レン……？ 無事、なの、か……？

薫の目にもエレンの五体満足の姿が確認された。

「サ、ユ、リン……？」

「——ふう……」

御刀同士均衡が保たれている状態を良しとしない小百合は硬直状態の『御刀』を弾く。お陰で二つの『S装備』がから空きである。

そこ……！

二つの一閃が胸部を覆う『S装備』に入る。

ノロを収容している強化ガラスが割れ、勢いよくノロが溢れる。

「え、ア、アリガトウ、ゴザイ……マシタ？」

「助かつ、た……のか？」

安堵に浸かるが薫は口元の痛みと共に疑念が生じる。

この先輩、オレの柵々切丸とエレンの越前康継を片手で、それも金剛身無しで防いだぞ。写シ張ってねえし、『S装備』のウイークポイントを見破って一撃いれて機能不全にした。マジで何者だこの先輩。

「不測の事態が起きました。今回の『S装備』装着テストは此処で終了とします。宜しいですね？」

強化ガラスで覆われたモニター室を見上げると小百合は鋭く睨む。

「ああ、構わない。ご苦労だったね」

あっさり引くのね。

小百合にとって洋治の一言が『S装備』開発に不信感を募らせる。

研究室――

装着テストが行われてから半日程が過ぎた頃、研究所内では二人の研究者が議論を交わしていた。

「アレを組み込んでいても『電力稼働型』は八幡力と金剛身の発動が、やはり二段階までが限界……稼働時間も『珠鋼搭載型』と比べ大幅に短いまま」

『珠鋼搭載型』はまあ、暴走も想定範囲内であった。今回は被験者の意識が保たれていたな」

「だが、やはり、どちらも相性は良くなかったか」

ガリガリ――ガリガリ――

とどこからともなく何かを削る音が小刻みに聞こえて来る。

話を邪魔したいのか、続けさせたいのか分からない。だが、話の輪に介入しようとする意志は感じさせられる。

「ああ、我々が予測した通りの結果だった。だが計画に変更はない。これ程の装備を刀使だけに使用するなど愚か過ぎる」

ミツヒロは口を滑らす。得られたデータに目を通して。

今回のテストは彼らにとって成功したモノとなった。

なぜなら。

「では、予定通りテストで使用した『S装備』から『自爆装置』並びに『光子結晶体の欠片』を取り除き保管場所へ戻そう」

長船女学園並びに刀剣管理局、引いては折神家にすら申告していない『モノ』を組み込んでのテストが自分達の予測した通りの結果内容だったからだ。

「次の『S装備』のテストは刀使である彼女達本来の『珠鋼搭載型』でテストを行って貰おう」

「じゃあ、サンプルの『S装備』はもう持って帰っていいの？」

若い、まだ声変わりしてない少女が突如として中年者達に問う。

何故少女なのか。それはその風貌が彼女を未成年者だと認識させるからだ。

日本では珍しくもない、伍箇伝の制服。それも長船女学園の制服である。

「いや、今日はデータだけを持って行ってほしい」「なんで?」

自身の爪を弄っていた少女は視線を動かそうとしない。

「今言った『自爆装置』と『光子結晶体の欠片』は『S装備』に搭載されていたとしてもキミ達が運ぶには危険過ぎる。後日、コチラから完成品を送るとするよ」

「ふくん。じゃあ、さっさとデータ寄越せ」ちょうだい

爪を弄るのにも飽きたのか数歩分彼らの許へ近づくと手を差し出す。

脱力した手首を上下に揺らし年長者を急かす動作をワザとらしくしてみせる。

「まだ取り纏めが出来ていないんだ。少し、待っていてくれないか?」「あくそう。んじゃあ、それまで遊んで来る。そろそろ交代の時間だろうし、良いでしょう?」

「ああ、処理はコチラでやつとくよ」

「そ、ありがとさん」

そう言っただけで御刀を携えた少女は扉から出ると通路を進む。

施設の構造、交代時間、巡回ルート、全て頭に入っている。

スカートに巻かれたベルトに手をやると、ベルトから布を剥がし、左手にそれを巻き付ける。滑り止めの代わりにするかのよう。

照明から照らされる光がベルトをキラリ、と反射させる。

手持ち無沙汰の左手で柄巻を擦り、次に人差し指でトントン、トントン、と一定のリズムを刻む。

御刀の感触をしっかりと確かめ、刀使は行く。

逸る気持ちを抑えながら、今日もこの刀使は歩き回る。

生贄を求めて。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第5話 帰着

## 6. 帰着

「——以上の事があり、『S装備』<sup>ストームアーマー</sup>の装着テストは中断されました。では何か質問はありますか？ 無さそうなら引き継ぎは以上で終わります。では後の事、宜しくお願いしますね」

「はい。任せください」

長船女学園から派遣されている刀使達による研究施設の警護ミーンディング。

今まで警護任務にあたっていた先輩刀使は引き継ぎの後輩刀使達に報連相を行う。

『S装備』に係わる事、周辺設備の異変、業者の出入り、巡回ルート  
の再確認、etc……。

前日までの申し送り内容を伝え引き継ぎが終わると、それぞれの荷物を置くため、各々の持ち場に就く前に一度施設内に入る。

閑散とした屋外で着いていたある筈のない仮面を外し、刀使から一人の少女に戻る。これで漸く本土に帰れる、と。

周囲に人がいない事が分かると、優等生の分厚い皮は剥がれ、本性を曝け出す。

「ああ〜！ しっかし、舞草<sup>もくせ</sup>にならなくて良かったー！ ホントツー！」  
「ちよつと、声デカいわよ栄子先輩<sup>エーゴ</sup>。所属してないとはいえ極秘事項にあたる事なんだから」

右腕を欠伸交じりの屈伸をさせると抑える事が出来ない声をあげる。

栄子<sup>エーゴ</sup>と呼ばれる年上刀使の横で年下刀使の少女は注意を促す。

「大丈夫、大丈夫。今周りに自衛隊の人らないし」

「いや、そういう問題じゃ……いや、もういいや」

頭を抱える二つ下の後輩。

相棒<sup>パティ</sup>として組んだあの日、担任から模範的<sup>……</sup>でも優秀だと聞いていた。

だから私も身近な目標として、この先輩を目指そう。そう心に決めた……ハズだった。

生来の性格なのか、はたまた幼少期若しくは刀使として人生を歩み始めた時からなのかは不明だがともかく、蓋を開けてみればこれなのだ。

彼女の処世術なのかは知らないが成績に、将来に係わる事がない事象についてはまるで興味がない。

今みたいに周りに人がいないと分かると平気で口が滑るし、だらしなくなる。

刀使としての力量も平均以上のチカラを持ち合わせているのに志が低い。

写シを張れる回数も平均以上で、八幡力に金剛身だって三段階まで上げれる。

何より、索敵能力が十分過ぎる程に備わっている。

『明眼』<sup>みょうがん</sup>——視覚を変質させ肉眼での望遠や暗視、熱探知を可能とする術——や、『透覚』<sup>とうかく</sup>——聴覚を変質させ集音やノイズカットを施す術——の技術も習得している。

一つ上の金城 董にも引けを取らないだろう。身鼻肩に聞こえるかもしれないが下手したら親衛隊に抜擢されてもおかしくないのでは？ と、少女はそう思いを巡らす。

「意識高い系でも別に良いけどさ、アンタも程々にしなよ。こんな危ない仕事続けてる方がどうかしてるんだから」

苦笑交じりに栄子<sup>えいこ</sup>は言う。まるで自分が一般人代表だと言わんばかりに。

今でこそ荒魂討伐や特別任務による死傷者は指折り数える程に激減している。

だがゼロではないし、家庭の事情や本人の意向による一般の学校に転入する者も少くない。

かつての『相模湾岸大災厄』の時の様に刀使の殉職者は劇的に減った。

寧ろその時が異常なのだ。

その時代に生まれてなくて良かった。

安堵のため息が吐き出る。

大荒魂が封じ込まれて以来、荒魂の活動も18年前より比べられない程、人と物への大きな被害は激減している。刀使も隊を組んでの行動が絶対の原則となっている。

だが、刀使の在り方については昨今ニュースで取り上げられてはおり、蚊帳の外である部外者達が当事者達を差し置いて議論している。未成年を危険に晒しているのか、と。

賛否両論あるだろうが先人達の今までの努力の甲斐があつたからこそ今の刀使という地位が在り、だからこそ感謝している。そのお陰で卒業すれば程度の差はあれど安定した生活を送れるというもの。まさに折神 紫様、様様である。

メデアは大いに議論してて下さいっ！と。

制服のポケットから取り出したスマホのアプリを立ち上げる。

情報漏洩を未然に防ぐ為、開発された刀使専用のアプリ『TOJ I』。

チャットや音声通話、ビデオ通話、それにグループでやり取りするトーク機能と一般に普及しているアプリと代わり映えのない機能が備わっている。

開発したのはオッサンか？ このネーミングセンスの無さが、もうね。

このアプリ開発にも折神家当主折神紫が関わっている事を彼女は知らない。

ミーティングが終わったことを今日まで担当していた刀使達にメッセージを送る。

すると間髪入れずに返信のメッセージが届く。

速いなー。秒で返信来たよ。

皆、早く帰りたいがっているのだ。

先に集合場所に向かつて。と、簡潔にメッセージを送る数秒の後、了解の文字と意味が込められた画像を受け取る。

まだ就任の準備がある以上、彼女達の準備が終わるまで巡回しなければならぬのが隊のリーダーの辛いところ。

「アンタも先に集合場所に行ってもいいんだよ？」

「そういう訳にもいかないでしょ。そう言って何かあったらどうすんの」

「全く、心配性だなく」

何だかんだこう言って着いて来るこの後輩と一緒にいるのが心地良い。自制していても笑みがこぼれる。

まあ、口には出せんけど。

「それより、話を戻すけど。組織の事、大きな声で言わないで下さい。どこで誰が聞いているか

分からないんだから」

「はいよく……ん？」

敬ってるんだか敬っていないんだか分からない口調の後輩に軽口をたたく。

アンタも舞草の一員じゃないのに。と思っていると、スマホから警告音が継続して鳴る。

通常画面から『スペクトラムファインダー』のアプリが起動する。

「荒魂……？ なっ、施設の外から!? なんて!？」

後輩が声を荒げる。後輩の中でも優秀な部類だが如何せん中等部であるがゆえ

荒魂討伐の任務を熟す機会も討伐数も自分と比べると少ない。

「ほら、落ち着いて、落ち着いて。今焦ってどうするよ」

「つつ……!」

今の一言で落ち着きを取り戻した少女は深呼吸を行い、お礼を言う。

この年齢でここまで瞬時に切り替えれるのは長所を通り越して最早才能である。

「スペクトラムファインダーの反応見てみ。小さいでしょ」

これがないやねー、と自分のスマホを彼女の目の前に突き付ける。映し出される荒魂の反応は確かに小さい。恐らく小型に属するものだろう。

後輩は思考するよりも速く決断する。

これなら私一人でも討伐は可能。なら、

「栄子先輩は待つてて。私が被つてきます」

後輩の提案に躊躇う。

彼女の荒魂討伐の経験は少ない。しかも小型とはいえ単独での討伐となる。自分と同じ特別任務に就いているのだから刀使としても優秀な部類であり、彼女を信頼していい訳ではない。

自分よりも幼い刀使の目を見る。

確りとした眼差しで先輩を見据える。身体の震えも無い。

仕方ない、と根負けした栄子は自分の後頭部を擦り。

「分かった。小型だからって油断して怪我しないでよねー」

「分かっていますよ」

帯刀された御刀を支え、刀使は颯爽と地面を駆ける。その身はとても軽やかで、若々しい。

まだ未成年だというのに自分も歳を重ねたんだと感慨にふける。まだ十七歳だというのに。

小型の荒魂であの子の実力なら二、三分。長くても五、六分で済むハズと、そう踏んでいた。

しかし、後輩が荒魂の許へ向かってから十五分が経過し出した。

やけに遅い。沖繩の日差しから来るものではなく、不安が汗となって背筋に滲む。今だけは風が気持ち悪い。

『スペクトラムファインダー』を見やってもまだ反応が消えない。

それに後輩からの連絡がない所為か、続く鼓動の高鳴りも止まない。

先程からバクツ！バクツ！ と、スピーカーから吐き出される音楽のように耳から離れないでいる。

不安が拭いきれず、要らぬ事に思考を巡らす。

自衛隊に連絡を……いや、荒魂を祓えるのは刀使である自分だけ

だ。荒魂の気配が消えていない以上、それは悪手だ。被害が増える。なら、今日から担当する後輩達に連絡を……これもダメ。『スペクトラムファイnder』に表示が無いだけで荒魂が一体とは限らない。何より刀使の一部隊で本当にどうにかなる状況なのか？

研究室の荒魂が逃げた………だったら警報になるし、米軍も動くはず。ここにいてもサイレンの一つ鳴らないならそうじゃない。

ふう、ふう……。と、息を整え一人の刀使は決断する。

まずは状況確認。その為、現場に向かう。

『スペクトラムファイnder』ないしスマホが一時的に故障して情報が更新されてない可能性だってある。

行動指針を決めると反応許へと向かう。しかし、急がず、慌てず。

急かせば些細なミスを犯す。非常時なのだから焦るなど口酸っぱくして何度も自分に言い聞かす。

反応は？

再度スマホを確認する。『スペクトラムファイnder』の前に栄子の目には数字が映り込む。

正常に丁度数字が切り替わる所だった。

………え？

不意に向かい風が身体を突き抜け、髪がフワリと無造作に踊り、制服が数瞬風船の様に膨らむ。

早く状況確認をしなければならぬのに栄子は案山子のようにピタリ、と全身が硬直する。

完全に忘れていた。

一体どれ程の時間が経っていたのだろうか。スマホに映し出されるのは既にここを巡回しなければならぬ時刻なのだ。

巡回ルートと巡回時間を変更するなら余程の事がない限り事前に連絡は受ける。そういう規則なのだが、変更するなど研究施設の職員は一言も言っていないかった。

素早く後方を確認する。誰もいない。物陰に隠れている素振りもない。

なら耳を澄ます。話し声などはない。あるのは施設の外から聞こ

える喧騒だけ。

だったら同じ刀使、駄目なら研究施設のどこでもいい。連絡を。スマホに表示されるアンテナ四本は左から順に右へ大きくなってはいる。しかし、繋がるハズの回線は繋がらない。

身体がざわつく。心臓の鼓動も落ち着くどころか血流の押し出しが更に早くなる。

流れ出る汗を乾いたアスファルトが吸る。身体に至る所で震えが止まらない。後輩の顔が記憶のフィルターから溢れ出て来る。

敬語で接してくれたのは出会って相棒パティを組んでからの二ヶ月程で、後は殆どため口。

八幡力も金剛身も二段階までで、写シに至っては一回が限度。

更には、直ぐ取り乱すクセと直ぐに冷静さを取り戻せる思考の切り替えが出来るのに何故かバカのように突撃思考の持ち主。

可愛い私の妹分……アレ？ちゃんと名前、言っていない……？

頭を何度も振る。それこそ眩暈がする程に。

それは今は不要な事で、

違う！ 違う!! 今はそんな事を考えている場合じゃない！ 走

れよっ!!

年長の刀使は両足に力を入れる。

迅移による移動や八幡力による身体強化でもっと早く奔れるハズなのだが思考は一人の刀使の安否にのみ向けられる。

思考の放棄中であり、今同業者と鉢合わせしても取り繕うことなど出来ない。

急げ！ 急げっ!! 急げっ!!!

不安を掻き消すように、ただ奔る。

前園まえぞの栄子えいこは兎に角奔る事に没頭する。

距離はそう遠くない。何より高等部二年生の中でも単純な奔りでは速い方だ。

荒魂の反応地点に難なく辿り着くと曲がり角に身を寄せ、その先を伺う。

荒魂は愚か、人の、後輩の気配すらない。

呼吸を整える事も忘れ、御刀に手を伸ばし、音を掻き消してゆつくりと鞘から抜き取る。

写シを張り、周囲を見回すが誰も居ない。

幾度目かの『スペクトラムフアインダー』を見るが、やはり荒魂の反応は付いたままでしかも自分の位置とほぼ重なる。

荒魂討伐の任務は何度も請け負った。

だがそれは、複数人の刀使による部隊での討伐であり、栄子自身単独での作戦行動は今の一度たりとも請け負った事など無く、請け負う事自体許可が下りないのだ。ただ一部の例外を除いて。

栄子にとって初の単独行動。非常事態の中で何が正しいのかなど判断がつかず、呼吸音が口から漏れる。

前園 栄子は富裕層でも貧困層でもない間の中間層の家庭で育った。

十代前半まで特にやりたい事もなく偶々刀使としての資格を持ち合わせた為、ならばと、その道へと進む事にしたのだ。

後輩の様に目を煌めかせ、希望に胸を膨らませて刀使になった訳でも無く、剣術の才があるから刀使になった訳でもない。

ただ、漠然と将来を考えて刀使になった口だ。

学生の内から働けて、給料も出る。卒業後も元刀使というだけつぶしが利くのだ。

模範的な行動をしていれば活躍しなくてもそれなりにコネは入る。

現に高等部二年になってから好条件の就職先が彼女の許に舞い込んできた。

進学先だつて見つかった。

初等部も在るには在るが通常中高、六年間を耐えればいい。ただひたすらに。

荒魂を祓うのだから部隊の刀使達と上手く連携をとりさえすれば、昔の様に大多数の荒魂が出現することもないのだから規律を守れば命を落とす事などない。

そして刀使として従事してきたこの五年程でこの結論に至った。

刀使というのはクソで、もつというなら公務員そのものがクソだと

いうこと。

安定している？ いやいや、結構給料安いから。コッチは命懸けなのに。

福利厚生が充実している？ いやいや、休みなんて早々取れやしな  
いから。平日は勉強しながら命懸けで荒魂を祓って、休みがあるとは  
いえ土日祝日祭日全て荒魂が出現すれば出勤ってそれ休みじゃない  
から。

食堂のご飯もそんなに美味しくないし、取りたい資格の勉強時間も  
ない。

これじゃあ、奴隷じゃん。

だから、あの子にも早々に刀使以外の道を探してほしい。

だから――

ヒュン――ヒュン――

「――えっ？」

最初に左側からソレは聞こえた。

不思議なもので、イヤな寒気がする時というのは周りの音が耳に入  
らなくなる。

だが次にはボトツ、とも、ベチャツ、とも聞こえた気もするが、兎  
も角、アスファルトに舗装された通路の上にナニカが音を立てたのは  
確実で。

「へ……？… なに……？…」

音がした方へ視線を向ける。

どれきせい  
土瀝青一面に広がる赤い液体の絨毯が鮮明に映る。

その上に有るのはボールの様に丸いナニカで、注視すると球体に見  
えるソレからは毛髪が生えている。

その少し手前で真紅に染まるスマートフォンは元の色の面影はな  
く。

スマホ……？ 何で？ そんなはずないでしょ？ だって今握つ  
てたばかりなんだよ？



『迫りくる死』……いや、『迎え入れる死』を。

「な、ん、つで……!? どう、う、し、て……!?」

聞き慣れない不快な音と耐え難い激痛が少女に生の終わりを自覚させる。

心臓の高鳴りは益々高まる。

痛い！ 痛いっ!! 痛いっつ!!! 痛いっつ!!!

剣術の授業の時に肌で受けた剣撃よりも、教師から痛さはこれ位と抽象的な言葉で聞いてた。

だが聞いていた以上に、これは想像を絶するモノで、この苦痛をどう形容したらよいのか言葉が見つからない。いや、見つける暇などはない。

ヤバいつ！ ヤバいつ!! ヤバいつつ!!!

何故こうなったのか。どうしてこうなったのか。現実にかけていてもそんな事があり得るのか。

写シで受けたダメージは軽減され残るが肉体への影響はエネルギー体が引き受けてくれる。

だから実体への損傷は無く、写シを解除した身体は無傷に見える。

しかし、栄子の場合、今はその限りではない。

写シが解除された彼女の手と腕は壊れた人形の一部のように接合出来ず離れたまま。

これでは写シの意味がない。

血い止まないっ!!

最早後輩の安否など気に掛けている余裕などもう欠片も持ち合わせしていない。

どお、して？ 来年受験だよ？ 卒業だよ？ こんな割の合わない

コト、もう直ぐ終わるんだよ？ あとちよつとなんだよ？ 行きたい

大学も決めてたんだよ？

「ね、え、な、ん、で、？」

驚きはない。そのことについて追及することはないし、薄れゆく意識の中ではその気も起きない。

あるのは今何故、自分と同じ長船女学園の制服を着る『刀使<sup>かのしよ</sup>』が目

の前に居て自分を襲ったのか、その理由が知りたい。

彼女の問いは空しく宙を舞う。

だがその問いに対し、『刀使』は無言の答えを返してくれる。言葉と声の代わりを務める無常な一閃の斬撃。

ヒュン——ヒュン——ヒュン——

「あ、が、つ、あ、あ！や、べ、……！」

一閃、二閃、三閃——と金属製の刃の鞭が空を裂き、丸裸同然の肉体から切先は紅く染め上げて踊る。

それはまるで演舞の様に綺麗な弧線を描き、血飛沫の壁画が出来上がる。

ああ、あの子の名前。ちゃんと読んであげればよか——

そこで意識は途切れる。

数分も掛らず、刀使だった少女は物言わぬ骸へと姿形を変えた。

目尻には涙が零れ、鼻孔と口腔からは鼻水と涎と血液が入り混じっている。

絶命したことを確認すると、死神は静かに口を開く。

「フム……弱い。聞いてたよりも弱いし、何より使えないわね、コイツ。折角、加減してたのに」

語ることも動くことも無い死体に使用した凶器を暴言と共に放り、吐き捨てると、急襲者は殺人演舞中も掴んで離さずにいた小型の荒魂を握り潰す。

当然、握り潰しただけではサイズに係わらず荒魂をを祓う事など出来ない。

腰に帯刀していた御刀を抜くと、流れる様に上段から振り下ろす。

途切れ途切れで弱々しくうねり声を上げる荒魂は一瞬で一閃を浴び、祓われる。

御刀を鞘に戻すと、少女はまだ汚れていない制服の一部で金属の刃に付着した血糊と脂肪を拭う。

だがソレだけでは拭いきれない為、仕方なく、着ていた制服を脱ぐと返り血に染まっていない長船女学園の制服で拭き取る。

屋外だというのに躊躇なく下着と柔肌を晒しながら得物に拭き残しが無いか目を通す。

恥も外聞もない、急襲者しやうじよにあるのは強者との邂逅その一点のみ。

「あくああ、帰ったら手入れしなきゃ。しっかし、刀使といっても所詮、ただの一般人かー。やっぱ、『舞草』の人間じゃなきゃダメかな？」  
脱いだ制服を適当に畳む様に包む。

「もう要らないし、長船ながふねの制服どこで捨てよう？」

目的を果たした以上ここに長居するのは無用。

スマホを取り出すと研究施設の彼らへ電話を掛ける。

用件を済ませた事とそちらでノ口を回収するように、と伝え、一方的に電話を切り、端に置いておいたカバンから無地のTシャツに着替えると代わりに血と脂肪が付着した制服を入れる。

「あ、そうそう。忘れる所だった」

死人に主を失った二振りの御刀を突き刺す。これでヨシ！ と、先程の不満が？かの様に殺人鬼は破顔する。

事を終えるともう一つの用事を済ませるべく少女は研究施設へと戻って行く。

その足取りは軽やかで、自然と指は御刀の柄巻を人差し指と中指でトントン、トントン、と一定のリズムを刻み続ける。

レッドカーペットには全身を切り刻まれた死人の上に頭部が丸ごと無くなった死人が墓標代わりの二振りの御刀と共に取り残されるだけとなった。

彼女達が研究施設内で焼死遺体として発見されたのは小百合達が長船女学園で報告を済ましてから数時間後のことだった。

その後、二名の葬儀は家族間だけで執り行われ、亡き娘の親族達からは刀剣管理局にこう訴えた。

長船女学園の関係者と、真庭 紗南は絶対に来るな――

残された遺族からの悲痛な言葉は責任者である真庭 紗南の心を抉る。

長船女学園に報告された死亡報告書の内容には次のように記載される。

長船女学園高等部二年 前園まえぞの 栄子えいこ

長船女学園中等部二年 蔵島くらしま 伝恵つたえ

以上二名は特別警護任務終了後、研究施設の『S装備』爆発の事故に巻き込まれ死亡。

爆発事故を起こした『S装備』は原因究明の為、米軍の預かり調査とする。

岐阜県関市内――

「……あつ」

通行中の女性が何かを思い出し、立ち止まる。

ピタツ、と一時停止したが、幸いにも彼女の後方には誰もいない為、接触事故が起きずに済んだ。

「岡山と沖縄の名物、買い忘れた……」

持っていたアタツシユケースをアスファルトで舗装された地面に一度置く。

続けて伸ばしたキャリアーを収納すると、引き摺って来たキャリアーケースのTSAロックを解除し、ファスナーを開く。

衣類や書類が入っているのは確認出来た。だが、お土産用の包装紙に包まれた物の類は見当たらない。完全に失念していたのだ。

如何するべきか思索していると突如としてと叫びにも似た唸り声が風に乗って聞こえて来る。声から犬の類ではないだろう。

続けざまにスマホのアプリが立ち上がる。

「今のは荒魂？ スペクトラムファインダーは……反応有り！」

美濃関学院に要請を出しては遅い。なら迷う必要はない。

一番距離が近いのは自分だ。伍箇伝に所属していなくても行くべきだ。事が終わってから連絡を入れればいいだけのこと。

そう判断を下した。

もう意思決定を覆すことはない。スペクトラムファインダーに目を通し、再度場所の確認を行う。

息を吐き出し、両手でキャリーケースのトップハンドルとアタツシユケースを握る。

反応地点へ一気に駆け出す。

小百合の加速で暴風とまではいかないが突風が彼女の通った道に吹きおこる。

同市内にある公園にてソレは悪意を振りまいていた。

角の生えた鹿型の荒魂——通称、角鹿型荒魂が蠢行を働く。

中型のサイズに分類される角鹿型は日陰棚や噴水といった公園施設を全壊させると、目の前で倒れ込む少女に目を付ける。

「ひっ……！」

突然の事で気が動転し平静を失う。

荒魂の鋭い目と少女の涙目の視線が重なり合うと、何も出来ない無力な少女は恐怖と共に硬直する。

逃げたいハズなのに身体が全身に鉛を纏ったかの様に重く動かない。い。

動きたい、逃げ出したい、だけでも身体が言う事を聞かない。

逃げろ、逃げろ、逃げろ、逃げろ——

脳から伝達される指令に反して身体が拒絶し、次には家族の顔が情景として思い浮かぶ。

お父さん、お母さん、美結<sup>みゆ</sup>、詩織<sup>しおり</sup>——

笑っている。まさに家庭円満を絵に描いたような一家団欒。

仕事で忙しいハズの父と母、それに二人の妹達と自分がにこやかに笑い合っている。

もう一度家族に会いたい。今望むのは細やかなことで、大それたことなど望んでいない。

けれど、その願いは届きそうもなく、少女の何倍もある巨体は四肢に力を籠め、直進する。

もうダメだ——そう思った瞬間、瞬きをする間もなくブルーブラツクのロングヘアが風圧でくしゃくしゃに乱れ、ふわり、と身体の感覚が無重力状態に陥る。

え……なに……？

吹き飛ばされた？ しかし身体に痛みはこれっぽちもない。代わりフローラルな香りが鼻孔につき、脇と太股に優しい感触が伝わる。視界には凜しい顔つきの女性が映る。

少女を横抱き、つまりはお姫様だっこをする女性は静かに広場のゴム舗装された地面に着地する。

「……大丈夫？ 怪我はない？」

「は、はい……」

綺麗……。

先程までの恐怖が嘘だったかのように少女は女性に見とれていた。

「そう、なら良かった。此処で少し、待っていてね」

女性は少女にそう伝えようと、腰に帯刀していた御刀を抜刀する。

その直後、自分自身を刀使として認めない女性は右足を引くと、荒魂から体を右斜めに向け刀を右脇に取り、剣先を後ろに下げる。

五行の型にある脇構えの構え方。

剣道であれば長さの規格が決められた竹刀同士の試合となる為、この型を選択することはほぼないだろう。だが、対峙するのが荒魂や御刀、さらに言えば命のやり取りをする相手であればこの型を取る意味は生まれて来る。

何より、刀使として御刀を振るう彼女にとってはこの構えこそが最適となる為、彼女自身がこの型を積極的に取り入れている。本来の得物ではないにもかかわらず。

攻撃対象を見失った角鹿型は身体を反転させ、対象物を視認する。発見するや否や目標物に向かって再度襲撃を仕掛ける。

先程に比べ、突進速度は速い。避ければ後ろの少女が犠牲に成り、振り向けば隙が生じ自身には致命傷を負うだろう。結果、どちらも幼

い少女は助からない。

だから、漆黒の女性がとつた行動はただ一つ、待つ。  
ただひたすらに。相手が来るのを。

それが刀使としての彼女の矜持であり、御刀で戦う事の意味表示。  
荒魂が彼女の間合いに入り——一閃が放たれ、穢れが祓われる。  
加速を生じた胴は左右均等に分かれ、落下の衝撃音と地面を抉る音が  
辺り一面に響き渡る。

防御と交叉法<sup>カウンター</sup>。それが彼女——百合園 小百合が刀使としての御  
刀を振るう覚悟であり、刀使になった事への後悔である。

「スゴイ……」

少女は女性の剣技に心奪われる。

彼女の容姿だけでなく、無駄のない動きや残心に至るまでの所作  
に。

「……美濃関学院ですか？ 百合園です。長船女学園の特別任務から  
の帰還中、

荒魂と遭遇、これを祓いましたので至急ノロの回収をお願いします  
」

スマホの受話口から美濃関学院の職員と思しき声が拡散される。

「いえ、建造物の被害のみで近隣の住民の被害は今の所確認されませ  
ん。はい、宜しくお願い致します」

通話を終えると少女は女性に歩み寄る。

「あ、あの……」

「何かしら」

「あ、ありがとうございます！」

深々とお辞儀と感謝の言葉を伝える。これが少女ができる最大限  
で精一杯のお礼。

「良いのよ。それより、本当に怪我はない？ 貴女、この辺りの子？」

少女と同じ目線になるよう膝を下ろすと小百合は無表情を崩し、微  
笑む。

この幼い少女が不安にならないように彼女なりの気遣いを見せる。

「もし後から何かしらの怪我を負っていた事が分かったのなら、この名刺を美濃関学院に持って来なさい」

「治療費が無料になるから」と、一言付け加えて小百合は少女に名刺を差し出す。

名刺を受け取ると書かれた百合園 小百合の文字を心の中で読む。ゆりその、さゆりさん……。

読み方は合っているのだろうか。ふとした疑問が少女に降りかかる。

確認はしておいた方がいいだろう、今度会ったとき失礼がないように。

少女はほんの小さな勇気を振り絞り訊ねる。女性の名前の読み方が合っているかを確認する為。

「あ、あの……！ お名前は？」

「小百合……百合園 小百合よ」

かくして、少女達と成年達は出会う。

少女達は憧憬と希望を胸に抱き。

成年達は消えない過去と癒えないを苦しみ抱え続ける。

これも運命だと、言葉で済ませるといっているのであれば、それは残酷で。彼らに望まない道を歩ませる。

運命は軽薄で、与えたものをすぐに返すよう求めるから。

だからこそ、彼らは進む――

それが自死しかない道だとしても。

然れど、彼らは振り向かない――

それが幾千幾万の屍を積み上げ続けても。

今、彼の地にて集う。

道を違えても、

道を踏み外しても、

武芸者達は今、修羅の道を歩み、征く。

風雲再起・編——今、戦いの火蓋が切られる。

次回、刀使ノ武芸者——修羅流転録  
第7話 初任務

## 風雲再起

### 7. 初任務

折神家構内一室――

中央との立ち合いの日から半日が経った翌日。真希と寿々花、そして夜見の親衛隊三名は紫が使用している執務室に呼び出されていた。

「獅童です」

扉をノックするが返事が返る気配は無い。

聞こえていないかもしれないと、もう一度ノックをし直す。

「紫様？」

それでも返事がない為、無礼と承知しつつ、真希はドアノブを捻る。

「失礼します」と、三人を代表して先頭の真希が入室の挨拶と共にドアを開く。

「……何をしているんだ、アナタは」

執務室内に居るはずの招集主の姿はなく、そこに居るのは応接ソファの下座で男性刀使が一人、品位の欠片もない体制で寝そべっている。

小耳に挟んだ情報によると一応、年上という事なので真希は敬語を使う。

「し、死ぬ……」

「たかが書類整理だろう。そんな大袈裟な」

昨日振りの第一声が自死を仄めかす内容に親衛隊第一席の刀使は真顔を保ち、心底呆れる。

「入力漏れに誤字脱字が多すぎる。それに、御当主の承認が不要な案件が混じっていると……お前ら公務員だろう、何でこんなにミスがあるんだよ……」

「……入力漏れや誤字脱字は公務員との因果関係はないと思いますが？」

表情を崩さず笑顔の一つも見せない親衛隊第三席は反応して見せる。

「まさか、修正していたんですの？ この量を？」

「余りにも多すぎ。一体どうなってるんだ、ここの職員は」

幅広い応接テーブルに積み重ねられた報告書を無造作に二、三枚取ると記載された内容に親衛隊第二席は目を丸くする。

僅か短時間で寝ずに全ての修正作業をしていたのかと、横隣りに居る第一席とは違う呆れを見せる。

そんなやり取りをしている間に、招集主たる折神家当主が紙袋とビニール袋を手にして顔を出す。

「全員揃っているようだな」

「おはようございます、紫様」

「……おはようございます」

「おごまーす」

紫の入室と同時に真希と寿々花の挨拶は重なり、その後を追うようにワンテンポ遅れて夜見が続ぎ、最後に中央がふざけた体制で締める。

「ああ、お早う」

「紫様、本日はどういったご用件で」

真希が話を切り出す。

「ああ、そのことについてだがな。急な話になるが防衛省の書記官との会談が決まってるな」

「日程はいつ頃になるのですか？」

「今日だ」と、紫が言い放ち、「今日!？」と、流れる様に直ぐに反応する真希。

親衛隊第一席であるが故に紫への発言を率先して行ってきた淡香の色合いの髪を持つ少女は一驚を喫する。

「何やら急ですわね」

「先方も至急との要請でな」

真希に比べ寿々花は落ち着いている。昨日の立ち合いからか、前日以上の驚きなどもう経験する事は無いと肝が据わる様になったのだろう。

臙脂色えんじの髪の少女は同色の赤い毛先をクルクルと指で弄りながら

紫へ口を開く。

「相手は省庁の人間だ。こちらも早急に対応しなければならない」

「……………少し、変ではありませんか？」

「今それをここで議論していても仕方あるまい」

夜見の指摘については紫自身もそれを承知している。だが彼女の言う通りそのことについて議論する暇は無いし、執務室はその為の場でも無く。

そう反論されては白髪の少女も口を紡ぐしか無い。

「では、中央、獅童、此花、皐月。以上四名は私の護衛として同行して貰う」

「はっー」

「ところで御当主。俺はこの格好で行くんですか？」

漸く応接ソファアをまともに座りだした中央が紫に問いて見る。

「ああ、忘れていた。お前用の親衛隊専用の制服は用意してある。受け取れ」

「うをおおお、つと、とと……………」

乱暴に投げ出された紙袋を床に落さずに済ますと、隙間から中身を覗き込む。

新品同様に丁寧に畳まれた制服一式がポリプロピレンの底ガゼツト袋に包装され収納されていた。

「それからこれもだ」と追加で放り投げられたビニール袋をこれまた取っ手部分のところろで掴むと一足のタクティカルブーツが確認出来た。

「直ぐに出立する。獅童、此花、皐月は私と共に車へ、中央は着替え終えたら直ぐに来い」

「はっー」

「りよーかいでーす」

四人の女性刀使が退出すると残された男性刀使は紙袋とビニール袋から親衛隊服と靴を取り出し、制服に着替える。

既に成年に達した身である為、僅かながらの抵抗や疑問が残る。制服といえど学生服。本当に着て良いのか、と。



折神家を出発してからもこうして運転している訳だが、果たして知り合って間もない女性陣達はこの出で立ちが女性として認識しているのか。

「まあ、見えなくもないことはないかな。黙っていれば」

「ビジュアル的にはそう見えますわね。黙っていれば」

「……言葉を発さなければ女性の方に見えます。黙っていれば」

ハハハハ結構辛口なコメントだことで。

タイムラグも無い素早い返答が直ぐに返って来る。こうしてみると三人の女子中学生の仲は良くも悪くもなく、可でも不可でもない。

思春期真っ只中の難しいお年頃の少女達に、青年は取り敢えずこの任務での最悪な事態は避けられそうだと思に至る。それにしても。

黙っていれば、か。

三人の少女達からのコメントに運転席に座りながらも、男はもう一度自分の身なりを確かめる。

制服は彼女らと同色の黄枯茶を基調とした色合いなのだが、大幅に違うのはそのデザインである。

所謂学生服、と呼ばれる様な代物ではなく半着と呼ばれる和装。

更にその下にはタクティカルブーツと何方も慣れるには少しばかり時間が掛りそうな恰好で。

髪型もどこの第8感に目覚めた龍星座の聖闘士だったり、どこのSF時代劇コメディの指名手配犯の様なストレートヘアーでは一目で男だと看破されてしまう為、どこやらの日本刀を使うエクソシストだったり、どこやらの中世風の異世界に召喚された弓の達人よろしくポニーテールにしてみたのだが。

今更だが、この髪。一々邪魔だな。

「……………それより、東西南北さん」

「んあ？」

珍しく夜見から声を掛けて来る。切ったハンドルを戻しながら抜けた声で返事を返す。

「警護陣形はどうするつもりですか」

「ああ、そういえばまだ決めてなかったな」

「ああ、って重要な事じゃないか」

「まさかまだ考えていない、と仰るつもりではありませんよね？」

「ワハハハ……ソナワケナイジヤナイデスカー」

凶星を突かれ思わず窓の景色へと視線を泳がせる。誰が見てもわき見運転そのものである。

「考えてなかったのか……」

「ふう、呆れましたわ」

「……流石にそれはどうかと思います」

女子中学生、辛辣ー。

「まあ、取り敢えず、俺が御当主の後ろ横でお前ら三人がその後ろな。んで、配置順は臯月が真ん中で、更にその後ろに獅童と此花な」

「その根拠を聞こうじゃないか」

お、突つかかってこないな。

「大まかに四つある」と、前方に神経を集中しながら左手の甲を後部座席から見える様に親指を折り、四本の指を晒す。

「二つ目。後方のお前らだが、真ん中の臯月は護衛はしなくていい。索敵にのみ集中してくれ。護衛中の索敵マジ大事」

続いて人差し指を折る。

「二つ目。獅童と此花を最後尾に置くのは攻撃、遊撃、守備のどれも熟せて思量出来るだろう」

次いで中指が曲がる。

「三つ目。後方にお前ら三人を集中させることで俺が前と左右の警戒がし易くなる」

最後、小指だけが真希達に見える形となる。

「四つ目。この短時間で俺とお前らとじゃ連携もクソもねえからな。下手な連携を取るよりも伍箇伝で学んだ者同士のほうがまだやり易いだろう？」

後な、と中央は言葉を続ける。

「変に俺の方をカバーしようとするなよ？ 仕事となれば俺は少しでも気配があれば斬りかかるからな」

左手をハンドルに戻すと信号機が青色から黄色に切り替わるのが

見えた為、ブレーキペダルを押し込み減速する。

横断歩道のしましま模様の前の白線に前輪のタイヤが乗りかかり停車した。

「……東西南北さん、いいですか」

「何だ？」

「……紫様の護衛時の襲撃者の扱いですが、どうしますか」

「それはその時々で状況で俺が指示する。だが、どんな状況であれ人で在れば殺すな。俺が許さねえし、それは俺の役目だ」

信号機の三色のLEDが赤色から青色に変わるとブレーキペダルから右足を放し、アクセルペダルを徐々に踏み込むと徐々に速度を上げ、法定速度のギリギリまで加速する。

「紫様、護衛の陣形は今話した通りとなりますが」

「ああ、構わん。それで良い」

「なあ、ところでよ。もう一ついいか？」

更に尋ねる。

「どうかなさいまして？」

「何で免許持ってねえ俺が運転しなきゃならねえんだ？」

「え？？」

「えっ？」

何を言っているんだこの男は、と三名の刀使達は真っ先に思った。

無言の車内が急に重苦しい雰囲気包まれる。

赤い三角形マークのボタンを押し、路肩に寄せるとハザードランプが一定のリズムでカチ、カチ、カチ、カチ……と左右のウィンカーバルブがアンバー色に点滅を繰り返す。

公用車が路肩に停車しているのを不信に思ったのか、偶然通りかかったパトカーに乗る警察官がコチラに視線を向け凝視してくる。

職務質問をされない為、この後、めちやくちや祈った。

祈りが天に通じたのかパトカーも通り過ぎ、難なく指定された場所

に辿り着いた折神紫一行。

隣接されたコインパーキングに公用車を駐車し、パワースライドドアを開くと目の前には閑静なビル群等が広がる。

本来なら防衛省の一室で会談を行うのであるが、先方からの要望によりとあるビルを借りての会談となった次第。

「お待ちしておりました、折神局長」

不審人物、不審物の有無を確認していると面談場所のビルから自動ドアが開かれる。

硝子張りで外側からも内側からも互いが見える作りの為、その出で立ちに刀使だと気付くのはこの国で生活する人間にとつてとても容易い。

エントランスホールから出て来た背広姿の男性が近付いて来る。

「初めまして書記官殿。 刀剣管理局局長を務めます折神 紫です。 後ろにいるのが本日の護衛を務める四名の刀使達になります」

「さあ、立ち話もここではなんです、こちらへ」

ああ？ このオツサン、もしや……。

ここで中央は違和感を感じる。

会談相手が自己紹介をしてきたのにも関わらず自分は挨拶どころか自己紹介すらなく話を進めようとするその姿勢。

どことなく書記官の表情も顔色も不自然であった。

何より僅かな視線を感じ取る。

確証はない。だが、やるべき事があるのは確かだ。これは仕事で。

「御当主、ちよつと待った」

今の彼女は、守るべき雇用主クライアントなのだから。

「どうした、中央」

彼の呼び掛けに紫は立ち止まって振り向く。

相変わらず表情が読み取れない為、何を考えているのか分からないポーカーフェイスが中央の瞳に映し出される。

それと同時に中央の脳が、身体が、反応を始めると、即座に腰に差した脇差を抜き出し一閃を放つ。

空からは乾いた音が、陸では鉄が鉛を弾く音がオフィス街に響き渡

る。

いるのは三人か！

人どころか車さえ通らない道路と建物を一瞥すると、周囲を見渡し状況を把握する。

隠す気が無いのか、存在しない場所からの殺気で気配が丸判りである。

踵を巡らすと一組の男女が五体満足のまま佇んでいる。

雇主主よりも書記官の動向が気になり、即座に彼を捉える。

護衛を務める少女達ですら何が起こったのか分からず動きを停止している、にも拘らずこの書記官は「何をしているのですこちらへ」と、紫を促し喋り続けている。

ツチ！ やっぱ操られてやがるな！

「獅童！ 書記官を取り押さえろっ！！」

中央からの大呼にハツとし、真希は身体の不感を取り戻す。

言われるがまま刀使の少女は駆け寄り書記官をねじ伏せた。

「此花！ 臯月！ お前達は抜刀して写シを張りつつ警戒と索敵！」

残る二人にも呼び上げる。

呆然と立ち尽くす二名の刀使達もこれは襲撃だと理解する。

早々と御刀を鞘から抜き出し、写シを発動して護衛対象者の許に駆けつける。

「御当主は写シを張ってそこから動くな！ それと、獅童！ 書記官は殺すな、絶対に！」

握っていた脇差を放り、御刀に巻き付けた布カバーを剥ぎ取りながら駆け出す。

向かう場所はただ一つ。

今の時点で二発目が無い以上襲撃者は一人のみ。時間差で射殺しようとし無い以上、後は接近戦で殺しに来る。ならば先に邪魔な襲撃者を殺す！

一定の条件下で発動することが出来る写シを張る。白い靄を身体全体に纏わせ自身をエネルギー体へと変換する。

写シが張れたのなら刀使である強みを生かす。

幾ら襲撃者スナイパーだろうと僅かな殺気の残滓は残る。それを辿るだけ。

紫を襲おうとした弾頭の射線は彼女の頭部だった。

幾ら技術が発達していようがああ短時間からの演算で機械によるリモート射撃は不可能。

それ故に最速で始末しなければならぬ。

迅移を発動すると駆けだした身体が更に加速し予測は確信へと変わる。

居たあつ!!!

迅移の発動の甲斐もあり襲撃者スナイパーの気配を知覚する。

殺意をばら撒く男は刀使から武芸者へと変貌する。

殺そうとするモノは殺す。攻撃を許すという事はコチラが死するも同然。故に指一本とて動かさせはしない。故に――

――殺す!!! 確実に!!!

「紫様。索敵の為、皐月の荒魂解放の許可を」

「待て獅童。まだここの職員が居る。それに監視カメラもついている、中央が戻るまで待て」

逸る真希に紫は正面玄関から微動だにせず、言葉で制す。

「……分かりました」

「獅童、そいつは捨て置いて抜刀、戦闘態勢に移れ。来るぞ」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。

だが、直ぐに脳が理解する。

「……なっ!?!」

建物の物陰から人がスツ、と音も無く姿を現した。数は二人。それ以上は出て来る気配は無い。

Tシャツにジーパンとラフな格好の者とスーツ姿の者がニヤニヤと不気味な笑みを作り、此方へ距離を詰めて来る。

どうやら単なる通行人ではないらしい。

彼らの手には鉈や短剣ダガーといった武器を握り、殺気を振り撒く。手慣れているのだろう、とても一般人が出せる様なモノではない。

襲撃者の歩調は互いにバラバラで、しかし、確実に彼らとの距離は縮まる。

「此花は獅童と連携し応戦しろ。皐月はここにいる一般人の避難誘導だ。済み次第戻れ」

「……はい、紫様」

事態を呑み込めていない数名の応接係や警備員に呼び掛けると、夜見は周囲に注意しつつ身振り手振りで避難誘導を始める。

「全く、どうなってますの？ 東西南北さんといい、この方達といい御刀以外は銃刀法違反でしょうに」

「国外の人間のようなだね。この国の警察も信用ならない、という事だね。まあ、ボク達もその警察組織の一部だけど」

「全くですわ」

この国のテロ対策は如何なっているのか。テロリストの侵入を許すとは。管轄は違えど同じ警察組織の人間として刀使の少女は不甲斐なく思う。

そう思惑しているとじりじりと殺気が肌に纏わりつく。でありながら構えを崩さない二人の刀使は攻撃に備える。

刀使とはいえ十代の少女。日本にいる少女達が経験する事などない殺気に、この二人は怯むどころか立ち向かう気概を見せる。

昨日味わった恐怖と痛みに比べれば今感じる殺気などどうという事は無い。

この程度なら。と、御刀を向ける刀使達は自分と相手との間合いを図る。

「ああ？ マジでガキじゃねえか」

「これなら早く終わるな。簡単な仕事で助かったぜ」

トントン、と鉈を肩で弾ませるスキンヘツドの男と短剣ダガーを刃先をねっとり舌先で舐めるスキンヘツドの男。

どちらも少女達よりかは一回り大きい。

「んじゃあ、さっさとこの仕事を終わらせてこのガキ共引ん？くか」

「いいねえ〜ガキとヤルのは久々だぜ！」

不気味さは不快さへと変わる。

この異国の密入国者達はあろうことか人としての尊厳を踏み躪ろうとするのだ。

下劣な様に中央ですらここまで酷くはなかったと思う真希。

「獅童さん」「何だ此花」と両名の刀使は声を抑え。

「何やら不愉快且つ不快感極まりない言葉を前方の二足歩行で立つ動物から聞こえて来ましたが、人間ではなく人の皮を被った下衆ですから叩きのめすのは私達が行っても何ら問題には至りませんわよね？」

「そうだね此花。東西南北には殺すなどは言われたが叩きのめすなどは言われてないからね」

「ええ、私もそう記憶にありますわ」

「紫様、宜しいですね？」

「ああ、あの程度なら私も自衛可能だ。問題無い、ヤレ」

刀使の頂点に君臨する者から許可が下る。

「ヒヤッハー!!」

威勢のいい三下の雄叫びが断末魔となり、都会の喧騒に木霊する。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第8話 火柱

## 8. 火柱

それは突然の事だった。

いつもなら仲介屋を通してくるのだが今日に限っては俺達の許に直接依頼が転がり込んできたのだ。

依頼人はスーツを着た若い男で。

一枚の紙を俺達に差し出し、男はこう言い放つ。

「この依頼を引き受けてくれるなら、その紙に書かれた額を支払おう」男は床に立てていたアルミ製のアタッシユケースをテーブルの上に丁寧に置くと、オープンボタンを両外にプッシュし、ケースを開いて俺達の方へ中身が見える様にそれを回転させる。

受け取った紙とケースの中身を見て瞳孔が右往左往するのが自分でも分かる。

前金と書かれた金額と成功報酬と書かれた金額が可笑しいのだ。

今まで得た金額と今回提示された桁が違い過ぎる。

成功報酬も前金よりも桁が一つ増えている。

新手の詐欺にでもあっているのか？

だってそうだろう？

この紙に書かれたターゲットは日本人で、そいつは日本からは動こうとしない。

それだけの相手を殺すのだから。

日本人の暗殺依頼など滅多に来ないから最初は妙だなと訝しんでいたが読み続けると下に対象の名前が記され、納得した。

ユカリ オリガミ。

この名は何度か聞いた事があった。

日本のアラダマとかいうモンスターを退治する専門家集団の頭目。

それもただの専門家ではない。

噂では並外れた戦闘力を持つアラダマと同レベルのバケモノだとも聞く。

故にそのバケモノを殺せば日本の防衛能力も自衛隊だけとなり、かなりの打撃を喰らうのだとか。

元々の依頼主がどこの国のどこの誰だが分からないが国際紛争の引き金と成り得る依頼に傭兵を使うのは失敗した事も考慮にいれての事なのだろう。

自分には荷が重過ぎると思った。

だが提示されたのは今まで受けた依頼なんか比べ物にならない位の金額で、天秤の秤は揺れる。

金を取るか。

命を取るか。

二つの秤が上下に揺れ続ける。

しかし、傾きかけた秤は何の前触れもなくまたたく間に沈む。

引き受けるか、それとも断るべきか。そう迷っていると、隣で聞いていた相棒がOKの一言で快諾した。してしまった。

依頼人の目の前で口論になり掛けたが、書かれた依頼料を相棒の口から聞かされる。

「相手はただの『人間』だ、銃弾が効かない訳じゃない」

そう諭されると完全には納得していないが男も渋々依頼を引き受ける事にした。

男は相棒に言う。

「この依頼で廃業だ」

「ああ、引き受けてくれるならそれで良いよ」

金額が金額である為、これが引き際だと、男は殺し屋稼業から身を引くことを決めた。

暗殺の当日。

時間通りにターゲットを乗せた車が到着すると、双眼鏡のレンズに不可解なモノが映り込む。

事前報告には折神紫の他に護衛の少女が三名いると聞いていたのだ。

だがあろうことか護衛の少女は四名いるのだ。  
情報と違う事に男の防衛本能がけたたましく警鐘サイレンを鳴らす。

作戦の中止を狙撃銃に取り付けられたスコープを覗き込む相棒に  
言い聞かすがしかし、相棒は聞く耳を持たない。「構うものか、このま  
ま殺やつちまわうす」と引き金に指を掛ける。

こうなつては致しかないと男はフィールドスコープに切り替え、  
観測手スポッターとしての役割を全うしようとする。

念入りに標的までの距離と角度を測定を済ませた。風も今は吹い  
ていない。天候も問題はない。

後は相棒を信じ、死体を確認するだけ。

使い慣れた狙撃銃の引き金が引かれると発砲音が鳴り響き、弾頭が  
発射される。

発砲の直前、ターゲットの前に一人の少女がスコープ内に入り込ん  
でいた。

何かの雑誌で見たことのある。確か、ユカタだったか。

少女の身なりに一瞬気を取られた刹那、男の視界はターゲットのい  
る地上ではなく、空を見上げていた。

額には何か貫通し、一本の空洞が出来上がり穴の入口から血液が  
溢れ出る。

殺し屋業を引退する男の最後の末路は母国の土を踏む事なく、戦争  
の無い異国の地で血に塗れたその生涯を終えた。

「ちっ……！ 観測手相棒が殺られちゃった。まさかアレがいるとはな。  
なら、もうコチラから手を出すのは無意味だな。金は惜しいがサツサ  
と退却するさせて貰——」

不意に強烈な突風が男の身に吹き荒れる。早々に撤収作業に取り  
掛かり始めていると物影と共に二つの物体が宙を舞う。

「——へえあ……？」

物体の正体は狙撃手の商売道具。つまりは人の腕。それが物理的  
に切り離されたのだ。

では一体何がそうさせたのか。

元々千切れかけていた？

第三者からの狙撃で吹き飛んだ？

否。答えは人間。但し、人と形容するには憚られる殺意を身に纏った武芸者と呼ばれる存在。

何をどうしたらこの殺意を垂れ流す武芸者はこの短時間で地上からこのビルの屋上まで登って来たというのだろうか。

一つしかない出入り口には邪魔されない様、簡易的ではあるが施錠を行っている。

なら上空からなのか？ しかし、ローター音は聞こえない。

飛行物は存在しないし、腕も上に舞い上がることから上からの襲撃では無い。

下からの狙撃か？ だが聴覚が刺激される事が無い以上、それもあり得る事は無い。

男が理解する事のない現象の正体——それは刀使が迅移を発動させた事によるパルクールのウォールラン——つまり、壁蹴りでビルを駆け上がって来たのだ。

殺意には殺意を。

着地と共に身体を反転し、間髪入れず直進する。

誰から見てもその形相は、武芸を修めた者というよりも最早殺戮者である。

「ひいっ……いっ！」

バケ、モ——

男がそう形容しようする瞬間、殺戮者の御刀が放つ一閃が男の目下をスルリと通り過ぎ、上口唇と下口唇を分離させる。

襲撃者とはいえ人間である以上、国籍人種に限らず裂けた断面から色鮮やかに見える鮮血が勢い良く噴き出す。

「んんー？ まさかこうも簡単にやられるとは。バイト程度じゃ無理もないかー」

重傷を負った襲撃者達を捕縛し、一か所に集めた所で一人の男がすつと姿を現す。

その形状は誰がどう見ても剣だと分かるソレを右手に持つが、隠そうともしないあたり一目で襲撃者だと分かる。

「まだ襲撃者が残っていますの？ 今ので力の差が解ったでしように」

「此花、油断するな。襲撃者<sup>ヤツ</sup>から発せられる圧は先程のヤツ等の比じゃないぞ」

凡そ普通ではない圧に「ええ、私も先程<sup>わたくし</sup>から感じ取っていますわ」と、寿々花は返すが先刻の二人に比べ、現れた一人の男から醸し出される異様な圧は二人の刀使を身構えさせるには充分過ぎる程であった。

「二人掛かりでやろう」

「ええ、願っても無い提案ですわ」

真希は寿々花を、寿々花は真希を。

一瞬だけ、両者が互いに視線を交わした瞬間だった。

視界を戻した先に、襲撃者<sup>おとこ</sup>の姿が消える。

「ツツ——!?!」

寿々花との二人掛かりによる挟撃の為迅移による移動を敢えて行わなかった。

しかし間合いを読み違えた訳ではない。

両者互いに射程距離には程遠いと捉えていたのだ。

だが突如として腹部に激痛が走り正眼の構えが崩される。

真希の腹部に打ち込まれたのは襲撃者<sup>おとこ</sup>が持つ皿上の柄頭。

なっ!? いつのまに!? それ、に……この重さ!!

あの距離から瞬時にここまで!? 刀使でもないのに!?

「フツ、邪魔なガキどもだな。家に帰りな。オレはその折神　紫に用があるんだ。大人しくしてれば見逃してやるよ」

まあ、ウソなんだけどね。

二人の刀使を相手にしても尚、本音と建前を使い分けられる程の余裕をこの襲撃者は持ち合わせる。

「ぐっ、賊の言う事など……信じられるものかあ！」

「ああ……そう」

真希と寿々花をスリとすり抜ける襲撃者。

通り過ぎた刹那、彼女達に張られていた写シが何の前触れもなく剥がれる。

纏っていた白い靄が塵となり四散し、吸い付くように少女達は重力に従い身体が地面に沈む。

授業で行った模擬試合で御刀に斬られた時とは比べ物にならない程の痛みが彼女達を襲う。

右腕を抑えその場で蹲る寿々花と背部への衝撃に辛うじて耐えながらも背後の襲撃者を追う真希。

「なっ……紫、様……！」

何としても紫様はお守りしなければ!!

もう既に襲撃者の持つ片手剣は紫の首を捉えていた。

たった一撃。されど一撃。

最早戦力外となった少女達にとってこの一撃の代償は大きく、そして重い。

這いつくばって立とうとするも御刀を握る指は弱々しく、それは叶わない。

「首、もぐらひ」

首と言いつつも狙いは肩や胸といった上半身。

上段から斜めに襲撃者の片手剣から薙ぎが放たれる。

しかし、寸前でその一撃は阻まれる。  
異なる金属同士の衝突する音の響き。

白色の髪の人影が紫の前と襲撃者の間で立ち塞がる。

夜見に授けられた御刀——水神切兼光すいじんぎりかねみつが西洋の剣を防いでいた。

「臯、月……!?!」

「……紫様には触れさせません」

間に合ったはずだった。

だが、じりじりと惜し負けそうになり水神切兼光の棟むねが今にも夜見の身体に触れようとしている。

男女の差、ではない。

これは力量の差そのものと言える。

相手は悠々と夜見を追い詰める。

「ハハッ！ そう言えばもう一人居たんだったな」

情報通り、と言わんばかりに襲撃者は尚も片手剣に力を籠める。

「ところで良いのか？ アンタ、そのまま棒立ちのままかい？」

「ああ。私が手を下すまでもないのでな」

「へえ〜言うねえ。だったらその言葉、死体が転がってもそう振舞え続けられるかな？」

途端に片手剣を後方の自分側に引き、水神切兼光は行き場を失いあらぬ方向へと御刀が空を斬る。

その所為で夜見の姿勢は維持できなくなり、身体は無防備な状態を晒す。

「ハハッ！」

「ぐっ……!」

突如としてわき腹に激痛が走り痛みには耐えられず瞬時に片目が閉じた。襲撃者の左足の甲が夜見の右わき腹に入り込む。

強烈な中段回し蹴り。

対人戦の経験があるとはいえ、それは御刀を扱う刀使同士での話。

剣術の心得があるとは到底思えない相手、ましてやテロリストとの武力衝突など想定していない。

予想外の方向から攻撃されたことにより、それに対する防御の準備

すら出来ておらず夜見は膝から崩れ落ちる。

だが幸いにも水神切兼光を手放さずに済んだ為、写シが剥がれずに済んだ。

「臯月、くっ！ この——ガハッ！」

「獅童さ——オゴッ！」

まただ。

決して遠すぎるといった距離ではないがこの襲撃者おとこは即座に詰め寄り一閃を放つ。

平然としてやってのけるが刀使以外で唯の人間が出来るのか。

身体に纏わせ直した写シも奮起空しく景色に同化した。

「んん？」と、襲撃者おとこは不思議と首を傾げる。

斬った手応えは在った。間違いなくこの二人の少女達を切断した。

だがどういふ事なのか、

「胴が千切れていない？ ああそうか、刀使トッの能力だったな。忘れていたワ。」

だが殺し損ねた理由が明確になり納得した。

『刀使』という日本のみ存在するティーンエイジャーを寄せ集めた戦闘集団だという事を。

「まあ、いいか。暫く立てねえだろうし、本命に行くか……」

「ま、待、て、……」

今の、一撃……で、呼吸が……！

「……紫様、お逃……げ、下さい……」

「臯月、その必要は無い」

「んじゃあ、三人目」

「……グッ！」

今度は標的を別の刀使に切り替えると片手剣が制服を斬り、夜見の左肩に衝撃が加わる。

先程の蹴りとは比べ物にならない程の痛覚が斬られた箇所から染み渡り全身から力が消え失せた。

それと同時に白いエネルギー体の身体は生身の肉体を取り戻す。

「アンタ、随分余裕だな。大人しく殺されてくれるの？ それならそれでコッチは仕事として見れば楽だからイイんだけどさ」

「何が言いたい？」

「何かこーう、張り合いが無いんだよ。依頼とはいえ折角、強者と殺し合えると思ってたのにさ」

「そうか、ならその願いは叶うぞ。直ぐに」

「……お引き、下さ……い」

「おお、浅く斬ったとはいえ頑張るね、ガキ」

武器も持たぬ丸腰の少女に対しこの襲撃者は慈悲と言う言葉を持ち合わせていない。

代わりに彼の辞書に書かれているのは一文字付け加えられた無慈悲と言う言葉のみ。

「ハハッ、じゃあ、望み通り先に死んど——ツツ!」

寸前のところで一筋の彗星が襲撃者の真上から降り注ぐ。

特殊な金属とコンクリートの地面が衝突した事により、衝撃音が抉りだされた無数のコンクリート片を押し上げ劈く。

「テメエ……俺の同僚たちに何してくれてんの？」

小規模ながらも小さなクレータが落下地点に出来上がり、そこから音の発生源である殺戮者が襲撃者睨み付ける。

「何って、ただの仕事……」

突如として降ってわいたこの状況に驚くことがなかった襲撃者は飛来者たる中央の形相からある武芸者を思い出し、言い淀む。

「お前、まさかあの東西南北か？ だとしたら、だとしたら。クハ、ハハハッ……アハハハハ!! ツイてる！ ツイてるぞお!! お前を

殺せば、充分過ぎる程のお釣りがくるんだからな！」

中央を見るや否や襲撃者は歓喜し顔を歪ませる。

「質問に答えろや」

「あ？ ああ。弱者だったから斬っただけだが？ それが何か？」

「ああ、そうか。ならテメエが斬られても、文句ねえよな？」

「あ？ ほうほう、言うね〜」

でも、と付け足し、

「勝てるかな？ 今のお前が。見た所お前の得物、本来の得物じゃねえよなあ？」

嘗て中央が使用していた武具をこの襲撃者は知っている。

何故ならこの襲撃者も武芸者で在ったのだから。

「雑魚がゴチャゴチャと言ってねえでさっさと来な」  
引き寄せる様にクイクイ、と人差し指で手招く。

ふん、易い挑発だな。だが、まあ、乗ってやるよ。その誘いによ……

！

「こねえなら、さっさと行かしてもらおうぞ」

戦闘の開幕を中央は自ら宣言する。

だが、この言葉を襲撃者は聞き漏らす。

間合いに入ったら即、カウンター決めてやるよ！

長巻と片手剣。

間合いでは此方に不利がある事は理解している。

だが目の前の武芸者は嘗て数年前に持っていた武具とは違う武具を扱っているのだ。

幾ら武芸者といえど僅か数年で違う武具を短期間で同レベルに扱うなど有りはしない。

故にこの殺し合い、勝てる。

だからなのか。目の前の女装野郎を如何料理してやろうか、返り討ち出来るかと踏んだ襲撃者は戦闘中だというのに考えに耽る。

相手はあの東西南北 中央。

しかも、本来の武器とは違う長巻を使用している。

自身の勝ちを確信した男は精神的な余裕が沸々と沸き上がる。

余裕という名の慢心が。

「……なっ……!?!」

襲撃者がまだ得ぬ勝利に酔いしれて瞬きをした咄嗟の出来事である。

何を勘違いしたのか。

どうして勝てると思いがったのか。

襲撃者の意表を突く袈裟斬りが薄く肉を削ぐ。

曲がりなりにも殺しに武術を使う者である以上襲撃者は反応してみせるが、それでも中央の長巻は血を啜る。

卑怯だと？ 正々堂々とヤレ？

そんな矜持は競技の世界だけでいい。

そんなモノは生き死にの掛かった戦場では何の意味も持たない。

予想外の攻撃速度に襲撃者は怯む。ならば勢いは殺さない。攻め続ける。

袈裟斬りからの遠心力を利用し、中央は車輪の様に弧を描く。

御刀である長巻を片手で振り被った体勢から、空いた腕で持ち手側の肘裏を弾き上げ――

「……へえあ？」

百千万億流 焰燃型 第一式

カグツチノカタ

――鞭のようにしならせ振り下ろす。

火柱

速や――

襲撃者が思ったのも束の間。

反応する隙を与えられず、垂直に両断される。

「一点だ、ハゲが」

そう言い放つと長巻を天高く振り上げる。

刀身には血が付いていないが念の為と、手慣れた動作で振り下ろし血振りを行う。

ボクらが三人掛かりでも打ち取れなかったヤツをあんなに簡単に……。

紫様の話は眉唾物でしたが、どうやら実戦の件は本当の事ですね。

あーやつぱ、師匠みたいに上手くやれんか……。

放り投げていた脇差を拾い上げ死体の切断面を凝視する。

綺麗な直線を描き見事に両断されている。だが、それは遠目から見ればの話である。

目を凝らし間近で見ると所々線が歪曲しているのが分かる。

師匠ならこうはならない。武術の、こと斬撃において彼女の正確さは威力を含め折り紙付きである。

溜息を零し、覗き込む様に夜見へ手を差し伸べる。

「ホレ、立てるか?」

「……ありがとうございます」

差し伸べられた左手を素直に受け取り、中央の助力を経て立ち上がる。

「いいものを見せてもらった」

夜見を引き上げた直後、紫が中央に語りかけて来る。

「そりゃあ、どうも」

耳だけを傾け、紫の僅か後ろで拘束された書記官を瞳に映し出す。

「それより、そのオッサンはまだ生きてるんだろうな」

「クルリと上半身を捻じり、真希に問う。」

「あ、ああ。この状況だというのにまだ何か独り言を喋っているよ」

「どれ、見せてみ」

「その方がどうかしたのですの？」

……コイツは。

うつ伏せのまま同じことを口にする書記官の身体を隈無く見渡し手探る。そこである一部に触れると、弄っていた手が止まる。

書記官の頭部にイボの様に小さく腫れてる箇所を見つけたのだ。目を凝らすと僅かに変色している。

これを目にした中央は充分過ぎる程、ある確証を得た。

書記官のこの症状を中央はよく知っているからだ。

幻術、だな……。なら、もう襲撃者は十中八九アイツ等で間違いないって事か。厄介だな。よりによってアイツ等が御当主を狙ってくるとは。

百千万億流で武術を学び数十年。最後まで自分には修得出来なかった技術。

師匠は気にするなど言っていたが、誰に似たのやら。

これだけは特殊過ぎて中央どころかその師もこの技術を修得できていない。

御当主が狙われたって事は、何れコイツ等も……刀使全体が狙われるって事だよな、コレ。

だが幻術に関しては素質や才能が無いだけで、知識が無い訳ではない。解術する術を一応は心得ている。

そこで解術に取り掛かろうとすると疑問が中央の中で浮かび上がる。

襲撃者達、明らかに御当主を殺そうとしていたが、アイツ等が欲し

ているのは武芸者だろ。死体は必要ないハズ……。

考えれば考える程、憶測が憶測を呼ぶ。

このままでは埒が明かない。

襲撃者がコイツ等だけとは限らないのだ。

この件は一旦保留にする事とし、後方の少女達に声を掛ける。

「怪我してるところ悪いがお前等、このオツサンは俺が如何にかするからまだ周囲の警戒解くなよ」

負傷している以上お互いが埋め合わせ出来る様、距離詰め三人は御刀を其々構える。

依然として人や車両の通行はないが、先程の事もあり予断を許さない状態が続く。

「……………」

ビルとビルの隙間から覗き込み、刀使達の戦闘を見ていた少女がその場から立ち去る。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第9話 模擬戦 ―其ノ壱―

## 9. 模擬戦 ―其ノ壱―

書記官との会談から一夜明けた翌朝。

中央が親衛隊に入隊してから初となる護衛任務は折神紫の護衛という点で一先ずの任務達成をした。

あの書記官も何とか解術することに成功し、幻術による人体への後遺症もなく済んだのだが、被害者とはいえ警察の取り調べに応じる事となる。

それにしても……。

歩調を進めながらも半着の青年は昨日の一件について考え込む。

武芸者の襲撃。

それも何故折神紫が狙われたのか。

確りと前を見据えて二つの可能性を思議する。

先ずは単純に国外だけに目を向けた場合。

折神 紫——その名を聞けば誰もがこう口を揃える。

相模湾大災厄の英雄。

刀使の最高峰。

これが国内での彼女の評価なわけだが。

なら、その一方で国外ではというと。

自分が成り上がる為のエサ。

賞金首。

揺るぎない強者。

などと本人のあずかり知らぬ所でゲス共からの評価があがると海を渡り海外にまでその身は周知され、更にはその首に金同様の商品価値と成り、右肩上がりで値段が付けられる次第。

金は重さを増して沈み、彼女の命は天秤の秤をいともたやすく傾かせる。それ故に命を狙われる。

このご時世一人で来る様なヤツは居ない。

当然、数名の同業者を引き連れてやって来る。

だがそれでは分け前は減る、若しくは懸賞金を独り占め。だとしても事を終えれば死体は金に成る。

ハイリスク、ハイリターン。

それでも数の暴力で押し切れるだろうと個に対して群で攻める。そうして何れあるかもしれない未来が可能性の一つとして浮かび上がる。

あるハズは無いだろうが仮に、万が一にその首を取ったとしよう。集団で狩りに来た中、取りこぼした連中は次にどう出る？

負傷した。

死んだ。

誰が？

仲間が。

部下が。

リーダーが。

社長が。

兄妹姉妹が。

夫が妻が。

このままでは骨折り損だ。せめてプライマイゼロにしよう。

同じ刀使でもそれなりの金になるんじゃないか？

殺しを生業とする連中だ。自分達の都合のいい様に身勝手この上なく解釈する。

常識も、法律も、況してやモラルなどかなぐり捨てて無法を実行する。必然として、そうなれば何れ刀使全体が巻き込まれる。

関係のないアイツ等が——死ぬ？

ふと三人の顔がチラつく。

ムスツとした表情の真希にクルクルと髪を弄る寿々花、終始感情の読み辛い顔の夜見。

仕事の為とはいえ一方的ではあるが少なからず信頼し、信頼してく

れたのだ。

僅か数日ながらも情が湧く。

苦く押し留めていた記憶が甦りギギギツ、と小さく歯ぎしりをする  
と持っていた御刀も柄からミシミシと音を鳴らす。

それは決してあつてはならない事であり。絶対に避けなければなら  
ない。

「フウ……」

ヒートアップしそうになり片足が廊下に着くと同時に歩行と思考  
を止める。

国内に比べれば世界情勢など刻一刻と秒刻みで移り変わるのだからある種の可能性として内に留めておくと、もう一つの可能性について考える。

国内だけを見た場合。

先ず考えられるとすれば政治家連中が手を下す。

何故？ 理由があるとすれば此方もやはりというべきか殺し屋共

同様、金。

防衛費やインフラに費やす金が増えたから？

天下りに回す金が減るからか？

それとも裏金に回す分が無くなった？

何れもその線はほぼ無い。思考が短絡的過ぎている。

荒魂問題が山積みの状態で刀剣管理局のトップを消すなんて決断  
をする者は人間ですらない、それこそ救いようのない鬼畜だ。

あるのであれば精々警察庁への圧力か刀剣管理局への予算カット  
だろう。

なら本当にアイツ等、なのか……？

疑問を呈した中央は着実に道を辿り、結論にたどり着く。

結局のところ、堂々巡りの様に答えを導き出したのだ。

アイツ等——つまりは中央と同じ国内に存在しうる武芸者で、中央  
の同門達。

アイツ等とは既に袂を分かつ結果となつたんだ。今更話し合いでどうこうなるハズもないだろうが？　ハハツ……オイ、まさかこの期に及んで手を取り合うつもりか？

喜びなど微塵も感じさせない短く乾いた笑いを吐き出すと今度は徒歩から競歩に切り替わる。

冗談じゃねえ、アイツ等が居なくなつた所為で――

鬼の形相になり掛けた思惑の青年は文字通りそこで言い止まる。

綺麗に整えられた黒のポニーテールが背中を無造作に撫でる。

……アイツ等が仕掛けて来るのか？

丁度真横に設置されたアンティーク時計の振り子の音がカチャカチャカチャカチャと聴覚を引き付ける。

呆けた様に口を開き首を捻るとそこには時計の硝子面から中央の顔を映し出す。

ほんのり青ざめた顔が彼の目にとまる。

今のこの状態でアイツ等が戦力を投入してきたら……？

もう彼らに会うことはないと考えていた中央はここに来て不安の波がじわじわと緩やかに押し寄せてきた。

同じ流派の学び舎で起きたあの一件。

アレを提案しなければ結果は違つていた。

身命を賭したとしても終わつていたハズなのだ。

それが今やこの状況。

笑うに笑えない。

考えれば考えるほど真希達の死体が積み重なる未来が思い浮かば

れる。

なぜなら、こぞつて去つていった連中の大半が一騎当千と呼ばれるに相応しい力量を持つモノ達。

その中には中央の力量ですらその域に届かぬモノ達が居る。

それが――

敵になる……？

沈黙は続く。

だが心の中の問いに誰も答えてくれはしない。

？  
そうなたら、アイツ等を俺一人で如何にかしなないといけないのか？

再び、今度は長い沈黙の後に「止めだ」と一瞬だけ思考を放棄する。心に留めていた感情に喰われそうになる前に自身を取り戻し、中央は再び足を動かした。

けれど無心となるのはほんの僅か、思考は止めず歩行した下半身同様に前頭前野を再び働かせる。

実際に彼ら武芸者が来るとして、武芸者は迎え撃つ為の戦力を勘定する。

確実な戦力として俺。非常時故に自己防衛の為の殺人が可能な御当主。姿は見えていないがこの国の何処かにいるあのオッサン。師匠と姐さんは連絡すれば如何にかなるハズ。ノアは、まあわからんな。この国の人間じゃねえし。

勘定を止めかけたところで中央は「あつ……」と声を上げ、忘却の彼方からすくい出す。

一人は男性。そしてもう一人の女性を。

そういえばバカと大馬鹿を忘れてたわ。まあ、居ても居なくても同じか。アイツ等相手じゃ。

こうして武芸者との戦闘可能な戦力を弾き終えると、その数に踏み出していた足取りは重くなる。

訪日人と中央曰くバカと大馬鹿を除けば、五人となる。足しても八人。

たったの五人ないしは八人。

どんなに甘く見積もっても相手方の戦力は最低この十倍は居るだろう。

当時抜けた武芸者の数がそれだけいるのだから。

仮に無事に五人、可能性の無い話だが八人が生存できたとしてもその後は。

悲観するだけの材料は充分過ぎる。

撃退するだけなら。しかし数の不利は如何ともし難い。

師である彼女との連絡手段はなく、最も、それが叶ったとしても今現在何処に居るのか分からない以上どうすることもできない。

絶望の泥沼へゆっくりと進むその感覚が中央にはハッキリと感じ取っていた。

この前みたいに向こうから接触してきてくれればまだ何とかかなるんだが。

後悔先に立たず。何てことにならない様、最悪の状況を想定し、対策を検討し、実行する。

後回しすればロクな結果にならない為、即時行動に移す。

見知ったのは四人しかいないので結ったポニーテールを解き、黒髪を不規則に揺らすと。

コン、コン、とノックするが、返事が返って来る前にドアノブを捻じり、開く。

「お前等全員居——」

「ウ、オ、オ、オ、オ、エ、エ、エ、エ、ッ!!」

ドアを開いた瞬間、硬直と静寂は後悔とともに訪れる。

誰も声を発せずにいたまま時は流れ、卸してから数日程しか経っていない親衛隊制服にベツチヨリ、と嘔吐物がへばり付き、何とも言えない異臭がこびり付き鼻につく。

折神家執務室――

親衛隊として配属されてから少女達は人生の、それも二つの転換期を迎えた。

一つは刀使として御刀に選ばれた事。

もう一つは 武芸者と呼ばれる者との邂逅。それに伴う生き死にの掛かった死闘。

そして、敗北。

とはいえ、任務自体は折神 紫の護衛は成功している訳だが。

「……………」

彼女達が醸し出す空気は重々しく、その様は正しく意気消沈そのもの。

無様な敗北。

少女は力強く拳を握り締める。

圧倒的な実力差。

今にも破れんばかりにスカートを握り、唇を噛み締める。

お役に立てなかった。

片腕の前腕部にもう片方の手で掴み、深く爪をくい込ませる。劣敗した。

誰が見ても火を見るよりも明らかで。

目に見えて明確化した実力の無さの露呈。表には出さなかったが親衛隊に抜擢されて浮かれ、舞い上がり、そして思い上がった。

その結果がこれだ。

刀使として御刀に選ばれ、剣を振るう者として、まだ弱い。

強烈なまでに実感する。否が応でも未成熟な身体と成長途中の脳に刻まれる。

しかし劣敗した事実は変わらない。

それも荒魂にはない、況してや刀使でもない。人に。

弱い。

情けない。

悔しい!!!

だが彼は違った。

守るべき者を護り、一早く行動してみせた。

彼のように強くなりたい。

例えば目指している頂さきが違うとしても。

芽生えた感情は肉体からだから駆け巡り、精神こころと目に小さく灯火をとます。

生氣と力強さを取り戻した三人は俯いていた顔を上げ、お互いを見ると頷く。

どうやら口に出さずとも考える事は同じで彼女らは意気軒昂とし、上司でもあり、同僚でもある男性刀使を待ち侘びる。

ジタバタするにしても先ずは彼が到着してからのだから。

獅童 真希は先日の事を思い出す。思い出すといってもあの情景は忘れる事は出来ないし、忘れる事など出来はしない。

何せ目に焼き付け、脳がしっかりと記憶したのだから。

襲撃者を一刀の許切断した剣技。

千切れた胴は文字通り両断し、左右に分かれた。

あれ程の剣技を――

「うっ……」

振り返っている最中、突如として此花 寿々花は口元を抑える。顔面真っ青で如何にもな身振りで立ち上がり、一目で気分が悪くなったのが分かる。

それも当然だろう。

人体が裂け、鮮血に塗れた血肉と、内臓と、骨がモザイク処理も施されぬまま直視してしまったのだ。

加えてこの国は戦争とは無縁であり社会と歴史についての基礎知識はあるものの、当たり前ではあるがその経験の無い十代の少女。

護衛という大義名分があるとはいえ明らかかな殺人を目撃したのだから今になって記憶がパアツ、と鮮明によみがえり消化中の食物が食道に押し上げられるなんて、それは至極全うな事。

その事象も此処に居る真希や皐月 夜見は前日に経験済みである。ただ寿々花が遅れて今来ただけなのだ。

それを察した同年代の少女達は彼女に声を掛ける。

「……東西南北さんには私たちが言っておきますので此花さんは御手洗いへ」

寿々花の許へ近寄り夜見は背中を擦り介助を施す。

「彼にはボクの方から言っておくよ」と受け皿になる物を探すが執務室だけあってそれらしい物は見当たらない。

「流石に彼も事情を知ればとやかく言う事などないだろう」

水分補給用のペットボトルや水筒もない為、真希は今直ぐ寿々花を連れて行く様、夜見を促す。

「……はい」と頷き、背中の擦り続ける夜見は寿々花の歩調に合わせて一歩一歩進む。

「ありが、とう……ごぎ、い……ます。皐月さ、ん……」

扉の前までは事なきを得て辿り着いたがまだ油断は出来ない。

寿々花が何時まで耐えられるかその保証はないのだから。

御不浄まではまだ先、可能な限り急がなければ。

夜見がドアノブに手を掛けようとした所でトン、トン、とノック音が小刻みに鳴ると間髪入れずドアの空隙が広がっていく。

「……もう……限、か——」

寿々花の言葉が紡がれるのと同時に夜見のインスピレーションは本能に訴えかける。

サツ、と気付かれぬ様後ずさり後方の安全地帯まで後退する。

「臯月なにを——」

「お前等全員居——」

ガチャツ、と目の前の扉が解放されタクティカルブーツが沓摺くつずりを越え、そして、無慈悲に——

堤防は決壊する。

「ウ、オ、オ、オ、オ、エ、エ、エ、エ、ツ!!」

扉を開けたのは刀使である彼女達の上司リーダー。

戦闘であれ程の強さを見せた中央かれでもどうやらこの事態を察知する事が出来なかつたらしい。

中央が着用する半着——主に腰から下にかけて未消化の食物が黄色味を帯びて親衛隊服にへばり付く。

「……」

中央のなかでこの状況に対しての理解は出来ている。

これが敵襲ではない事だと。知り合って間もない間柄なのだからドツキリを仕掛けられた訳でもない。

仮にそうだとしてもそれは親睦を深める為なのか？

もしそうだとして何故なのだろう。何故このタイミングで如何して此花 寿々花がこの場所で吐く必要が生じた？

思考のみに意識を集中している為、この男性刀使は寿々花が放つ次の気配に気付かない。

「ぜー、ハー、ぜー……ッ、オロロロロ」

第貳陣。寿々花の追撃が始まる。

……さながらマーライオンみたいですね。

もうこうなってしまうては部外者を決め込もう。

呆然と呆けている真希を余所に夜見は無関係を装い、冷静に考察に

入る。

彼女は寿々花が嘔吐する様を口から水を吐く、上半身が獅子、下半身が魚の全身コンクリート製の像を思い浮かべた。

……叶うのなら、何時かシンガポールに行ってみたいですね。高津学長と……。

静かに目蓋を閉じ、ささやかな願いを胸に少女は小さく決意する。

「……いや、これでこの話を締めて置もうとしないでくれるか？」

「……東西南北さんはエスパーですか？」

機微を捉えるには難しいであろう皐月の表情から彼女が考えているだろう考えを察知し、退ける。

僅かながらムツ、としたのか表情が薄っすらと歪む。

「取り敢えず、獅童は服の替えになる物……あーいや、ジャージでもいいや。Lサイズ以上のヤツ、それと清掃用具とゴミ袋頼むわ。んで皐月は此花の介助を頼む」

「アナタはどうするんだ？」

二つの鼻孔に臭気が入らぬ様、手で塞ぎながら獅童は尋ねる。

「服も汚れちまつたし、この状態のまま此花を介助して通路を汚すよりこのまま執務室の掃除を引き受ける事にするわ」

真っ新たな手で後頭部をポリポリと掻き、そう告げる。

手は液体の混じった固形物と異臭に汚染されていない為、直接人体や装飾品に触れる事が許されるわけで、そそくさと動かし、取り掛かる。

「……な、な——」口をワナワナと震わせ、真希の口腔はマシンガンと化し捲し立てた。

「何故脱ぐんだアナタは!!! それも何で下半身だけ!!! まさか下着を履いているから見えていないから大丈夫だろ? 何て言うつもりじゃないだろうな!! 冗談じゃない! コッチは十代思春期真っ只中の中学生だぞ!? 二十代なんだろ!? TPOぐらい考えれるだろう!!!」

「婦女子が誰彼構わず性に興味ある訳ないんだからそれぐらい考える思考あるだろ、分別ぐらいつけろよ——」

「……獅童さん、どうどう。落ち着いて下さい。そうやって騒ぐと此花さ、あ——」

「あ？ どうせ洗濯するんだ、獅童オマエが持つてくるまでヤレる事や、あ——」

顔一面紅潮した真希の背後からスルリと真希かのじよの両脇から黒いグローブが顔を出すと続けて黄枯茶色の長袖が続く。

迅移で動いたのかと疑いたくなる程その動作は早い。

腕を素早く通し、ガシツ、と羽交い絞めを試み同僚たる少女を嗜めたのも束の間。

「オロロロ、オロロロ……ツハツ、ハア、ハア……」

第参、そして防壁が破られた。

「……なあ、此花よ。オマエの胃の中にはリバイバルスライムでも居るのか？ いや確実に居るだろ。外に吐き出した瞬間、胃に召喚されるんだらう？」

「……コンビニ弁当しか食べてませんわよ」

今度は大腿四頭筋から下に寿々花が開口していた口から戻す。

「朝からコンビニ弁当……って、食堂あるんだから其処使えよ」

ここで中央は言葉を発するのを止めた。

かつて師に無理矢理付き合わされた飲みの場合の際限なく続くアルコール摂取の後にくる後始末。

それに比べればまだましではあるが、それでも精神的にくるものがある。

拭くものがマジでねえ……。あーもう仕方ねえわな。

上半身の肌着に手を掛ける。

「なあ……！ 言った傍からキミは——」

「いや、見てねえで拭くものをさっさと持つてきてくれよおー」

そして、涙声でひっそりと心の中でこう呟く。

なんか、もう、精神が折れそう。こころ

情けない理由で口腔から弱音と共に人魂を象った白い提灯が抜け殻になり掛けている青年から抜け出そうとしている。

「……まさに無限ループ、ですね」

この世ものとは思えない阿鼻叫喚地獄。

そう形容しても差し支えない光景をこの部屋の主は無音で目撃する。

「どうやら今日の事務仕事は中央抜きで取り掛からなければならぬ様子だな。」

四人の刀使らに気付かれぬ様、こっそりと音を殺して刀使の頂点に立つ者は180度回転する。

「……新しい執務室を手配しなくてはな。それと、殺菌しても危なそうだからここは倉庫として使用するでしょう。増築……は又今度するとして清掃費用は中央の給与から天引きするか」

実年齢と見た目年齢がイコールではない日に日に四十路に近づいている女性は静かに天を仰ぎ、その場を後にする。

東西南北 中央。給与から天引きが確定した瞬間である。

### 折神家別室――

「……で、少しは落ち着いたのか此花よ」

数日前と同じように獅童が持つて来たジャージに着替え、腕と足の袖口を捲ると机に肩肘を付け、指の中節骨で頬杖をつく。

今回ばかりはイラつきが抑えられそうにない。

分かり易く反対の人差し指でトントントントン、と小刻みに机を叩く。

五歳以上離れているとはいえ相手は未成年。理由が理由な為、理由を聞いて仕方ないと半ば納得せざるを得ないのだからこの感情も行き場をなくし消化不良にもなる。

「申し訳ございません、ですわ」

加害者たるお嬢様口調の少女は深々と頭を下げ、伝法さ溢れる被害者へ謝罪を述べる。

このまま威圧し続ければ直ぐにでも三つ指ついて土下座までしそ  
うだ。

「……」

体内にダムでも出来ているのか、言の葉は喉奥でせき止められ、仮に声を排出出来たとしても結局は空となり消える。

今回ばかりは自分にも非があると自覚がある為、二人の少女は事  
行く末を見守るしかない。

特に真希はあおも早口言葉を並べ詰め寄つての結果がアレだから  
発言権など存在しない。

タイムグを逃したのだ。言うに言えない。

ちゃんとした謝罪の機会が欲しい。

少女は切に願う。

そんな心情を知つてか知らずか、中央は半目でジト——と三人を睨  
む。

此花は依然として臙脂の赤毛を垂らし頭を下げ続けている。

丸目で顔面に大量のしの字を流し浮かべているのが目に見えて分  
かる。獅童もコチラの動向を息を？んで静かに見守っている。残る  
皐月はぱあーつと後光でも差したかの様な朗らかな微笑みで中央と  
此花を見詰め——

見詰め。

見詰め？

待て待て。何なんだその満足気な顔は。今までの無表情に近い変  
化の無さは何処へいったんだよ。悦にでも浸つてんの？

オマケで背景には星々が輝いている様にすら見える。  
長くもない溜め息を吐き出し自分の心の中で言葉を紡ぐ。

心の中でツツコムのは止そう。今日はこんな事をする為に来た訳じゃないんだ。

これでは唯の時間の浪費に他ならない。この身をギャグ世界線ワールドに浸かる訳にはいかせまいと本題に移る為、中央は意を決する。

「まあ、その、何だ。任務とはいえ俺にもなんやかんや原因の一端はあるしよ……その」

引き摺った椅子から短く悲鳴を鳴らして立ち上がる。

このまま尾を引いてしまつては今後の活動に支障が必ず出て、それは何れひよんなことから崩壊を生む。

中央は腰を屈め、謝罪の言葉を彼女達に向ける。

「済まなかった」

何方が良いか悪いかではない。手遅れ遅いにならない為。

先程の怒りは消え失せ、面を上げる。

その目つきは真剣さを帯び、彼の眼差しを見た少女達はそれまでの一部を除いて重々しいムードだったのが一転し、荘重な雰囲気雰囲気に変わる。

「東西南北さん……」

「ヨシ！ これがこの話は終わり！ 良いなオマエ等」

「ま、まあ、アナタが良いと言うのなら」

少しばつが悪い真希はそれを了承する。寧ろこの方向に持つていきたかったので東西南北の提案は有難いものであった。

「……私はそれで構いません」

「本当に、その……宜しいんですの？」

今の今までを惜しむかの様に微笑みを消し、表情の硬さが平常運転の夜見は彼の提案を受け入れるが夜見かのじよとは反対に萎れた花の如くしよげ悄気しよげた寿々花からは尋ねられる。

「ああ、二言はねえよ」と間を開けずに彼は言う。

「それじゃあ、本来朝からヤル筈だった今日の本題に移るぞ」

パン！ と、手を合わせると中央は漸く軌道修正する事が出来た。口を閉ざし三人の刀使を見詰める。

昨日の反省会でもやるのだろうか。その後、紫様と防衛省の会談は行われず折神家に戻りその日は事務仕事に従事する事となったが……。

東西南北さんもこの後業務があるのでしようがここは無理を言っても私達に剣の稽古をつけて貰わなくてわ。

……今からでも強くなる事が出来るのなら、それが叶うのなら、あの方の為、この提案を何としてでも受け入れて貰う為に。

三人の決意が固まった所で、タイミングを見計らったのか彼は言葉を吐く。

「オマエ等三人には俺が直々に武の指南を行う。それも最低一年で最低限の力量を身に着けてもらう。短い期間ではあるがな」

「ボクラ、らふおつふおおーつて……最低一年でつて」

思いもよらない事を口走る。

先手を取られ出そうとしていた決意が意を突かれ真希の喉を経由し口を通して新たな言語として創造される。

「……剣術、ではなく武、ですか」

「ああ、この前は個の力量を見させて貰った訳だが、今日から暫くの間は群としての力量を図る。その為にも」

一拍置き。

「集団戦をヤルぞ」

「集団戦……ではここに居る私達以外の方達とも刃を交えますの？」

当然の疑問が寿々花から発せられた。

「ああ、とは言っても直ぐにじゃあねえ。早ければ二、三日つてところ

だ。それまでは俺とオマエ等とする」

「誰か当てでもあるのかい？」

「俺じゃなくて御当主がな。此処に来る前に話をしたら数名の刀使をコツチに派遣するそうだ。勿論実力が備わっているヤツをな」

「そうか……」

東西南北の答えに真希は直ぐにある人物達の顔を思い浮かべだした。

実力が備わっている。つまり自分達と同等、又はそれ以上ということだ。

ここでその該当者の存在が明るみになる。

彼女達が来るのか……金城は来るだろうが他は果たして引き受けてくれるのか？ 仮に引き受けたとしても一刀は……。

眉間にしわを寄せた表情で考えている様に寿々花と夜見も真希と同じく思考し、ある考えに至る。

獅童さんにも心当たりがあるようですわね。でも彼女、裏隠居さんが来るとはとても……。

恐らくは佐等さんが来るのは確定でしょうが他の方は未知数ですね。

三人は各々が招集に応じるであろう刀使とそうでない刀使を思い浮かべる。

彼女達は充分過ぎる程の実力を備えている。それは自他共に認める程に。

そして自分達以上の実力がある事も。

だが、それはその者達の実力であって、親衛隊に抜擢されるかといえば違う。

その四名は確かに御前試合に出場経験がある。

端的に言えば性格に難があり過ぎるのだ。

現に候補に挙がった四名は親衛隊の候補者として名が挙がった。しかし――

「興味が湧かないので辞退させてもらいます」

「カカカ、自由に行動出来ないならイヤです」

「ああ!?　なんでアタシがそんな面倒な事引き受けなきゃならねえんだ、ふざけてんじゃねえ!」

「いや、身体的ハンデがあるのにそんな大役を儂なんか引き受けも良いのかのう?　そういう事は健常者に任せたほうが良いと思うぞ?」

と、その様な有様で獅童　真希、此花　寿々花、皐月　夜見の三人が親衛隊に就任された。

親衛隊の人数に上限は無く、決して消去法などでは無い。

もう一度言うが、護衛をする以上、あげられた四人には性格上の難があり過ぎるだけ。

「どうしたオマエ等、難しい顔して。まだ先の事を引き摺ってんのか?」

「ああ、いや、何でもないよ。それより集団戦、と言ったが場所はどうするつもりなんだ?」

「当然、場所はこの前使用した折神家の立ち合い場所だ。広さも申し分ないし、何より他に移動する時間が勿体ねえ」

パンツ!　と声もなく一丁締めで手と手が合わさり合い音を出す。

すると、「時間も惜しいし、早速行くぞ」とスタスタと動き出した。

「あつ!　お待ちになつて、東西南北さん!」

「……どうかしたのですか、獅童さん」

寿々花の後を付いて行こうとしていた夜見がふと振り向く。

強さを求める獅童かのじよが真つ先に動くものだが今回に限ってはまだその場で立ち止まったままだ。

「獅童さん?」

「ああ、すまない皐月。今行くよ」

そう言い、漸く真希は歩き出した。

「それじゃあ、一通りそっちで作戦会議してから始めるからな」

「……勝敗の条件は先程言っていた通りで良いのですか？」

講堂に来るまでに伝えられた事を夜見は再確認する。

「ああ。俺に一撃入れたらオマエ等の勝ち、オマエ等は写シを剥がされたらそれで負け。分かっていると思うがかすり傷程度じゃ判定は無効だからな」

一拍置くこともなく中央は淡々と言葉を続ける。

「一回終わったらダメ出して修正。作戦会議してもう一度模擬戦。今日はそれを延々と繰り返す。自分等で線引きなどして限界を決めつけるなよ。創意工夫し、あらゆる可能性を見出し、御刀を振れ。自分の信念を守る為、守るべき者を護る為」

「あ、早々、言い忘れてた」と思い出した様に中央は声を出した。

「それから前回と違って今回は木刀使うし、コッチからも攻撃するからな」

自分で線引きして限界を決めつけるな、か……。我ながら偉そうだな、ホント。

自身の御刀である長巻を端に置き、そして己の発言に呆れる。

自分で自分の限界を決めたモノが言う言葉ではないな、と。

「分かりましたわ……。それで、どうしますの？」

言うべき事を伝え終わると彼女達から距離を取る中央。

折角の模擬戦。冷静さに欠け、相手との力量を推し量ることも実力も見極める事もせずにはいた前回とは違う。

思考を巡らせ策を練り、数の有利を生かす為に協議する。

何れ来る猛者達に打ち勝つ為の下準備期間。

成長のチャンス奪う訳にはいかない。

故に、中央かれは少女達の声の届かない隅へと移動する。

「昨日の様な醜態はもう真つ平ごめんですからね。それにこれはチャンスでもありませんしね」

「ああ。実戦に勝るモノはない……。彼との立ち合いは今以上に自分達の成長に繋がる事が出来ると思っっているよ」

「……では、二人が陽動し、残りの一人が決める形でいきますか？」

中央の意図した事に三人の刀使達は無自覚ながらもその思惑に近づく。

「そうだね、下手に裏をかいても彼に通用するとは思えないからね。皐月の言う通りここは正攻法でいこう。二人掛かりの連撃であれば僅かな隙もできるだろうから、そこを狙う」

「なら私わたくしと皐月さんで陽動と攪乱。獅童さんが決めるという事で宜しいですね」

「よし、準備出来たみたいだな。コッチは何時でもいいぞ」

三人の談話が終わる頃合いを見計らうと遅くもなくかといって早くもない速さで歩き出す。

右手に持った木刀を無造作に振りながらそれを確かめると白いラインテープの前で足を止めた。

「こちら準備は出来ている」

そう言った時、既に真希達は御刀を抜き、写シを張り準備を整えていた。

「ならそっちのタイミングで良いぞ」

木刀の切先を床に向けた瞬間――

「では、いきますわ……よー！」

「いきます」

――寿々花と夜見は中央の許へ加速した。

寿々花は三段階目、夜見は二段階目とシフトチェンジを行わず一段階目を飛ばし迅移を発動させた。

「フン、最初に仕掛けたのは此花こと臯月にんか。つーう事は獅童は俺の後方うし——」

自身の真後ろの気配を探る。

だが虫一匹すらそこには居ない。

——居ねえだと!?

中央が親衛隊に加わってからの初のチーム戦。三人の内、二人が守備手として陽動を引き受け残りの一人が攻撃手として動き死角となる後方を攻める。

獅童コイツ、臯月の後ろに隠れてやがったか!

「でやあああッ」

「はあああッ」

寿々花は真横に薙ぐが彼の制服にすらその切先は届かない。

くッ! 紙一重で避けられたか!

まだ、ですわ!

これは実戦ではなくチーム戦による模擬戦。

拙い連携を少しでもマシにする為に試行錯誤させる場。

故に中央も今は防御と回避に専念するが僅かながらこの女装男は口元が緩んでしまう。

ハッ、舐めて掛かってこねえ分この前より鋭くなって……臯月の気配きはいがない?

命のやり取りをしないが故にこの状況を楽しんだ所為か、もう一人の刀使の気配を中央は見失う。

ああ、イヤ。背後そこにいるか……！

「……」

今度は夜見の突きが中央の背中に突き刺さろうとする。

しかしながら彼女の剣も真希や寿々花同様、空のみを突く。

上手い具合に状況をよく見てやがるな。

夜見の一撃に合わせた真希と寿々花による連撃をヒラリと躲し間合いを取る。

それに此花コイツも獅童の動きに合わせて攻撃を組み立ててやがる。立ち合い中とはいえ戦闘のバリエーションが増えて来たな。

「でやあつ!!」

真希コイツは真希コイツで此花を信頼仕切ってるのか分からんが攻撃に迷いがねえ。シンクロでもしてんのかコイツ等？ だが、まあそれでも……。

「……」

迅移——

アイコンタクトも行わずに真希と寿々花の両名は呼び動作無し  
の三段階目の迅移で中央との距離を詰める。

及第点をくれてやるには充分じゃねえよな。

まだまだ求める領域に達していない。今回の模擬戦ではそろそろ集中力が切れる頃と判断し中央は防御と回避から攻撃に転ずる。

木刀といえど自身の力量なら写シごと彼女等の骨を砕きかねない。薄緑を緩衝材に利用して下段から木刀を振るう。

これでもダメなのか——!?

次の一手を思考中、予期せぬ衝撃が自身の薄緑を通して両手に伝わる。

前日に襲撃者から受けた一撃よりも遥かに重く、そして鋭い。

これ程の一閃、身構えて受けたとしても防ぎきれはるはずもなく、掌で包まれていた柄は勢い良く宙を舞う。

「があッ!!」

耐えきれなかった衝撃は痛みと成りそれと同時に全身を覆う写シは霧散した。

写シが肩代わりした痛みはやがて増幅し、戦闘手段を失った真希を容易に両膝を付かせた。

苦痛に歪む真希など知る由もなく中央は寿々花へとターゲットを切り替える。

位置は把握済み、木刀を振るうよりも空いている左手を使う方が迅い。

まだ体勢の整っていない寿々花の背中にバシンツ!! と、音を響かせ張り手で床に落とす。

ぐうっ……!?! 体勢が……いや、まだ! ここから!

あの状態で此花さんがまだ攻勢する気である……なら。

斬撃程の痛みは無い。だがそれでも痛みは痛み。急激な痛みが寿々花の背中を襲う。

御刀を放すまいと手から離しそうな九字兼定を強く握りしめ、泥臭く踏ん張り片足で無理矢理身体を反転させる。

方向は当然、東西南北 中央この一択。

向きは中央、目線は床。

これでは一閃を放つ前に倒れてしまう。だが――

これで……良い!!

時間にして一秒も満たないが、寿々花の脳裏に一つのビジョンが浮かび上がる。

既視感だともいえるのだろうか。寿々花にとって身に覚えのない動作がハッキリと見え、その通りに身体を動かせる事が出来る。

だからこそ、この体勢からでも一閃は放つ事は出来ると確信を持っている。

脳が、身体が、感覚が、細胞の一つ一つが寸分の狂い無くそれを体現してみせる。

コイツは!?

夜見の追撃による斬撃が迫る中、中央は寿々花の挙動の違和感を感じ取る。

知っている、この不利な体勢からの一撃を。そして迅移すら上回るその瞬発力を。

何故此花がこの技を繰り出せるかなんてのは今はどうでもいい。避ける事は容易。両目を閉じてもそれは容易い。しかし避ければ対角線上にいる皐月がこの技を受ける事になる。それは避けるべきこと。

今の此花が繰り出すこの技の威力は全くの未知数で、予測がつかない。なれば防御に全力を注ぐ。

ここだツ!!

ただ防ぐだけではこの木刀は造作もなく砕かれ、写シを張っていない自身の身体は間違はなく深手を負うだろう。

この先油断できない状況が永遠と続く。だからこそ必要のない負傷は避けなければならない。

寿々花の百千万億流イカツチノカタ雷電型二式が始動を開始した刹那に同じくして中央も百千万億流の技を始動させた。

金属と木刀。ましてや此花の扱うのは珠鋼と呼ばれる特殊性のある金属。

幾ら自分の技量を以てしてもこちらが使うのは木刀。

最良の選択が求められるこの状況で中央は転瞬——両手で柄頭を握り下段で構え、二式の白刃が動くタイミングで木製の刀を振るった。

土公型ドコウノカタ——第一式 荒神アラガミ

荒神——構えた自身の武器で相手の武器を狙い、刃同士が激突する瞬間に刀を回転させることで激突速度を一気に上げ、相手の武器を弾き飛ばすと同時に損傷させる百千万億流の防御術。

この技は本来、鍛冶職人達が鍛えた刀剣類を使用することを想定とされている。

だからこそやはりというべきか、その技の威力と衝撃に九字兼定を弾き飛ばした木刀はもの見事に亀裂が入るのと同時に原形を留めることを許さなかった。

景気よく木刀は木屑をまき散らして二つに分離し欠片は宙を舞う。寿々花の放つ雷電型二式は不発に終わった。

手加減できなかつたのだらう。夜見の目には今を置いて他にはないまたとないチャンスだとその隙を最後に残された刀使は見逃さなかつた。

ゴルフスイングのような振り被る姿を中央はまだ戻す様子はない。ここぞとばかりに迅移で振り被った方へ詰め寄る。

恐らく東西南北さんには360度死角などないのだろう。

今までの体裁き、技術、判断力、そして、反応速度。どれを取っても東西南北さんを上回ることは自分には不可能。

ならばこそ、この瞬間は逃さない。チャンスを掴み取る。

それに東西南北さんは言った。

「俺に一撃入れたらオマエ等の勝ち、オマエ等は写シを剥がされたらそれで負け」

使用する武器の破損については一言も言及していない。

彼が提示したルールには違反していないのだからこの状況でも何も問題などない。

ガラ空きとなった中央の脇腹に水神切兼光の切先が触れようとした寸秒――

バアンツツ!!

重い衝撃がシビレとともに両手から伝わる。

しかも指先の感覚がまるでない。

御刀はどこに？

この場には中央と夜見しか対峙していないのだから何が起こったのかが明白だからこそ自身の愛刀を探し――

見つけ出す。

恐らくは3〜4メートル程、目測ではあるが衝撃の音からおおよそそれ位の位置に夜見の御刀は何事もなかったかのように床に置かれていた。

しかし、起きた現象はわかっただけでも何をされたのかまでは彼女には不明であった。

素手での攻撃とは考え難い。漸くして中央が何をしたのかを夜見は理解した。

最後の一闪を防ぐ――弾き飛ばしたのは木刀だったもの。その頭

である。

それがわかったからといって彼女の纏っていた写シは戻つてこないし、両手に痛みを抱えこうして天井を見上げることもない。

「——フウ——」

三人の写シが剥がれたことを見届けるとまだ痛むのか痛みを堪えている寿々花の方に目を向け、中央は思考する。

先のアレは、不完全な形ではあるが雷電型、しかも二式。此花<sup>コイツ</sup>、今の今による咄嗟の思い付きか？

目を瞑り答えをひねり出そうするが納得のいくものは出てこない。

先日の件の如くこれも保留という名の先送り。

短く溜め息を吐き出し、彼女達に歩み寄る。

「取り敢えず、一回目は終了な。んで、正直なところ自分等としてはどうよ？ 今やり合ってみて」

「ああ、うん……正直、差が開き過ぎててどう言つて、どうすればいいのか……」

「まるで勝てる気がしませんわ……」

「……分かりきった結果に感想を求められましても……」

まるで生気のない表情からは抑揚のない声が漂う。

あの時はこれで防げた。この時はこうすれば良かった。そういつたことを期待していたのだが。

……あ、あれ？ 何このお通夜状態。朝の時点でやる気あったよねキミ達。

木綿豆腐のように脆く、ガラス細工のように傷付きやすい。この繊細な少女達にどう声を掛けるべきなのか。

「ほ、ほら。諦めたらそこで試合終了だと高校教師も言ってたじゃないか。元テニスプレーヤーもどうしてそこで諦めるんだと熱い言葉



わりと背中を撫で、穏やかに波打つスーパーロングウェーブが可憐さを際立たせる。

そしてその隣で顔を朱色に染め上げた同行者に意見を求めた。

同行者、といつても目的地へ進む方に歩を進めれば今日という日に自然とこの二人は出会うのだ。

「ああ!? んな事一々記憶に留めてねえよ! クソみたいな質問しやがって、斬り殺されてえのかクソチビ!!」

煽られたと思ったのか荒々しくイラついた声で返すこれまた一人の少女。

綾小路武芸学舎所属の刀使なのだが彼女は制服ではなく同学の指定ジャージのみ着ているがスカートはそのまま制服。

上はジャージ、下はプリーツスカートと変則的な格好で、ファッションだけを見ればどちらかと言えば奇抜の部類に入るのだろう。

本来着ているハズの制服は御刀の鞘に限界まで巻き付け、袖で縛り上げ固定している。

注意や指導はされないのかと疑問が出るだろうが本人曰く、「ああ? そんなモン学長から許可とってあるわ」との本人談である。

そして――

「あークツソオツ!! 何つでアタシがアイツの代わりにこんな任務引き受けなきゃならんのだツ!!」

思い出したかの様にぐしゃぐしゃと鮮やかな黄赤のある蜜柑色のラインバレイヤーージュの髪を掻き毟るとまるでフィクションの様にこめかみに血管が浮き出す。

「あのクソアマ、見つけ次第即刻ブツタ斬ってやるっ!!」

「お主、相も変わらず血気盛んじやな。そんな短気だと疲れやせんか?」

首輪と紐があれば今すぐにでも繋ぎ留めたいがこの獣じみた少女には繋いだとしてもまあ、どだい無理だろうと少女は思い留まる。

隣の連れ人を宥める事もなく、幼い体躯に似つかわしくない老人語を喋る少女は閉ざされた扉に手を掛ける。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第10話 狂犬と妖精

## 10. 狂犬と妖精

沈んだ太陽が再び昇り続ける最中、東西南北よもひろ 中央は折神家近くなかおのコンビニから買い物済ませ構内を歩く。

折神 紫からの依頼とはいえまだ刀剣管理局に正式な辞令が組織内に通達されていないわけで。

認知しているのが折神 紫と親衛隊の三人、それと守衛を含む数名の職員だけなのだから自分が人目についてうろつき回るといっものはいささか不都合が生じる。

まだ早朝ということもありこの時間帯では職員や折神家に配属になった刀使にはいまだ会う事はない。

しかし、だからといって職員達との接触は極力控えるべきでだろう。

「あら、もう制服のクリーニングはお済みになられたのですわね」

構内での行動に制限がかかる事に少なからず不便さを感じていると不意に、背中から落ち付いた少女の声が入る。

「ん、此花か。お早うさん」

構内のT字路を通り過ぎようとしていたところで中央は声の主――寿々花に軽く挨拶をすると、

出会ってから数日でもう聞き慣れたその声に成年は振り向くことなく目的地向かう。

「お早うございます。東西南北さん……それはひょっとしてコンビニのお弁当ですか?」

駆け寄り隣に並んだと思ったらヒョイツと前屈みで手に持つビニール袋を覗き込む。

ビニール袋に収まった形からおおよその検討をつけ、赤に似た臙脂えんじの髪をかき上げ尋ねてみる。

洗髪した後なのか寿々花からふわっ、とフローラルな香気が漂う。

「あ? ああ、そうだが別に珍しい物でもねえだろう」

「……その格好で、ですわよね?」

じーっと、さながら怪しむように彼の全身を見回す。

黒髪は前日と変わらぬ艶やかさを保ち、親衛隊の制服はクリーニング済みで今のところシワの類はない。

戦闘の爪痕が残る靴はまだ新品同様といえるだろう、少なくとも寿々花の半目にはそう映っている。身なりもこれといって不自然さはない。ここまでは。

だが刀使としては異様に見えてしまう。

彼と、その御刀の存在に。

店員の方、見知らぬ刀使が身の丈以上の御刀を佩刀はいとうも行わずに入ってきたら驚くでしょうに。

「いや、そりゃあそうだろうよ。伍箇伝か親衛隊の制服着ずに佩刀してやうものなら即禁固行きだわ」

「……貴方、紫様とお会いした際、確かボロボロの袴を着ていたと臯月さんから聞きましたわよ。」

それも御刀と脇差を持ったままで日本中を移動していたとか」

「その時は特注の竹刀ケースに入れてたんだよ……って、臯月アイツ一々そんな事覚えていたのかよ」

「紫様と貴方の会話に入らぬ様にしていたのなら誰だって些細なことだろうと」

会話のやり取りぐらい覚えていると思いますわよ。

記憶に留めておく期間に差異はあるのでしょうか」

「あーそれもそうだな……で、先から何をそんなにチラチラと見てるんだ？」

「い、いえ、私わたくし別にお弁当など見てはいませんわよ」

手元に刺さる視線が気になりその許である主に問いかけるとなんともしも明白な自白が返ってきた。

珍しいものじゃねえだろうに、と寿々花の目線に入るよう上に持ち上げる。

「そんなに食いたいのかよ、弁当コレ」

「そんなことは……因みになのですけれどお漬物はお嫌いですか？」

「漬物？ 別に好きでも嫌いでもないが……え、オマエこのコンビニ  
弁当の漬物が食いたいの？」

「そ、そのような品性下劣な事、この私わたくしがするなど……」

「まあ別に漬物ぐらい構わんど。ただ、食うんだったら箸は自分で用  
意し——」

「ご相伴に与らせて頂きます！」

光の如き速さで四十五度の角度で腰を曲げる此花家のご令嬢。

生身でこの速さ。まさしく黄金聖闘士のソレそのものと疑う余地  
はない。

「……オマエ、良いところのお嬢様なんだよな？」

「ええ、由緒正しい此花家の嫡女になりますわ。それがどうかしまし  
て？」

「ああ、いや何でもない。気にするな、忘れろ」

頭部にクエスチョンマークを浮かべながら首を傾ける。

よだれを拭ったハンカチをスカートのポケットにしまうと寿々花  
は中央の黒髪に視線を

向けていた。

「それはそうと、髪はそのままになさいますの？ ポニーテール似  
合っていましたのに」

「ん？ ああーこれか。マジでどうすつかなー。いやな、何だかこう  
……しつくりこねえんだよ」

「ポニーテールが？」

「アレ段々と邪魔になつてな。オマエのソレ、邪魔にならねえの？」

後頭部に手を当て小刻みにさすると他愛のない疑問をぶつける。

「私わたくしは刀使として、御刀を振るう者として動き易い様にこのヘアーに  
セットにしていますので

今まで不便だとは感じる事はありませんでしたわね」

「そりゃあ羨ましい事で。まあ、臯月が今日髪型弄ってくれるみたい  
だからコッチは考えんでもいいから楽でいいんだけどな」

「臯月さんが？」

「そ。世話を焼くタイプには見えなかったんだがな」

数秒の沈黙の後、冷ややかな視線とともに寿々花は口を開く。

「……刀使とはいえ女子中学生の弱みを握つての命令は職権乱用、犯罪にあたりますわよ。」

自首なさったら？」

「どうしてその考えに至るんだよ……」

「これまでの言動から、でしてよ」

あーうん。この流れは納得しなきゃダメな流れだな。

そうこうしているうちに目的の場所へ辿り着くとドアストップパーに固定された両開きのドアが

目に入る。

入口上の白いサインプレートには黒字で食堂の二文字が印字されまだ真新しくも見える。

大抵小、中、大にかかわらず部屋の隅なんかは汚れが残っているもののだが、税金で運営されているお陰か、はたまた清掃業者がきちりしているのか定かでないが中に入ってみると汚れらしい汚れは見当たらない。

食事を摂る場所である以上、不衛生では困るが食堂はそれとは真逆の無菌状態を保っている。

ありがたいことに早朝ということでは今は二人だけだ。

「申請された人数分しかありませんが、その辺りの手続きはどのようなさつていますか？」

「衣、住に関しては全く！ 当面の食費を稼ぐ事しか考えてねえし」  
備え付けられた電子レンジからピーツ、ピーツ、と加熱処理を終えた音が数秒鳴る。

電子レンジから取り出した弁当をサツと白色のビニール袋に入れ直すと手ごろな席に二人は移動した。

「まあ、なんか色々と話してくれてたんだが給料の事（とエロい事）しか耳に入れて

なかったからな。それ以外の事は殆ど聞き流していたな」

「今までよく生活してこれましたわね」

「日本コッチに来たのは二週間程前だからな。お陰で金がねえ、住む場所もねえ。

今の俺の胃袋と同じですっからかんのないない尽くしなんだわ」

「ここでふと、当たり前前の疑問が寿々花の頭から思い浮かぶ。

「では就寝場所はどちらに？ 外で野宿を……」そこでハツとし「まさか、化粧室で——」

サツと、手で口元を覆い隠すと同時に後方へ身動ぐ。

「いや、そんな訳あるかよ。事務仕事ついでに執務室を代わりに使わせて貰っているんだよ」

「ではシャワーは……」

「毎日欠かさず洗って……そこも皐月から聞いたのか？」

「ええ、紫様と同行したのは皐月さんですから、根掘り葉掘り聞かれる事は全て。

わたくし私だけではなく獅童さんも存じていますわよ」

「ああ、そう……」

取り出した弁当から透明なプラスチック容器の蓋を取り外し「ん、先に漬物食いな」と、

テーブルから引きずる様に目の前の少女に差し出す。

「あら、お先に頂いてよろしいので？」

「人が食ってる物から拵むのイヤだろう」

「妙なところで気を遣いますのね」

そう言つて寿々花は手を合わせ合掌すると「では、お先に。頂きます」と湯気を帯びた漬物を口へと運ぶ。

ハムツ、と一口噛んだ瞬間、少女の顔から喜色が溢れる。

写シとは違ったオーラに包まれ空いた手を頬にあて、至福の時を得た彼女の周囲には花々が咲き誇った。

それが現うつであるかのように。

「あ……」

「どうかしましてっ？」

この弁当、底上げしてやがる。何でだよ、600円もしたんだぞ……詐欺じゃねえか。

なけなしの銭で買ったにもかかわらず量に対して金額が見合わないことにげんなりしつつも

引き攣った顔の男は短く返答した。

「あーいや何でもねえ。気にすんな」

「そうですか？　ところで、先程お金の事を仰っていましたがこのお弁当の支払いは

どちらから？」

「御当主から天引きと言う名の前借り」

「それは何れお給料が無くなるのではなくて？」

中央と寿々花、この二人の与り知らぬところで静かにフラグが設置され、いずれ回収がなされる。

フラグという概念があるのであればの話だが。

「手続きが受理されるまでの間、繋ぎなんだから早々そうはならねえだろ」

建設業関連の専門業者かなにかなのか、フラグを建てる中央。

そうとは露知らず量が少ない分、口の中で細かく噛み砕き、確りと大量生産された食材を味わっていると残りのメンバーが食堂に姿を現した。

「……お早うございます」

「珍しい組み合わせだね、此花と東西南北アテナタが二人一緒でいるなんて」

姿を見せたのは夜見と真希。

寿々花同様親衛隊の制服に身を包み中央達の方に近づく。

「朝食食おうとしたら途中でバツタリ合っつてな。オマエ等もその口か？」

「……いえ、獅童さんも私も食事は済ませてあります。此花さんともう食べ終えたのですか？」

「朝食なら私も済ませまし——」

タイミング悪く官給品たるスマートフォンから前兆もなくブルブ



「俺のこの決まらねえ髪型をどうにかしてからコイツ等と一緒に行くわ」

「時間が掛つても東西南北アナタが行けばいいじゃないか、一応ボクらの責任者だし」

「あのなあ、学生じゃねえ俺が迎えに行つても不審がるだけだろ。」

何だつたらあちらさんがその場で即斬りかかるかもしれんし」

あー彼女なら恐らくあり得るね。

あり得ますわね、彼女なら。

……彼女の場合あり得るかもしれませんね。

一呼吸分の間を置くところある一人の刀使が思い浮かび三人の主観が偶然にも重なる。

東西南北——だしな。

東西南北——さんですし。

あれ？ 気のせいか、心なしか三人からの視線が痛気持ちいぞ。

—— 応接室 ——

二度のノックを済ますと寿々花は一言断わりを入れて入室する。

「お待ちせしました」

ダンッ!!

ドアの開放と同時に室内がけたたましく鳴り響く。

誰が鳴らしたのか。

音の主たる人物については入室前から既に大方の予想がついてい

た為、寿々花はその音の中心地に目を向けるとそこには――  
邪魔にならない程度に短くされた蜜柑色のラインバレイヤージュ  
の頭髪。

右耳にはイヤークーフが一つ。

そして指に着けられたアクセサリーはイヤークーフ同様に銀色が輝く。

服に至っては襟立てされた淡い灰色のジャージのフアスナーを閉じ切っている。

このひとときわ異彩を放つ少女。しかも、綾小路時代からのよく知る顔見知りがそこにいるのだから。

だからこそ、ああ……やはりアナタでしたか、と吐露しそうな言葉を内心に押し留め肩をすくめる。

「人待たせておいての出会い頭開口一番がそれか此花ア！」

「これ、久々の後輩に再会してそれはなからう」

しかし異彩を放つといえはその隣にいるプラチナブロンドの少女もそれに当てはまる。

異国人と思わせる黄色味の髪。

髪色に負けじと大きく波を打つようなボリユーム感に溢れたヘアスタイルは胸下付近まで煌めき続け、江戸紫の襟カバーを覆い隠す。

短髪の少女とは違い制服は着用しているものの、そのブレザージャケットの袖口はウィザードスリーブのように円錐形に形を変えて広く見せている。

手を加えることを許してしまった以上、一部分でも魔改造されている制服を着ているのだ。

それだけに治まるはずもなくプリーツスカートも標準のミニを止め、白いラインがくるぶし付近を覆うまで伸ばしたマキシ丈に仕上げられてある。

そして極め付きは目を閉じ、杖について地面を確かめる姿。

見えているのか、いないのか。様々な憶測が飛び交う日々。

だがそれでも、ヒソヒソと囁かれる周囲の声などものともせず今日までの歳月を過ごした甲斐もあってか、一般流通されているものとは

比べ物にならない茶葉の香りと味を楽しめる僥倖が今もたらされる。

啜っていた湯呑をガラステーブルに置くと一向に開こうとしない  
瞼のまま老人語の少女は口の悪い隣人を制止する為、矮躯の少女は今  
もなおガラステーブルに置き続ける足を退かそうと足首を掴む。

「気にすることはありませんわ佐等さん。彼女の言動は今も昔も変わ  
らないようですので。」

寧ろ、安心感と懐かしさすら覚えますわ」

「んん、そうかの。まあ、お主が良いのであれば僕はこれ以上つべこべ  
言わぬが」

佐等は雑に足を退けるとそれを意に介さず隣で座す少女は寿々花  
を鋭い眼差しでじつと見る。

「……………オイ。アイツ、来てねえのか？」

「アイツ？」

綾小路の在校生から訊ねられるも元綾小路卒業生は首をかしげる。

誰のことか思い当たる節がなく皆目見当もつかないといったのを  
察して鎌府の刀使がその人物について付言した。

「ああ、ホレ。こやつ<sup>の</sup>代わりに本来此処に来る筈だったお主等の後  
輩じゃよ」

「そういう事ですか。綾小路の刀使は貴方だけですわよ」

「チツ……………結局来てねえんじゃねえかよ。クソツ……………戻ったらソツ  
コーブツダ斬ってやる」

不穏な言葉が寿々花と佐等の耳に入ることなど意に介さず、といっ  
た具合にぬるくなつた緑茶を一気に胃へ流し込んだ音をたてると  
ソーサーを介さず粗雑に湯呑を叩きつけ、少女は御刀を取りソファー  
から立ち上がる。

「暇や遊びで来たワケじゃねえんだからさつさと案内しな」

「では、案内致しますわ。佐等さんもよろしくくて？」

「ああ、待て。そう急くではない。余った茶菓子を包むで暫し待て」

「オイ……」

しんと静まる講堂で伝法な少女は口を開き目の前の臙脂えんじの髪の毛を呼び掛ける。

「どうかされまして？」

「誰も居ねえんだがこういう時、呼び出した側が準備万端でいるもんじゃねえのか？」

「少々、準備に時間を要しているみたいですよわね」

クルクルと暇を持って余した指で髪を弄り寿々花は言葉を返す。

佐等も先程包んだ菓子を呑気に小さな口で咀嚼している。

「ハア？」と、短く吐き出した言葉で不快感を顕わにすると「んじゃ、帰るわ」とそう二人に告げ、ジャージ姿の刀使は講堂の出入口に向かおうとする。

しかし――

「――んだよ、佐等」

翻した先にそれが立ち塞がる。

そうする事の善し悪しを論ずることは別の機会にするとして、彼女は杖の代替品として使っていた御刀が膝上に制止棒としてこのとき機能する。

「態々わざわざ遠路遙々古都から来たんじゃ。もう少し待ってみてはどうかの？ お主はまだ若いんじゃから」

「ジジババ臭エこと言ってるがオメエ、アタシと同一年だろうが。大体テメエも――」

あーだこーだと口を開けば飽きもせず言葉のラリーを繰り返している、不意に胸のざわつきが二人を襲いドクン、と心臓が跳ねる。

――何だ、コレは……？

近づいてくる足音に比例してイヤな気配は肥大して迫ってくる。獅童や臙月ではない。いや、厳密には二人は近づいているのだがそ

れでも一つだけ、ただ一つだけ異常な気配が慣れ親しむ二人の気配を従えている。

来るハズのないクソアマかといえば違うし、かといって『一刀』や金城でもない。

ましてや折神 紫でもない。

では何なんだ？ この不快感とは違ったモノの正体は。

そこで漸く答え合わせが実現する。

「悪いな、待たせた」

微塵も悪ぶれない素振りでのその刀使は講堂の扉を開き、姿を現す。直観なのか、はたまた第六感がそうさせたのか二人の刀使は御刀に手を掛け、鯉口を切ると鉦を露出していた。

それは中央を視認した瞬間だったのだが、そこで漸くとこの正体不明の感覚を諒解し、パズルのピースを埋め尽くした様に二人の中でカチリと、ソレは嵌る。

「やっと来ましたのね。あら、その髪型にしましたの？」

「ああ、昨日のよりもコツチのがしつくりきたわ。そう見えるかどうかは分かんが」

「大丈夫ですわ。ポニーテールも捨てがたいですがその三つ編みも似合っていますし、ちゃんと見えますわよ」

「そうか？」と中央の尋ねに「ええ、事情を知っている私達からでもそう見えますわよ」と言いながらチラリと真希に視線を向ける。

「人間観察は得意な方じゃないが今のアナタは何処から見てもそう見えるさ」

後頭部から三等分に分けた毛束を一本に束ねた——いわゆる三つ編み。

中央にとつての不安要素であった髪型も同僚達からとりあえずの及第点が与えられる。

しかし、中央の粗暴さは隠しきれず気は抜けない。

ブンブンと無軌道に黒髪の毛先を振り回したのち、ヒョイツと放り投げて制服の後身頃にそれが当たる。

「改めて、臯月もありがとうな」

「……いえ、これも仕事の内ですから」

そう言っつていつもと変わらぬ無表情を見せるが無表情そこから微かに覗かせた薄っすらとした笑みを寿々花は見逃さなかつた。

こういつた表情もするのか。

まだ知らない同僚の一面に寿々花も夜見につられて夜見かのじよのように微笑む。

そんな中、その一方で。

此こ奴やつ—— 紛れもなく、強い！

コイツ—— 紛れもなく、強い！

弛緩した空気の中で短髪の少女は鬨気をまとう。

敵対している訳でもないしこれから戦をはじめるともない。

だが彼女の目には無防備をさらす目の前の刀使への興味がふつと湧き上がる。

無防備な様であってもその刀使は見る限り一つ一つがムダのない最小限に抑えられた動作。

にもかかわらずこれほどまでの圧を感じた事があつただらうか？

感じるモノは人それぞれ。

かけられた首輪の鎖を引き千切らんばかりの勢いと形相の傍ら、佐等は思案する。

この御仁、儂や『光枝』との力の差が開き切つておるのう。始めて感じる気配じゃがはて？

刀使達の中でこれ程のモノが居たか………ああ、そうか。此奴こやつ武芸者か。

クク、面白れえ……！ クソアマの事なんざどうでもいい。そう思えるぐれえにはここに来た甲斐があつたぜ！

確信とも呼べるモノを二者は得る。

剣の道に進んだ以上、強者との剣戟を望んだ。

されど高みにいるモノとは刃を交えることが叶わず。  
その過程で自ら認めた刀使<sup>モノ</sup>とも不完全燃焼で幕を引いた。  
望んでも掴めない。

そんな中、この邂逅は是が非でもモノにしなければならぬ舞い降りた千載一遇のチャンス。

「んで、そいつ等か。依頼を引き受けてくれた刀使二名つてのは」

「ええ、では私<sup>わたくし</sup>から紹介させてもらいますわ。左に見えるのが裏隠居<sup>うらいんきよ</sup>光枝<sup>みつえ</sup>さん。私<sup>わたくし</sup>がいた綾小路武芸学舎の先輩にあたる方ですわ」

「……ヨロシク」

「そして、その右隣に見えるのが佐等<sup>さとう</sup>イチイさん。彼女の在籍校は鎌府女学院ですわ」

「宜しく頼むぞ若いのに。因みに、儂はこんななりじゃがその光枝と儂は同じ高等部一年じゃからの」

「んじゃあ、コッチの自己紹介だな。俺<sup>お</sup>、グフツ——わつ、私は、今回新しく親衛隊に入隊した零席の東西南北 中子<sup>なかこ</sup>だ、よろしく」

「グフツ!! なか、こ……!」

事前に周知された名も当人の口から出され真希のツボにこの上なく刺さる。

しかしプルプルと震える真希の姿を意を介さずに中央——もとい中子の目の前に迫る光枝。

「なあ、アンタ強えだろう」

「どうした藪から棒に」

「一つ、アタシと立ち会ってもらえねえか？ 勿論アタシとアンタの一对一で」

「何か理由があんのか？ 下らねえ内容だったら却下するぞ。時間ももつたいないねえし」

「理由だああ？ そんなもん強えヤツと戦<sup>ヤリ</sup>いたいからだ。それ以上でもそれ以下でもねえぞ、悪いか？」

「そうか、そういう事か。ならまあ良いぜ、丁度いい。集団戦ヤル前にコッチもオマエ等の実力はこの目で見ておきたいしな。ソッチの小<sup>ち</sup>つこいのはどうするよ」

「フム、ではお言葉に甘えんとするかの。だが、儂は後でええでの」  
首を傾けた先の視界には微動だにしないイチイがそう言つて早々と踵を返すと杖をコン、コン、と何度も床を突く。

コイツ……目が見えねえのか。にもかかわらず御当主が呼んだてことは相当腕が立つつてことだな。

フム、とイチイを一瞥する。

包み隠す気がないのかユラユラと揺らめく鬨気が後ろ姿からでも見て取れる。

……いつ以来でしょうか。佐等さんが本気を出すのは。

短い期間とはいえ幾度となく夜見はイチイと行動を共にしていた。

それ故にイチイの実力はこの中では誰よりも知っている。

彼女が本気を出す状況かどうなのかも。

「それじゃあ、早速ヤルか裏隠居よ」

「ああ、コツチはいつでもいいぜ」

制服に包まった鞘から抜刀すると峰を右肩に乗せ、写シを張る。

しかし意気揚々としていたがある重要なことに光枝は気付く。

「……オイ、何で木刀なんか持つてるんだ。アタシは全力のアンタと戦<sup>ヤ</sup>りたいんだ、先まで持つてた御刀使えよ」

……何処かで見た光景ですね。

「万が一怪我させたらこの後の集団戦に支障がでるからな。今はこれで納得してもらうしかないな」

「ああ、そうかい。なら……直ぐに全力出させてやるよ!!」

言い終わると間髪入れず迅移による高速移動で瞬く間に距離をづめる。

間合いに届いた瞬間、上段からの袈裟蹴りが滑るように白刃の軌道

をえがく。

「ほう、一撃が鋭いな」

ちッ！ 初撃を簡単に避けやがったか。なら——

数歩後退すると再度迅移で前進する。

「これでッー」と斬撃を飽きることなく繰り出し「どうだッ！」と数本の線が中央に触れることなく消える。

アタシが薄皮一枚も斬れねえだあ!?

獅童達よりも斬撃の質が違うな。しかも先程の言葉とは裏腹にコイツ、本気で来てねえ。天邪鬼か？ それともツンデレか、コイツ。

まあいいだろう。それなりに測れたことだ。

それが光枝の戦術だとしても最後まで付き合う必要はない。

まだイチイが控えているのだから早々に切り上げるのが最良だろう。

指先に力を籠め、柄から音が漏れる。

「そろそろ見るのも飽きたし、防ぐか避けるかしらよ？」

全身の肌がひりつく。急激に中央の圧が変わるのを瞬時に理解した瞬間——

来る——!!

下段からの鋭く強烈な一撃。

刀使だろうが荒魂だろうが攻撃であれば避けるし状況によっては防ぐ。

だがこれは——

避け切れない。

光枝のこれまでの経験が脳内で警鐘を鳴らす。  
どんな行動を選択しても防ぎきれない。  
光枝の中のあらゆる選択肢が潰される。  
これ以外は。

「ぐッ、うう……!!」

歯を食いしばり痛みに耐えるが沈むように御刀が  
ジャージを切り裂き左腕に喰い込む。

写シのお陰か出血はまぬがれてはいるのだが。この状況は想定外。  
自分の予測を超える速度の斬撃。

それにとまなう質の違うこの重い一撃。

なにより相手がまだ本気を出していない事が腹立たしい。

そうだ……。

——許せねえ。

芽生えた感情は怒り。

時として怒りは予想外のエネルギーを人にもたらすもの。

ここぞとばかりに火事場の馬鹿力で喰い込んだ峰を肉から引き離  
す。

それだけに留まらずその勢いで声を荒げながら中央の木刀を押し  
返した。

写シを張っているにも関わらずこの刹那の間にそれを選んだのか。  
コイツ、刀使じゃなくて武芸者コッチがわの素質があるな。

ハア、ハア、と乱れた呼吸を整え目の前の刀使をギッと睨みつけだ  
す。

歪んだ表情につられピクピクッ、とこめかみが躍動する。

——許せねえ。

御刀を床に刺し直立させると今度は腰の佩刀金具に手を伸ばし鞘を外す。

なるほど、鞘を使った攻防一体の剣術。これがコイツの本来の戦術か。

その為に縛った白い制服を解いているのかと光枝の動向を注視していたが中央の考えは思いのほか外れた。

覆われた鎧こじりの隣からもう一本の鞘がむき出しなかくし茎が丸々露出しだしているのだ。

制服が床に落ちると同時に空となった一本の鞘も音を立てその場に沈む。

二刀だと？ いや、違う。コイツは一体……。

——許せねえ。

残されたもう片方の鞘から茎なかごを握り抜刀すると齒軋りと共にもう一度中子を一瞥して目に焼きつける。

この女アマ………叩き斬って殺ラアツ!!!

「これ、やめんか」

ゴンツ!!

ニブイ何か大きな衝撃が光枝の後頭部に加わり一時的な痺れを起こした。

「が、あ、ツ、………！ ああ………？ 佐等オ………テメエ何しやがる!!」

「お主の負けじゃ」

「あ、ア、ツ!？」

「木刀にもかかわらず腕はその状態。御刀だったらもう写シが剥がれておるし何よりその腕、今頃地に伏せておるぞ」

「——ツツ………あゝあゝあゝあゝツ!!! 分わったよ!! 止めりやあいんだろが!! 止めりやあよオ!!」

言葉ではそう言ったもののそそくさと大股で端に向かうと光枝はドンツ!! ドンツ!! と、抑えられぬ怒りを壁にぶちまける。

それこそ一糸不乱に足蹴りを続け、オレンジと黒の髪が踊り続けた。

「良いのかよそんな簡単に引き下がらせて。まだ続けても良かったんだぜ?」

「あ奴は血が上りやすいでう。あのまま続けていたらお主、誤って生殺しにおったじやろうて。それに、短気は損気と言うじやろう? 力量を見るのであればあれ位で丁度よかろう」

「あーまあ、それはあるかもしれんな」

塗装が剥がれ、原形を留めることがなくなった壁それを狂犬はまだ追い打ちをかける。

止める術が見当たらない為、放置するしかなく今に至っては脹脛がスッポリ覆うほど深く蹴り込んでもお彼女は青筋を浮き立たせる。

「——人のオツ! 楽しみをツ! 奪ってえツ! んじやアツ!!  
ネエツ!!」

……コレ、東西南北さんの給金から引き落とされる流れではなくて?

「さてと」

フラグを再生産したことに気付かぬまま中子は仕切り直す。

「次は儂の番じゃな」

「おうよ。じゃあ、始めようや」

「いつでも」

床についていた鑑いしじりが宙に上がりややイチイの方へ傾く。

垂直に近いかたちで持ち上げられた杖それを細い手で引き寄せると、直後。白い霧がイチイの身体を包む。

グリップは握られたまま、けれど刀身は姿を見せずその時を待つ。

……。  
……。  
……。

空気が静止する。

静まり返る講堂で誰一人として声を発するのをやめていたのだからそれはそうだろう。

壁への八つ当たりで没入していた光枝でさえ対峙する鬪気を察してからは足をとめ、静観する。

蚊帳の外で固唾をのむ刀使達をよそに刻一刻と流れる最中、二人の刀使は時を止め、構えを保ったまま。

一人は切先を床に向け、かたや一人は切先は見せず。

写シの有り無し係わらず秒針が動く度に二人の鬪気はじりじりと増す。

動かねえな……まあ盲目ならむやみやたらと動くよりも待ち、後の先を取る方が理にかなっているからな。それも仕方ないか。なら、コチラから攻めて様子見するか。

牽制の意味を込めて、先ずは中子が動く。

おかたな長巻は端の隅に置かれていた為、迅移による高速移動は不可能であるがゆえに必然的に身体能力で前進する。

防ぐか？ それとも回避するか？

イチイが選択したのは後者だった。

右上からくる片手からの袈裟蹴りをいとも容易く回避してみせるとイチイは中子の懐に侵入する。

気配を消したつもりだったが、中々どうして。上手くコチラに入り

込みやがったな。なら、

次は――

即座に右手から左手に柄を持ち替え流れるように片手一文字斬りを試みる。

しかし、これもイチイは防ぐことなく後方へ下がり木刀の横一閃を躲す。

まだ御刀を抜かない？ どういう――

着地を済ますと間髪をいれずイチイは迅移を発動――再度中子の眼前に迫る。

口角が上がり納刀された御刀から鯉口が切られ、そこで漸く中子は佐等 イチイの剣術がなんであるかを理解する。

コイツ抜刀術の使い手か!?

気付いたときには時すでに遅し。

右足の踏み込みと同時にイチイの鞘引きは完了し『呉竹鞘御杖刀』くれたけさやじょうとうの白刃がその姿をあらわす。

「ありゃ?」

逆手居合で剣速も早い、なあっ!! かなりの練度だなコイツはよ。

「ぬおっと」

イチイの居合をすんでのところ躲しきると反射とも呼べる左逆袈裟蹴りが空を斬る。

互いの間合いの外で納刀するイチイの姿を中子は両の目でとらえ続けていた。

先程の裏隠居といいよくもまあこのレベルの奴がいるとは。それ

に視覚が封じられている分、気配を読むのに長けているのか。コツチの斬撃を一切受ける事をしねえとは。

フー、と短く息を吐き出すと自分でも気付かぬまま口角が上がる。「何か可笑しい事でもあったのかえ？」

「ああ、いや、可笑しいとかそんなんじゃないよ。嬉しいとは違うな。」

そうだな、なんつうーかまあ……少しだけ面白くなってきたな」「ホホッ！ そうかそうか、面白いか。武芸者おぬしにそう感じてもらえるとは儂の人生捨てたもんじゃないの」

緩まる二人の表情とは裏腹に彼女のボルテージは更に増す。

面白くなってきた。

口に出さなくてもよかったのだが言葉にすることで感覚を研ぎ澄まし二人の闘気は熱をもたらし周囲に伝染する。

「……」

その熱にあてられた刀使がぎゅつ、と十指に力を籠め羨望の眼差しを向ける。

何故自分にはないのだろう。

何故自分にはあそこに行けないのだろう、と。

持たざるモノが消化できない感情で両者をとらえる。

「……現。親……に出」

突として流れた声に中央とイチイは互いの存在を外へ追いやり天井そこに意識を向ける。

構えた刃からは闘志の熱は失われ、その場でただ待つのみ。

コイツには構ってられない。

そう言わんばかりに天井を見つめ身構えるが、かと言って強張りはない。

ピクリとも動かない二人に親衛隊の三人は訝しんだが時同じくして二人と同じ所作に至り天井を見上げていた光枝は険しい顔で小言をこぼす。

「ぜってー面倒くせえことだな」

光枝の予断した通りに若い少女の声が厄介ごとを招く。  
恐らくは伍箇伝から折神家付になった刀使だろう。  
スピーカーからの響動<sup>とよ</sup>めいた声はところどころで言葉をつまらせ  
る。

「――、並びに郊外に大多数、の荒魂出現。繰り返すツ、周辺に大多数  
の荒魂、出現。」

親衛隊は直ちに――」

ああ……今日は厄日だな。

「繰り返す、大多数の荒魂出現」

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第11話 正道から外れた道―荒魂変異体

## 11. 正道から外れた道——荒魂変異体

「——ギンシャアアアアッ!!」

どこからともなく断末魔の叫びがあがると同時に少女が放つ一太刀が土瀝青を木つ端微塵に砕け散らす。

砕く衝撃音は断末魔と同じボリウムかそれ以上に響き渡った。

こんな真つ昼間の住宅街から騒音とも呼べるレベルの叫び声をあげるモノなど野良の犬や猫、まして人にできるはずもなく、そうなる  
と必然的に声の主は荒魂に限定される。

必定——荒魂がいて、そして荒魂が祓われる。

『彼ら』の悲痛にも似た悲鳴はただ虚空へと木霊していった。

群れを成して行動していた最後の一体が起こした抵抗も空しくその存在は有から無へ。『ノロ』をまき散らし最終的には飛散する。

『彼ら』を祓ったのは当然とある一人の刀使。

「——では、ノロの回収お願いします……ん？」

何時ものつまらない事務的な連絡を済ましスマホをスカートに忍ばせようとしたところでスマホが震えだす。

見知った相手からの連絡ゆえにコレとって警戒する必要もなく画面をタップすると、少女は「はい」と短く返事をする。

「ああ、スマイレー？ もうすぐ神奈川の市街地ら辺にデツカい荒魂が出現するんだけどさー餌それにつられて得物も掛かるみたいだから興味あるなら行って見たらー？」

「了解です」

短く、ただそれだけ言うともまた画面をタップする。

お陰でタイミング悪く通話主からの「私は別の場所で遊ぶからー」と、無邪気さを拭えない少女の声が遠ざかってしまう。

しかし今度のは間に合ったのか、タイミング良く間髪入れずに一通のメールが少女のスマホに届く。

メッセージに目を通し、尚且つ親指をスライドさせながら片手間で御刀を宙に上げる。

「……次は……神奈川、か……」

「ソフフ……」と、無造作に置かれた巨刀と同じサイズの鞘を拾い上げると、ソレに御刀を納めて刀使は駆けだす。

人目も憚はばからず無我夢中で。

今日も今日とて、少女は征く。

写シを纏い、紫の髪とマフラーをなびかせながら。

ただ、我欲を満たすために。

—— 折神家講堂 ——

「この放送、今郊外言ったか」

余程緊急性のある事態なのだろう。焦燥感に駆られた、ところどころ詰まる発声音を聴取した中央なかおの声は宙を舞う。

誰を指名する訳でもない中央の聞き返す問いに真希は未だスピーカーがある天井を凝視し続ける中央、改め中性へ答える。

「確かにそう言ったね。付け加えるなら市内とも言ったよ。」

荒魂が出現した以上、ここでぼさつとしていないでボクらも現場に駆けつけなければならぬよ」

「そうだな」

短く返すと漸く真希達の方へ顔を下ろし、クルツ、と反転させた身体につられて黒の三つ編みが踊る。

「……どうやら荒魂は三か所に分散しているみたいですね」

既にスペクトラムファインダーを起動させていた夜見は荒魂の場所を把握するとまだスマホを取り出していない中央に画面を呈ていする。

「ですわね」と夜見の言葉に同調するように寿々花は頷き「どうされますの？」と続けた。

「お……わたし達は刀使だ、親衛隊といえどもそれは変わらない。やる事は決まっているんだ此処にいる全員で事にあたるぞ」

「なら儂らはお主の指揮下で動けばよいな」

既に納刀を済ませたイチイが歳月人を待たずと言わんばかりに即

席部隊に加わる事を提案してきた。

老人染みた少女のその片手にはリード紐よろしくジャージ袖を引つ張られる光枝の姿も当然のようについてくる。

「行くんだったらサツサとしろよ、クソが」

アタシはコイツのオマケじゃねえんだぞ、なんて言いたげな見るからに不機嫌さのふの字も隠さない陰気なしかめ面でこの部隊長たる中子を睨む。

「じゃあ、お前等二人も戦力として数えさせて貰うわ」

「どこから対処するつもりなんだい？」

「歩きながら指示を出すがりあえず三か所同時に対処する」

真希の問掛けに脊髄反射するように答え、クイツ、クイツと、手招きするように数回人差し指を屈指させて付いて来いと言わんばかりに刀使の少女達をけん引する。

構内の通路を早歩きで進むと中央につられるように真希やイチイ達もそれにならう。

「対処するにあたり二人一組でことにあたるぞ」

「それで、その組み合わせはどうするつもりじゃ？」

背中からかかる老人語に答えるべく中央は口を開く。

「佐等と裏隠居は一番近くの市街地。わたしと臯月は一番遠い郊外で獅童と此花は残りを担当する」

「ああ？ 市街地だア……って、オイ待てよ。何でアタシがこのクソチビと一々組まなならねえんだ！ 一人で祓やらせろう！ ダメならせめて獅童か此花のどつちかと組ませろや！」

毎度毎度声デケエなコイツ。

徐々に徐々にと拡大された音量が鼓膜へムダなダメージを蓄積していく。

「まあとりあえずスペクトラムファインダー見てみる」

「ああ？」と、今になってスペクトラムファインダーを立ち上げた光枝のその顔は発声に比例して更に不機嫌さを増した。

携帯端末からの表示は場所もバラバラで、その点滅する団々たる三つの円は大きさもそれぞれが異なる。

真希と寿々花の担当する場所の円は大きく、中央と夜見が向かう先はその次に大きい。

なら光枝とイチイが対応する場所はというと。

「ちツ……群れが相手かよ」

光枝達の担当場所は画面上、円の大きさは一番と言っていい程大きい。

だがその形は疎<sup>まば</sup>らで幾つもの点が重なったものであった。

正確な数は把握できないがこの円の出現は小型の荒魂が群れを形成していることに他ならない。

「因みに聞くが、オメエらがデケエのやってアタシらが小せえのを祓<sup>ヤル</sup>う理由はなんなんだよ」

「荒魂祓<sup>ヤル</sup>うのにそんな実力差ねえだろう」と険しいままの表情で最後に付け足す。

「消去法だ」

「……………は？ 消去、法？」

短い返しに光枝も短く途切れながらもオウム返しのように呟く。

「獅童達の実力は大体把握してるからな。だからデカイ反応は獅童と此花に任せれる。一番遠くのヤツは個人的にチョット気になることがあつてな」

「それにな」と中央は間を開けることもなく続ける。

「立ち会ってみて分かったんだがお前等、獅童達よりも迅く討伐できるんじゃないか？」

「なあ？」と顔ごと真希の方へ向けるとピクリツと、中央の首筋から僅かに空気が張り詰めるのが漂う。

「ああ、確かにそうだね。実際、彼女達の荒魂討伐はボくらよりも迅いよ」

答えるべき問いに真希が割って入り代わりに答えた。

その声から発せられる言葉は彼女達の今までの積み重ねを肯定する。

「数が多いなら最短時間で効率よく祓う。被害を最小限に抑えるためなんだ、当然のことだろう？」

然もありませんと言わんばかりに女装した刀使はあつけらかなと言う。

言っていることは刀使として正しい。

正しいのだがそれでも心が納得しない。

こうしている間にも秒針は否応なしに休むことなく進む。

すると煮えたぎる光枝を見兼ねたイチイが握っていた杖もとい鞘を軽く振り下ろした。

「アッ、ダッ！」

「グダグダ言っておらぬときさっさと移動するぞ」

「何度も何度も……何しやがる……」

「数や個体の大きさ、そして強さ。儂らが刀使である限り荒魂とは何れ出会う。それも否応なしにな。森羅万象出会は一期一会、人だろうと荒魂だろうと、そして御刀だろうとそれは変わらんよ。ただ今回はそういった縁がなかっただけのことじゃ、わかるな？」

光枝が言葉を発しようとして口を開いたところでイチイの神速ともいえる迅さで光枝は胸倉をつかまれ引き寄せられる。

「わかるな？」

追い詰めるように四文字の言の葉を口に出す。

しかし反応がない以上、言葉が理解できていないかもしれないと今度は側頭部をガツチリと鷲掴み、鼻先が触れるか触れないかまで顔を引き寄せ、そこでハッキリ聞こえるようしつかりと発音する。

「わ、か、る、な？」

「わ、わかった……」

プラチナブロードの髪を身に纏う少女はその身に不釣り合いな無表情さを持ち合わせて圧力をかけだす。

無表情にもかかわらずその凄まじさに宛ら彼女さなの背景からゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴ……と、オノマトペが羅列されるのが容易に見えてしまう。

血統書付きの狂犬も飼いなされた忠犬とまではいかないがこの数瞬で躰けを施される。

飼い主に屈する様を目撃していた各々が異口同音に折れたなど心でひっそりと呟く。

「もう寸劇はいいのか？」

「いや、寸劇じゃねえよ」

「遅らせてしまいですまんのう」

ハハツ、と穏やかな表情を見せるがイチイの声は先ほどと変わらぬ怒気を孕んでいる。

桑原桑原。

触らぬ神に祟りなし。

YESロリータ、NOタッチ。

神ではないがロリの皮を被った鬼をこれ以上怒らせないよう背筋を立て身を引き締める五人の刀使達。

—— 郊外荒魂出現地 ——

甲高いブレーキ音がけたたましく鳴り響き機械音が止まってから数秒ほど経った後。

その発生源から二つの帯状の線が路面を黒く焦がしていた。

折神家が所有する光沢のある黒色のミニバンが急停車した跡がその正体。

車内は既にもぬけの殻だがドライバー達は割とすぐ近くにいた。

「……近くに反応あります」

「だが視認できねえ」

短い白髪の刀使と長い黒髪の刀使が左右交互に足を動かす。

そこから変わらぬ歩調で二人の後頭部が微かに下がる。

「なら上空か？」

「……いませんね。使いますか？」

指示を待つまでもなくスペクトラムファインダーを握った方の袖を捲り柔肌を晒す。

色白の肌からは想像もつかぬ見ていたたまれない痛々しい切り傷が共に露出するが夜見自身の性格の所為か目など気にも留めることなどはしない。

「いや、今はいい。まだチラホラ人がいる」

「……見える範囲にはいませんが」

「今はわからなくてもその内わかるようになる」

答えになっていませんが……。

つい言いそうになった言葉を喉元で留め、何事もなかったかのように捲った袖を伸ばし次の言葉を紡ぐ。

「そういうものですか」

「ああ、そういうもんだ。何事も経験だ経験。」

俺がどうやって周囲を把握しているのか自分なりに考えてみたりその場の空気を感じるだけでもいい。何だったら見よう見まねで真似したりと、とにかく行動して実践を繰り返せばいい。

ヤルかヤラナイか、それだけでも違いがでてくるハズだ」

軽い口調と声で言ってみせるが近寄り難い雰囲気醸しだす中央に夜見は薄っすらと脂汗を滲ませた。

全身の肌がひり付く感覚が突き刺ささり喉を鳴らす。

「逃げ遅れた人がいるのであればこの前のように避難誘導を行う必要がありませんか？」

「その辺のことは警察に任せればいいさ。俺等には俺等のヤルべきことがある。刀使の本分を見失っちゃいけないよ。」

まあ言っちゃ悪いが人間なんていつか死ぬ。天災だろうが人災だろうがそれは変わらねえ、そいつに運が無かっただけのことだ気に留めるな」

「……随分と達観していますね」

「……」

彼が無声を貫いてから十数秒ほど経つ。

矢庭に一言も喋らなくなった中央に夜見の心の奥底に一抹の不安

がじわじわと押し寄せてくる。

中央なら何かしらのアクションを投げ返すハズなのだが依然として周囲の森閑しんかんさに同調したかのように中央は沈黙を続ける。

「……東西南北さん？」

「……」

護衛の時では彼は指示を出し、素早く行動を起こしたが今日に限っては違う。静かすぎる。

今回は荒魂の討伐だからだろうか。

だからといって別段任務に支障はない。荒魂と遭遇すれば中央かれのサポートに徹するだけだ。

「今からする荒魂の討伐、俺は手を出さないからな」

……。

……。

……!!?

彼は何を言ったのだろうか。

行動を共にしてからの日が浅いがこの非常時に冗談でふざけたことを言ったりする様な人ではないハズだが。

「……東西南北さん」

「何だ？」

「それは何の冗談ですか？ 笑えませんよ」

「別に、冗談なんか言ったりはしてねえよ」

「……私の実力は把握しているのですよね」

「ああ、獅童達に会う前に渡された資料と前日までの立ち合いでな。モチロン、お前が無数の荒魂を使役できるってのも含めてな」

「なら尚更私一人で、というのは些か無謀ではないですか？ 獅童さんや此花さんに比べ私では——」

「どうしてだ？」

言いかけていた言葉が遮られ、そこで私は言葉に詰まってしまふ。そこから先程と変わらない口調と歩幅で彼は淡々と続けた。

「初めから強いヤツなんていないだろ。 御当主や俺だって生まれたときから強かった訳じゃないんだ。

鍛錬のときから試行錯誤して今に至る。何でもかんでも使えるモノは使い、己の糧にすればいいんだよ」

「そういうモノ、ですか……」

「そういうモンだ。何だったら毎日俺の寝込みを襲い寝首を搔くぐらにしてもいいぜ。そうすれば日常から気配や殺気の消し方とかイロイロ身に着くしだろうしな」

「物騒な話ですね……」

数秒程積雲を眺めてから反芻し、私は決意する。

ひっそりと仰ぎ終えてから再び彼を視界に収め口を開く。

「……では、前向きに検討させていただきます」

言い終えたのを見計らったかのようなタイミングで彼の左手背しゅはいが目に映り、そこでピタリと止まる。

「それじゃあ、そのポジティブさが続いているうちにアレを祓うか」

「——！」

祓うか——その言葉で直ぐに身体がこわばった。

指の隙間からその輪郭を認識するまでもなく、その巨体の存在感に自然と後ずさる。

アレが中型？ 大型の間違いではないのか。

こちらの見解などお構いなしに短く息を切らし、ギラリと血走る眼でコチラを睨み付ける二足歩行の荒魂。

手は無いがいくつかに分かれた尻尾を持つその形姿には見覚えがあった。

狐型と呼称される中型の荒魂——のハズなのだが夜見の目が確かであればそれは今までに確認されたサイズを一回り……いや、二回り

三回りも大きくその場で実在しているのだ。

それに違うのは大きさだけじゃない。

荒魂特有のオレンジと黒の配色以外に所々痣や血管のようなスジが金色に煌めいている。

「……」

荒魂に対しての恐怖心は無い。

あの方の為。総てはそこに集約され行きつく。

だからこそノロも受け入れることは容易く、そこに苦などなく寧ろ喜ばしかった。

けど、それは今までだけであつて、今日この場この瞬間においては違う。

否定したいが否定しようにも右手が動かない。それどころか指一つすらいう事をきかない。

何かが違う……。——では何が違う？

どこが違う？ ——サイズの問題ではない。

「——月」

なら何が違う？ ——これは本当に荒魂なのか？

「——い——月——見」

このままじゃ……。何も——

「夜見ッ!!」

ハッ、と忘却の彼方から意識を連れ戻し感覚を取り戻す。

「……………東西南北、さん……………」

「任務中に何やってるんだお前は」

目の前で御刀である長巻を晒してた彼がひとつ息を吐き出した。

鈍く輝くそれとは別に地面へ二つ三つと焼痕が見受けられる。

焦げ、跡……？ 攻撃されていたのですか……？

「荒魂見るなりボーっとして、考え事でもしてたのかよ」

「あ……いえ……あれは、キツネ型……なのですよ」

「狐だな。あの形はどこからどう見ても」

「……荒魂、ですよ」

「荒魂だな。あの特有の身体の配色は。ついでにそのデカさも」

再び夜見は貝殻のように口を閉ざしだす。

個体ごとで多少の誤差はあるが狐型は中型。

だが目の前の荒魂のサイズは中型というカテゴリーをとうに超えており大型の枠に収まるほど。

「ひよっとして、一人で討伐しろってんで緊張でもしてんのか？」

「……いえ、そういう訳では……」

「じゃあ何だよ。声かけてなかったらあの火の塊が直撃してたぞ」

言葉に詰まる。

強者たる彼に言っても理解してくれるのだろうか。冷やかな目で笑い飛ばされる光景が頭の片隅によぎる。

紫様の昔からの顔見知りとはいえ元々彼は部外者なのだから。

信頼するにはまだ不安が残る。

言うか言うまいかを考えあぐねている間にも中央は尻尾から放たれた狐火を弾いていた。

しきりに増える黒い痕とともに臭気が鼻につきうとましくなる。

「……東西南北さん、少しいいですか」

「ん？ 漸くヤル気にでもなったか？」

「はい……ですがその前に話しておきたくて。東西南北さんは荒魂についてはどこまで知っているのですか」

「何でこのタイミングでんな事聞くよ。質問の意図が見えねえんだが」

夜見の今までの人となりや声色からもふざけている訳ではないと

伺える。

だからここは素直に答える為、中央は至って真摯に返答をした。

「まあ、本職のお前等の知識には劣るがそれでも相模湾のことや今までどんなタイプのヤツ等がでてきたかぐらいまでなら記憶してる」

「でしたらキツネ型についてもご存じですよね」

「ああ、今日の前にいるヤツがそれなりに異常だったのも理解しているつもりだ。

まあ、なんであそこまでデカくなってるのかは大体の原因は検討がついてる。そこに至った過程はわからんがな」

検討がついてる……？

「あ、あ、ちなみに御当主に訊いても無駄だぞ。御当主も口止めされてるからな」

紫様が、口止めされている……？

一体いつから。

誰に。

どうして。

なんの為に。

この人は何を知っている。

溢れ出る疑問をこのままにしてはいけない。きっと手遅れになる。

手遅れ……？

どうしてそう考えるのか。思考があらぬ方向へと向かいそうになった時、ダレかの声がハッキリと聞こえた。

——大丈夫ですよ。今は彼を信じて下さい。

」  
息を呑み、目を見開く。

鏡などどこにも無いはずなのに瓜二つの自分がそこにいる。  
ノロを投与し過ぎた所為なのか。

東西南北さんは気付いていない？ では目の前の彼女<sup>わたし</sup>は一体。

見たことのない白い制服を着ているがあれは間違いなく親衛隊の制服。

その彼女がさらにこちらに語りかけるのを止めず――

アナタがここにいる事、全部意味がありました。

静かに――

だから、今は――

言の葉を紡ぎ。

――アナタがやれる事をやりなさい。

それだけ言うのとツペルゲンガーは消えていく。

それは警告というにはそぐわず穏やかで。そう、ただ穏やかに語りかけていた。

幻聴……それに幻覚ですか。でも……。

反芻する。

――アナタがやれる事をやりなさい。

……そう、ですネ。

意外なことに不思議とすんなりと受け入れられている自分に驚かされた。

目の前の背中を瞳に映す。

恐らく彼から指南を受ければ獅童さんや此花さんと同じ場所に立てる。

根拠はないし倫理的な裏付けなどない。

でも、それでも。

彼女に必要とされるのであればこそ。

瞳を閉じると一拍おいて、開く。

目には力強さを宿し、僅かに身体を脱力させると漆黒の鞘から御刀を抜き写シを張る。

と、同時に夜見の身体から白いオーラの他に僅かながら陽炎が揺らめいた。

「どうやら決意は固まったようだな」

「いえ、決意は固まっています。ただ、決心はつきました」

「じゃあ見えてみな、お前の決心それを」

「……はい」

「行ってきな」

「……行きますー！」

左腕の裾を再び捲ると色白の柔肌に水神切兼光を当て、引く。

一切の躊躇なしに行う自傷行為。

切り開いた傷口から血は流れず代わりに噴出したは無数に発光するオレンジとブラック。

それによって生み出された蝶——小型の荒魂——が宙を舞い一斉にキツネ型へと迫る。

無数の蝶が進軍し夜見もまたそれに次いで迅移で駆け出す。

「行きなさい」と号令がかかると指令を受けた蝶型の荒魂達が標的目掛け突撃に繰り出した。

「——はッ！」

キツネ型へと群がる蝶型の中に紛れ夜見は側面に回り込み一太刀たる唐竹を浴びせる。

だが空しいかな、放つ一閃は空を斬るだけでキツネ型は健在なまま。

「くッ——」

回避されたのならこのまま左切り上げに切り替えるため、握り手を持ち替える。

だが相手は荒魂。人ではない。

獣の防衛本能が夜見の動作を上回り頭部から急激な熱を感じとる。

先ほど起きた中央の焼痕が記憶から甦るとすぐさま呼び寄せた荒魂を壁にしてバックステップ染みた迅移を何度となく繰り返す。

尾から繰り出される火球により肉壁だった無数の蝶型は活動を停止した。

距離を置いてでも火球が迫りくる。

次の一手を決め、またしてもキツネ型の側面へと白霧の線が駆ける。

水神切兼光が振り上がったタイミングで夜見の反対側から残った蝶型がキツネ型へと加速し向かう。

——ツツ！

ゴリ押しとも見てとれる荒魂の特攻と夜見の挟み撃ち。

しかし挑んだ蝶型も健闘する間もなく尻尾でいなされ、空中、あるいは地面へと叩きつけられる。

ならばと、挟撃を封じられた次の一手。

昨日中央が繰り出し寿々花が受けた技。

一朝一夕で会得できるモノではないにしろ目にした限り威力は申し分ないはず。

間合いに入るやいなや下段から絞るようにして柄を回転させる。

どこの流派かも分からぬ見様見真似の土公型ドコウノカタその一式 たる荒神アラガミ

で目標を叩き斬る。

が、やはりその場しのぎの技術では結果など火を見るよりも明らか。

刀身が弾かれ天高く水神切兼光の切先は空を見上げた。

自身の技術不足に実戦経験のなさ。

結局、初めからわかりきったことを再認識させられただけだった。最早打つ手がない。

……効かない。何もかもが。

「ここで打ち止めか」

やはり私では届かない。私では――

折れかけた心に諦観さが身体を縛りつけ、纏っていたハズの写シが全身に押し掛かり御刀も酷く重く感じる。

スーッと、肉体と精神が離れ、虚脱感に陥る感覚が自覚できた、その時。

「――ツ！ 東西南北、さん……？」

「今日はここまでだ、皐月。後は俺がヤル」

「……………わかり、ました。後は、お願いします」

「応、任せな」

「さて……と、いい加減楽にしてやるか」

そう言つて中央は数歩ほど歩を進めると間合いを測ることなくキツネ型の懐に入る。

写シを纏つてない以上迅移の使用は当然していない。

純粋な身体能力のみで距離を詰めたのだ。

認知したが最後。

迎撃態勢に動くさ中、長巻の刃文が獣皮に沈み摩擦抵抗を感じることなく棟が血肉を通り過ぎる。

刃筋から遅れて血液に似た液体が噴き出し呻き声とともに霧散す

る。

一振りです、ですか……。東西南北さんにとって人か荒魂かなど然程関係ないようですね。

マズイ状況になった。

ただの荒魂であればどんなに良かっただろうか。

日本に来てわずか数日で問題が山積みになってしまった。

こんなことになるのであればギリギリまで向こうにいるべきだったと後悔の念と焦燥感が募りながら横たわる死骸を見つめる。

ここから先は自分一人では手に負えない。

キャパオーバーなのは目に見えることだから。

だから助力を乞おう。

手持ち無沙汰な手を腰に置き、ほんの小さく氣息をととのえ、心配がする背後に首を向け。

「……もう出てきていいぞ——」

ある男の名を呼ぶ。

「——『ノア』」

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第12話 その来訪者は相識ではあるが

## 12. その来訪者は相識ではあるが

名を呼ばれ、その男は物陰から顔を覗かせスーツ姿を晒す。

中央との距離が近づいてくにつれ黄金色の短髪が燦爛と光放つ。

「アレからおおよそ二年の月日が経ちますがなににせよ、どうやら衰えていないのは流石と言うべきか。ひとまず安心しましたよ」

異邦人の口から出る流暢な日本語は懐かしくもあるが同時に胡散臭く、言葉一つ一つに含みを感じられずにはいられない。

中央にとつては余り関わり合いになりたくない人物。

それが、この『ノア』という武芸者。

「よく言うぜ。そんな事微塵も思っただけでねえクセによ……それで、何の用で来たんだよ。普段から人目を避けてえお前がわざわざ会いに来るなんざ何か理由があるんだろ？」

「フム……しかししかし、まあまあ。まさか女装に目覚めるとは。人間、どう変わるか分かりませぬね」

「いや、聞けよ。つうか俺はな、伊達や酔狂で女装してる訳じゃねえし、ちゃんとした理由があるんだが？」

膝から順に指先で黒髪までを宙でなぞり、大げさに三つ編みを払う。

渡りに船となるハズと思ったていたのだが再会したこの男からの助力は乞えそうになく、寧ろ茶化そうとしてくる始末ときたものだ。

「フム、情緒がないとはこう言う事ですか。残念ですね、いや実に残念だ。キミはもつと会話を楽しもうという気概はないのですか？」

「ねえよ。今のやり取りでどう楽しめってんだよ」

「即答ですか、そうですね。悲しくなりますね、涙がちよちよぎれて血涙が止まりませんよ。その弾みで血尿も止まりませぬね」

「オイ、ふざけるだけなら帰れよ」

「オツと、ついでに切れ痔にもなりましたか」

相変わらずコイツは……。

人をおちよくるのが上手いというか、神経を逆撫でるのに秀でているというか。

もうどうしようもないと嘆息しながら呆れ気味に落胆して肩を落とす。

「仕方ない。まあ、ワタシもまだ職務中でもありますし本題に入りませんがああ、些細なことです。

とは言ってもまあ、ワタシにとっては些細なこと。しかし君にとっては重要な事になるのでしようね」

「お前が直接来てまで話さなきゃならねえ程の事なのか？」

「ええ。『ハジメ』が刀使<sup>トシ</sup>について色々嗅ぎ回っているみたいですよ」

「はじめ」が？　なんでアイツが——ああ、いや、そういう事なら説明が見つるか」

一瞬——考え込むように左手が顔に触れそうになるがある言葉が浮かび上がりピタリ、と硬直する。

武芸者、それも『アイツ等』であるならばそれは考えるまでもないだろう。

しかし今そんな事をしている場合か？

確信が持てずにいるのを見計らったのか丸刈<sup>クルーカット</sup>りの壮年は口を開く。

「理解が速くて助かりますよ。まあ、いずれにせよ彼<sup>カレ</sup>の方から接触してくるでしょうし」

「ところで」と、ノアの視線が中央から外れ、奥で佇む少女に興味に向かう。

「そちらのお嬢さんとはそれなりに親しい仲なのですか？」などといかにも他事にも関心があると体裁を取り繕ってくる。

「あ？　臯月の事か？」

「ええ。件のこともありますし親しいのであれば一応忠告したほうがよろしいと思ひましてね。自己紹介もしたいですし」

「お前、巻き込むつもりでいるのか？」

「巻き込む？　そんなそんな。滅相もない。しかししかし、巻き込む、と言うのであればそちらの臯<sup>サツキ</sup>月さん、もう巻き込まれているのでは

？」

「……なんだと？」

「もう既に武芸者ワレワレと関わりを持ってしまっている。先の戦闘からそれは変えようのない事実でしょう？」

「先の戦闘……お前、この前の襲撃者共とやり合ってたのを見てたのか？」

「ええ、ええ。それはもうこの目でバッチリと」

人差し指で眼鏡のブリッジが押し上げられるとつられて口角も上がる。

何度も目に行っているのに息を吸うようなそのにやけ面が実に腹立たしい。

「見てたなら手伝えよ」

「それはワタシのあずかり知らない事でありワタシの仕事ではありませんよ。何なら見知らぬ少女達を助ける義務もありませんしね」

「知り合いが大変な目にあってるんだからそこは昔のよしみでどうかこうにかするとか——」

「ないですね」

容赦のない即答。

突き放すだけでは飽き足らずさらにさらにと言葉の圧が中央に迫りくる。

「そもそも、折神氏オリガミがしようもない雑魚ザコに狙われたその時点でもう手遅れなんですよ。我々が手助けする必要はない。程度が知れた連中に殺されるなら折神氏オリガミもその程度、それまでのこと。例えばそれが『彼女達』からの言い付けでもね」

「上の命に背くか。自由気まま、気の向くままにフラフラするテメエらしいといえればテメエらしいが」

「どちらかといえれば違命しているのはキミの方ですがね。ワタシは『彼女』達カンジョから許可を貰って自由に行動しているワケでして、一時的とはいえキミのように自暴自棄になって勝手に放浪しているワケではない。

折神氏は18年前に『彼』カレ、そして『彼女』カンジョから指南を受けているの

ですから我々が動かなくても自身でそれ相応の対処はできる。例えその身体が乗っ取られていようとも未だに彼女は禍神を抑えられる女豪だ。如何様にもできるでしょう」

ペテン師が嘘を吐くように矢継ぎ早にと弁舌は続く。

「ああ……それから折神氏、いえ紫嬢ユカリのことは別として親衛隊である少女達。本当に戦力になるとお思いですか？」

「んなもん実際にやって見なきゃわかんねえだろ」

「ハジメクラスの武芸者では瞬殺されるのは目に見えている。分かりきった結末であるならば我々は雑魚それらにかまけている時間も必要もない」

「チンピラや武芸者モドキどもが御当主狙ってくるんだ周りも最低限度の自衛する力は身に着けるべきだろ」

突として夜見達へ矛先が向かうがなんとか食い下がろうとはしてみる。

だが依然として異邦人の弁舌が覆ることはなく。

「では別の聞き方をしましょうか。刀使トヅだから助けるのですか？ 武芸者……特に金銭に困り果てた輩なら今この瞬間クソにも劣る行為をしている。標的となったモノであれば一般人だろうと刀使だろうとそこに優劣はない。キミも散々嫌となるほど見てきたでしょう？ まだその手に、耳に、目に、脳に、その鮮明さが記憶に残っているというのに」

「——ッ！」

本当ッ……コイツは。

「返す言葉ありませんか？ 素行が悪くても情が移るのはキミの悪い性格ですよ。ああ、いや。情よりも色欲の方が勝りましたか？」

「——チッ！ ああ、もう……ぐうの音も出ねえよ」

「未だ過去の愚行を引きずり良心の呵責に苛まれるのならいつそのこと『ミヤコ』に預けてみればいいじゃないですか。どれ程の期間預けどれだけ成長するかはわかりませんが十代の少年少女なんてみな成

長期ですし、並みの武芸者ぐらいにはなれるんじゃないですか？  
その方が効率的ですよ？ キミも紫嬢の護衛をしなければなら  
ないんだ。預けるにしろ預けないにしろこのままでは何れ、彼女の二の舞  
ですよ」

トンツ、と心臓むねに人差し指で突かれる。

「巻き込んだのは間違いなくキミ達なのだから」

「――」

「まあ、よく知りもしない少女達の事ですからどうなろうと対岸の火  
事。ワタシには関係のない事。これっぽちの興味もありませんし」

摘まむように指を形作っては解きヒラヒラと手を振る。

「これ以上時間を浪費しても互いになんの益もありませんしお開きと  
しましょう。必要な情報は伝えましたし、また何か動きがありました  
ら伝えますよ」

「……ああ、そうしてくれ」

踵を返して手にした布を御刀ごとうに巻きつける。

気分の晴れぬままノアに背を見せ夜見のもとへと近づく。

来たときよりも歩幅が速く、顔付きが普段よりも幾分か険しい。

きつと話が済んだのだろう、そう思い至り晒してた水神すいじん切兼光きねみつを漆  
黒の鞆たもとに納め警戒を解く。

「戻るぞ、臯月」

「……わかりました」

……何故怒っているのでしょうか？

眉間に皺を寄せて通り過ぎる中央から遅れて彼の歩調に合わせ踏  
み出す。

数歩分の距離をとりながら尾すり早数分。

黙りこくっていた中央と夜見だったのだがその時間もそう長くは  
保たなかった。

「……………アッ、アッ、アッ、ツッ!!!」

「!？」

何事か。急に低く濁った大声を出す所為でビクツと身体が硬直する夜見。

そしてそんなことなどお構いなしにと急反転し出す中央。

急激な動作で暴れる三つ編みを寸前のところで躲した直後、白髪の頭上に疑問符が浮かぶ。

アイツのペースに乗せられて問題が何ひとつ解決してねえじゃねえか。

慌てて歩いてきた道を振り返る。

すぐさま駆け出し戻るも目にした骸の傍には誰の姿もなく周りを見渡しても気配らしい気配はおらず。

しかももういねえしよ。神出鬼没か何かか。

そよ風がさあーつと吹き渡る。

先ほどの荒々しい気分も諦めが勝ると一気に消沈し、スマホの電話帳から待機中の回収班に繋ぐ。

黄色の瞳で二人の背を見送り終わると踵を返し、しまい込んでいたスマホの電源を入れる。

死骸とはいえ荒魂がいるような場所でSNSなど見たり、写真を撮る意味などはない。

ならば通話をするか、メッセージを送るかこの二択しかないだろう。

「でえ、どうだった？ 今の中央は<sup>アイツ</sup>」

通話口から聞こえてくる相手方の男が開口一番に訊いたのは東西南北 中央の状態。

その声色からは心配しているといった様子はなく、軽薄そうな声なの

だから寧ろニヤニヤとした面持ちが窺えるし、その口ぶりから一度や二度顔を合わせているわけではない。

「ええ、少なくとも牙は折れてはいないかと。ええ、ええ。後はご自身の目で見、実際に刃を交えてみて判断すればよろしいかと」

「でもよ、そうは言うが今のアイツとやりあってもビミョーじゃねえか？ アイツ、今は長巻なんて使ってたんだろ？」

「ワタシもこの目で見ましたが長巻でも遜色ないですよ。まあ、全盛期ではないのは確かですが」

「ホントかねえ。今様子見でアイツとやり合っただけに死にましたーじゃ意味なさ過ぎだろうよ。よしんば昔のレベルに戻ってガチ目にやり合っただとしても」

続けて男は発する。

「死ぬだろ。中央」

「今彼と刃を交える事がご不満ですか？ でもそこはアナタの力量次第というモノですよ」

「力量次第……ねえ」

「ならば一度二本で試してみるのも一つの手では？」

「オイオイ、バケモノ共を相手にするんじゃないんだから」

「バケモノですよ。彼も彼の雇用主も。何ならキミも。ならそうだと仮定し手合わせする。慢心しなければ方に一つとてアナタと彼が死ぬことはありませんよ」

「オレも中央も死ぬ事前提かよ」

クハッ、と先ほどと変わらぬ声色で笑うのがノアの外耳道を通り、続く。

「その方に一つが起ころねえ保証はどこよ？」

「保障はできかねますね。ただ少なくとも中央は我々にとって必要な戦力足りえる人材だということを頭の隅にでも置いておいてください」

「まあ、そうさな。仕方ねえか。白黒つけるにはまだ早えがコツチの人数揃える為にも四の五の言つてられねえわな」

男は長嘆息仕切ると軽くジェスチャーをして缶ビールを受け取る。

「オーケー。どうにか見計らってアイツが万全そうなタイミングで仕掛けてみるわ」

「ええ、そうして下さい」

——プシュツ。

ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ、と包み隠さず喉を鳴らし「——  
ぷはあー!!」と盛大な声と共にアルミ缶が潰れる音を上部スピーカーから聞き逃しはしなかった。

「まったく。人が休暇も取らず馬車馬の如く働いているというのにキミという人は」

「いいじゃねえか。人間なんだから、飲みたいときに飲まねえと人生損だぜ? 特にオレ等はな」

「まあ、ワタシは飲むときは自室でと決めていますので暇を見つけ次第そうさせてもらいますよ」

「ああそうしてくれ。何時如何なる時に飲むかはアンタの自由だ」

「ええ、では朗報を期待していますよ」

ボタンをタップし真つ直ぐと見据える。

視線の先に誰の気配もしなくなったのを感じ取ると再びその場所へと地面を蹴る。

「さて……些か遊ばせ過ぎましたかね。ですがそれも終わり。キミには甘さとぬるま湯に浸った生活を捨て去ってもらいますよ、中央。<sup>ナカオ</sup>ワタシ達の生きる場所はココに非ず。しっかりとその命、捧げて貰いましょう」

荒魂とナニカだったモノに革靴のアウトソールとヒールがピタツと密着する。

「総ては、そう総ては人類が勝利する為に」<sup>ワレワレ</sup>

言うが早い片足から大中小と不揃いじみた天河石やグラウンディ<sup>アマゾンナイト</sup>デイエライトといった青緑色のケイ素が形成され瞬く間に死骸を覆いつくし結晶体へと変貌する。

そこから寸秒も経たずに死骸だったノ口だけ残し結晶体は音をたて、雲散霧消して砕け散った。

何軒かの住宅が並ぶ道で真希と寿々花は周囲を見渡す。

「スペクトラムファインダーからの反応はこの付近で間違いない」  
「ですが見当たりませんか」

起動されたスペクトラムファインダーには大きな円状が確かに点滅を繰り返している。

この方向なのは間違いない。

小型ではないのも間違っていないから視認する事もそう難しくはない。

「いるのは間違いないんだ。まずは反応が示す方へ行くとしよう」

「そうですね………ねえ、獅童さん」

一定の歩調で徘徊していると先刻から気になっていた事を訊く為、  
寿々花は真希へと声をかける。

「何だい此花」

「このような時に訊くのもどうかと思いますけどどう見ましたか。裏隠居さんと佐等さんの立ち合いは」

「二人とも途中で中断したんだどうもこうも何もないだろう」

「いえ、茶々が入らず彼女達が十全な状態——つまり本気を出した場合にどうなっていたか、についてですわ」

こびり付いて離れない光枝やイチイの剣裁きに中央の体裁き。

先輩達の斬り合いは今なお寿々花の目に焼き付いてやまない。

「中々難しいことを訊くね。ボクだって彼女達の全てを知っているわけじゃない。ただあのまま裏隠居は一振りで、佐等は遊んでいたら二人は負けていたと思う。そして君の言う本気を出した場合でも恐らく同じだろう」

「獅童さんの目から見て裏隠居さんや佐等さんでもあの立ち合いでは勝ち目が低いと？」

「というよりもないだろう。一振りのときに比べ二振りの御刀を使用

したときの彼女は動きが大きすぎる。東西南北<sup>か</sup>がまだ底を見せていないんだそこは揺るがないハズさ」

「では佐等さんは？」

「彼女の抜刀術はどの刀使達よりも群を抜いているが余裕を見せるきらいがある所為もあつて彼女自身遊びがすぎる。あの立ち合いでも本気を出せるか怪しいな。此花はどうなんだ？」

「佐等さんについては私も概ね同意ですわ。ただ、裏隠居<sup>わたくし</sup>さんは勝てないにしろ一太刀は入れそうではありますわね。まあ、身鼯<sup>むす</sup>目<sup>め</sup>に聞こえるかもしれませんが」

「それは仕方ないことさ。キミが裏隠居を。皐月が佐等を。ボクなら『一刀』の剣を間近で見えてきたのだから鼯<sup>むす</sup>目<sup>め</sup>になるのも無理はないさ」

寿々花に目を向けずそう言い放ち見やる。

「その『一刀』さんは今回の招集もボイコットされましたわね」

「彼女の性格上仕方ないさ。討伐任務のときも、御前試合のときも何かしらの理由をつけてやり過<sup>す</sup>ごしていった。本当なら第一席の座だつてボクじゃなく彼女が……」

「それを言ってしまったては裏隠居さんだつて同じようなモノですわ。いえ、佐等さんも金城さんもみな同類<sup>わたくし</sup>でしょうに。私<sup>わたくし</sup>達が抜けた今の伍箇<sup>ご</sup>伝には問題児だらけ。とやかく言つても詮無<sup>せん</sup>い<sup>い</sup>ことですよ」

「愚痴を言う暇があれば腕を磨け……か」

「あら、お一人でなさるおつもり？ 私<sup>わたくし</sup>もお付き合<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>致しますわよ」

「ありがとう、此花」

寿々花の顔を一瞥し、雲井を見上げる。

「強くなろう」

「ええ。三人で」

いつか、一刀<sup>か</sup>や東西南北<sup>れ</sup>の様に。

そう決意を固めた少女二人は歩みを止めることなく進む。

前へ、前へ。時には後ろへ。

右へ、左へ。時には回り道もすることもあるだろう。  
人生百年。

遠くない未来。いずれ二百年、三百年の時代が訪れるのかもしれない。  
い。

だからこそ、幾度か訪れる試練が彼女らへと訪れる。

「——いました、わね……」

「ああ……けれど、まさかこれ程とは思わなかった」

燃え盛る炎のオレンジに角のような触覚——

「帰ったらスペクトラムファインダーの更新……いえ、機能向上して  
もらうよう進言しますわ」

「ボクも一緒に嘆願するよ」

刃の如く鋭い無数の肢を持つ巨躯——

「生きて帰れたら、だけどね」

「このような場所で死ぬ気は毛頭ございませぬわよ」

—— 所謂ムカデ型と呼ばれる荒魂。

そのハズなのだが。

「報告書に記載されているデータより遥かに大きい、いやそれよりも  
——」

「以前討伐したときに比べて異常にデカイ、ですわね」

「それもそうだがあの荒魂その場に留まって動こうとしない……これは  
周囲を窺っている?」

「荒魂にそこまでの知能があるとは思えません」

記憶を手繰り寄せてはみるものの今までの経験上、怒涛のごとく暴  
れたり野獣さながらの咆哮をするさまはあった。

しかしこの荒魂はその逆で。

たたずまいは嵐の前の静けさそのもの。

「だが無闇に暴れ回ったり叫び散らすことをしていない。現に周囲は  
荒らした跡がない」

「不気味……ですわね。それにあの配色」

「所々に金色を帯びている……?」

なんなんだアレは……？ 本当に荒魂なのか？ いや、荒魂でいいのか……？

目を凝らし訝しんでみるが明確な答えは出ず。

瞳孔が一点にしぼられる。

引き込まれそうな金色に真希は意識が遠退きかけた。

「……は一度東西南北さんと皐月さんに合流して対処方法の見直しを図ってみては？ 私達<sup>わたくし</sup>だけで不用意に事を構え、万が一にでもアレが活動し無差別に暴れ出されてでもしまえば警察や自衛隊はもちろんのこと並みの刀使では対処することなど到底不可能なのは火を見るよりも明らかではなくて？ あの巨体ならさぞ容易いことでしょう」

だがそれも寿々花が隣で喋繰るおかげで我に返る。

「……確かに。だが異常な荒魂があの一団だけとは限らない。もしかしたら皐月や裏隠居達も同じ荒魂に遭遇している可能性だってあるかもしれない」

スマホの画面を見ようとすると何が何故か手が止まり躊躇ってしまう。

今スマホを見てはいけない。スマホに気をつけてはいけない。

自分でも何故そうしてしまうのか分からないがとにかくそうしなければならぬ。

取り返しがつかなくなる前に。

「……取り敢えず監視に徹しよう。なにか動きがあればその場から移動させないよう可能な限り牽制と誘導を試みる。いいね？」

「ええ、構いませんわ。ああも不気味ですと慎重に期するぐらいが丁度いいくらいですわ」

「……………」

固唾を？んで打ち守る。

未だ荒魂から動く気配はなく、真希も寿々花も控えるだけ。

刻々とただ時間が過ぎていく中での我慢比べは続く。

然れど何も起きない。

その場の風景の一部に化した二人と一匹は微動だにしないまま無為の時を過ごす。

この停止していた世界もやがて動きを取り戻す。

動きがあったのは荒魂、まして真希や寿々花ではない。

予想外にも——空から——それは降り注いでくる。

「——ん？」

その変動に気付いたのは真希が最初だった。

突として地面に浮かび上がる陰影は音とともに広がり続け、近づいてくるそれに寿々花も獅童の視線を追うように仰ぎ、目と意識を奪われる。

「——なッ!？」

自由落下から加速した物体は薄白い軌道を残し荒魂へと差し迫る。

同時にムカデ型もそれに感付き上空へと咆哮をあげはするものの、気付くのが遅く、次の数舜で悲鳴と地面にめり込む衝撃音。

そして、最後に降り注いだ鞘が地面から弾き落ちる頃には荒魂は息絶えていた。

土煙があがる中、微かに影法師が立ち上がる。

「ああ、そうか。見知った気配から微妙な違和感があると思ったら………なんだ、獅童に此花だったのか」

「キミは——」

「貴女は——」

見間違えることのない巨軀とそれに見合う御刀と鞘。

長船の制服に季節が移ろうとも欠かさず身に着けるマフラー。

何よりも独特に呼ぶその喋り方と声。

この刀使の風貌から二人の声とその名は重なる。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第13話 獣の情緒

### 13. 獣の情緒

「——金城……!」

「——金城さん……!」

土煙が晴れ、刀使たる巨女——金城 董の輪郭が帯びる。

写シを解いた彼女の視線が捉える先に真希と寿々花の姿は映しておらずただ蒼穹を眺めるばかり。

「カカカ、前回ぶりだから御前試合のとき以来だったかな。けどこうして近くに寄れば分かる……」

ゆっくりと首を傾けると彼女の名前と同じである——やや青みの濃い紫——董色の髪もつられて揺れる。

「ヒヒ、イヒヒイ……来て正解だあ。餌に喰いついてくれたあ」

真希も寿々花も一度だけ見たことがある。あれは合同討伐任務のときだった。彼女が豹変するのを見たのは。

「少しぐらい味見してもいいよね……」

「ま、まて、金城ツ！ ボクらは——」

「いただきまあ——すうツ!!」

地を見ていた切先がいつの間にか天に掲げられ——再び地へと振り下ろされる。

「ツ！」

「——!？」

「……ううん？」

唐竹割りから繰り出された斬撃に肉を斬る感覚がなく地面に衝撃音だけが鳴り響く。

いきなり二人まとめては無粋と思い最初は獅童のみに狙いを定めたのは余計な考えであり要らぬ心配だった。

「此花ツ!？」

ラグビーのタックルを思わせるように組み付かれた後、すぐに真希は抱きかかえられ薄白い僅かな像とともに二人は董との距離をとってはみるものの、董と破邪の御太刀の間合いから逃れるには不十分と判断し、加速して迅移の足跡を作るときさらに距離が遠のく。

「なにをぼさつとなさっていますのッ！ あの状態になったときの金城さんは裏隠居うらいんきよさんの比ではありませんわよ！」

「もしかしたら自制心が働いてくれるのかと期待していたんだけどね……」

「人間、短期間でそう易々と簡単に変わるものでもありませんわよ。性格や考え方なんてそうでしょう？」

「なまじ強者の高みにいる所為か裏隠居や佐等さとう、そしてこの金城といいい自尊心が強すぎてそう切望するのも無意義だったね」

「他の荒魂もこの場にはいませんしああなってしまった以上、彼女が飽きるのを待つ他ありませんわね」

荒げた声はすぐに鳴りを潜め、冷静に。沈着に。慎重に。次はどうするべきかの思慮を巡らせる。短慮などしようものなら死は免れない。なぜなら相手は金城 董。親衛隊入りが確実とされていた長船女学園の代表ともいえるべき刀使。

滅多なことで感情を露わにする少女ではないのだが、なにがトリガーになるのか。時として、

あの裏隠居 光枝みつえをも超える凶暴性を表す現伍箇伝においての最大の斬撃力を誇るうら若き少女。

ついては。

「それだけに回避は困難か。写シを張っていても一撃でも貰えば重症は免れない」

「あの斬撃力、場合によっては即死は免れませんわね」

「もういいかい、二人とも」

待つのは飽きた……。

悠長にことを構えるなどよしとせず、二人の会話にねじ込んでくる董とうすみどりに薄緑はくしよかと九字兼定の切先が彼女に向く。

「できれば待つていただけると有難いですわね。そろそろお花を摘みに行きたいところですし」

「なら後にしてくれる？ もう、治まりそうにないんだ」

一歩進めば、一歩後ずさる。

脱力した一人と力む二人の距離は縮まらず。

「ケケ、二人とも何があつた？ 以前にも増して気配を讀む力付けたよね？ 動きも僅かだけど前と違う、どうして？ 臯月も変わった？ なんなら臯月の方が二人を追い越した？ 今なら荒魂使えるんだよね？ 荒魂使えるならもつと遊べる」

貰えば即死となるこの状況。力の差は数の差では埋まらず。

「喰い甲斐があるなあ。因みに紫様はどう？ 前よりももつと強くなった？ それとも現状維持でもしているのかな？」

だから、喰らいたい。

「だから……」

ああ……喰らいつくシタイ。

「教えてよ……」

舌鼓を打って味の余韻に浸り品評なんて上品さはいらない。

まして焼いたり、茹でたり、炒めたり、揚げたり、煮たり、和えたり、蒸したりしなくていい。ただ原始的に動物的に本能に従い噛みちぎって、咬み千切って、むせるまで掻き込んで。とにかく骨の髄までむしゃぶりつきたい。啜った血を飲み乾したい。

だから——おまエヲクライタイ。

「どつちを喰らっていい？」

「!?!」

瞬きをした瞬間——寿々花の両目には董の全身から豊満な胸部に切り替わっていた。

迅移での移動ならまだ解る。しかし写シを張る兆候も、構えて間合いを測る予備動作もなにもない状態。そこに遠間にいるハズの董が目の前において既に御刀を振り下ろしていた。

なッ、回避できな——

「寿々花ッ!!!」

完全に機を逸した身体は硬直し、破邪の御太刀の刃がすぐ目の前ま

で差し迫ると触れるか触れないかの寸前で締め付けられた柄が悲鳴を上げさらに加速する。

だがそれも新たに奔る刃がその軌道の行く手を阻む。

「——つぶねーな。なんなんだ？　この馬鹿力はよお」

「誰？　アナタ」

三つ編みに結んだ見覚えのある黒髪。

黄枯茶色の半着は間違いなく親衛隊の制服。

受け止める刀身は長巻などという出自不明の御刀。

先ず間違いはないがそれでも猜疑心を抱かずにはいられない。

「東西南北、さん……？」

「よお、無事か？　此花、それと獅童」

間違いない、彼だ。

「東西南北さん——！」

「東西南北——！」

安堵のこもった二人の声が同時に重なる。

だがそれでも危機的状况に変わりなく真希の注視は緊張とともにうち続く。

「——ラァアアッ!!!」

「——!?!」

わずかながらの膠着状態はちんにゆうしゃ闖入者——東西南北　中央のなかお一声と気が交じる馬鹿力で董を押し戻す。予想外の出来事だったのか董自身もすんなり破邪の御太刀が弾かれるのを許してしまう。

「下がるぞ」

「キヤッ」

一瞬の出来事にキョトンと目を丸くする董を余所に切先をアスファルト土瀝青に刺すと相手の承諾を得ずに背中とひざ裏に腕を回し寿々花を引き寄せるながら抱き上げる。

突然のこともあってか寿々花も両腕を中央の首の後ろに回してしまい寿々花自身、無意識の内に抱きつく姿勢をとってしまう。

姿勢を維持できたことを確かめず御刀を引き抜くと助走やそれに伴う予備動作を排除、不規則な着地を繰り返し真希の目の前までたど

り着く。

引き抜いた勢いで土瀝青の欠片も目くらまし代わりになり丁度よかつたのか、この場から離れる二人を董は呆然と何もせずただ見送る。

「見かけによらず重えなオマエ。ひよつとして毎日毎食コンビ二弁当食ってんのか？」

「……………」

ものの数秒の沈黙が流れた後、雷の如き光速の剣が一筋、中央の首筋へ薄傷として入る。

「ちよ、オマツ、あつぶねえだろが！」

寿々花の一撃よりも中央の反射が勝った為、なんとか事なきをえたのだが斬首を目論んだ当の本人は餌を口にため込んだハムスターよろしくふくれっ面を朱で染めて中央を睨みつけていた。

だがそれも瞬間的なことであり直ぐに元の親衛隊第二席に戻る。

「それよりどうしてここに」

「んなもん、可笑しな荒魂が出現してたら他にもいると思うだろうが。で、コツチに駆け付けたってワケ」

「この短時間でそんな……………」

「颯爽と登場するなんざご都合主義ってか？ 車ぶっ飛ばして全力全開超疾走かましたんだよ」

言い続ける前に視線を天色の瞳から逸らし未だ静かに佇む巨女へと向ける。

先ほどの嵐のような激しさは鳴りを潜め、変わりに品定めするかのうようにコチラを熟視していた。

「で、何で刀使同士やり合ってたんだ？ 荒魂も制圧したみたいだがありゃー裏隠居ばりに…………いやそれ以上か？」

「私達にも何故この場に金城さんがいるのかわかりませんわ。ただ、彼女は裏隠居さんや佐等さんと同じく単独で荒魂討伐が認められている刀使の一人。彼女とも偶然鉢合わせしたとしか」

「偶然鉢合わせしただけで同じ刀使をバーサーカー状態で襲い掛かるとかゼツテー正常じゃねえよ」

「正常まともじゃないからこそ単独での討伐許可が下りていましたよ。それに彼女、普段は温厚な方ですわよ。数回程しか会ったことがありませんが」

「アレでツ!? あんな状態のヤツがツ!?」

おまつ、ウツツソだろオツ!?

寿々花、董と二度見三度見を繰り返しが開いた口が塞がらない。

「普段は、と言いましたわよ?」

「それが本当なら落差あり過ぎだろ。最近の中高生はどうなってんだよ……」

マジかよ……じゃあ、アレが素なら操られてる線は消えたか。

「じゃあどうやったたらその元の温厚な状態に戻る」

「今まででは金城さんが満足するか飽きるか、はたまた別の荒魂を認識したら取り敢えずは事なきを得ますわ」

「なら皐月の荒魂は?」

抱きかかえていた寿々花をおろし、返答を待つ間もなく指名したと同時に遅らせながら夜見も馳せ参じたが呼吸の乱れとともに両肩の上下運動を止めることができないでいる。

「小さい荒魂には目もくれませんから皐月さんの群体では囷にもなりませんわね」

「チツ、じゃあ気絶させるしかねえな。どうしようもねーんだ、撤退の二文字はねえぞ。薬ヤクキメてるのかバーサーカーなりきってるのか知らんがあんな状態のヤツからお前等を守りきるなんざ無理ゲーにも程があるからな」

「重々承知していますわ」

寿々花に同調する意をこめて真希と夜見は静かに頷く。落ち着きをとりもどしたよう<sup>すいじんぎりかねみつ</sup>で長嘆息をひとつついてから直ぐに夜見も水神切兼光を抜き写シを張る。

これは防衛戦。コチラから手出しする必要ない。

三人が体勢を整えたのを目し、携えた長巻の切先が地を向きなぞる様にゆつくりと空を滑る。

「……これは、マズいですね」

「ああ、事態はより深刻になった。東西南北が来たことで金城の歯止めがきかなくなってしまった」

「見逃してくれる雰囲気ではありませんわね。あの状態では」

「火に油、いやガソリンを注ぎ込んでしまったからね」

「駆け付けたのは失敗でした」

「それでもありませんわ。お蔭で私は助かりました。ですが……」  
「今だけは静観するしかないね」

「ここからどうする。止められるのか？ 金城を。」

ゆつたりとした男の足取りはそこで動きを止める。

それこそが戦人として自身が持つ得物の間合いに到達した合図でもある。

とは言っても董の持つ大太刀もそれは同じこと。リーチの差はあれど彼女の剣も彼の御刀に引けを取らない長さであり僅かな間合いの差など微々たるもの。

故、剣戟の幕が上がるのはいつなんどきか。

「よお、長船の。どした、気でも触れたか？」

「フフ、ソフフ……クフフフ」

それは自然に吹いたのかはたまた彼女自身が起こした鬨気なのか。

双肩を小刻みに揺らし董色の前髪が後ろ髪とともになびき、それが後者だと自ずと理解させられる。瞬間、前髪で覆い隠れていた黄色の瞳がチラリと見えるがその眼差しは力強さを増し、身体からにじみ出る鬨気は膨れ上がり湯気のように周りを浸食する。

しかし、佇まいは至って穏やか。

静かすぎるその様は嵐の前の静けさにも似ているが董の身体は武芸者が発する鬨気のソレそのもの。じわりじわり周囲を鬨気で呑み

こむ。

「アナタ、見ない顔だね。初対面だから自己紹介しないとね。初めまして、ワタシは金城 董、

十五歳。所属は長船女学園中等部でそこにいる獅童しどや此花のほなとは同学年」

先ほどまでの荒々しさはどこえやら。

淡々と自己紹介を始めたがやはり先ほどと同じで董の目は中央を見していない。

「好きなモノ、それと今一番に欲しいモノは——」

ハア、ハア——

短く断続的に息切れる口は閉口することなく。

「塩漬けされた——」

ハア、ハア。

視界から消え。

「アナタの首」

武芸者男の目の前へ姿をさらす。

並の人間でも如何に動体視力が優れていようと理解不能の現象に身動きひとつ取れずその場で立ち尽くすだろう。だが武芸者中は違う。

仕掛けてくる為の予備動作。

重心の移動。

送る視線。

そして微かな音。

それらを始めから捉えており、だからこそ董の一太刀目に反応し、薄皮や制服にすら刃筋を入れさせない。

鼻も引っかけなねえとか会話する気ゼロかよ！

避けた！ 避けた！ 防いでくれたツ！ それもいと簡単！

クツ、しかもこの剛剣！ 一撃でも喰らえば即死は免れねえじゃねえか！

避けては防ぎ、防いでは避けるを繰り返す。

迫る刃に殺気もなければ悪意もない。あるのは戦いを楽しんでいくという純粹な愉楽。

「……庄されていますね」

「ですわね」

「援護……はしない方が賢明かもしれません」

「今の私<sup>わたくし</sup>達では邪魔でしかありませんものね」

巨刀が何度も何度も幾度となく縦横無尽に空を斬り、二重三重と金屬を弾く音が次第に近づいてくる。荒魂討伐のときの比ではない。一歩間違えれば直面するのは紛うことなき死。

怖くはないのか。

平然と斬り殺そうとする金城と臆することのない中央。

彼女と彼、そして自分との力の差を思い知らされミシリ、と柄巻が悲鳴をあげる。

「……………」

どうしたんだ。なぜ東西南北<sup>彼</sup>は写シを張らない？ この前は張っていたじゃないか。余裕ある状況じゃないだろ。

振るわれた十二に及ぶ剣戟も継ぎ目なくして十三へ次ぐ。

そろそろフィクションのように休止し、会話による駆け引きが行われる頃合い。オーディエンスもその状況に至らないか今か今かと息を？むがしかしこの双刃、中斷などは認めない。なにせこの獣が止める理由はないのだから。挟めば一刻の愉悅が失われる。冗談ではない。

ああ――

こっの、野郎<sup>ヤロー</sup>！ 所々で躊躇無く首狙ツ、うとかアタマおかしいんじゃないか……!?

——楽しい……！

この短い刹那の斬り合いで少女は破顔し、昂る。致し方ない。久しぶりなのだ。ここまでして死なないのは。

——嬉しい……！

微笑む乙女は心の中で感謝する。

この男に、この武芸者に、この状況に廻り合わせてくれて、と。でも。

——悔しい……！

だからといって沸々と湧き上がる感情に自ら笑顔を蹴散らす刀使は胸に抱く。

——憎らしい……！

この時間が、もう終わってしまうのが。

終わりなく一瞬一瞬を続けたい。

でもこの愉悦に浸るその刹那を是が非でも味わいたい。故に。

迷いを拭い去り。全力で、猛る。武芸者に勝るとも劣らない獣が型を構える。

この構えは!?

右手に持つ破邪の御太刀の刃が水平になると同時に左腕が右前腕部の内側に潜り交差する。

董が構えたその『型』は紛れもない焰燃型カグツチノカタその第二式。五行の中で最も破壊力のあるこれをこの巨女は完全な形で発動させようとして

いる。

以前に寿々花が雷電型イカツチノカタ二式を不完全で終わらせたがこれはその比ではない。

なによりどうしてこの金城 董が使えるのかなどと今は問題視している場合でもない。

武芸者じみた『身体操作能力』を有するが相手はただの刀使。この前の襲撃者ども同様に殺すなど以ての外。それに無力化する前に先ずはこの一太刀を避けなければ話にならない。

——なッ!?

だが中央の頭には重要なことが抜け落ちていた。

目の前の巨獣にばかり気を取られて後ろにいる三人の存在を失念していたのだ。指一つ動こうとしない三つの気配が背中にベツタリと張り付き固着している。

誘導された!? 回避させない為にここまで。イヤ、違う! コイツ

膨れ上がる鬨気。なびくマフラー。

得物を捉える眼光。増える足跡。

日差しに煌めく刀身も血を啜りたく今か今かと待ちわびる。

獅童達ごと俺を斬り殺す気か!!

思考は愚行。

ならば迷いを捨て、即座に反応しろ。

力を込める ↓ 14. 刃、血に濡れて

瞬きをする ↓ 15. 紅蓮旋改

## 14. 刃、血濡れて

ここで避ければ獅童達後に直撃するツ!!

確然たる『紅蓮旋ぐれんせん』の構えに疑う余地などない。

型の術理は理解わかつしているんだ。問題にすべきはこの状況。

後ろには人質。しかも相手は殺せないときた。

ならばこの状況下でとるべき選択肢は御刀の破壊。

土公型あらがみで向かい受けるべく柄頭まで持ち手をスライドさせ、紅蓮旋の軌道たる水平真横斬りに合わせようと始動を待つ。

狙うは刃の平地。御刀の修復は困難になるだろうが命を取るよりもマシな選択肢だ。

しかし、命懸けとは読み合い。

殺し殺される世界に身を置き続けてきた中央にとっての常識だが人生を修練に捧げてきた董もそれは同じこと。このまま始動すれば当然、獅童達も紅蓮旋の餌食になることは百も承知で、だからこそ相手女装男もこの技を防ぐ為に動くのはわかっていた。

なんと容易いことか。

充分過ぎる間合いに入ると左腕を動かすが同時に右手もスライドして柄頭へ握りこむが空いたすき間が間髪入れず左手で覆われる。

破邪の御太刀の軌道が真横から急激に斜めに切り替わると継ぎ目もなく振り下ろされた。

紅蓮旋じゃないだど!?

打ち付けられた逆袈裟斬りにすんでのところで大胸筋上部の肉が削がれたがどうにか致命傷は避けることができた。

しかし、にやつく獣の斬撃キバは獲物を喰らいつくす為に刃に血塗るところを止めない。

体勢を立て直してる場合じゃねえ!

内心で舌打ちながらも視野を二百度目配りしながら次の防御に移る。

息つく暇もないまま獣の眼光が鋭さを増す。

「シフ——」

「ウラアア、ア、——!!!」

「フフフ……ダハ、はア、ア、ア、ア、ツ!!!」

男の叫声おらびいえと女の咆哮が鳴り響く金属音と雑じる。

高められた筋力から放たれる袈裟斬りを中央もまた真つ向から袈裟斬りで迎えうち、刃と刃が重なり膠着した。

力では押し負ける。刀身同士の鏝迫り合いに持ち込んだ瞬間、瞬時に判断を下すと両手を絞るように捻じり刀を回転させ、土公型第二式

——岩喰イワグキ——を始動させる。

「——なアツ!?!」

武芸者としてあるまじきなんとも間の抜けた声が漏れ出し、空所の下を奔らせてしまう。

刀身が回転した一瞬間で御刀どころか金城 董自身の姿かたちごと行方を眩ませた。

この現象は刀使ならでできる芸当。獅童 真希や此花 寿々花、臯月 夜見もやろうと思えば可能であり、当然、同じ刀使である董と中央も不可能なことではない。

にもかかわらず一時的なことだとしても不覚にも失念してしまった。いくら同じ流派の同じ型を扱ったとはいえ彼女は刀使なのだ。武芸者などではない。

クソツ、迅移か！ マズイツ!!

自分自身への敵意、そして気配の無さに董が別の標的にネライを変えたのを瞬時に理解し、百八十度の転回と同時に縮地を繰り返す。

なぜ東西南北はこちらに向かってくるんだ？

金城の姿が見えなくなった直後にとてつもない形相の彼が迫ってくる。鬼の形相と言って差し支えないだろう。彼が纏う写シ以外モノの所為でそう見えるだけかもしれないが。

焦っているようにも見える。距離が縮まるほどにそれは顕著だ。

金城……？ そうだ、金城はどこだ？ 彼女は今どこにいる？

彼女が東西南北ほどの強者を目の前にして飽きるなど。今年の御前仕合、『一刀』に負けたはしたがそれでも投げ出すことなど無かったはず。

正眼に構えた薄緑うすみどりを崩すさぬまま周囲を窺い——猛烈な圧と。

まさか東西南北さんでも金城さんを止めることが厳しいとは、思っても寄りませんでしたわね……。

狂乱する董の強さに寿々花の頬は若干の引き攣りを見せるがそれでも東西南北さんならどうかしてくれる。何故だかそんな根拠のない確証だけが沸き上がる。だから彼を信じ続けよう。

九字兼定の切っ先が天を向き——暴風を携えた獣が。

金城さんは調子を上げ、東西南北さんは攻めることをしない……これはひよつとすると。

チラチラと後ろを見ながら警戒してみるが膨れ上がる圧に体中がひりつく。あの荒魂あらいごころを鎮めた

東西南北 中央という男ならこの状況もすぐに打開してくれるのだらうと見当していた。

しかし状況は今一つ芳しくない。だとしても今はただ、

やれる事をやる。過信する相手でもないし盲信するほど愚かでもない、まして彼に対して狂信に到りはしない。

余計なことをして彼が退職するようなことにでもなれば前と変わらないままの日々。必要とされなくなってしまう。

いえ、今は自分がやれる事をしましょう。彼の枷となるべき行動をとるのはいただけませんね。

反芻と大息たいそくが終わるとギョツと水神切兼光すいじんぎりかねみつの柄に力が入はい——  
一瞬だけ音を立てて少女達の横目に入る。クシヤクシヤに乱れた董色の髪が重力に従いゆったりと落ちきる前に巨刀を支える腕は弾き鳴らして、真横から奔る。

逸り走って、奔る。

怖気が奔る。まだ来るハズのないと思っていた生の死が目の前に迫る。

動かない。動けない。

——バクバクバクバク

ドラムが高速で連打され続けられるように心臓の鼓動が激しく鳴り止まない。死に際に直面するとはこういうことなのか。白刃が。振りぬこうとする腕が。無造作に舞うマフラーが。何もかもがスローモーションで映る。ここで死ぬのか？

ああ、そうだ。どうせ遅かれ早かれ喰らうのに変わりない。だってらもうこの三つの鼓動に加減する必要はない。鍛えた大腰筋、大腿直筋、ハムストリングに内転筋、臀筋群でんきんぐん、腓腹筋ひふくきん、そしてアキレス腱と八幡力を付与した脚力が掛け合わせり迅移が相乗する。

後は紅蓮旋で葬うらえればメインディッシュは更に極上の味になるに違いない。締めは強きモノの血液で潤そう。

間に合えやツ！

獣スマイルの雑念が中央に僅かな猶予を与える。

「——ボツ……」

ああ……されど無常。天が与えたのは時間だけ。

「……………  
南北ひろ？」

東西よも

突如現れた金城を追い駆けてきたハズの東西南北の姿が見えない。確かに目の前にいたんだ。金城の御刀がボクらに触れそうになった瞬間に東西南北が現れて、それで……それで？ あれ？ どうなったんだっけ？

顔にこびりついた不快感を手で拭うと手に巻いた包帯が赤色に染まっていた。痛みがないから自分ボクがケガをしたワケじゃない。じゃあ、誰が出したモノだ？ 此花か？ 皐月か？

すぐ近くにいた二人を見る。此花も皐月も世界が停止したかのように瞬きを忘れ口を開けっぱなしにしてそれを見ている。なぜ見ているんだ？ 二人とその視線の先を繰り返し何度も追うがああ、やっぱりそれに行き着く。

この僅かな時間でそれはみるみるうちにほぼ総てを拭ったときと同じ赤色に彩られていた。そこから時を待たずナニカが降り注ぎ異質な音が耳に残った。

彼女は確かに強い。御前試合でこそ立ち会う機会はなかったがそれでも自分より腕は立つのはわかる。だけど、東西南北 中央よりは強くない。そう思っていた。

だってそうでしょう？ 一度立ち会っただけの人に、刀使だと言われてもわかには信じられないような男の方に出会ってすぐに力量差もわからず圧倒されたのですから。

彼は強い。恐らく縁様と同等、もしかしたら縁様以上なのかもしれ

ない。自分では計り知れないことだとそう疑う余地などないと思っ  
ていた。でも現実はず違った。

彼は斬られた。だけど、そこからなにがどうなったのかわからない  
……。目の前でナニカが吹き飛んだのが辛うじてわかる程度。

それから……ナンデ、ワタクシハウゴクコトガデキマセンノ？ ド  
ウシテ、シドウサンヤサツキサンガヨコタワリナガラウゴイテイマス  
ノ？ ドウシテコンナニ……サム……イ——

ああ……また、彼が死ぬ。私の目の前で。

白い髪も、黄枯茶色の親衛隊服にプリーツスカート、中に着た黒い  
ストライプの入ったブラウスも、身に着けたグローブも、白いニーハ  
イブーツも何もかもがああ、赤く染まる。染まる。血で空が染まる。

舞う胴体<sup>彼</sup>を見ても特になにも感じず、次第に空中分解していく両手  
を目にして「あつ……」と、私は声を漏らした。口を開けていたのが  
悪かったのだろう。血塗れの身体の次は唾内に血が侵入してくる。

マズい……。

血を放出する感覚は慣れてきたが口から血を取り込むなんて行為  
は未経験だったがああ、これは経験したくはなかった。

大、中、小の塊がバラバラと落ちてから一陣の風が通り過ぎる。先  
ほどの音とは違いゴトツ、とそれなりに大きい音が聞き取れた。音の  
方へ視線を動かす。

今度は此花さんだったモノの上半身と下半身が別れている。次は  
獅童さんか。その次は私。

ああ……私も死——

御刀を放した瞬間と同じく私の意識も肉体から離れた。

空と地面が代わる代わる入れ替わる。自分ではどうしようもなく

視界が回転し定まらない。時折り見えた呆ける三人の空いた口が塞がらないさまはバカ面で笑える。これからは三バカと呼ぼう。いや、バカは自分か。『選択』をミスったのだから。他人をバカにできねえなこれじゃあ。

などとくだらないことを呑気に考えていると胸筋下と舌に衝撃が襲う。どうやら地面に不時着したみたいだ。直立したみたいに立ってやがる。はは、落下後からピンポイントに立てるとか物理法則はどうなってやがるんだ？ ツイていんのかコレ？ まあ身体は付いてねえんだけどな。

ナニカが抜ける感覚が寒さとともにやってくる。

いよいよ俺も終わりか……。

此花の胴体が落ちる様を見、悲鳴すらあげない獅童の首が吹き飛ぶ。

このザマじゃ俺がいてもいなくても結果は変わらなかつたか

ああ、いや指示出したの俺だったな……。 皐月の胴が飛び跳ねてくる。仰向けになっっているお陰でいつも通りの無表情が見れた。皐月が恐怖に怯えてはいないのかと、ただ安心した……。 ああ、色々俺もバグりだしたみたいだな。

すまねえな、お前等……。役に立たなくて。

「く……ほ……ふ……お」

血とともに吐き出した声はなんとも呆れるほどか細い声。消えかけの意識の中、最後に残った金城 董が何か言ったような気がしたところで意識は途絶えた。

「なんだこんなものか。せつかく東西南北中央が戻ってきたって聞いていたのに」

深い深い底の見えない真つ暗闇に男は沈んでいく。地上もなければ空もなく無重力空間、或いは水中のように潜行していくがここへ来たのも自分の意志ではない。

縁あつてのことかここに辿りつく。

底とっていいのか沈む意思のない男は静止した。

コツン、コツン……。反響する靴音が男に近付いてくる。

「あーああーあ、何やってんだか。来んの早過ぎだつての」

靴音の主は一つため息をつき、腰に両手を置いて制服姿の少女が死体<sup>そ</sup>を見下し呆れる。

「次は間違えんな——」

右足を後ろに引き続けて僅かに溜めをつくると一気に解放し振り抜く。

「よッ!!」

蹴り足が前にでると勢いは増し死人は遙か彼方、地平線の先へと見えなくなつた。

「もう……来んなよ」

フオロースルーを終えてもまだその先を見つめる。

「バカ……」

少女は踵を返して歩く。

人目を気にしないのか辿り着いた先でスカートを整えることなく「どっこいしょ……」と、そう言つて胡坐をかく。

目の前には幾つかの『扉』がそこに在り、それ以外にはなにも無い。立てた膝を揃え、両脚を両腕で抱えてから膝で頬を休ませて独り呟く。

「少し、眠ろ」

顔を膝に埋めてゆつくりと、静かに深い眠りに堕ちる。

彼が望む限り時間は無限にある。

きつといつか。

彼が望み、彼の意志でちゃんとした形で会えるその日まで。

意識が遠のく中、そう願ひ、少女は静寂と深い無に包まれた。

「ここですつと待つてるよ。ずつと……」

The end

あなたは、そこにいますか？

はい / いいえ

## 15. 紅蓮旋改

ほんの一瞬、気を失う。気付いたのは風が凧いだ所為なのかそれとも人工的につくられた風圧が迫りきた所為なのか。

別段ハイになっている訳でもないがただ一つ言えることがある。そんなことをするのはバカ者のすることでもひとつ言えば戦場では自殺行為である。

チツ、意識が吹っ飛びやがったッ！

幸か不幸かまだ紅蓮旋は始動していない。まだ始動していないということはタメを作っているということ。

紅蓮旋の軌道はほぼ真横一直線。軌道は読みやすいがその術理の特性上、始動時の初速に加速された斬撃とその破壊力は凄まじい。オマケに莖すみれの扱あつかう御刀——破邪はしやの御太刀おんたちは全長が四六五センチメートル、重量も七五キロもある代物。並の武具や御刀であれば一刀のもと、いとも容易く両断されるのは必至。

付け加えてコチラは背に三人も人質がとられている以上回避もできないしなにより殺せない縛りがある。ならば防御一択。互いのこのリーチとタイミングでは土公型あらがみも中途半端で終わり最悪の結果に至る。故、中央なかもも両前腕を十字に交差し、莖の挙動に合わせる。

殺すつもりでぶっ壊す！

へえ、アナタもそうくる。まあ、でも……喰勝らうのはワタシだ!!

女装男中も腕を交差させ莖と同じ十の字を作る。相手が使えるのは百も承知であるからこそ勝ちを確信していた。剛と剛。威力と威力がぶつかり合うこの戦いにおいて誰にも負けはしない。

だが中央相手もそれは了承して二式を構えている。

相手の体軀に御刀はかなりの重量級、加えて焰燃型カタツチノカタを完全に使いこなすとなると生半可な破壊力じゃ防げない。よってこの一撃に加速を乗せる。

——ッ!? 身体が沈んだ!?

身体のあるとあらゆる部分を脱力し、地面に吸い込まれるように重  
力に身を任せる。倒れこむ身体、しかし視線はしっかりと正面の金城  
堇を逃さない。

膝が曲がり事前準備は完了する。そっちが純粋な焰燃型<sup>パワ</sup>で向かう  
のならばこちらは雷電型<sup>最速</sup>と焰燃型<sup>最大</sup>の複合で狙う。

テメエは今勝ちを確信したんだ。そこからそのデカブツで雷電型<sup>イカツチノカタ</sup>  
や虚空型<sup>オホロノカタ</sup>の発動は間に合わせねえだろう。仮に出来たとしても、この  
紅蓮旋改<sup>一撃</sup>は防げねえわなあ!!

面白い……面白い、面白い、面白い!! これでこそ武芸者! それ  
でこそ東西南北 中央!! ようやくメインディッシュが食せる!

叩き斬れるもんなら、叩き斬ってみせろやツ!!!

アナタの望み通り、叩き斬ってアゲル!

互いに最大の一撃を放つ為、限界ギリギリまで見定め、溜める。  
さあ、届け。

絶対に——喰らう!!

絶対に——壊す!!

バチツ!!!

腕を弾いた衝撃が響く。同時に放たれた大太刀と長巻は水平に  
奔った末、止まなかった剣戟の狂乱は終わりを迎えた。

「——なああつ!?!」

呆気ない幕切れに最初に声を出したのは巨刀を振るっていた堇。  
肉の感触がない。こんな事は今の今までなかった、故に口を開いて目  
を見開く。

「止め、た………のか?」

「止めました……………わよね？」  
「……………確かに止めました」

金城の本気の一撃を止めた……………今日会ったばかりの東西南北が、そんな、この僅か短時間で。

ワタシの紅蓮旋が通<sup>負</sup>ら<sup>た</sup>ない!? 何故!?

董の目に映ったのは鏢と鋤<sup>はま</sup>が破損し、そして刀身がひび割れている破邪の御太刀。力では自分よりも劣る男に止められ、その男の御刀の刀身はひび一つ入っていない。

紫電閃<sup>しでんせん</sup>と紅蓮旋のかけ合わせか……………まさかワタシの破邪の御太刀に対してそれをやるとは、これは見事と言わざるを得ない。それに……………この状態じゃ三式、はキツイな……………刀身自体も修復しないとマズい、かな。

冷静になり「ふうー」と、董は一息ついて纏っていた鬨気をスーツと引つ込めて半歩後退る。長巻に触れていた刃先も離れ、刃文<sup>はもん</sup>が後頭部へと移り峰を左手で支えるとこれ以上の攻撃はない、と董なりの意思表示する。

圧が消えた? 伝わっていないのか中央は訝しみ董の動向を注視するが董色の目が前髪に隠れて視線が分からない。

まだ警戒しているのを悟り董は一言告げる。

「終わり」

「……………何?」

「そのままの意味。今日はもう終わり」

「……………ほお、そうか」

「納得してないみたいだね、不満? それともまだやり続けたい?」

「いや、そっちがその気ならそれで構わねえよ、コッチは続ける理由はねえしな。だが、お前さんが止める理由はやっぱ御刀が欠けたからか」

「んんー秘密。楽しみはまた今度にでもとっておく。それに次ヤル時は本当の姿がいいからそれまでとっておく」

前髪とマフラーで表情は見えないがその声は弾んでいるのは間違いないかった。ウキウキと胸を躍らせた姿を目にすると真希たち三人は戸惑いを隠せなかった。

「金城、君——」

「じゃ、獅童しどうに此花このはな、それに臯月きつまたどこかで」

三人には目もくれず言葉だけを残すと大股で進み、拾いあげた鞘に破邪の御太刀を納めると嵐の如くその場から過ぎ去る。伸ばした手に掴むモノなどなく、遠くから微かだが断続して聞こえるカツコー、カツコー音響信号機という音や排気音、それに足音やしやべり声が入ってくる。

「——は」

「……行ってしまいましたね」

「嵐そのものですわね」

「大したものだよアナタは。あの金城から無傷で退かせたのだから」

「……………」

「……東西南北？」

音を立てて中央は崩れ落ちた。力尽きたのか握っていた長巻も間髪入れずその場で横たわっている。

「——!？」

「東西南北!!」

「東西南北さん!!」

「大丈夫か東西南北——」

——きゆるるるるる

駆け寄った三人は 横たわる中央を囲うが真希が言いかけたところで何らかの擬音が彼女の言葉を遮る。突つ伏した男は絞り出したか細い声で「……………は……………」と漏らし言葉をつなぐ。

「腹、減った……………」

白目をむき口から白いエクトプラズムをゆらゆらと放出しながら中央はふり絞り食料を寄越せとジエスチャーする。

連続する緊張感から解き放たれたことと中央の姿が滑稽だったこともあり、それぞれ笑い声を吹き出す三人。

「……あれだけ激しい戦闘を繰り返しましたが無理ありませんね」

「むしろそれだけで済むのですから。まったく、今までの緊張感を返していただきたいですね」

全く格好付かない年長者だが危機的状況を覆した命の恩人であることには変わらない。呆れた言葉で声をかけてはいるが心底呆れているわけではなくその表情は明るく、どこか安心しきった顔を向けている。

「ホント、大したヤツだよキミは」

色々とアレだけどホント、キミは……。

寿々花や夜見のように真希もまた口角を上げ穏やかな表情で中央を見下ろす。和んだ空気の中でも硬い土瀝青アスファルトに頬がへばり付き、一度として顔を上げることのない中央は懇願する。

「誰でもいいから、飯……早く、食わせてくれ……」

凧いでいた風が再び吹く。

それに併せて羽を休めていた一羽の燕巢立ちちは8月頃が遙か大空へと翼を広げ飛び立つ。旅立つ日に備える為に青く、白く、広く、深いあの蒼穹そらへと。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第16話 兄妹

## 16. 兄妹

市街地周辺

暖かい時期、ユスリカの大群が蚊柱を作るようにこの市街地で小型の荒魂が群れをなし、そこかしこに飛び回る。しかし、群れといっても小型。刀使そこにいる以上、着実にその数は目に見えて減っていく。

「オオオイツ!! なんでアタシ等の描写が省かれてんだツ!!」

声を張る黒と蜜柑色パレイヤージュの髪の少女が声量を上げて次々と荒魂の中を駆け抜け、墮とす。

自分達の状況についてどんな弁明をされてもやはり納得がいかない。白い帯は加速し続け地を、壁を、宙を、そして空を駆けショートカットが踊り、一刀二対の刃が舞う。

「お主、誰に何を言っておるのじゃ?」

気の短い少女の罵声にこれまた老人語の少女が答える。

豪快に乱舞する少女と異なりその場から一步も動かず、しかし少女の代わりに刀身は奔る。

「目の前のテメーにだよ!!」

「はて? 儂はお主の百八十度、つまりは真後ろ、今は真上におけるハズじゃが可笑しなことを言うのお」

「ハア!? テメエ、マジでそれ言ってるのか!?!」

「真正直じゃぞ? お主まだ若いのにもう呆けたのかえ?」

まだ十代だというのにもうボケたとは。相手の若年性認知症を疑う佐等さとう イチイが聞き返すがそれを煽りと受け取ったのか、裏隠居うらいんきよ光枝みつえが休むことなく一撃で荒魂を無力化していく。

斬つては柄で円を描くように回転させ、時には自身も前転、側転、横転、後転を繰り返し、そしてまた斬る。

「ああッ!? フカシこいてんじゃねえよチビがよオ! ボケたのはテメエの方だろうがアアア!!」

「はて……これだから近頃の若いモンは。最近では耳が遠くなって

のお、何を言ったか聞こえぬ」  
「こんのオ……………クソがああああッ!!!」

怖い…………。

応援に駆けつけた鎌府女学院の刀使は怯えていた。荒魂ではなく味方である刀使に。

光枝の悪評は聞いていたから多少身構えることはしていたがいざ実物と顔を合わせてみると前評判よりも数段怖ろしかったというのが彼女の感想だ。

当たり散らすヤンキー的ないつ自分が恫喝されるかわからない。そう、ただただ怖い。

早く帰りたい…………。

これでは中型…………いや、大型の荒魂が暴れ回っている方が幾分かもマシというものだ。心の内での願望を意識を向けている間にもスペクトラムファインダーの反応は消失していく。

「姉御オー！ 二時の方向から十匹ぐらい接近してますぜー！」

「佐等さん、住民の一時避難完了しました！」

「しようがない、では儂も動くかのお。光枝だけに任していたら終わるのがいつになか分からん。打ち漏らした荒魂はお主らに任せるでの」

「はー！」

返事を聞くや否やイチイもまた光枝と同じく迅移で大地と空を縦横無尽に舞い始める。

荒魂の出現により中央達親衛隊メンバーと臨時応援の光枝とイチイが出動し、独りとなった紫は執務室に向かっていた。

彼と彼女らがいなくなったことで普段の喧騒さが？のように消え失せる。

「始まったか……」

「何が、始まったと言うのだ？」

執務室に辿りつくくと独り言を呟き、ドアノブへ手をかけたところで背後からくぐもった声の男が言葉をかけた。

恐らくはナニカに遮られた所為だろう。

「いらしていたのですか……何時こちらに？ 事前に連絡をして頂ければお迎えに上がれました。わざわざ待つこともありませんでしたでしょう」

後ろへゆつくりと面しその姿を視界に入れ、男を呼ぶ。

「兄上」

「ほう……このような醜い姿に成り果ててもまだ吾を兄と呼んでくれるか」

そう言って紫が兄上と呼ぶ男——降魔 辞世、旧姓を名乗るのであれば折神 星藍は相對する。

彼は全身を白い装束——白衣に白い袴——で装っていた。袴も光の当たり加減で大きな白い文様が映るが醜い姿と言うからには皮肉交じりでその服装のことを指してはいる訳ではない。

くぐもった声の正体である頭部と顔の輪郭までをガスマスクのように覆うプラチナ製のマスク。

例え兄妹だけで会する状況だとしても鋼の意志を貫き通し、この降魔 辞世という男は素顔を晒すことはしない。

「貴方は紛れもない私の兄です。戸籍上折神家から除名されても貴方は私や朱音と同じ折神の血が流れている、その事実には？偽りで着飾るなど出来はしない」

「それがお前の本心だと今はそう受け取っておこう。で、だ。世間話をする為に本家に来たわけではない。お前のことについてだ」

辞世を執務室内に通すと備え付けのソファに座るよう促し、辞世も

促されるまま腰掛け、紫と同じ艶やかな黒色の総髪が揺れる。

腰が深く沈んだのを目し、紫もまたエグゼクティブチェアに腰を下ろす。

「私の……ですか」

「左様。お前の護衛とし置いている刀使だが今は三人しかいないのであろう？ それでは不十分だ」

「親衛隊に迎えた者達は四人ですが」

「その内の一人、燕つばくら 結芽ゆめは今もまだ病床に伏していると耳にしている。それでは席を置いていないのと同義ではないか」

「こちらで用意したノ口を投与させます。復帰できるまでそう時間はかかりませんので問題はないかと」

親衛隊への入隊が確定してはいるが病状の淵から完治の目途が一向にたたない燕 結芽の名が挙がる。通達されていない事柄だとしても折神家の分家たる降魔家、折神の長子には包み隠すこと能わずか。

そちらの動向の一つ一つ何もかもを見透かしていると、そう釘を刺すような声と言葉が紫の心に突き刺す。

「ではその娘、一体いつになれば使い物になる？ 直ぐに体調が万全となるわけではあるまい。なら今直ぐにでも使える人材を速やかに補充させるべきではないか」

「兄上の御厚意は痛み入りますがそう易々と人材を確保できるものではありません」

「とぅとぅ」

微動だにしない辞世が視界と呼吸口の無い真つ平らなマスクの底からジツと見つめ、紫の言葉を待つ。

精神から肉体にまで突き刺す視線はなおも紫に更なる負担となつて圧しかかる。

「親衛隊に席をおく獅童しどう 真希まき、此花このはな 寿々花すずか、皐月さつき 夜見よみ、そして残る燕 結芽の四名に勝る者、もしくは同等の力量を持つ者がいないのが現状です」

「いるではないかその四人よりも力量が遥かに抜きこんでいる者が」

「その者というのは佐等 イチイか裏隠居 光枝、それとも金城 董  
ですか？ 彼女らには協調性というものが見られませんでしたので  
コチラの判断で親衛隊への配属は見送らせました。」

あの手の者達は単独で動かした方が何かと都合がいいかと」

「まだいるではないか」

その三人でなければ思い当たるのは絞られてくるがそれでも当て  
ずっぽうになってしまふ。次は伍箇伝外の該当しそうな者を挙げて  
みる。

「警衛大学には……いるにはいますが彼女もまた協調性に欠けます。  
招集に応じるとは思えませんが」

「いや、その者でもない」

当てが外れたか。であれば残るは教員からの選出となるが現場を  
離れて久しい者が急に職場環境が変わり使い物になるかどうか。事  
務処理は何とかなるだろうがそれでもやはり荒魂討伐に紫の護衛、そ  
れに伴う対人戦闘など不可能である。かすりもしないだろうがと念  
の為聞き返す。

「では教員からですか？」

「平城にいる娘だ」

痺れを切らしたのか辞世から返ってきたのは過去、戦場とともに駆  
け抜けた嘗ての戦友——吉野 いろは改め、今は五条 いろはが統括  
する平城学館、そこに在籍する刀使の名。平城で獅童 真希以上の刀  
使となると一人しか思い浮かばない。

その少女の名を口にする。

「二刀、ですか……」

「左様。あの娘ならばお前の言う協調性とやらも難はあるまい、何よ  
りも実力でいえば親衛隊に席をおく四人よりも上に位置する。本来  
であればいち早く一席として迎えるべき娘だ」

どうやらの中したらしく張り詰めた空気と辞世の声が僅かばかり  
緩んだ気がした。

「以前親衛隊への入隊を打診しましたが一身上の都合により辞退して

「いますぐ」

「それなら案ずることはない。コレを平城学館の五條 いろはに渡せ」

座っていたハズの辞世が瞬きをした瞬間、音もなく近付き目の前に迫っていた。差し出されたA4用紙を受け取ると文頭には太字で辞令書の三文字が書かれその下に異動の旨が定型文として記されている。だが右下には誰の名前も書かれてはいない。

「辞令書……後は私のサインと捺印をするだけとは、随分と用意周到なのですね」

「あの娘の実力をこの目で見ていたときからお前の側近にと既に目を付けていた。それが御前試合の結果の有無に限らずにな」

「検査した際にノロとの適合率は余り高いモノではありませんでしたが……それでも、ですか？」

「ノロを使わずとも十分な戦果は期待できよう。それに万が一の事態が起きたときお前にとって有益となる人材だ……これでもまだ不服と申し立てるか？」

紫が座したままとはいえ辞世が見下ろす様はマスクも相まってから見下す様な威圧感を与えてくる。故に一時的に弛緩した空気は緊迫感が執務室内に再び漂わせた。

それに伴ってエグゼクティブチェアの肘掛けに置いた手と辞令書を掴む手から滲み出る脂汗がジワリと出てくる。

「いえ。兄上からの進言、謹んでお受けします」

スツと立ち上がりお辞儀の為、上半身を四五度に倒す。

それを承諾の意と受け取り踵を返すと辞世はドアへと向かう。

「ああ、宜しく頼むぞ。では吾<sup>われ</sup>は失せるとするよ。多忙なお前をこれ以上拘束しては執務に差し支えるだろうしな」

そう言つて重くもなければ軽くもない足取りからドアノブを掴みその去り際、一つ思い出す。

身体を反転させ、再び紫に声を掛ける。

「ああ、そうだもう一つ」

「何か？」

まだ何かあるのか。そう思いながらも上体を引き起こし辞世の言葉に耳を傾ける。

「大荒魂タギツヒメにも宜しく伝えておいてくれ。ああいや、聞いているのだつたな。聞いているの通りだ大荒魂タギツヒメももう一人新たに配属されるが気にせず貴様が成したいことに励め。吾われは邪魔立てはせぬ。だが……」

圧が膨らみ。

「吾われの邪魔をするのであれば容赦はせぬ」

瞬く間に室内をソレが支配した。

「貴様を態々わざわざ生かしているということ、くれぐれも忘れるでないぞ。いくら吾われが貴様を祓うことができないからといっても延々と痛みと苦しみを味わいたくはなからう？」

隠れた目から発せられる視線は紫の頭を、首を、心臓を握り潰す様に先ほどとは比べ物にならないくらい息苦しさが彼女を蝕む。大荒魂タギツヒメが中にいるといってもこれが実の妹へ向ける視線なのか。強張った身体は瞬きすら許させはしない。

「では、失礼する」

——カチャツ。

小さく鳴ったドアラツチと元の位置に戻ったドアノブを見届けると息苦しい空気から解放され脱力し、前触れもなくエグゼクティブチエアに身体を預ける。

その拍子で辞令書も床に滑り落ちたが先ずは解放されたいという気持ち勝ち勝り、白い縦縞模様に入った紫色のスーツインナーの第一ボタンを開けフウ、と息を漏れ出す。

大荒魂タギツヒメの存在がいる以上安閑あんかんとしていられないがその大荒魂タギツヒメも内側に引つ込み普段よりも存在感は薄れている。

大荒魂タギツヒメと実の兄。内側と外側に問題を抱えたまま過ぎた人生も一八年、辞世兄のことであればそれ以上の歳月が過ぎた。女系家族である折神の家に生まれてきた以上どうにもならないし、どうにかするにしても自分はまだ若輩者の小娘で辞世兄を救うことなどできはしない。

嘆きたくなるのを抑え、落とした辞令書を拾いあげるとサツと机にそれを落とす。

「兄上が認めた刀使、か……」

辞令書に書かれた名を見て呟く。一彼女刀も辞世兄にとつてはきつと道具コマと同じ扱いなのだろうとそう思いを巡らす。結局、一刀にも辞世にもどうしてやることもできない。

辞世兄と朱音妹とはまともに喋ることもなくなった。辞世兄と同じく自分ももう元の兄妹姉妹には戻れない。だからせめて、辞世兄は救われてほしいと願う。

「美奈都………かがり篝………」

そして悔やむ。

もう何もかも放り投げてしまいたいなどとマイナスな思考に囚われていると背後に何者かの気配を感じ取る。

「……鳥………?」

何故このような場所に……。

ノックするようにコンコン、と窓ガラスを小突く音と微かにパタパタと動く音とともにレースカーテンに映る影。掌に深く突き刺さった爪先を解き、立ち上がる。

背後にある湾曲した窓ガラスに近寄りレースカーテンを開くとそこには小さな燕がこちらを見下ろす……いや、見つめるようにその場でホバリングしていた。

「燕か……入りたいのか——」

入ったそうにしている燕をなんとなしに迎え入れようとし窓を開くとホバリングしていた燕は枠に降り立ち羽を休める。

観察する間もなく口ばしに目がつく。啞えていたのは一輪の花。

燕はクイクイ、と口ばしを上下させる。

「これを私に………?」

無警戒で百合の花を受け取ると黒い翼をはためかせ燕は羽ばたく。女が知ることのないどこか遠くへと。

「あら、話しは終わったのかしら？」

強固な表門を通り抜け、赤い木橋を進む途中で声が掛かる。余程待ちわびたかのか欠伸まじりの声で美濃関学院の制服だと判る赤紅のセーラー襟とスリットの入ったスカートを着た女が言うがしかし、男は歩みを止めず小股で進む。

だが決して無視を決め込んでいるわけではない。

「ホウ、随分と早く終わったのだな。首尾は如何様か」

「ダメね。全然ダメ。隠し部屋や隠し通路やらを手当たり次第に探ってみただけとそれらしいモノは見当たらなかったわよ」

背もたれ代わりに木橋と同じ赤色の欄干墜落防止の手摺りに身体を預けたまま折り返しのあるニツト帽を被った女は返答しながら手を無造作に振る。

「ホントにあんの？」

「以前は本家に保管してあったのだが紫が持ち出せぬ以上、朱音が持ち出したか或いは何者かに吹聴された第三者か……」

「じゃあ、舞草に向かう？ 折神 朱音が持ち出したのなら舞草の、確か里だったわね。そのどこか、もしくは誰かが隠し持ってるでしよ」

「可能性は無きにしも非ずだが朱音ならいざ知らず、今リチャード・フリードマンと邂逅するのは得策ではないな。なによりお前をその二人の前に晒すわけにはいかない」

曖昧なまま適当に女は発するが危機感の無さに自分の認識を改めさせる為、女に今一度釘を刺す。

「じゃあどこ探すのさ」

「まだ伍箇伝内を探しておらぬから、次は五校の内のどこかになるな。だが美濃関に平城、長船は後回しだ。行くとしても貴様は連れて往か

ぬ。その三校へ赴くのであれば使い捨てにできる者だけだ」

互いに顔は合わせずに言葉を交わすが見ている先は両者はともに同じ。であれば急ぐ必要性などは皆無。故、消去法で対象物の在り処を探る。

「鎌府と綾小路の二択しかないじゃない。まあ、美濃関にはあのジジイがいるみたいだし、長船には折神 朱音とリチャード・フリードマン、つまりは舞草と癒着してるから分かるんだけど平城はなんでさ」「平城に関しては紫が使いを出すかもしれない。それに関わりのない五条 いろはに感付かれてでもしたら厄介だ。昼行灯を気取ってはいるがあれで感が鋭い」

「そんな時は始末してあげるわよ？ 折神 紫と伍箇伝の学長ら五人がジジババ共に鍛えられたとはいえ相模湾の一件から鍛えるのを止めた連中だもの、万に一つの可能性なんてありはしないわ」

空を仰ぎながらヘラついた顔で自分の首元に四指を伸ばし爪を立て、スパツと斬る動作を試みせる。それがいとも容易いかのよう

に。

「仮に鍛えていたとしても素人に毛が生えた程度よ」  
「この国にとって重要な教育機関の学長だ。まだこの国の行く末が決まらぬ以上騒ぎを大きくする必要もあるまい。それとも、やはり己が

『子』に会うのは憚はばかられるか？」

突如、一瞬にして辞世の身体はプラチナのマスクだけを残してアマンナイト  
天河石やグランディエライトの輝きを放つ結晶体が覆いつくす。

発生源を辿れば辞世と話していた制服姿の女、その足元から地面を侵食し、形成されていた。

ギロリと殺意にも似た視線が刹那で向けられ空気が張りつめられる。殺意とはいえ漸く辞世へ視線を向けた。先刻、執務室で辞世が紫と大荒魂タギツヒメに向け与えた恐れが二人の空間を包み込み怒り、憎しみといった負の感情が今度は辞世自身に向けられる。

だが留まったのはわずか一瞬であって直ぐに結晶体とともに霧散した。目の前の辞世男は敵ではないのだからと落ち着きを取り戻すと女は短く嘆息する。

「あんなのはただの失敗作よ、わたしの子供じゃないわ。わたしの才を一欠けらも受け継がなかったのだからアレはただのゴミ………にも………劣る」

「どうした？」

珍しく歯切れの悪い女に辞世は声を掛ける。ひねくれた性分だがこれまで言いよどむことはなく、物珍しいこともあるものだと思えるうちに女は要領を得たのか目を見開き開口する。

「いや、アレらの保管場所だけどひよつとしたら分かったかもしれない」

過去の記憶から女は掘り起こす。

代わり映えのない見慣れた場所。嗅ぎなれた空気。興味の失せた奴らとの他愛のない会話。

不必要だと切り捨てたモノがこんな形で役立つとは正に僥倖というべきだろう。褒めてやってもいいとすら思える。

「何、それは真か？」

「ええ、心当たりがあるわ。子供の件くだりでね、ピンときた」

制服の上からスウェットシャツを被り女が運転席に乗り込むと辞世もすかさず助手席に腰を下ろす。

「なら、ここからは別行動とするか。念押しだ。吾われはこのまま鎌府に行つた後、綾小路へ赴くとする」

エンジンを始動させようとしたところで女の手が止まり、「はあ？」と語気を強めてぼやきだす。

「いやいや、だったら着替えさせてよ。女学生のまま移動するなんてイヤよ。一体どんな羞恥プレイ？ コスプレ趣味なんて冗談じゃないわ。大体別行動つたって、アンタ運転できないでしょうよ」

「なら誰か変わりの者を寄越そう。次いでだ、お前も自分の愛車の方がよからう。貴様の車と一緒に着替えも持たせる」

「外そとで着替えろと？」

サムズアップで二回、三回と窓を指す。コスプレ趣味の次は露出と視姦による恥辱をご所望とはこのオッサン、まだ性欲が減退していなかったのかと呆れる。

だが返ってきた言葉は女に追い打ちをかけた。

「裸如き今更恥じらう歳でもなからう」

「全裸はまだ夫にしか見せたことないんだけど？」

「貴様まるで自分が淑女かのようなことを言うな。これまでで恥じらう場面があつたとしてその都度、気にしたことがあつたのか？」

「いや無いな。うん。そうね、そういえば無かつたわ」

考え込むまでもなく、即答による一刀両断。

「……………」

「……………」

「では呼ぶぞ」

「ええ、そうしてちようだい」

沈黙の後、辞世は然るべき相手に連絡を入れる。通話中の辞世の隣で女は物思いにふけた。

ああ……愛車が恋しい。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第17話 雛鳥は雷かみなりばな花のもとで

17. 雛鳥は雷花（かみなりばな）のもとで

—— 奈良県某所 ——

町外れから更に進んだ先にポツンと数軒の民家がある。

平面に建てられたモノもあれば中には緩やかな傾斜地に建てられ、その周辺には田畑も散見される。

その内の一つ、近くに設けられた擁壁ようへきに息を切らして全身をジャージで包んだ少女はそこを駆けのぼると段々畑を横切り、上は瓦葺かわらぶき、下は茅葺かやぶきの然程大きくもない庄屋住宅の敷地内へと入る。

「はあ、はあ……」

多少なりともペースが速くなったことを実感しつつ、膝に手を置き肩で息をする。

にじみ出てくる汗を袖で拭うと、赤紅の瞳で空を仰ぎ——

「……………ふうー、よしッ…………」

「たかが十キロ走った程度で息切れするとはそれでも十代の生娘か？

なんと不健康な」

「誰だッ!？」

呼吸が整え終わる頃、素振りの準備に取りかかろうとしたところで不意に声が掛かる。

今の今まで人がいる気配などしなかったし聞こえた声も知らない若い少女の声だ。咄嗟に立て掛けていた木刀を掴んで構える。

「そう睨んで構えなくてもいいだろう。ただの女学生だ、まあ落ち着け。走った後だ水分補給が必要だな。ほらスポーツドリンク、飲むだろう?。」

どこに潜んでいたのか、目頭から放した指で目薬のキャップを締めながら少女がゆっくりと近付いてくる。パチパチパチと幾度か瞬きを繰り返してから首にぶら下がったチェーンに手が近づく。

少女は慣れた手つきでそこに繋がれたメガネのつるを摘まんで耳にかけると、次に差し出したのはどこでもよく見かける青いラベルのペットボトル。清涼飲料水。

しかし、ジャージの少女は受け取ることもなく構えたまま反射で後退る。

「人の敷地内に無断で侵入しておいてよく口が回る」

「まだ警戒心を解かないのか………困った生娘だな」

「荒魂のいない所に刀使が何の用だ」

睨みつけながらジャージの少女はメガネの少女を観察する。

革色のセーラー服の上には汚れ一つない研究用白衣を羽織りそのポケットに片手を収めて、しかし棒立ちしてはいるが腰には佩刀金具とその左側に御刀を佩刀しており鑑こしらは空を向く。

その姿を見紛うことはない。誰だって知っている。コイツは刀使だ、とジャージ姿の少女は決定付ける。

「ほお、わたし己を刀使と見破るとは大した観察力だ。その特技を活かして警察ないしは検事、いや探偵にでもならないか？」

「その左腰の御刀を見れば誰がどう見ても刀使だと分かるだろ」

「日本人はな。だが海外の人間から見れば凶器を携帯するコスプレ集団か何かだと思うぞ？」

「外国人はな。だが私は純然たる日本人だ。そういうお前も日本人だろ」

ジャージの少女が言うように刀使の少女は紛れもない日本人だ。ただ、初見で国籍を問われれば判断は難しいだろう。

なにせその髪は青く、けれど肩ミディアム上まで伸びた毛先は水色であり、ま

るで開花した彼岸花の雄しべや雌しべのように外にハネている。

変わった髪色と髪型をしている所為ではあるが日本人なのは間違いないのだろう。

また、自己申告したとおりジャージ姿の少女も日本人である。

濡羽色ぬればいろの髪で前髪はぱつつんと切り揃えられていて、後ろ髪も背を撫でるようなサラサラとしたロングヘア。

ともに日本人である両者の違いは刀使かそうでないか。

「見かけで人を判断するのはよくないな。なにも黒髪はアジア人だけではないぞ。アフリカや中東の人らも黒髪だ」

「それで、一体なにが言いたいんだお前は」

「ああ、いかんいかん。話が脱線してしまったな………まだ警戒するののか?」

「当たり前だ」

不審者極まりない少女への警戒心を強めることに神経を注ぐ。

何が目的なのか、それが分からない以上迂闊な行動は避けなければならぬ。大荒魂折神紫に感付かれた可能性だってあるのだから。

「ふむ、では自己紹介といこうかお嬢さん。己わたしの名前は——パブロ Diego. Jose. Francisco. de Paula. Juan Nepomuceno. Maria de los Remedios Cipriano de la Santisima Trinidad Ruiz. Pikachuだ デラ サンテイシマ トリニダード ルイス イ ピカチュウだ」

「それはピカソの名前だろ! しかもなんだ最後のピカチュウは! ふざけているのか、怒られる!! というか無駄に発音いいな!!」

相手が名乗った名前は授業で聞いたことのある画家の名前に酷似しているがフルネームらしきものの最後にピカチュウなどとぬかすからそれがポケットに納まる国民的アニメのキャラクターだと真っ先に思い至り、反射的に思わずツツコミを入れてしまう。

「観察力だけではなく博識でもある。やはり将来は弁護士になるといい。では改めて、己の名前は平平ひらたいら 平平へいへいだ。こんななりと名前だがこう見えて吾輩は女である。名前はまだない」

聞く限りそれも偽名だろうと確証を持ち刀使の少女が言い終わった直後、全力で木刀を投げた。

ヒョイ、と避けるどころか回転する木刀を氏名不詳の刀使は驚揺む。タイミングがよかったのか、それとも狙ってそうしたのか丁度柄の部分が掌へと収まった。

「危ないな、ヘルメットを被った二足歩行の猫よろしく指差呼称してなければ死んでいたぞ」

「帰れッ!!」と、ゼエー、ハー、ゼエー、ハー、息を切らしては今日一番の音量で短く怒鳴る。

「ここまで短気とは、これがゆとり教育の弊害というやつか。では改めて、己の名前は正親町三條わがまぢさんじょう 雷丘ライチュウだったが親の再婚により雷電らいでん 雷丘ライチュウになった為、役所で雷電らいでん ピチューへと改名したニート歴わずか一万と二千年目のただの刀使だ」

ランニングによる肉体的疲労に見知らぬ少女の長口上と一時的な緊張からくる精神的疲労が二重、三重と重く押し掛かり。

疲労困憊——目の前で疲弊しきったジャージ少女を目し、平城の刀使は言葉を投げかけた。

「ただ八千年過ぎた頃からニートであるのに飽きてきたんだが………ツッコまないのか?」

「……もういい、疲れた」

「そうか、ならビタミンをとるといい、飛ぶぞ」

「……………ホントに何しに来たんだお前は」

ドサツと崩れ落ちる黒い髪の少女。その場でお尻を両足のあいだ

に落として座る——ぺたん座りの形をとり、精魂尽き果てた顔でうなだれる。

もう相手が何を狙っているのかなどどうでもよくなり、さつさと要件を言っただけを思う。

「平城うちの学長から言われてな、お前を迎え入れに来んだ。十条じゅうじょう姫和ひより」

「……………何……………」

自分の名前を呼ばれ面を上げる。

コイツは今、私の名前を呼んだのか？ 何故私の名前を知っている？ 現職の刀使で知り合いはいない。疑心は一気に確信に切り替わり、背中から血の気が引く。

コイツは折神 紫が放った刺客だ。

武器になりそうなモノを求め視線を交わしたままで手探る。

「めでたくお前も刀使の仲間入りとなるワケだが……良かったな、丁度いいチャンスが巡り回ってきて」

「なんのことだ」

攻撃の意志は感じられない。だがそれも油断を誘うものかもしれない以上、気は緩めれない。

感覚を研ぎ澄ませる。

チラチラと周囲を一瞥し、武器になるような物を探る。

「なんのこと？ お前は折神 紫を殺したいのだろうか？ 母親の仇であるあの大荒魂を。だからこうやって自己満足な鍛え方で無駄な時間を浪費している」

「——ッ!？」

「そんな驚くようなことか？ ちゃんと調べれば分かることだぞ柎ひこいの娘、柎 姫和よ」

この女一体どこまで……。

地面を這う手がひとりでに止まった。

武器を探している場合じゃないと姫和と呼ばれた少女は動かなくなった身体を無理やり動かして後ずさる。あろうことかこの刀使、自分の名前どころか母親の姓まで言い当ててきたのだ。

得体の知れないモノが姫和にへばりつく。

この女は危険だと判断し逃げる算段をたて始める。

「そこで、だ。平城うちに連れていく前に少し基礎を教えてやる。独学や一般人達からの教えではそろそろ限界だろ、受け取れ」

鞘から御刀を抜き取り姫和の前に差し出す。

「私の御刀だ。当然それは真剣だ。刃に触れれば切れるし切っ先を相手に向けて力を込めれば刺し貫くこともできる。復讐を成功させたいたのであれば早いうちに殺し方を覚えておくのは損ではない」

「……………自分の御刀を他人に渡すとか、それは刀使としてどうなんだ？ それにお前はなんとも思わないのか？ 人殺しを手伝うことになるんだぞ」

「そののどっこに問題が？ そう言われても別にとしか思わんな。そもそも、他人の復讐なんて興味はないし誰がいつどこでどうしてどうやって殺し殺されるかなんて己わたしの知るところではないな」

答えると反転、元居た場所には戻らずに数歩進み、そしてまた反転をして黒い髪の少女を見やる。御刀を渡した少女とは目と鼻の先までの距離。そう、つまりは姫和の持つ御刀の間合いに自らの身体を差し出している。

すると何をするかと思いきや白衣のポケットからメガネ拭きを取り出してレンズを拭き上げ掛け直しては、口を開き――

「それとな、十条 姫和よ。ナニも斬ったことのないただの小娘風情が刀使に傷をつけれると思うなよ」

—— 圧が膨らむ。

なんだこの重圧は。急に、身体に纏わりついて……あの女から発せられている？ 先ほどまでとはまるで別人じゃないか……。

今日に限って立て続けに後退る行為。

だがそれも危機に迫る恐怖からではなく強者が発する圧に負けているだけが変わっていた。

身体の震えもないし、心は落ち着きだしている。

分かっている……。

自分は弱い。

言葉にしてみせたが言うほど覚悟なんて出来ていないし、御刀を振るう者としての技量なんてまだまだだ。

どう転んだって今のままじゃあの人の傍には追いつけない。

……あの人？

不意に出てきた心当たりのない人物を思い描きながら疑問にも思うがしかし、それは直ぐに霧散し、目の前の立ちはだかる壁へと意識は向く。

「本当になんなんだお前は」

「さて、な。ほら、いつでもいいからさっさと斬り殺しにこい。お前の下半身股下同様、産毛すら生えてない剣のド素人であるお前の剣など誰一人として殺せる者などいないのだから」

「聞き捨てならないことを言ってくれるが……本当にいいんだな？」

「ああ構わんよ」

余裕しやくしやくといった具合で容認を返答する。

刀使の魂と呼べる御刀を刀使自らの手で手放したのだ。とても正気の沙汰とは思えない。しかも相手は完全な丸腰、荒魂との戦闘経験があるとはいえ御刀の無い刀使など一般人とそう大差ない。

「ふう……」

息を吐きだし正眼の構えで相手を捉える。目の前の刀使は隙だらけで不遜さを隠さない自信に満ちた顔から語ってくる。

こちらからは何もしない、どうぞ煮るなり焼くなり好きにしてみるがいい。

鼻につく態度なのは気に入らないが自分が今どれ程のものなのか力量を推し量るまたとないチャンスだ。遠慮はしない、試そうとしているのはそっちだ。怪我をして再起不能になったとしてもそちらの過失だと自身の正当性を訴えては足を八の字に浅く開き、中段で構える。

「……はああああ!!」

自分を鼓舞するような掛け声の後、地面を蹴り出し構えを上段に移す。

間合いを確かめるまでもなかった。既に彼女は間合いの中にいるのだから、後はどう攻めるかだけだが御刀を受け取った時にそれは既に決めていた。初手は袈裟斬りと。

「暗殺を企てているヤツが声をあげるな。それになんだ、そんなモノかお前の実力は。母親から剣を学んでいたのではないのか？ 柊家の人間に教わっているんじゃないのか？ それでは母親にすら劣るな。いや、そもそもが柊 箒という刀使も所詮はその程度ということか」

「ぐッ！ 母さんを知らないお前が知ったような口を聞くなッ!!」

空を斬った数瞬、相手からの口撃が繰り出されるが受け流すことができずに心が乱される。

ならばと次の一閃は足元に狙いを定めるがこれも初撃同様に手応えを得ない。

「そんな体たらくであるならば復讐など諦めて大人しく父母共々、仏壇か墓石に一人寂しく線香でもあげていろ」

「——ギイツ!!」

目を見開くと頭に血流が昇る。力を込め、斬撃は突きへと切り替わる。

力むのは亡き父と母を侮辱されたというのもあるが、復讐を成さずにおめおめと生きる自分が許せないからだ。

強張るところか姫和の動きはキレは一段と増す。

獲ったッ!!

切っ先が白衣に触れた。今度こそ当たる。

確信を得たのも束の間、顔を緩ませた少女は一転して解釈不能に陥る。

いないッ!?

後わずかのところで白衣姿の刀使の肉を削げるハズだった。なのにどういうことか。青い髪の少女の姿はどこにも見えない。

予想外の出来事に困惑の表情を浮かべると同時に手元から衝撃がくると次の瞬間には片側の前腕に衝撃が走り、痛みで態勢と自由を失う。

手放した御刀は宙に舞うことも音を立てて地面に刺さることもない。目に入ったのはむき出しの刀身がいつの間にか鞘に収まって滞空している御刀の姿。

どういう……ことだ!?

物理的にそのような状態は起こり得るはずはない。ならどうして。次々と思考を巡らせ続ける中、右側から猛烈な圧が姫和を襲う。

相対し、そして消えていた刀使が視線の外にいる。迅移も使っていないのに生身の人間が瞬時に移動するなど聞いたこともないし、こんなのは理解が追いつかない。

これが最前線で荒魂と戦う者との差……それとも経験の差だともいうか。

悠長に思考を続けていると新しい衝撃が腹部に襲う。

「——ガッ!?!」

掌底が打ち込まれ、そこで姫和の意識は失う。

倒れむ前に刀使の少女は姫和を片腕で支えた。

「ふむ………初めて対人による殺人を試みてのコレか。できれば『ひとつの太刀』をこの目で見たかったがまあいい。及第点には届かないがこれは使えるな」

独り言を漏らし鞆に収まった御刀を佩刀金具に着け終わると姫和が着ているジャージのポケットを弄る。お目当ての鍵モを見つけると姫和を俵担ぎで抱え、家の中へと消えていった。

—— 数時間後 ——

「……………ハ、ハハ……………はっ!?!」

直ぐに身体を起こし左右に首をふり、周りを見渡すとそこは見慣れた畳部屋だった。しかもご丁寧に布団を敷かれ、床に就かされている。

私の家？ 確かあの女から一撃を貰って………そうだ、あの女はどこへ！

立ち上がろうと布団に手を掛けたところで鼻孔に香りが伝わると異変だと気付くがスンスン、と嗅ぎなおす。

これは、味噌汁の匂いか？

「おお、丁度いいタイミングで起きたな。手を洗ってこい、食事にしよう」

現れたのはピカチュウだの平平だのと偽名を語った素性が分からぬ刀使の少女。匂いの元はそれであると一目瞭然だろう。鍋の取っ手を持つがゆえに塞がれた両手が目に入る。

「……何故勝手に人の家の台所を使っているんだ」

「気にするな」

「気にするだろ」

早歩きで台所へと赴く。乱雑に荒れた状態かと思いきや小鍋やフライパンが置かれてはいるが使用したと思われる菜箸やスプーンなどが洗い桶の中に浮かんだり沈殿され、台所の状態は到って奇麗にされてある。

調理して出たと思われる生ゴミもゴミ箱へ入っていた。

「ああ、食材はこちらで用意したものを使ったからな安心していいぞ。流石に他人様の家から食材をくすねてまでなんてことはしない」

最後の小鉢を取りに来た少女が通りすがりに姫和に声を掛け、居間に戻る。

「……………」

食卓に並べられたのは先ず大皿。四、五品目の野菜炒めに冷凍食品と思われるたこ焼き、ミニハンバーグにナポリタン。それと山盛りの具材が入った焼きうどん。

ほうれん草の胡麻和えが小鉢に盛り付けられ、小鍋には湯豆腐と、これはポン酢だろうか小皿に入っている。

そして具の無い味噌汁に白米と、ハンバーガー。

何故この組み合わせでハンバーガーなんだ……いや、そもそも米とパンと麺類……。

「どうした食べないのか？」

「炭水化物が多いし組み合わせとバランスはどうなっている……そもそもどうしてそう平然と食べていられる」

「どうしてもなにも腹を空かせたんだ食べる以外の選択肢などないだろうっ。」

ムシヤムシヤと頬張る刀使は咀嚼と喉を鳴らす合間に言葉を交わす。

「そういうことでは……」

——きゅるるるるる

腹を鳴らし耳と頬を朱く染め、黙り込む。

「遠慮することはない。金銭を要求したりはしないから思う存分食

せ」

「……いただきます………美味しい」

食卓に飾られた中で先ずは味噌汁に手を伸ばす。

一口、音を立てず口に含むと、次いで野菜炒めに箸を伸ばし口に入れ、咀嚼し、味わい、ポツリと言葉が出る。腹を空かせていたこともあり箸が進んでいく。

「御代わりはあるからしつかりゆつくりと味わえ」

食事を済ませた姫和と刀使の少女は食器が片された食卓を囲う。食後のお茶を喉に通していると不意に、刀使の少女が口を開きだした。

「食事も済んだことだし改めてキッチンと自己紹介致そうか」

「はっ？」

スカートから取り出したスマホを操作しBGMが流れ出しバツと立ち上がると、手を胸に当て少女は語り部のように語り出す。

「芝居に魅入られて幾星霜、紆余曲折の荒波の中、芝居をこよなく愛し！　そして愛され！　遂には芝居をおかずに自家発電をキメ今に至る!!　そうッ!!!　己わたしこそが平城学館の小間使いにして刀使史上初、次期アカデミー賞並びにゴールデングローブ賞さらにはカンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭、ヴェネツィア国際映画祭、モスクワ国際映画祭をも総なめにする女。それが――」

バツ、と大袈裟に両腕を広げ天井を仰ぎ。

「――この己わたし、一刀いっとう 雷花らいか、その人だッ!!!」

振り上げた拳を高らかに掲げては名を告げる。それも仰々しく。一体なにが始まったというのか目をパチパチとさせ置いてきぼりをくろう姫和を他所に依然スピーカーからはBGMが鳴り続ける。

「だが己わたしの演技力は皆無だ。悲しいほどにな」

仰いでは目から流れた一滴を畳に染みこませ、頬に残った雫をそつとふき取る。

「故に狙うはゴールデンラズベリー賞だ。切実なまでに喉から手が出るほどに欲しい。なんだったら大金を積んでもいいとさえ思う」

「情報過多過ぎる……」

「もう一つ、これは余談だが雷かみなり花ばなと書いて雷花らいかと読む。間違えないように」

「どうでもいいし、テンションについていけない……」

「そうか、それは何よりだ」

頭を抱え突っ伏しそうになる。この女、一刀 雷花と話していると生気を吸い取られてしまうと錯覚に陥っていく。いや、これは寝て起きても疲労感が残る感覚に近い。

姫和は完全に疲れてしまった。

「というか、どれが本名なんだ……」

「今々にフルネームを言ったではないか、一刀家の雷花嬢だと」

畳に置かれた御刀を佩刀金具に着けながら雷花は返答する。

「なんだ聞こえなかったのか？ 耳の遠いヤツめ仕方ない、ではもう一度最初から——」

「それはもういい。それよりピカソや平平、正親町三条のくだりは何

だったんだ」

「その辺はただの即興だ気にするな」

「頭が痛い……」

「なら真面目な話をしよう。お前の今後についてだが刀使になるつもりはあるのか？」

姫和が頭を抱えていると先ほどのふざけた態度とは打って変わって真面目なトーンで雷花は話し出す。

「脈絡もへったくれもないのだが。お前は私を連れにきたんだろ何を確認する必要がある」

「五条学長からは連れて来いと言われたただだが無理強いしてまで連れて行く気はない。それでは人さらいだ。それに、どうせ五条学長からも刀使になる気があるかどうかを聞かれる、後か先かの違いだ」

随分とまともなことを言うなコイツ、さつきまでののは本当に何だったんだ。と、心の中でひとりごちるだけに留めておく。また同じテンションで喋られては身が持たないから。

そう思い到り、姫和は話しを進める為に雷花の質問に二択で答えしてみせる。

「行くのを拒否したらどうなる」

「早々にここから立ち去る。復讐も、それに伴う準備も何もかも自分独りでするといい。当然だが伍箇伝、刀使に関わりがない以上、己は一切の助言もしなければ助力もしない。ああ、復讐のことは他言しないそこだけは確約しよう。まあ、親戚の柊家の連中がどこまで準備できるかは知らんが」

「じゃあ、行くと言ったら」

「その場合は予定通り平城、ひいては五条学長のもとへ連れていく。今日この日をもってお前も晴れて刀使だ」

「……………」

手で口元を覆い隠す。

これはまたとない千載一遇のチャンスだ。刀使になれば大荒魂折神紫を暗殺できる可能性が近づく。大きな前進だ。このチャンス、モノにしなければならぬ。

しかし、本当にこの一刀 雷花という刀使を信用していいものなのか？ ひよっとしたらこれは演技で、暗殺を未然に防ぐためではなく見せしめとして現行犯で捕らえ処刑するかもしれない。

まだ疑念が拭えない以上、懐疑の念がまわりつく。

「じっくりと考えるといい。お前の人生の分岐点だ後悔のない選択をしろ」

目を瞑り、その言葉を噛みしめる。

後悔のない選択。

自分にとってそれは何なのか、改めて自分に問う。

復讐を諦めて貝のように噤つぶみ閉じこもることか？ 機会を伺い、そしてその機会を失って何もかもを棒に振ることか？ 馬鹿正直に突っ込み玉砕することか？

違うだろ！ そんな人生は。私の望むべき、進むべき道じゃない！

私は私がやるべき事を成すだけだ。だから……。

目蓋を開き、重い口を開く。

「……分かった、私をその五条学長のもとへ連れてつてくれ」

「思ったよりも早い決断だな。だがいいんだな、それで。後からやっぱ止めるはなしだぞ」

「私のあるべき日常はもうどこにもないんだ、戻る気もない。覚悟も、進む道も、決まっている」

「フツ、いい面構えだな。いいだろう、なら表へ出ろ」

今日という日、青い雷かみなりばな花の下で雛鳥こがらすは孵化し、鳥は人へ。  
少女は復讐の鬼へと到る道を歩みだす。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第18話 刀使へとなるため

## 18. 刀使へとなるため

「外に出てこれからなにをするつもりだ？」

雷花らいかに言われ自宅に保管していた御刀——小烏丸こがらすまるを持ち出した姫和は彼女とともに外へと出るが、その後暫くは徒歩に興じていた。

「出会い頭最初らへんに言っただろ、基礎を教えてやると」

振り向くこともなく左耳に付けたエメラルドグリーンのイヤリングを微かに揺らし、正面を見て雷花は言う。

進む度に人里は離れ、人つ子一人誰一人として気配がない。あるとすればそれは二振りの御刀を持った二人の刀使。

「それは平城へいしやう学館がくかんで教えてくれるんじゃないのか」

「今編入しても新しい人間関係の構築に寮生活、さらには荒魂討伐も行うんだ。慣れない環境下での生活でしばらくはそれで手一杯だろう。刀使だって義務教育を含む学生だ一般科目を学ばないとならないからな、短期間で最低限、本当の剣術を叩き込んでやる。向こうに行つて編入するのはそれからだ」

「授業は必要な出席日数の確保と補習が回避できる成績があればいい。一日でも一秒でも早く剣術を学べるなら教員に教えてもらったほうがよくないか？」

「相模湾の一件から荒魂の出現は減りつつある。教員の中には討伐経験の乏しいのもいるだろうがそんな先人達からなにが学べる？」

「基礎は学べるだろう」

目の前にいる白衣姿の少女に姫和は返す。

「基礎はな。じゃあその先はどうする？」

「どうする……って、その教員がダメなら別の教員、それでもダメなら

高等部の先輩から指導を受ければいいだろう」

至極当たり前のことを述べる。これぐらいのことは考えるまでもないがこの方法では何か問題があるのだろうか。

雷花からの問には意図が見えない。

「ならその方法を選んだとしよう。それでお前、そこから一体何十年かけるつもりだ？ そんなやり方ではいつまで経っても折神 紫は斃せないし復讐など夢物語だ」

「だが他に方法はないだろう」

「いいや、ある。お前の目の前にいるこの己わたしがな」

「やけに自信過剰だな」

歩きながら呆れ返る。

言うに事欠いて自分がその方法だと抜かすものだから、それはないだろう。と、心の中でポツリと呟く。

「当然だ。己わたしの辞書に勝負と勝ちと負けという文字はない。あるのはシナリオ構成、役者、背景、演出、小道具……芝居に関わる文字だけだからな」

「それ意味あるのか？」

「ないな」

「……………」

下唇を噛み締め顎に小ジワを作る。

この女は一体全体どこから本気でどこまでが冗談なのか、本気で凶りかねる。

「これが己わたしだ、理性を解き放ち本能で受け入れろ。さて、じゃあ本題と  
いこうか」

修練前なものにも関わらず精神的疲労が姫和に押し掛かることなどつゆ知らず、雷花はマイペースに物事を進めようとする。

「修練の前に一つ制約をつけてもらう」

「制約？ なにをだ？」

「刀使として平城に編入してから最低でも二年は我慢しろ」

「はあッ!? 何故——」

「話しは最後まで聞け」

耳を疑うようなことを青髪の少女から発せられるが間髪入れず反論を試み、反射で口を開くが直ぐに遮られてしまう。

「ッ……………わかった」

「先ずお前には不足しているモノが幾つかある。圧倒的にな」

「不足しているモノ？」

コイツの目から見てまだ覚悟ができていない、とでも言うのだろうか？

姫和は目を細め雷花を見据える。

コチラ 姫和を一切見ずに喋る所為でなにを考えているのか図りかねるままに後をついていく。

「ああ、膨大だぞ。技量は勿論のこと、知識、場数、状況把握に気配察知、強大な殺気を向けられた時の対処法、強者との戦闘、勝つこと負けること両方の経験そして覚悟。挙げればキリがないほどにな」

「幾つか同じことが混じってないか？ 大体、覚悟なんて言っているがそんなモノとうの昔にできている」

「そうは言うがお前、絶対的な力を前にして死ぬ覚悟は出来ているのか？」

「当然だ」

「口ではどうとでも言えるな」

短く息を吐き、雷花は嘲笑う。

口角を上げ、人を小バカにした顔をしているのが背後からでも想像に難くなく、ムツと不快感を顕わにしては小股だった足は大股に変わり地を蹴り出す。

「勝利と敗北を味わってこそ強さ、高みへ登れる。それらが無いと到達出来ぬよ、頂には」

だがそれでも先を進む雷花に並びつくことは叶わなかった。

追い付こうと姫和が歩く速度を速めたのを察してか、雷花もまた時同じくして歩くペースを速める。結果として二人の距離は大して変わらず差は縮まることはない。

「そこで、レクチャーだ。今、折神 紫には四人の護衛——親衛隊と呼ばれる連中が就いている」

「親衛隊……そいつらは強いのか？」

「いや、弱い」

バツサリと切り捨てる。

もはや自信過剰というよりもただ単に情報収集ができるバカなだけでは。そう思い到ると姫和の奥底では公園の水のみ水栓から出される水のようにちよろちよろと雷花への不信感は湧き出す。

「だったら警戒する必要はないだろう」

「折神 紫に比べたらな」

「なんでそういった情報を省く……」

「お前が我慢汗のように先走っただけだ」

「……………」

顎とともに眉間にも小ジワを作り、表情は更にシブくなった。

もういつそのことコイツから斬ってしまえばいいのではないかなどと段々思考が明後日の方へと向かっていく。

そもそも、この女さえいなければ誰かに情報が洩れることもないだろうし、予行演習にもなる。前回は真正面だったから失敗したが今回は背後をとっている。幸い振り向く素振りは見せないしコチラを気にする様子もない。音を出さなければイけるだろう。

極めて無音であるよう親指で小烏丸の鰐をゆつくりと押し上げ抜刀の準備に移る。

「止めておけ」

感付か、れた……？

一瞬——雷花の一言とともに寒気が全身に広がる。

強風に煽られたワケでもないというのに異様なまでに身体が冷える。

寒い。ただただ寒い。

尋常ではないこのただならぬ空気は姫和を怯弱きよつじやくにさせた。この雷花という刀使には背中に目でもついているとでも言うのだろうか。

振り向く素振りなど微塵もなかったハズなのに姫和は制止させられると大人しく鰐から親指を解放する。

「最低でも二年という期間は目安だ。これはお前の技量次第だが才能豊かであれば幾らかの短縮は可能だろう。ただし——」

姫和の行動を咎めることもせず、淡々と口を動かす。

「——年に一度、御前試合がある。殺やるならそこで殺やれ」

それ以外に進む道がないと思わせるかのように。

「だが来年、お前が中等部二学年にあがった時は見送れ」

「……………理由は？」

「お前は復讐相手の情報を何も得ず、何も知らず、一矢報えぬままで敗れ死ぬ気か？」

やはり姫和の方には目もくれず声と言葉は続ける。

「親衛隊そいつらとも戦う機会があるのか？ その御前試合の最中には」

「いや、ないな」

「それだと何の意味があるんだ…………」

「出場者以外は観客席で観戦することができ。決勝戦なら当主である折神 紫は勿論のこと、親衛隊も護衛の為に出てくる。折神 紫を含めた相手の呼吸、癖、一挙手一投足些細な挙動をその目で確かめろ」「見たからといって有利になるとは限らないだろ」

「考えが常人的だな。じゃあスポーツの個人競技に置き換えてみる。トップランカーとランキングにすら入らない奴が対戦する場合、挑む側は相手の弱点となる部分を調べ上げられるが受ける側は情報の無さから初動は相手の様子を見る。つまりは——」

デルタ六面体へと形作られたイヤリングを大きく揺らし、雷花はくるりと反転する。そこで漸く雷花は姫和の赤紅の瞳を。姫和は雷花の翠色すいしよくの瞳を捉える。

「——狙うなら初見殺し、その一択だ」

先ほどまで淡々と喋っていた少女の顔は無表情かと思われたが自分自身が言ったその状況を想像したのか含み笑うようにして口角を上げると人差し指を向けて、告げた。

「ふむ、こいつらでいいか」

周りを見渡し、持っていた袋からガサゴソと中から取り出すと直ぐにそれを姫和に見せる。

「それは？」

「知り合いに無理やり作らせた所謂ただの超硬合金製の鉄球だ。まあ、見ている」

言うや否や掴んだ球体を上に放り投げる。

垂直に上がるそれに赤紅の瞳が引きつられた一瞬。

正面から風圧が押し寄せファサツ、と濡羽色ぬればいろの前髪が舞い上がった。

それは一瞬の出来事。

ダイヤモンドに次ぐ硬度を誇る球体はまたたく間に十字の線が入るとその中心部から四つに別れ、重力に引かれて地面へ落ちる。

なッ……球が割れた!? それも四つに!?

その御刀の切れ味が優れているのか、雷花自身の技量によるものなのか。断面には縦筋の光沢が見られる。鮮やかではあるが姫和の目ではこの断面に生じた圧倒的なまでの綺麗さを目の当たりにしてもどちらなのか判別はできない。

まったく見えなかった……コレをたった一太刀で………?!

球体だった欠片を摘み取りまじまじとそれを凝視しては面に触れてみたがザラザラとした感触がほとんどなく、本当に鉄製のモノかと疑ってみるが重い。

では予め空中分解するように仕込んでいた? その可能性も無きにしも非ずだがはたしてそんなことをしてどんな意味があるのだろうか。

私の『一つの太刀』と同レベル……いや、それ以上の斬撃で斬った  
というのか？

合金の欠片から刀使へと視線を移し唾を飲み込んだ。

あまりにもかけ離れた力量差を突き付けられて言葉がでない。力がある、そして刀使であるにも関わらず折神 紫が祓うべき大荒魂だと知ってもなお何も行動しないこの刀使に対し姫和は先ほどと似通った微かな寒気を覚える。

これだけの力を持ちながら静観しているこの女の神経がわからない。刀使であり続ける理由とは？ 誰が死のうが興味がないなどと言っていたが荒魂から人々を守りたいから刀使になったのではないのか？

そこで一つの疑問が浮かび上がった。

コイツ、本当に人か？

折神 紫という前例がある以上、この女を完全に信用することはできない。念には念を。情報は筒抜けだろうが『一つの太刀』を雷花の前では見せないよう注意を払うと心に決める。

「これをヤレ、とは言わん。幾つかある内の一つでその目標地点としてやっただけだからな。言葉よりも実際に目にした方が実感しやすいだろ」

静かに納刀を済ますと御刀を定位置に戻す。

散らばった欠片達を拾い集め袋にしまい込んでいると姫和の声が耳へと入る。

「今のがヤレる頃には折神 紫を斃せるということか」

冷静を装う。

信用はしない。だが目的の為には利用はする。自分がやるべきことは見えているのだから目の前の畏怖の対象には目もくれない……ハズなのだが。

「いやそんなワケはない」

その対象者は目の前で左右に手を振り調子の抜けたことと言っている。

「はあッ!? じゃあなんでそんなことをやり出した!?!」

「戦いに絶対なんてない。だがこれをモノにすることが出来れば相対したとき同じ斬撃を放てる。そうなれば戦い次第で互角か、それ以上の結果へと繋がる。まあ、お前次第ってことだ」

「私次第……」

「そうだ、だから先ずは基礎たる『身体操作能力』を教えてやる」

「身体操作能力? 剣術ではなくてか?」

耳にしたのは初めて聞く言葉であった。

母や柊家にいる親戚から剣を教わった際に聞くことはなかったその言葉は不思議と自分に馴染んで染み渡る。

「剣術は平城<sup>向</sup>学館<sup>こ</sup>でも教わることができるがまあ、素振りやらなんやら最低限のことも教え込まないと。ああそれで、身体操作能力とは書いて字のごとくだが。十条 姫和よ人間がどうやって身体を動かしていると思う?」

「どうやるものにも、脳から送られている電気信号で身体を動かしているだろう」

「ああ、だが人間は百パーセント完璧に伝達できてはいないし仮にできていたとしても筋肉や骨格といったものの隅々まで動かせるとは限らんだろ? お前、出来るか?」

「できるワケないだろう」

「だろ？ だからそれができるよう徹底的に叩き込ませる」

「分かった、頼む」

—— 数時間後 ——

「ウゝ オゝ オゝ オゝ エゝ エゝ エゝ ツ!!」

「これぐらいで吐くとは情けない。それでも健全な十代の生娘か？」

「ハァー、ハァー……無茶、言う……な……」

雷花が指導を行い早数時間。

行きすぎたしごきはハードトレーニングを通り越してスパルタの領域に入り込んでいた。

仏の顔も三度までという言葉があるがこと一刀 雷花に関しては自己申告通りにそんな言葉はないのだろう。

教育ママ。 鬼ばばあ。 般若。 夜叉。 鬼軍曹。 ギヤング。

悪魔。

彼女 雷花の世界に仏などいなかった。その総てが生ぬるい。

吐しゃ物を盛大にまき散らし植壊土を消化途中の食物だったモノで汚染する。

「とりあえずコレを飲んで水分補給しろ」

「すま、ない——ブフォオオオオツ!!」

思い込みとは常に命取りである。

会遇したときに差し出された清涼飲料水ペットボトルであると、そう思い込んでいた。親切にボトルキャップを外し、渡されたのだから疑いようがない。

しかし口に含んだのは形容し難い液体のようなナニカ。しかも固形物のようなモノがドロリと舌を刺激するおまけ付き。

「汚いなあ」

「なんだこれはッ!？」

今日一番の音量がアップデートされた瞬間であり、色別不明の液体が植壤土を更に浸食しだしては臭気がたちこめる。

そして信じられない言葉を姫和は耳にする。

「私が丹精込めて調合した自家製栄養ドリンクだが?」

「自家製せッ、よくこんなモノを人に飲ませれるな!! お前まッ、自分で味見したのか!？」

「ん? なぜ味見する必要がある?」

「――」

言葉を失い文字通りに絶句する姫和と心底不思議そうに小首を傾げ、真顔で姫和を見据える雷花。いくらなんでも常識が欠如している。しかし――

「必要なのは体内に吸収される栄養素だろ? 一々味覚への刺激を気にしていたらキリがないぞ」

コ、コイツ……!」

冗談ではなく作った本人は到って真面目である。それ故に。

「さて、充分休憩したことだ、再開するでしょう」



## 19. 編入

―― 3ヶ月後 ――

短い月日は過ぎ去り、今しがた戻った二人の刀使が校門を潜り入校する。

通り過ぎた門には表札が二つ。縦書きと横書きの物で特別祭祀機動隊奈良支部と平城学館中等部 高等部、と文字で記されている。

ここは所在地を奈良県のとある場所に構える特別刀剣類従事者訓練学校の一つ、平城学館。

二人は並ぶことなく、けれど歩く速さは一定。迷うことなどはない、慣れ親しむ母校なのだから。

そうして先導者として前を行く一人は革色に染まる平城学館の制服から研究用白衣を帯し、追従していくもう一人は平城とは別の他校の制服を着用し、竹刀ケースを握りボストンバッグを肩にかけている。

「ここが平城学館……」

僅かだが左右に首を動かして敷地内を赤紅の瞳で映す。中等部と高等部の両立させる刀使育成機関というだけあって一般校よりもかなり広く建てられている。

まだ授業中ということもあり喧騒もなく玄関口はしんと静まり返っていた。

校舎に足を踏み入れ、校内を見回す。

「何をしている十条、ぼさつとしていないで歩け」

「ああ、すまない」

立ち止まった姫和に気付くと青と水のミディアムヘアの少女――

―雷花らいかが足を止め、促す。直ぐに返答すると後を追うようにいつもよりも速い小股で姫和ひよりは雷花の後ろについた。

「ここがそんなに気になるか？」

「いや気になるというかあまり変わりがないんだな、と思つて」

「それはそうだろ。刀使育成機関とはいえ中身はただの中高一貫の訓練学校なんだ。一般校と違うのは精々御刀それと御刀それに関するところを扱うか扱わないか、ただそれだけだ」

率直な感想を述べると少しズレたメガネの位置を直し、雷花がそれに答える。

姫和も濡羽色の髪を小さく揺らしながら言葉をつなげる。

「それはそうだが」

「なんだ、復讐以外に何か興味が湧いたのか？ あれか、男か。そうかよかつたな平城うちが共学で。鎌府か長船にでも編入していたら春なんて訪れないから……ああ、いや、花が咲き誇るだけか」

「何をいつているんだお前は」

「そうなった場合、十条は絵になるな。艶やかな黒い髪、サラツサラのロングヘア―、そして時たま見えるうなじ。なによりボディソープじゃなく石鹸で身体の隅々まで洗っているというのがポイント高い」「おい」

三ヶ月という短い共同生活を経て雷花は思い出す。晴れて同校の後輩となった少女の裸体。そして翠色すいしょくの瞳に焼き尽した裸体と下着を。大事なことなので二回にわけ記憶から呼び覚ます。

猥談のスイッチが入ったことに気付き、すかさず姫和が止めに入るが。

「それからマイクロビキニが似合う貧しい双丘、そしてなんと言ってもツンデレ。これもポイント高い……が、いや待て、お前の身体だと

旧型も捨てがたいが新型のスク水。それも脇から腰にかけてラインが入った背面部のY字型も……違うな、やはりここは競泳水着の方が劣情を煽れるな。うん、己わたしの性癖が拗れる」  
「やめろ」

常識人の皮を被った変態メガネの妄想は十条 姫和という少女を燃料にヒートアップし色欲と煩惱まみれの脳内妄想を膨らませた。

標的とされた姫和の顔は朱色に染めてはプルプルと身体を震わせ握り拳に力を込め、制裁の為の準備を完了させる。

「よかつたな十条よ、男女問わずモテモテになりそうで………ハッ！ そうか………滾たぎりに滾りきった男子生徒共が放つ白濁の液体まみれ。これはこれで——」

「おい、やめ——」

止めようと声量が上がりかけたその一瞬で視界が黒く覆われると同時に姫和の顔、特に鼻先と鼻筋あたりに衝撃がかかった。

反動でわずかに後退り鼻を押さえると雷花を見やる。

「痛ッ……急に止まるな——」

「着いたぞ。ここが学長室だ」

目的地に着いた二人は立ち止まった。

雷花の言った通りそのドア上に掲げられたプレートには学長室の文字が掲げられている。

「ん、なんだ緊張しているのか？ 吐くなよ」

「三ヶ月前のことを蒸し返すな！ 大体あの大惨事についてはお前のスパルタと意味不明なドリンクの所為でもあったんだぞ！ 大体、毎食毎食炭水化物中心で組み合わせなんて——」

「はいはい。じゃ、入るぞ」

「あ、おいまだ話の途中——」

姫和からの抗議の声を右から左へ流してコン、コン、コン、とドアを軽くノックする。

今日は編入の為に来たこと、今の今までヒートアップしてしまったことを即座に思い出し、コホンと小さく咳払いをして背筋を直す。

「はあい？」

「一刀です」

「どおぞく」

入室の許可を下したのは柔らかな関西の方言で返す女性の声。取り敢えずは高圧的な人物ではなさそうだとホッと胸を撫で下ろす。

「失礼します」

「失礼します」

雷花の入室から一步遅れて姫和も一言断りをいれて続く。

「あら、雷花ちゃん、長期出張ご苦労様。予定より随分お早い到着やね」

「ええ、思っていたより彼女の筋がよかったですから。あっコレ頼まれてた」

迎え入れたのは苗色なえいろの色無地に薄藤うすふじの紋付羽織を着付けた糸目の女性。

五條ごじょう いろは——旧姓、吉野よしの いろは——にお土産と称した茶菓子ちあしを紙袋かみふくろごと渡す。

「おおきに。それでその子が」

「ええ。十条この人がお前を平城に編入できるよう取り計らってくれ

た五条 いろは学長だ」

五指を開き、差し出すようにその手をいろはに向け学長たる彼女の名を口にする。

「初めまして、十条 姫和です。よろしくお願い致します」

「初めまして、十条 姫和ちゃん。ここの学長をします五条 いろはです。どうぞ、よろしゅうなあ」

自己紹介とともに姫和は三十度ほどに頭を下げ、いろはもまた姫和と同じように自己紹介に続き頭を下げる。

「ここに来る前に学内のことは一通り説明済みですので本題に入ってもよろしいかと」

「おおきに。でもな、平城うちに編入する前にやけどいっぺん確認させてなあ。姫和ちゃん、本当に刀使になる気ある？」

「はいー」

互いに姿勢を正した状態でいろはからの言葉にタイムラグの生じない言葉が返る。

真っ直ぐな瞳に意志の籠もった言葉。生半可な覚悟でここに来たワケではないのはそれが証明してくれている。なにより雷花が姫和を自分のもとに連れてきたのだ、決して中途半端で匙を投げるなどはない。いろはもそこは雷花という少女を信用している。

「決意は……もう固まっているみたいや、ね……………」

「どうかしましたか？」

言葉に詰まるいろはに疑問符を小さく浮かべる姫和。

「わたしら、こうしてここで会おうの初めてやよねっ」

「そうですが」

妙な沈黙が室内を漂うとお互いに気まずい時間が流れる。ただ一人、手で口を押さえて声もない欠伸をする雷花を除いて。

結局、違和感の正体がなんなのか掴めぬまま何事もなかったかのようにいるのは表情を少し崩して喋り出す。

「ほな、これを腕に通してみ。姫和ちゃんも今日から平城ここの刀使になるさかい、制服を着な生まれへん」

透明な包装紙に包まれた平城の制服を受け取ると姫和はそれを見つめる。

母が着ていたモノとは違う制服。それに学校も違う。だけど、これで、漸く同じ刀使となることができた。漸くスタートラインに立た。後は――

「ありがとうございます」

今度は深々と頭を下げる。

濡羽色の後ろ髪がサラリと撫でるように背中から零れて垂れ下がると、そしてゆっくりと静かに赤紅の瞳が見開く。

待っている、折神大荒魂 紫……母に変わり、今度こそ私がお前を葬り去ってやる……!!

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第20話 餞別

## 20. 餞別

—— 平城学館 教室 ——

姫和ひよりが平城学館に編入してから早二週間が経った。だというのに少女には友人と呼べる学友が一人もいない。それもそのはず。彼女が平城学館に来たのは剣を学び、己を磨き、血濡れた道を進むためである。決して友達百人をつくり青春を謳歌するためではない。

一匹狼となる状況になったのも思い返せば編入時の当日。編入してきた珍しさもあつてか姫和の周りには編入初日から人だかりと質問攻めにあう。

だが姫和の素っ気ない態度はシャイで物静かな性格ないしクールな人だと周りに印象付けた。

そこから少しずつ亀裂が入り、溝ができ、やがて不和が生じていく。剣術の授業でも直ぐにそれは視覚化されていた。

息も乱れぬ所作で行う素振りに始まり切り返しや基本打ち、打ち込み稽古にかかり稽古、果ては地稽古でさえも他を圧倒する。

その剣速は雷の如く、振るう圧は苛烈でなにより一撃一撃が受けるには重い。

氷のように凍てついた姿勢が周囲に伝染し、声をかけてきたクラスメイトは一人、二人、三人……と数日足らずで距離を置かれるようになっていた。

孤立。

わずか数日足らずで積もった塵は山脈となり村八分の状態を生み出す。

その決定打ともいえるのが一刀 雷花の存在が一番とっていいほど大きい。

いつものように奏でられた楽曲が段々と音量を増して近付いてくる。本人の気分なのだろうか、シヨパンの夜想曲の次となる本日四度

目の楽曲はトルコ行進曲が反響する。

「十条はいるか？」

「またお前か……」

溜息を吐き出す原因となる刀使が一人、打楽器や弦楽器の奏でる音を引き連れ研究用の白衣が驚きの白さで引き戸をスライドさせる。

二学年上の雷花が断りもなく入室してきたが編入してから一日毎、それも数時間毎にくる先輩刀使の要件は決まっている。

「また雑務を私に押し付ける気か？」

「それもあるが次いでに荒魂討伐だ。さっさとついてこい」

緑のラインが入った白いセーラー襟を引っ張られズルズルと上履きを引き摺り、姫和の意志とは関係なく強制連行が執行される。

「あッ、オイ！ 制服を引っ張るな」

「なんだ、髪を引っ張られたほうがよかったのか？ このマゾヒストめ」

「そんなワケがあるか！ とうとうか荒魂の討伐を次いでとかいくな」

「次いで次いでだ」

諦めたのか観念した姫和が「わかった、わかったから。手伝うからその手を放せ」とついていく姿勢を身振り手振りを交えながら訴え、雷花もその言葉を受け止めてはセーラー襟をスパツと放す。

「……………で、荒魂討伐を蔑ろにしてまで優先させる事とはなんだ」

乱れた制服を正しながら問います。

前回、前々回のように校内の修繕作業や学び舎を一周して清掃する

なんてことは御免であるが……と内心思つて後をつく。

「学長が食べる茶菓子のストックがきれかかつていてな、それと己も時々食べさせてもらっているんだ補充しないとマズい。」

「そんなことで荒魂討伐を片手間で済ますつもりか」

今度はお使いか……。

「授業を受ける時間が減っていくのだが」

「気のせいだ。仮にそうだとしてもお前の学力なら問題あるまい」

「いや、大ありだろ。鍛錬の時間が減る」

「なら勉学のうち予習か復習、もしくは両方の時間を減らせ。いや、もういつその事剣術以外の時間は削れるだけ削れ。寝るな、食うな、飲むな、吐くな、排泄するな、喋るな、聞くな、息をするな。何だったら剣以外にも持つな」

立ち眩みのような感覚が襲い掛かる。だが一月以上の共同生活下で雷花という少女の言動はわかってきたのだが如何せん慣れない。仕方なく聞き流すだけに留め言葉を続ける。

「お前もう無茶苦茶だぞ。補習を受けるところか剣を握る時間………いや生活することすらままならない。それでは本末転倒じゃないか」

「フツ……それぐらいなら如何様にもできる。いやどうにかしてみせろ、自己管理と時間管理は社会人なら当たり前のことだぞ。今さらなにを言っている？」

「それには同意だが、私もお前もまだ学生だろ」

目の前を先導していた研究用の白衣が急に止まる。

「え？」

デルタ六面体のイヤリングが宙で跳ね上がるとメガネチエーンが白い裾とともに翻り、キョトンとした表情が姫和を見つめる。

「……ウソだろう？」

「ウソではない。私もお前も刀使で学生だ。一体なにを言っているんだ？」

翠色の目が見開き文字通りのきよとんとした表情を向けてくる雷花に対し、姫和も真面目な表情と声をもって答える。

「……あーそうか。そうだな、うん。これは夢だな。そうに違いない」  
「——ッ!？」

突如として雷花の手が姫和の胸部を捕らえる。

「なにをしている……」

なすがままされるがままに胸部を包む五指が不規則に動き続ける。

「いや、なに。今この時が夢か現か確かめたくてな……ふむ、この形やはり馴染む——」

「フンツ!!」

「——オツと、以前よりも速い挙動だ。修行の成果が出てきているな、いい傾向だ。だが拳であれ剣であれ無言で繰り出せ、フィクションじゃないんだから一々声を発するな」

触れるか触れないかの紙一重で上体を反らすと今度は姫和への啓蒙とともに反対の手が再び胸部を覆う。

「自分ので試せッ!!」

何事かとまばらに各教室のドアが開き生徒達が顔を覗かせ、騒ぎの中心部たる女子生徒達に視線が集まったのは言うまでもない。

—— 平城学館 敷地内 ——

「荒魂の討伐、それと買い出しに行くんじゃないのか」

雷花に連れられて外に出たはいいが歩くこと数分、二人は校門を出るどころか学内を今だ歩き続けていた。

答える気がない雷花に変わり姫和はスペクトラムファインダーを立ち上げ荒魂の出現位置を見ようとするも反応らしいモノは何一つとして浮かび上がらない。

騙した……？

信用に足る人物ではないが言動がアレなだけで今さら不意打ちをかますような実力でも性格でもない。あるとすばセクハラか突拍子もない思い付きか。

なににせよ、雷花が口を開くのを待つほかない。

「先ほどは買い出しに荒魂討伐と言ったがあれはヒ素だ。あ、間違えた嘘だ」

「だろうな。スペクトラムファインダーに一切反応が出てないんだ、それでこんな人気のない所に連れ込んで一体なにをやらかすつもりだ？」

また口クでもないことでも思い付いたのだろうと睨む。何故そうやって直ぐふぎけるのか。精神的にもくたびれた身体から溜息が無

意識に吐き出された。

肩肘張るのもいい加減バカらしくなってくるので一人で仰いで空を流れていく雲を赤紅の瞳で流し見る。

「ああ、この度卒業することになってな」

「……………は？」

適当に聞き流そうとしていたら聞きなれない単語が唐突に耳へと入り靴底が地面から離さないでいた。

今、なんて言った？ 聞き間違いか？ 今雷花コイツは卒業と言ったのか

？ この時期にか!? 何故だ……何故このタイミングで……!

過去の自分とはなんだったのか。雷花の指導で今では別人のように成長している。錯覚などではない。これは紛れもない強さ、その入り口から漸く踏み出し、そして歩き出せた。

自分はまだまだ強くなれる。なのに、その矢先に指導者が不在となる事態。

いつの間にか拳をつくり、今にも音が鳴りそうに聞こえてくる。

卒業なんてまだ先の事だと思っていたのに。どうしてそうなってしまったのか理由を探そうとしている姫和を尻目に雷花は口元はまだ動く。

「わたし自身全くと言っていいほどめでたくはないんだがどうにも仕方なし否応なしにな……こうしてめでたく親衛隊入りとなってしまうた、今日はその報告というワケだ」

「いや、ま、ちょッ、待て……」

また質の悪いおふぎけなんだろう？ いつものおふぎけたBGMはどうした。こういう時に使わないでどうする。

どう取り繕ってやればいいのか、気まずさを微塵も隠そうともしない困り果てた顔が晒された。

普段の言動からは想像できない表情にあてられ言葉に詰まる。

どうしてそんな顔をするんだ。まるで本当の事を言っているみたいじゃないか。

「いやはや、まさかお前の敵対する側に回ってしまうとは……」  
「待ってっ!!」

その態度がどこまで本気なのか。腰に手を当ててポリポリと青色の後頭部を搔いていると怒鳴り声が正面から迫りくる。人気のない場所を選んだのだから当然、目の前の姫和が発したモノだ。

「それは……嘘じゃ、ないんだな？」  
「ああ」

俯く姫和から出される声は弱々しく、相對する雷花も彼女に感化され活気は打ち消されていた。

とてもじゃないが感情の処理が追いつかない。喪失とは違った感情が姫和の心をかき乱す。

「断ることはできないのか……?」

か細くなるがそれでも声を絞り出した。

ようやくスタートラインに立つことができた……まだまだ教えてもらうことが山ほどある……それなのに……それなのに……それなのに……  
なッ!!

「顔を上げろ十条 姫和」

ハッキリとした声が姫和の耳に入り込む。

その声に俯いていた顔はゆっくりとだが上げて雷花を視界に入れる。

「なに泣きそうになっているんだ」

「泣きそうになどなっていない」

いわれのない指摘から潤みだしていた赤紅の瞳を彼方へと反らす  
が、それでは彼女の言葉を事実だと認めてしまいそれはそれで癪だ  
と、時を置かずに翠色の瞳を再び捉える。

「まったく、このツンデレ娘は……まあいい。決まったことはどうに  
もならん以上、利用させてもらうだけだ。十条」

「……なんだ」

「わたし己はこのまま親衛隊に入るが何かしらの情報が入ればお前に報じて  
やる」

「ありがたいが、それは結構リスクじゃないか？ もしバレでもし  
たら」

「伝える手段なら幾らでもある、そこは安心しろ。だが……その為  
はこちらが提供したことに對してお前は享受しなければな」

「なんだ？」

普段よりも低いトーンで話すことからこのタイミングでふざけだ  
すことはないだろうがそれでもやはり警戒はする。何せここに来る  
までに幾つも前科があるのだ、どうしても必要以上に身構えてしま  
う。

「ああ、今から見せる技を会得しろ。それも暗殺する御前試合までに」  
基本となる五つの型はある程度形になるぐらいには習得させられ  
たが別の新しい型か……それとも今まで覚えた型その先があるんで  
も？

劍術の基礎とともに半ば強制的に仕込まれた一刀 雷花による劍技——その五つの型。

速さの雷電。イカズチ

威力の焰燃。カグツチ

体捌きの虚空。オボロ

変化の水龍。ミズチ

そして、破壊の土公。ドコウ

この数ヶ月で五つの型はそれぞれ一式までは形にすることができている。雷花自身も時期を見て二式を教えると明言していた。であれば後者である二式を、もしくははこのタイミングで全ての型式を伝えようとしているのかもしれない。

なればこそと姫和は雷花の一挙手一投足、ありとあらゆる挙動を見逃すまいと全身を強ばらせる。

「これから教えるのは今まで教えた型じゃない」

「なに……？」

「いや、正確には一つの型を三式まで。そこからプラスアルファで己わたしのオリジナルを見せる」

「オリジナル……お前、一体いくつの劍技をもっているんだ」

「既存の術技なら十五……実戦に使えるオリジナルであれば八つほどだな」

その数に戦慄するほどではないが、やはり異常に思える。荒魂相手にこれほどまでの劍技を必要とする理由はなんなのだろうか。大荒魂タギツヒメの存在を容認しておいてもなお戦いの準備をしている。

「よくもそんなに考えつくものだな」

短い嘆息とともに言葉が吐き出された。

「フ、とうとう尊敬……いや敬愛してくれるようになったか？」

「これは呆れだ」

「嬉しさのあまり嬉ションしたくなつたか？」

「これは呆れだ」

「校門をバツクにブレイクダンスを踊りたくなつたか？ フラツシユ  
モブの一人として出演してもいいぞ」

「これは呆れだ」

「世界の中心で愛を叫びたくなつたか？」

「……………これは呆れだ」

「美濃関、鎌府、綾小路、長船、そして平城うちに盗撮したお前の着替え—  
」

「——教えるなら早くしろおツ!!!」

袋小路に陥りしびれを切らした姫和が遮る。その直後、彼女の頭の中で不穏な二文字が反響しだしインテリメガネの皮を被つた変態に問い詰める。

「どうかいつ盗撮したんだ！」

「知りたいのか？ ちょっと待ってクラウドデータから引っ張って  
……………」

「オイ、本当に盗撮したのか!？」

研究用白衣からスマホを取り出しかけたところでその腕に姫和の  
両手が力強く掴んだ。

「……………ナンノコトダ？」

「目が泳いでいるぞ」

「コツチを向け」

「……………」

「コツチを見ろ」

放そうにも逃がす気はないらしく、万力の如くジワリと締める力は増しだす。

レンズ越しに映る翠色すいしよくの瞳が明後日の方へと動くも赤紅の瞳がそれを許さず目と鼻の先まで詰め寄る。

「……………」

「オイだんまりするな」

「……………いいだろがッ！ 裸やパンチラ、ブラチラの一つや二つ!! 胸以外にもアソコとケツの穴の小せえヤローだなアッ!!」

「なッ、自爆した当人がなんでキレてるんだ！ ホント汚い言葉を使うよな!」

「そこに綺麗な柔肌が無防備で転がってるんだ、画像と動画に収めなくなるのが人間の性さがつてもんだろがッ!!」

「なんでそんなキャラがブレブレ…………グフォ——」

言いかけたところで雷花の姿が消えだすと次の瞬間——には右腕が掴まれ、姫和の足が払われた。音も無い技の前に身体は地面に沈む。

所謂柔道の出足であしはらい払をかけられただけに留まらず今度は腕挫うでひしぎ十字固による雷花の攻勢は続く。

「官能の偉大さ重要さを理解できんとは嘆かわしい、なッ！」

「お、前のオは…………ただの性欲だろ。大体、女が女に欲情してどうす——」

「こ、れ、は、か、ん、の、う、D A ッ!!」

語尾を強める度に締め付ける力は増し、その威力は上限というものを知らない。

「そしてえ……性癖とは自分で扉を開くもの、今がそのときツ!!」  
「——いッ、痛い痛い痛い痛い。ギブだギブツ! 私が悪かったツ!!」

大空に唾液が飛散するほど大口で発した言葉に骨が軋み悲鳴は増幅する。

常人ならばとつくの昔に折れてもおかしくない腕挫十字固だが雷花の度を越えた修行と自家製飲み薬を強制的に服薬を強いられた姫和の肉体強度は十代とは思えないほどに高めてくれた。

「そうか、giveか。仕方ないなこの欲しがりさん、め☆」

「違ッ、違うと言つて——」

誰が言ったか怒りは力となる。ネガティブに捉えられるがスポーツや勉強、遊びでもなんでもいい。とにかく何かしらの原動力となるには違いない。その瞬間が十条 姫和にも訪れる。

「——るだオオがああアアアアアッ!!!」

「ファッ!」

猿叫じみた叫びが雷花の胸をお返しと言わんばかりに容赦なく驚かす。

この状態で己の胸を掴むだ!?

「フッ、やるな十条……だがこの一刀 雷花、この程度の痛みに屈するな——」

この程度の痛みは余裕だとすまし顔を見せる。

「痛い痛い痛い痛い痛い!!!」

が、そんなものは30秒と持たなかった。

「HA☆NA☆SE」

「誰が放すか」

「わかったわかったわかったわたし己が悪かった」

「もうしないな?」

「しないしないから、早く力を抜——力を抜けエエツ!! 乳房がもげるツ!!!」

じゃれ合いもほどなく終わり両者のボルテージは右肩下がりに急降下した。

「……………なにをしているんだ私は」

両ひざをついて跪く姫和はどうにかして正気に戻る。

「わたし己も一体なにをしていたんだ……………」

雷花も自我を取り戻し大の字で空を仰ぐがやがて乱れた呼吸も落ち着きをみせ上半身を起こす。

「…………話しを元に戻すぞ……………」

「…………頼む……………」

盛大な時間浪費の後、漸くまともな思考をすることができるよう

なった二人は当初の目的へと軌道修正を行い、五つの型——二式、そして三式とその身で受け、身体と脳に刻む。

教授できるタイミングは今日この一度だけしかない。それ故にそれぞれの術理の特性を把握した上で受ける。雷花が加減したお陰もあつてか小烏丸の刀身は刃こぼれ一つしなかった。焰燃型カグツチや土公型トコウもあつたというのに雷花が本気で型を繰り返して出していれば今頃は小烏丸もただでは済まなかつただろう。

「さて、次が己わたしのオリジナルだ。心して受け取れよ」

そう言い終わると御刀を真下に向け切っ先を地面へ垂直に突き刺す。

素手？ 一体どういう。

「お前が言いたいことは分かる。だがこれは安全の為だ、納得してもらうしかないな」

「……それほど危険な技なのか？」

「ああ、コレは容易に防ぐことなどできなくてな」

「写シで防いだとしてもか？」

「写シなど意味を持たない。決まれば必殺にして絶命。例え御刀で防いだとしても御刀それごとと人体を余裕で貫く」

「!？」

言葉が一瞬出なかった。彼女の言っていることを言葉通りに受け取ればそれはつまり——

「……試した、のか？」

「荒魂討伐のときにな。駆けつけた時には手遅れ、既に荒魂に成り果てていたよ」

過去——自身のした行為の肯定。

「知り合いだったのか？」

「仮に知り合いだったとしても然程深い仲というワケでもなかったな」

「後悔してるか？」

「さて、な……まあ、後悔ならとつくの昔に別のことでしたがな」

言葉を濁しメガネを外してレンズを拭き、空に翳す。

今まで見せなかった感情を悟られぬよう顔を隠している所為で雷花が今何を思いどんな表情で言っているのかわからない。

「お前が私に構うのはそういつた経緯があるからなのか？」

「悔やんで感傷的になったワケじゃない。立ち合ったとき、ただお前に剣の才能があると感じたから己わたしの技術を教えただけだ」

メガネを掛け、佩刀金具から鞘を取り外すと今度は太刀緒金具から鞘を抜き、それが土に沈む。

「お喋りが過ぎたな。さあ、写シを張って構えろ」

「安心したよ」

「何がだ？」

「このまま素手の技を教えられるんじゃないかと思ってな」

「己わたしは剣術以外は知らん」

突き立てた鞘尻が正面の姫和へと向く。

「今から教えるこの技は突きに分類されるモノだ。十条、お前の『一つの太刀』が防がれるあるいは回避された場合、次の手立てはなにか考えているか？」

「正直考えていなかったな。柊の人達からは使えば必中と教えられてきたから」

「荒魂にならそうだろうな。だが人、それも一度その技を受けた大荒魂が憑依している刀使に使うんだ、防御や回避といった行動を執られたらあのレヴェルの武芸者なら刹那の瞬きで命をとられる」

武芸者……？

姫和の耳に聞きなれない言葉が混じるが一先ずの疑問は置き、技を会得することに専念し雷花の言葉に耳を傾ける。

「その為にコイツを餞別代わりに教えてやる。どう使うかはお前次第だ」

「……この場合、私が送り出すのだから餞別じゃなくて寸志じゃないか？」

「こまけえことはこの際どうでもいい……気張れ」

吹き出される圧に気圧されて無意識の内に土を擦った音で気付かされる。

ああ……こんなにも遠く、まだ高いのか。

強さに近付こうとする度に思い知らされることを。強者の頂へと続く道のりが如何に険しいことを。でも、進む。乗り越えてみせる。

「いつでも」

全身の脱力により両膝の関節を僅かに曲げ半身で構える雷花と正眼に構え正面を晒す姫和。

姫和の目には刀文の模様と平地が目映り、雷花の目には両刃の煌めきが映る。

水龍型のような変化を加えなければ鞞尻は直線的にくる。問題はその威力だが関係ない、チャンスは今日この一度きりのみなのだから。故に物にする。

「では、行くぞ」

「ああ」

姫和の短い返事が終わるとともに雷花は地面を蹴り、踏み出す。右肘が下がり小さな溜めの後鞞尻切っ先が姫和の胸元に迫る。

来る。

？偽りのない圧を孕んだ突きが奔る。

自分が成長しているのは実感していたが、だからこそコレは防げない  
いと理解する。

突きの速度と雷花の発する圧が相乗し小烏丸での防御が間に合わず、鞞尻がめり込む胸の激痛がそれを思い知らす。

突きの衝撃が2メートル程にわたって二筋の轍わだちを作り出した。

「気絶はしなくなったか。上出来だな」

「バカを、言うな……呼吸、する、のがやっとなん、だぞ……」

肩が上下に動き続けながらも小烏丸を杖代わりにしてかすれた声で答えるが素直な身体は悲鳴をあげ、直ぐに膝と地面は密着しスカートを汚す。

「そうは言うが写シは剥がれていない。昔のお前だったら今ので死んでるか、よくて失神していた。これほどの成果が出ているのは喜ばしいことだ」

差し出された手を掴みなんとかして地面から膝が離れた。

「途轍もない、突きだな」

「物に出来そうか？」

「――」

ほんの一瞬――言葉に詰まる。

起き上がった拍子に顔を直視したが声のトーンもそうだが起伏の

ない表情で見つめる雷花には言いようのない怖気を姫和は肌で感じる。

「どうかしたか？」

だがそれも時を待たずして治まる。今のはなんだったのだろうか。やはり任務中とはいえ同じ刀使を殺してしまった話を聞いた所為で雷花に対して妙な偏見を心の奥底で抱いてしまったのだろうか。

「……いや、なんでもない」

「そうか」

怪しむ素振りを見せず何事もなかったかのように振る舞う雷花にそっと胸を撫で下ろす。

「伝えることは伝えたい、行くとするよ」

「ああ………なあ」

「なんだ？」

「まあ、その、なんだ………ありがとうな」

「礼を言うのはまだ早い。なにしろこれから先は前途多難なのだから、復讐を終えるまでは誰も彼も使用するな。復讐の妨げとなる」

「肝に銘じておく」

「じゃあな、十条 姫和」

まともに名前を呼ぶこともなかった所為で躊躇いが生じる。こんな時はなんと行って送り出せばいいのか。

一刀？ 雷花？ 先輩？ 先生？ 少なくともお姉ちゃんとは言わないし逆に向こうからお姉ちゃんと呼ばれたくもない。

おちやらけた行動も、真面目な顔も、過去を想う姿も、冷たい表情も、強大な圧を纏う姿もどれも本当の一刀 雷花なのか。

尻込みしている間に雷花の姿は小さくなっていく。

「雷花!!」

ヤメだ、ヤメだ。今さら他人でもないし、だからといって特別親しいわけでもない。こんなことで躓いてどうする。出たところ勝負だ。聞き返されないようめいっばい声をあげる。

「なんだ!!」

雷花も同じように音量をあげ聞き返してくる。けれどこの距離では姫和の視力をもってしても彼女の表情は伺えない。

精一杯声を張り、もう一度感謝の言葉を声にする。

伝わったかどうかわからないが雷花の表情が微笑んだような気がした。

—— 平城学館 寮 ——

「なんだコレは……」

雷花から技の伝授を施されてから寮の自室に戻ると部屋には幾つか段ボールが山積みになっていた。ガムテープを破くと中には一本一本がカラフルな液体の保存瓶や粉末状にされたナニカを詰めた透明な袋がこれでもかと段ボールにぎっしり入っている。

そして次に目に入ったのは十条 姫和へ、と書かれた一枚の封筒。取り出すと筆跡から誰がやったのかを察する、などという労力はしない。この平城でふざけたことをするのは一人だけだ。

どうせこれもわたしなりの演出だ、などと言うのだろう。裏向きにしてみると案の定、ふざけた名前が書かれていた。

ジエネリック・倍バイ・胡坐アゲラ（用法用量は守れよ）より。

人の名前ですらないな……。

どうやって錠と錠をしたのか、そしてこれ程の段ボールをいつ入れたのか等言いたいことをグツと堪え封筒を開封し、便箋に目を通す。

書かれていたのは長ったらしい挨拶の定型文の後に各薬の内服についてだ。

ふるふると全身が震え、そこで姫和は絶望する。

「全部、飲むのか……!?!」

もう一度便箋に目を戻し続きを読むが最後の二文で生気を失う。

追伸、継続して飲めば効果は絶大だ（当社比）。だが次会ったときにも変化が見当たらず今日のようなザマを晒すのであればお前の未使用の尻にリングを捻じり込み、○□×△して○□×△する。

追伸、お前の為に味は改悪——ゲフンゲフン、改良しておいた。後日品評を聞くから存分に味わうがいい。

姫和の中で謝辞を述べたことの後悔とともに何かが盛大に折れる音が聞こえたきがあった。

次回、刀使ノ武芸者——修羅流転録

第21話 変わりゆく世界の変わらない朝

## 21. 変わりゆく世界の変わらない朝

雨が嫌いだ……。

あの日を思い出すから。

午前三時を過ぎた頃、ぴしょぴしょと外から鳴る音に気が付きベッドに横たわる女は瞼をゆつくりと開きそのままカーテンの方へと見やっていた。

やはりか。こういう日に限って嫌に長い夢を見せられる。

カーテンの隙間から見える薄暗さに入り雑じった音が案の定、直ぐに雨声だと分からせられる。

せめて驟雨しゅううであってほしいがどうにも止む気配のなさにうんざりし、前腕で目を覆い隠した。

不規則だけど変わりなく聞こえる耳障りで不快な音。

髪や衣類が濡れれば肌へばり付き奪われる体温。

ぼやけた視界はあの光景を記憶から呼び起こす。

嫌な日……。

薄暗く静寂に包まれた部屋で白無地の寝間着姿の女は不快な音をなすがまま受け入れる。

どうにかしたいものだが如何せん耳を塞いでやり過ごしてもこれは自然が起こすもので何をしてもその時、空の気分次第、どうしようもなく時間だけが過ぎていく。なら諦めるより他ない。

……：……ほら、そうこうしているから殺風景な自室があの日の光景に切り替わろうとしている。

余計なモノが見える前に女は洗面台へと向かった。

身体を預けた洗面器の天板からひんやりとした感覚が両手に伝わる。

水栓金具の蛇口から一定量の水が排水口に吸われ続けることと顔に付いた水滴が稀に落ちるのを幾度かただ眺めては意識と思考をどこかに忘却させていた。

そんな特に意味のない行為に飽きたのか女は化粧鏡へと視線を向ける。

酷い顔……。

生気の薄れた、言い換えるならば草臥くたびれた顔を晒す女が一人。

その隣でもう一人のダレカが女の耳元に近付くと鏡の中で口が開く。

——幸福や充実感を望むな。

発したダレカは女を見ず。

——憤ったり、昂るな。

能面のようにニコリともせず、ただ目の前を目し。

——  
悲しむな。泣くな。

女に言い聞かせ。

——  
嗜むな。誰も愛すな。

血肉と化して女の一部とする。

自分の為だろうと他者の為であろうとそれはあつてはならない。  
無機質なままそれは呪詛のように何度も唱える。

己を殺せ。

感情を殺せ。

未来を望むな、現在など否定しろ。

お前にそこにいる資格はない。

過去に沈め。

日々摩耗していく中で自らを縛り己を希薄にしていくその強迫観念は破滅願望を植え付けるためのルーティン。

そう教え込まれ生きてきたのだから、そうしなければならぬ。  
瞬きを数回繰り返して自分を直視する。

右目の光彩はセピア色でそれ自体は至って普通。しかし左目に映るのは鮮やかで、けれどルビーのように真つ赤な光彩。視界を何度暗転させてもこの異常なオッドアイは変わらない。

試しに変色した瞳を手で覆い隠して、退ける——が、この現象、瞳の色素を失っている以上、不変的でそれは変わるはずもなく。

仕方がない……と、諦めが小さな嘆息と成して吐き出される。

嘆きや憂いもただの時間の浪費。仕方なしに収納棚から常備している抑制薬（ヘリオキユレ）を無針注射器にセットし、それを躊躇なく打ち込む。

2年も経てば打つ場所、恐怖心は薄れて慣れていく。しかし痛みだけは別だ。無針注射といえどこれは慣れない。ほんの僅かに顔をしかめ、握っては放す——を繰り返して心身ともに異常がないことを確かめるとコンタクトレンズを付け、また自分を見つめ直す。

映るのは光彩をセピア色にした双眼の女。異常はどこにもない。そう言いきかせてクリスタル状の蛇口ハンドルを捻り、洗面台を後にする。

駐車場に車を止めてから何時間経っただろうか。「自分で連れ戻す」と苦々しい表情で玄関に向かった同乗者の背中を見送ったままゆりぞの百合園さゆり 小百合はハンドルを握った両手に額を付け瞑想する。

彼女の性格なら少なくとも見積もっても連れ戻すのに三十分は容易にかかるだろうか。しかし、学生時代とは異なり彼女も今や成人を過ぎた身。それなりにコントロールはできているハズ……だと思いたいのだが現状は悪化の一途をたどっている。

その証拠に腕につけたミリタリーウォッチの短針と長針があと30分もすれば12の上に丁度重なる。

口は悪い、だがそれでも親しい者には親身になって口と手が動く……訂正、先に手が動き、後から説教という名の罵詈雑言が飛び交う。

小百合から見ればそれも彼女の美德と悪癖の表裏一体。

そこまで人に真摯に向き合えるその人格やら性格やらは正直羨望している。

だがそれにしても――

「遅い……」

ポツリと言葉を漏らしてから然程時を待たずして右隣の窓ガラスがゴン ゴン ゴン ゴン、と強めに数回叩かれた。

漸く来たか。

顔を上げると案の定、数時間前まで車内にいた紺色のリクルートスーツを着るドイツ人女性――ヒルデガルト・V・リッターの剣幕を視界に捉える。

「はよ開けーや」

暗いブロンドの髪を纏う女はその容姿に似つかわしくない関西訛

りの低い声が怒気を孕まし窓ガラス越しの小百合の耳に入る。

「随分と時間がかかったようね。人目もくれずまた説教？」

ドアロックを解除し、エンジンをかけ直すとヒルデガルトの代わりに入ってきたのは黒い髪がウニのように尖り切った毛先を持つ鎌府女学院の制服を着た少女に尋ねる。

「そーなんですよー。ヒルちゃんがガミガミ、ガミガミと。それも大声で！ しかも次第にヒートアップするものだから歯止めがきかなかってー」

どっこいしょ、と半身で乗り出しては後部座席にその身を投げ出した制服少女は主観を口にする。相手のリアクションなど求めていないのか指を組んだストレッチの最中にふと気掛かりが口から言葉として紡ぐ。

「あれ？ そういえば今日は何でごっつい車なの？ いつもの高そーな車はー？」

「貴様もう忘れたのか」

「うわ、クサッ！」

ドアを開けっぱなしにしていた所為で瞬く間にふかした紫煙と先ほどと変わらない声音が車内に入り込む。

小百合に尋ね返した制服の少女は侵入してきた臭気を察知しては鼻を摘まみ、臀部でんぶを使ってそそくさと隣の座席へと移動、そのまま行き止まると――キョロキョロと逃げ口を探す。

「乗ったならさっさと閉めろや」と言葉を発して後部座席のドアを閉めたあとヒルデガルトは助手席に乗り込む。

「消臭スプレー、消臭スプレー……………あれ？ ゆりちゃん、消臭スプ



「それで、今日はなにをやらかしたの？ 聖<sup>ひじり</sup>」

ハンドルは固定されたままバックミラーに視線を寄越さずに小百合は声だけをかける。

「やらかしたもなにも聖は人助けしただけだよ？」

「アレのどこが人助けや。加害者がほぼ半死人状態やないか」

首を傾け、鎌府女学院の刀使——新木<sup>あらき</sup> 聖<sup>ひじり</sup>は真面目に答えてみせるがヒルデガルトが即座に否定を口にする。

「ええー！ スリの現行犯を捕まえたんだから人助けでしょー？」

「ならなんで留置所に拘束されてんねん貴様は。警官もまたかって呆れとったで」

「またか、ってなんですかー。聖は犯罪者撲滅という悪即斬で社会貢献活動をしてただけですよー」

ひよつとこの様に口を尖らせ聖は不満を漏らす。

「なら手加減ぐらいせーや。犯罪者だろうと相手は武装もしとらんだの人間やろ」

「ちゃんと手加減しましたよー？ あれぐらいでダメになるなんて人間失格ですよ？」

「貴様等と一緒にたにすんなや。小百合からも言うてやれ」

「一先ずそれは置いておいて」

「置くなや」

「ププツ……！ 流されてやん——アギヤツ!？」

「余計な茶々言うな。それで、小百合は何言おうとしてんねん」

スカスカになったK O O Lと印字されたタバコの空箱が聖のおで

こを弾く。

「聖……貴女御刀はどうしたの？」

「ちよッ——ヒルちゃん、ゴミ捨てないで……へ？ 御刀？」

今の今までその存在を忘却していた刀使は制服を弄り、プリーツスカートをめくり上げて覗き込む。あるのは当然の如く布地の手触りと瞳に映った黒色のシヨートスパツツのみ。

「…………… あ あ、 御 刀 …………… 御 刀 …………… ね  
…………… 聖の御刀って今ドコ？」

壊れんばかりにブレーキペダルを踏み込む小百合。

配慮する間もなく周囲に甲高い異音を撒き散らし段階的な減速をすつ飛ばして数十メートルもの距離をタイヤは無回転で進む。

どうやらハンドル操作だけは間違えなかったが道路には黒いタイヤ痕が帯状に記し、標識のついたスタンドを通り過ぎて路肩に停止する。幸いなことに後続車と対向車線からは一台も通り過ぎなかった。

直ぐに聖を見やるが急ブレーキへの対処が間に合わなかったのか頭を抱え悶えている。

「ゆりちゃん……なにやってんの……………」

「貴女こそ何をしているの？」

現役の刀使、しかも任務中である貴女が何故御刀を忘れてしまっているのか。問いただそうとするが聖は痛みと戦ってそれどころではない。

この事をヒルデガルトは知っていたのか。もしくは知ってて放置したのか。今度はヒルデガルトに言葉を飛ばす。

「ヒルデ、貴女何故最初に言わなかったの？」

しかし、彼女も彼女で聖と相違した状態で頭を押さえていた。

「ウチが知るワケないやろが、いてまうぞ……！」

「……………ごめんなさい」

「止まるなら止まると先に言えや。で、なんで御刀ないねん」

「ないというか、忘れた？　みたいなの？」

最後にウィンクと舌を出し、てへっ、と付け加えたが言うや否、マズルフラツシユとともに乾いた音が鳴る。それなりのスペースがあるとはいえほぼ密室内でのけたたましい発砲音の直後、対応が遅れるが小百合は耳孔に二本の人差し指を入れて左右の外耳道を塞ぐ。

「わああああッ!!」

お茶目さを演出してみせたがそんなものは不要と断じられた弾丸は聖の肩——三角筋付近をあと数センチ程のところを通り過ぎる。

この体勢では射線に入らない為、仕方なく利き手ではない左手で撃つたのが失敗だったか。やはり狙いは定まらない。どうあがいても聖は避ける。

「はよ思い出せ」

「出す！　出す!!　思い出すからッ!!　撃つのヤメテッ!!　てかこの車、ゆりちゃんの車でしょ!?!　ボロボロにしているの!?!」

「いいわよ。襲撃に遇うの想定しているから、多少キズが入っても問題無いわよ」

「イヒイイイイッ!?!」

法令違反を犯す加害者と自業自得な被害者に呆れハザードランプを仕方なく点滅させる。

「それとヒルデ、撃つなら撃つでサイレンサー付けてくれない？ 近くで撃たれると音響障害で難聴になるわ」

ドアポケットから常備していた耳栓を取り出し二人を目することなくそれを嵌めて更なる発砲を許可するこの車のオーナー。

「そういうワケや。一数える間に言わへんなら大人しく往生せえや」

「はい、はい、はい!!! 数える意味ツ!!」

「いーーーーーちい……」

取り出したサイレンサーを手早く取付け、銃口、そして照準を小憎らしい後輩に向け、二度目のマズルフラッシュが起こった。

その後も複数回にわたり銃声と叫び声が交わされるが蚊帳の外たる小百合は額をハンドルに預け溜息を漏らす。

あちらこちらに車体が揺れ傾くのと硝煙の匂いに微かに顔をしか顰めて弾倉が再装填されないことをただ願った。

—— 数時間後 ——

「—— 聖……」

停車した車内で御刀を両手で抱え大きく開口する聖の肩をゆらしながら小百合は彼女の名を呼ぶ。

「んん……」

しかしながら小さく吐息を漏らし反応はするものの刀使の少女は絶賛、夢心地を満喫している。

「仕方ないわね……ヒルデ、まだ弾は残っている？」  
「ああ？　ちよい待ち……」

短い嘆息の後、ヒルデガルトに視線を向けると何の疑問も持たずにヒルデガルトは拳銃を取り出すとそのままリリースボタンを親指で押し、グリップ内から弾倉が滑り落ちる。

碧眼に映る弾殻と弾倉の重さで銃弾の総数を把握し——刹那で答える。

「——まだあるで」

「じゃあ、「発お願い」

Ailes klar  
「了解」

小百合と入れ替わったヒルデガルトは躊躇なく聖の耳元から僅か数センチ離れた場所へとけたたましい音を放ち、弾痕をシートに刻み付ける。

「……………ドウへへ……………zzz……………」

「コイツ、マジか」

「駄目みたいね。ならば煙草で試して」

「根性焼きでもするんか？」

首だけを小百合に向け、尋ねる。意図して狙いを外したとはいえ躊躇なしに銃口を後輩に向けた自分が言うのもなんだが流石にそれはほんの僅かばかり憚られる。

「煙草の臭いで起こすのよ」

「ああ……じゃあ、遠慮なく」

そう言つて Wevius と印字されたパッケージを逆さまにして五、六回ほど掌で叩いては、透明セロハンを開封——銀紙を破く

と箱の上部を人差し指でトントン——と叩き、飛び出したタバコを人差し指と中指で掴みそれを口元へ運ぶ。フィルターを啜え、刻きざみと巻紙に百円ライターの火が灯る。

吸った煙を口の中で溜め、フィルターを口から離し深く息を吸う。すると聖の眼前に近付き——彼女が副流煙に害されることなどお構いなしに溜めた紫煙を一気に吐き出す。

「クツサああアア!!!」

「おはよう、ウニ頭。このまま焼きウニにしたるか？」

「ゴツホ!! ゲホツ!! ガツツツ……………ヒルちゃん!! いや、クツツツツサああ!!!」

「で? 返答は?」

「…………いやどゆこと?」

質問の意図が読み取れず助手席に体重を預け、ヒルデガルトの傍に控えている小百合に尋ねた。

「もう目的地に着いたのよ」

グレーのスーツジャケットに触れ、腕を組み右手の人差し指で辺り一面の暗闇を指し示す。

「へ? もう空港についたの?」

「貴様がぐっすり眠っている間にな」

「おおー流石ゆりちゃん……………って、暗あツ!? 今何時!?!」

嫌味つたらしく語気を強調して聖を見下ろすがそんなこと意に介さずといった具合でスカートからスマホを取り出し、ディスプレイに表示された時間を確認する。

「わあーお、おもつくそ十時過ぎてらー」

「時間食ったのは大概が貴様の所為だからな」

「サーセーン」

「搬出準備できたそうよ」

スマホを耳元から離れた小百合は二人に告げるが反応を待たずして運転席へと歩を進める。

「なんだ、時間ピッタリじゃーん」

「ウチが遅らすよう連絡しといたんや」

「ひゅーひゅー」

「できとらへんで」

両手で頭を支えつぼめた口で吹かすも空気の振動が上手くいかず口笛は失敗する。ヒルデガルトが指摘してもなおそっぽを向いて口笛を試みるがやはり結果は変わらない。

二人のやり取りなど特に気にすることもなく座席に着いたのを見計らい小百合がサイドとシフトのレバー操作後、クロスカントリー車はヘッドライトとテールランプを灯し数十メートルを走行する。

貨物機フレーター便をバックに再び停止したクロスカントリー車から刀使に關わる三人の女と少女が出ると先ほどまでの弛緩した空気とは一転——ひりついた空気を纏い、それぞれが周囲を警戒する。

最初に降りた女——小百合が自身の御刀——七支刀しちしとうの柄に手をかけ、自分達を通った車轍しゃてつを注視する。

次に降りた少女——聖はドアステップを使わずにルーフに乗り手庇てびさしすると目を凝らし、しゃがんだ体勢を維持しながらフィギュアスケーターのように180度ほど回転した。

最後に降りた女——ヒルデガルトは右手に拳銃を、左逆手で持ったライトを持って貨物機フレーター便に向かい、そこにいるライフル銃を携えた男たちへと向かう。

命令口調で男たちに指示を出し終わると身体を反転、かつぱり開いた前面内を左手のライトで数回点滅させた。

ヒルデガルトから異常なしのサインだ。

「引き続き貴女は周囲の警戒をお願い」

「了解ッす」

夜目でも獣並みに利く聖を警戒に置き小百合はヒルデガルトとともにメーンデッキの中へと入っていく。

「コレが……」

ヒルデガルトが解除コードを入力し終え、見るからに強固で分厚そうなコンテナがその中身を晒すとセピア色の瞳に収めた小百合が見開く。

彼らの技術は他の追隨を許さず圧倒的に群を抜いている。しかし、こうも短期間で形にできるとは思っていなかった。なにせ互いの技術が違いすぎるのだから。都合よく完成品が来るハズなどない。精々が御刀にフィッティングするよう武装を再形成、S装備も上半身の胸部と腕部ないし下半身の脚部だけが関の山だと蓋を開けるまではそう思っていた。

「まさかあの馬鹿デカイサイズをS装備に合わせここまで縮小させるとは」

「一月も掛からずに仕上げられるのだから流石は『西尾博士』と『島』のスタッフ達、と言ったところかしら」

「ウチからも資金と人材も出した。当然やろ」

「そうね。後はコレが稼働できるかどうかね」

「できるやろ」

「そう………できるかしらね」

「できない困るのは貴様やで」

「そう……ね……」

わたしたち人類に時間は残されていない。

この国に住まう人間だけが何も知らずに取り残され、自由当と平和前を享受受している。

かご楽園の中の鳥たち。世界はそれを許さないだろう。  
それでも、せめて……。

『複合改造試作機 ストームアーマー S 装備改・テイターンモデル』

——プレートアーマーの様に全身を装甲で覆われた人型の棺桶に異常がないことチェックし、扉を閉ざす。

S 装備が保管されたキャンピングトレーラーをリアにセットイングし終え三人を乗せたクロスカントリー車もとい牽引車は空港を後にし、静かに夜道を走る。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第22話 武装試験

## 2.2. 武装試験

「ゆりちゃん寝ないでダイジョーブ？」

街路灯とヘッドライトの光が頼りの車道に法定速度を軽々と超えて進むクロススカントリー車とそれに牽引された機密物を運送するキャンピングトレーラー。

その運転席と助手席の間——エアコンの吹き出し口にホルダーとともにセットされたスマホから車内へと聖ひじりの声がスピーカーモードで拡散する。

舗装状態もあまりよくないのか微かに車内も揺れるが気に留めることなく二人の女と一人の少女は電話越しでやり取りを続ける。

「ええ、大丈夫よ」

「そう思うんやったら貴様が変われ」

「え、イイの!？」

冗談交じりで言ったハズの言葉を真に受けた聖は目の周りで星々を輝き散らせ直ぐにキャンピングトレーラーのドアに手を掛けるが

「ダメよ」

慌てることなく、けれど即座に小百合が開口し一蹴する。

「ええーイイじゃーん。バレないってー」

「制服でバレるわよ」

「そうかなー?」

「煽ったウチが言うのもなんやが、そらそうやろ。そこら辺にちよくちよく監視カメラ付いているところもあるんやから」

ヒルデガルトからの小言を恐れてか聖はそそくさとドアから離れ、シートに座ると持て余した暇つぶし代わりにスニーカーの両底を合わせ足首を掴み前後に身体を揺らす。

すると頭の中でなにかが閃く。

日中と違い夜中での運転ならバレる心配は皆無、何なら制服は脱げばいい。そう思いもう一度口を開く。

「いや夜中ならワンチャン、バレない可能性が——」

「ないわね」

「ないわ」

「むーなんか二人とも卒業してから一層辛辣になったよねー」

否定されて風船のようにワザとらしく頬を膨らませ拗ねてみせるが小百合とヒルデガルトは牽引車に同乗している為、ここにはいない。

聖もそれはわかつてはいるがつい態度を顔に出してしまう。

「ウチも小百合ももう、はしゃいでいい時間はとうの昔に過ぎたんや」

「私は在学中のときからはしゃいでなかったわよ」

シートに預けた身体で窓ガラスに映る自分が見えるがヒルデガルト自身、その奥の街路灯で光るオレンジと黒の街並みを右から左へ、見送りながらポツリ言葉をこぼした。

独り言のつもりだったのだがしつかりと小百合に拾われるもそこから特に会話を続ける気にもならず口を閉ざし景色を見渡す。

小百合も運転に集中し出したのかそれ以上の言葉が返ってこず、暫くしてからヒルデガルトは正面を向くように頭をズラし、ハンドルを握る元後輩へと流し目を向けた。

「……………」

「……………何？」

「……………なんも」

目配せする小百合にそっぽを向いて答え、また変わらない景色を一人で収める。

——海上——

車で陸路を、そして数時間に及ぶ海路を三十フィート以上のプレジャーボートで航走し、辿り着いた国籍不明の航空母艦——それも飛行甲板の上で全身をフルプレートに纏った女と御刀を佩刀する少女がそれぞれ立っている。

グレーのスーツジャケットとボトムスからパイロットスーツに着替え、小百合が装着したS装備は各部が解放され装着者を包んでいないがそれでも身を守る物としてはこれでも充分である。

「ねえ、舞草じゃないにしろやっぱ『八幡電子』には連絡ぐらい入れたほうがよかつたんじゃない？ 聖達じゃメンテナンスとかできないんだし、暴走したら止める術なんて皆無だよ？ 何だったら『島』の人か『パイロット』の人らと『ファフナー』いるよ？」

「その時は『気化爆弾』を解放させるだけよ。退避の余裕を持たせて予め時間も変更してあるし」

グローブ内にある十個の指輪ニールンゲに十指を入れると肩部——三角筋と腹部——腹斜筋付近、そして太腿部へと内側に組み込まれる針が打ち込まれ、激痛と引き換えに小百合の身体は機体と接続——改良されたS装備——テイターンモデルが起動する。

「——ッ!!!」

痛みで歯を食いしばり如何にか悲鳴を上げずに済む。

「なんでサラツとそう怖ろしいことを平然と言うの？」

「……………珍しいこと、言うわね。怖いもの、知らず、の、貴女が」

装着する度に肩、脇腹、大腿部への激痛が伴うが耐えられない程の痛みではない。しかし、声は隠せても苦痛に歪む表情は見せてしまう。

元がファフナーだからこの接続方法が継続されるのは仕方ないか…………。けどこれ、他の子が装着するとき耐えられるのかしら？ これ以降には改善されてるといいのだけど。

「聖はただ、何も無い海の上で死にたくないだけですよー」

「なら祈りなさい。気化爆弾フェンリルを使わざるを得ない状況にならないように」

ヘルメットのバイザーシールドの透き通ったオレンジ色から所狭しとスライドして情報が表示されるがそこは冷静沈着に。小百合の目は羅列された情報を読み取りS装備のチェックを済ませます。

両手の甲を上げ、拳をグー、パー、と繰り返し 装着したSストームアーマー装備の感覚を確かめる。

以前は適正無しと診断されたがS装備と複合させたお陰か、はたまたこの身体になってからか機体は今のところ正常に動いてくれる。

例え使ったとしても――

「私の周りでは誰も死なせないから」

「……………二人とも準備はできたか？」

少し間が空いてから小百合と聖にインカムを通して耳にヒルデガルトから無線が入る。

「分かっていると思うが改造試作機テイタインモデルの運用テスト、その内容確認や」  
「ハイ！ ハイ！！ ハーイイツ！！」  
「……なんや聖」

返事とともに目一杯の拳手を繰り返す少女バカが一人、艦橋ブリッジ内のスクリーンモニターにデカデカと映し出される。どんな状況になろうとも場を弁えずに発するその声、そしてその動作に心底嫌気が差し、疲労の二文字がヒルデガルトに蓄積する。

「なんでヒルちゃんは参加しないのー？」

本当に疲れる。

うな垂れるように片手で頭を抱え、もう片方の手——主に人差し指と中指が小刻みに、そして不規則ながら宙を踊る。会うたびに頭痛のタネともいえるこの言動にタバコ飲みと同様に機械を纏う女もまた無言のまま額を抑えていた。

「ここに来る前、話したが貴様聞いていたよな？」

「聞いてなーい」

——ブツツ。

トランシーバーのプレスボタンから刹那の速さで指が離れる。

「……………おい、対物マクミラライフル持ってきていや」

傍にいた搭乗員に目もくれず吐き捨て、返答を待たずにプレスボタンを再び押す。

——ブツッ。

「……………聖」

「はいな」

「教えてやるからそこ動くな」

「あざーっす」

まあ、たかが銃弾で死ぬような子じゃないし大丈夫でしょ。

ヘッドギアを通して発せられたヒルデガルトの低い声に今ブリッ  
ジ内はヒルデガルトを中心に空気を凍てつかせその場にいる搭乗員  
達ですら殺気の混じったものと察する。ただ一人を除いて。

小さな嘆息をしては今から起こるであろうことに小百合は心の中  
で呟く。大方、艦橋ブリッジから狙撃するのだろうと予測し、呆れた顔で射線  
軸から退避する。

「アレ？ ゆりちゃんどこ行くのー？」

——ヒュン。

その場から離れていく小百合に気づき彼女の方に向きかけた瞬間  
——音を置き去りにした風圧が鼻先をかすめ、それから一秒も経たぬ  
まま地面に衝撃が両足へと伝わった。

「チッ！ ハズシてもうたやないかボケがあッ!!」

「ええ……………」

立ったまま長距離狙撃銃を構えてがなるヒルデガルトとその射線  
軸の終着点を交互に見て困惑の言葉が漏れる。もう一度ヒルデガル  
トへ視線を向けた首とリンクしてスカートに風穴ができた。

「はわわ……………」

「遊底<sup>ポルト</sup>を操作、次弾が装填された頃にはスコープ内に捉えてたハズの標的<sup>バカ</sup>は行方を眩ませていた。」

「逃げんなやゴオラアアア!!」

「逃げ一択でしょうーよおー!!」

「——ツツー」

観測レーダーから映し出される二つある信号の内、一つの点がとてつもない迅さで点滅を繰り返す。当然、移動するこの点滅は全速力で甲板を走り逃げる聖。

残るもう一つの信号は小百合なわけだが左右からの音量が最大に増幅された突然の叫び声に思わずヘッドギアを外しかける。

「しびてえなあー! ゴキブリか貴様は!」

三発目の弾道が加速する人体、その鼻先を捉えようとする。

例えかの有名な陸上選手以上の速度で移動しようが把握してしまえば狩り人にとって獲物が次にどう動くかなど予測は容易い。

「死ぬ死ぬ死ぬう! 殺意高すぎい!!」

首元に命中するハズの12.7 x 99 mm弾は衝撃がかからぬままに直進を続けた。弾道の通過点になるハズだった瑞々しい肉体と交わらず、鉛弾は血に飢えたまま海に沈む。

だが、加速すればいつかは停止する。弾丸であろうが人であろうがそれは変わらない。

ヒルデガルトが発射した銃弾がそうであるように聖もまた既<sup>すんでのとこころ</sup>所で自身の動きを止め、直撃コースから逃れた。

しかし、排出された葉莖が宙を舞い——刹那を待たずして銃身内<sup>バレル</sup>を突貫——地に落ちるときには四発目が銃口から飛び出る。

けれど止まった時は必ず動く。否応なしに。

——来るぞ。

停止した肉体は殺意に抗う。新木 聖という少女が培ってきた経験と遺伝子が次に向かつてくる殺意を捉え、身体は本能それらに従い反応する。

——避ける。

ただそれだけを命令し、縛鎖の如く身体に強制させる。

自分自身が出した命令だ、抗う必要性などない。全身を脱力させ——解放する。

甲板に穴が空いたときには既に聖の姿は消えていた。全身のありとあらゆる力を抜き脱力と解放を休む間もなく移動に費やす。ジグザグに動き、それによる軌道と残像は見たものの目に雷を思わせるほど切り替わり時の継ぎ目がない。

スコープ内で捉えても当てなければ意味はない。

ならばと怒りを捨て、舌打ちも罵声も発しなくなった成年の女は銃口を追わせ、もう一度予測する。

急所は外した。聖バカが敵意や殺意に無意識でも反応するなら狙わなければいい。

そこにあるのは何もない空間。ただトリガーを引くだけの簡単な作業。

ああ、速く終わらせてニコチンを供給したい。

雑念を入れ、人差し指を引く。

——ッ!?

放たれた五度目の発砲音から直ぐに金属音が入り交じる。

銃弾は甲板に穴を空けることも聖の肉体を貫くこともなく、あらゆる方向へと弾道は行きやがて弾かれた鉛は夜風の中へと沈む。

「——ふうー……」

唾内に溜めた紫煙を排出するように口をすぼめて息を吐き出す。

「その強度は問題ないんか？」

ヒルデガルトの低いいつもの声がヘルメット内に組み込まれたスピーカーから伝う。

「ええ、大丈夫よ。ライフルの放った銃弾程度ならたかが知れてる。それに、これで不具合が起きるようなら試験する意味はないわね」  
「言えてるわな」

構えを解き、銃弾を弾いた槍の矛先を降ろす。小百合が握るそれ槍は正確には槍ではない。

形状は馬上槍に酷似した刃と柄を併せ全長5 m以上ある形状の刀剣武器——それがこのルガーランス電撃槍と呼ばれる代物。

金属フレームに樹脂やゲル等をセラミックで包んで製造された物である為、その構造から強い負荷が加わると壊れやすいのだがヒルデガルトから射出された12・7 x 99 mmの弾を弾いてもなおクラックが入ったり刀身が欠けることがない。

「聖、もう撃たんからはよ所定の位置に戻れ」

「またまたー。そういつて平然と撃つ気でしょ？」

小百合の影に隠れぴよこつと黒い毛先がS装備の脇からはみ出る。

「くどいわ。弾倉もすつからかんなんやからはよせえや」

「ええー信じれないんですけどー？」

「本当のことよ」

懐疑心に満ちた聖にヒルデガルトの助け舟を出そうと開口する小百合。

何度目となるだろうかこのやり取りも。ふと学生時代の情景が脳裏にチラつきながらも両腰に添えられた手を軽く振りほどく。

「うへえ？ マジですかー？」

「マジよ。大マジ。ヒルデが使った対物ライフルの装弾数は五発が上限よ」

「じゃ、戻りまーす」

「おさらいだが再確認するで。余計な茶々いれんなよ聖」

インカムから聞こえた会話で漸く本題に入れる。短く吐き出した息を霧散させ発する。

「了解つす」

「今日の試験はSストームアーマー装備テイタンモデルとその専用武器の実用テストだ。武器はさつき小百合が使った電撃槍ルガーランスにマインブレード、レージングカッター、デュランダル、ピラム、ロングソード……………」

「やること多ッ!?!」

ヒルデガルトが提示した物の数に思わず声を漏らす。

正常に動くのか。最大稼働時間はどれだけなのか。従来通りの威力はでるのか。耐久性は。S装備が機能しなくなった場合使えるのか。敵に奪われたらどうなるのか……………などと試験内容は挙げればキリがない。

風のたよりで耳に入る長船の真庭学長と同じかそれ以上の真つ黒さ。

「ウチらはタギツヒメや舞草らに隠れて極秘裏で動いとんのや。試せるときに試すんは当たり前やろが」

着火した巻紙まきしと刻きざみが一瞬、オレンジに色付いて灰と化しすぎさま吐き出した紫煙を霧散させ言葉を継ぐ。

「大体、タギツヒメのアホがやらかしだす事になんでウチらが四苦八苦しなあかんねん。国内のゴタゴタにウチらを巻き込むなや」

「うつつわ！ 元刀使とは思えない発言したよこの人！ ゆづっち先生に言いつけてやる」

「御刀返納しとんに今さら刀使の事情なんか知るかいな」

「じゃあなんで御刀扱う伍箇伝で教師やってるの!？」

「まだ教師ちやうわ！」

「……………ねえ」

抑揚のない声が二人の鼓膜に打ち付ける。

「なんや」

「なんですかー」

タイミングよく重なる返事。それに続くように言葉は静かに、圧を持って返す。

「いい加減始めてくれる?」

喜怒哀楽など感じさせないこのわずかな言葉が何より冷たく、言い訳を許させない。

「ああ、いや、少し話が脱線し——」

「始めてくれる?」

いくらなんでも弁明くらいはできるだろうと口を開くヒルデガルトだったが小百合はそれでも二の句を継がせない。

ヒルデガルトでさえこうなのだから間近にいる聖も今は背筋を伸

ばし直立不動、息を殺して静かな嵐が過ぎ去るのを待つ。

「始めてくれる?」

「……はい」

「……はい」

「同じ日に同じ事を二度も言ったのだから、三度目の正直なんてのはないわよ」

「はい……」

「はい……」

どうしてだろう。緊張で張詰めるこの状況で他ごとを考えてしま  
うのは。

どこかのネットニュースだったか、それとも暇つぶしで検索閲覧し  
たブログの記事だっただろうか。

ああ、どこかで似たような症状があったな。そうか、これって――

「若年性更年期……――ひいッ!!」

思わずポツリと吐いてしまった単語は小百合の耳に届き、解放され  
たルガーランス電撃槍の両刃の間に聖の首元が中央に据えられる。

脳裏に浮かぶ三つの選択肢。

1. 開いた刃が閉じる。
2. そのまま荷電弾が射出する。
3. 極太レーザーと化した弾頭を射出する。

どう転んでもデッドエンドは免れないし、どれを選んでも圧死か焼  
死か溶解するかの違いだけ。

さあ選びなさい。

眉一つ、なんならポニーテールすら動かささない能面の女は愚者たる  
少女に瞳で訴えかける。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第23話 修羅は突然やって来る

## 23. 修羅は突然やって来る

——ピッ。

「一旦休憩はさむで」

「ホント？ やったー」

二つの試験評価を残すところでヒルデガルトの声が掛かると屈伸交じりの拳を突き上げその場を離れるべく、ひじり聖は甲板上を軽やかな足取りでステップを刻む。

深夜から行われた飲まず食わず寝ずの長時間にわたる試験。疲労困憊間近の身体も解放された喜びから不思議と軽くなるというものだ。

薄暗い世界の中に差し込む夜明けと照明の光の中、黒髪の少女から思わず鼻歌がまじる。

「私はまだ大丈夫だけど」

「貴様がそう思っても『同化現象』が確実に進行してるんや。はよヘリオキュレS装備脱いで抑制薬打ちな」

「まだだ——」

「打て」

「ふう……分かったわ」

航空母艦の責任者であるヒルデガルトから間髪入れずに発せられた有無を言わせぬ語気に気圧され、仕方なしと観念した小百合はインカムから流れる声に大人しく従う。

「聖、聞いての通り抑制薬ヘリオキュレの投与が終わるま——」

「ああ、お構いなく」

聖の方へ向き、言いかけたところで開いた口が止まる。

目にした光景は何処から出したのかレジャーシートを広げ大仏の様に寝そべり、ポテトチップスを頬張っている少女。既にうすしお味のプラスチック袋容器は空となり、今度はオニオン&サワークリーム味の紙製カップ容器に手を伸ばしかけていた。

「……………」

「え、今休憩時間でしょー?」

口では何も言わないがそれでも何か言いたげに見下ろしてくる小百合にさも当然のことを口走る。

「……………そうね。確かに今一息入れるところだったわね」

「二人とも働きすぎなんだよー。あ、ゆりちゃんも食べるー? コーラもあるよー」

差し出されたコーラを受け取ることなくその場で微動だにしないまま顔は表情を崩さず小百合の視線は聖を捉える。

むーお気に召さないかー、と受け取らなかつたコーラをその場に置き、間食を続け——ボリボリ、そしてゴクツ——咀嚼音と炭酸が弾ける音がそれぞれに漏れ続ける。

「……………ねえ、聖」

「ふああにっ?」

ニートを彷彿とさせる姿でポテチを頬張る聖は呼びかけに答え咀嚼物を飲み込み、白い歯を見せた瞬間——電撃槍ルガーランスの切っ先が小百合の手により間食代わりとしてねじ込まれる。

幸いにも電撃槍ルガーランスの刀身が聖の口の広さよりも勝ったお陰で切っ先だけが挿入される形となるが啞内はセラミックの味一杯で上書きされ、後頭部にも衝撃をもたらず。

「ふぐお!？」

「ゆっくりと味わいなさい。お菓子じゃ直ぐに完食してしまうでしょ？」

「ふぐごごッ!?」

「そんな遠慮しないで。今味わうフレージャーは舌が消し炭になるほど刺激的だから」

「ふぐおオオオオオッ!!!」

次に何が起こるのかぐらい能天気な聖でも瞬時に理解する。それ故に必死に抵抗するが如何せん小百合との隔たりがあり過ぎるし、何よりこの体勢が不味い。

塗装された鉄板に密着した背中はルガーランス電撃槍と小百合の技量加わった荷重で四方八方に動かすことができず、無理に動かそうとすれば首が折れるだろう。

これではどう足掻いても啞内の刃を引き?がすことなどできようもなく、ならば後は刃が開かないようにするしかない。

力の限り両刃の芯へ目一杯の圧力をかける。

「あら、人の筋力で機械の動作する力を如何にかできると思っているのかしら。いくらなんでもそれは機械のこと舐めすぎじゃない?」

「……それぐらいでええやろ。バカに対してマジになると疲れるだけやで」

撒き散らした紫煙を空気とジャケットに浸透させながら小百合と聖に近寄るヒルデガルト。

トントン、と吸い殻で満杯となった携帯灰皿に灰を落とすともう一度フィルターを啜える。

「……………貴女も休憩?」

ヒルデガルトの姿を目し、昇った血も下がったのか聖の口からルガーランス電撃槍を引き抜くと切っ先を甲板に付け七支刀と一体となった刀身を静かに寝かす。

「どうせコイツのことやろうから菓子類持ち込んでるだろうと思うてな。そしたらドンピシャや」

「甘いモノ苦手だったハズじゃ……趣向変わった？」

「ただの飯替わりや。食わないよりマシってだけや」

シートに置かれた缶コーヒーとペットボトルの水を掴むとそのまま小百合に投げる。言わなくてもキャッチするだろうと目もくれず今度は適当に選んだお菓子を掴み状態を起こす。

「……ん」

「はい」

ヒルデガルトが開封したお菓子を差し出すと小百合も飲み口を空けた缶コーヒーを差し出す。受け取ると互いに一口唾内に含まし喉を鳴らした。

「ゆりちゃん『シナジエティック・コード』の形成影響で『変性意識』が凶暴になってない!？」

「気のせいよ」

ほっと一息ついていると遅れて聖が喋り出す。まだ痛む関節円板周辺を摩り指摘するがたった一言で処理される。

「小百合」

「何？ ヒルデ」

「身体の方はもうええんか？」

「ええ、特に異常はないわ。なに、心配してくれるの？」

「そろそろやろ。試験機とはいえ身体への負担がエグインやから」  
「無理はしないわ。まだやらなきゃいけないことがあるのだし。それに、貴女にまた怒られたくないもの」

飲みかけのペットボトルを見つめながら答える。

ああ、きつと見透かされている。わかっているながら敢えて聞いているのだ。意地が悪い。

「アレの対抗手段として必要不可欠やからな。刀使だろうと武芸者だろうと扱えられるヤツの間口を広げさせんとな」

摘まみ終えたアソートパックを聖に投げつけまた喉に無糖コーヒーが流れる。僅かに残した缶の飲み口に吸い殻を押し込め次の一本を取り出そうとポケットに手を入れ、残り13本となった煙草箱とライターを探す。

タバコ……タバコ……とつ、あつた。

掴んだ小箱を取り出しコンビニでよく見る100円ライターと一緒に一本を掴むとそのまま啜え人差し指と中指で支え、近づけたライターの発火石フリントを押す。

カチツ、カチツ……、とただ鳴らすだけでデイスポライターの着火口からは小さな火花が舞うだけに終わる。

まだそないに使ってへんやないか。ガスのうなってきたんか？

ライターオイルの残量を確認しようと思つてみせるが夜が明けかけているとはいえまだ視界は薄暗く、辛うじて液体が見える程度にはあるらしい。

しやあない。



殺気と敵意、そしてこれは害意も含まれる。兎に角むき出しの圧が身体に押し掛かる。

突如発せられた女の声にその場の三人は身体を捻り視線と意識が声のする方へと矯正させられる。

「……あ、貴女は」

振り向きざまヒルデガルトから放り投げられた電撃槍ルガーランスの柄を再び握り、聞き慣れた声の方へと切っ先を向ける。

「おひさー」

二年振りの挨拶と共に両目を瞑りながらヒラヒラと陽気に手を振って距離を詰めるのは喪服に亜麻色の三つ編みを胸の前に垂らした一人の女。

もう片方の手には自分の遺影を収めたフレームをコチラに見せつけている。

この場にいる誰よりもそぐわない服装の武芸者が小百合達三人の目に映る。

「知り合い……なんか？」

「あまち天地………しずね静音………」

カチカチ……カチカチ……— 鏢と刀身の隙間から小刻みに鳴る音と上下に歯が噛み合う音が奇しくも重なり合うがそれでも声を振り絞り女の名を口に出す。

『『修羅』に到った一人で』

瞳孔は開き——

「二年前のあの時……『北極決戦』で死んだ筈よ」

身体の震えが止まらない。

そう……天地彼女 静音彼女は死んだ。北極決戦と記録された人類との戦いの最中、同化こそ免れたものの惨たらしい亡骸をこの目?????にした。その事実は間違いない。しかし現に彼女はこうして声を発し、手足を動かしている。

幾千の中、彼女の埋葬にも立ち会った。生きているハズなど無い。つまり、その可能性に行き着くのは当然の成り行きであり恐怖が押し迫り小百合を呑もうとしていた。

「コイツがあアスラの阿修羅の爺さんらと同じ修羅!? 全然若えやないか!?」

「あら嬉しいこと言ってくれるのね。あなた達小娘からしたら何歳くらいに見えるのかしら?」

不味い、わね、いくら武器を持っていないとはいえ迂闊なことは――

「40歳――!」

バツ、と手を上げて答える聖。変わらないこの声調に小百合の恐怖は不思議と薄まる。

「ばツ、聖!?!」

「貴様なに言うてるんや!?!」

端を発した聖へと迂闊にも顔を向ける小百合とヒルデガルト。武者相手芸者に隙を見せるには充分過ぎる迂闊さだが静音は依然としてその場から動く気配を見せない。

「えー40歳ってまだまだ若いでしょー？」

「ふふ、正直な子ね。概ね正解よ。じゃあ、ご褒美あげる」

「やったー!!」

yes! とガッツポーズをとってはしゃぐ様はまさに子供。

「何がいいかしら。ああ、そうね、あなた体格に見合わず随分と食いしん坊さんみたいだから——」

瞬間、黒づくめの女は音もなく消え——

「お肉をぐ馳走してあげる」

現職の刀使の背後に現れ親指を折り曲げると——

「あなた自身のお肉だけど」

金色の双眼を見開いて風切音と手刀が静寂だった世界に放たれる。

しかし、本来臓物を抉り鮮血に染まるハズだったその手は血肉を貫くことなくけたたましい音に阻まれ、数瞬で軋轢音を感じ取る。

「力押しで如何こうするなんて脳筋スタイルは相変わらずなのね。じゃあ小百合にはむね肉がご所望としてそっちの」

チラリと刀使の少女を目すると御刀を構えるかつての仲間。反攻する気概はあるものの怯える様は狩人に狩られる鹿のよう。

今度は甲板に横たわる切り離パーされた電撃槍ルガーランスに目を向けるがこれも作り出された物の宿命か、対物ライフルではキズがつかなかった刃も今や亀裂が走り砕け散ろうとしていた。

無茶をする。

慣れない武器で防ごうとしたのだろうがその刃はそもそもその用途

が違う。

横たわる鉄屑を見やり——アレは回収しても意味なさそうね。そう思い到るともう一度。静音の眼球は対象物を追い、捉えると首を正す。

「いいわね、その目、それにその動き。あなたのお名前は？」

遺影を脇に挟むと右前腕を左手で支え——ゴキツ、と外された関節を戻しあの刹那の瞬間に肘を外した実行者を指名する。

電撃槍ルガーランスの防御後、攻撃が止まる一瞬——打突で肘の関節を外しすぐさま小百合とヒルデガルトを抱えて離脱。刀使の恰好をしているが小百合と同じく武芸者コチラ御の人間だろう。是非とも名前を聞いておかねば。

「新木 聖でーす」

「なに答えてんねん。能天気すぎるやろ」

「あらき……ひじり……？」

ん……？

その名に違和感を覚え思考する。特に名字——あらきの方に引っかけかりを覚える。この頭に靄がかかった様なはたまた喉奥に引っ掛かる感じは無視できない。名の響きではない、ならば活字に直すべきだろうと漢字に当てはめて違和感の払拭を試みる。

「あらき……荒木、いやコレジャナイな。なら新城……いやこれも違う、じゃあ安楽城………これでもない………ああ、そうか。『新木』。だからか。聖と言う名もあの一門の末々すえずえだったわね」

「どうかしたんですかー？」

「あなた隠す気ないでしょ」

「なにがですかー？」

とぼけているワケでもなく隠しているワケでもない。ならば自分の血筋を知らないのか、はたまた知らされていないのか。安易に決定づけるには尚早だがかといってかまをかけるには思考が読めない。仕方なしに知人たる女達に投げかける。

「ねえ、この子はいつもこんなにちやらんぼらんなの？」

「ええ」

「昔からこうやで」

「……………こんな子の面倒を見るなんて小百合アナタ昔と変わらず大変なのね」

「そう思うのであればこの子を相手するの変わってくれる？」

「いやよ」

「遠慮せんでもええで」

「辞退させてもらおうわ」

ミスった…………。

何を思っただけにしたのか明後日な質問をしてしまう。困った事に尋問は専門外で拷問も門外漢ときたものだ。これ以上の情報は引き出せそうにない。なら日を改めてあのクソ野郎クソ野郎に問いただすとしよう。……………覚えていなさそうだが。

「むむー。なんか初対面なのにこの人も辛辣みがあつてヒドイなー」

この女は次にどう動くのか。二人が相手の出方を読んでいると腕組しながら仁王立ちとともに頬を膨らました聖が拗ねだす。

聖としては女学生時代から知る二人ならともかく今日会ったばかりの女の人にまでそう言われるのは心外であり扱いの是正を求めべき事。

これは認識を改めるさせる為にもここで殺やつてしまおうか、そう思い、柄に指が触れる。

「ちよい待ちい。まだ抜くな」

「ええー」

掌で顔を包まれ制止され不満とともに柄から手が零れる。

しかし、思わぬ収穫ができたわね、これでも充分なお釣りが来る………わたしにとってはだけど。やっぱり報告のあったS装備の性能、欲を言えば物自体欲しいけど………あの様子じゃいくら頑張ってもダメそうね。

「まあ、どっちつかずな子だし、態々この子が被験体として買って出るとのを見ると——」

小百合が御刀——七支刀を構えるのを金色に輝く双眼で捕らえる。だが彼女の切っ先は微かに震え呼吸もまだ荒い。一方、傍らにいるピルデガルトはこちらの力量が推し量れていないのか恐怖はしていないようでただ息を？んでこちらを窺っている。

そして、残る聖はというとふくれっ面を晒しながらも静観しているが闘いたい、闘わせろとウズウズしているのが見て取れる。

「まだ使えそうにないわよね」

そう結論付けると——

「それじゃあ帰るわ」

「……………は？ 何言うてるんや貴様は」

「取り敢えず今日の要件は済んだことだしね。それに小百合が今どういう状態かも見れたし、何より」

チラリと聖を見やり。

「楽しみは後に取っておくわ」

踵を返すと『黒い球体』フォームスフィアが静音を中心に広がる。

「ソレ、完成するといいわね。それじゃあね、アデュー」

来た時と同じように手を挙げて振ると、静音を覆い尽くしクレターだけを残して消える。

「……助かったんか？」

「そう……みたいね」

「ええーつまんないー!!! あだツ!？」

安堵のため息を漏らすと横から聖が不満と痛みの声をあげる。

「アホ言ってる場合か！」

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録

第24話 酔いどれ強者ども

## 24. 酔いどれ強者ども

川のせせらぎや木々が鳴らす息吹きと風がざわめく森林の中、土や小石が敷かれ雑草が無造作に生える平地だった場所に突如としてクレーターが作られる。

原因は言うに及ばず。どこからともなくそこに出現した物体——  
ワームスフィア  
黒い球体が勢いを衰えることなく凄まじい回転で存在し続けている。

「あら？　着地点がズレたわね」

黒い球体はそう時を待たずして消滅し、その中心部から黒い喪服姿の女が現れグルリと周りを見渡す。金色の瞳に映るそこはガラんとした人工物のない景色だけで待ち人達の姿は見えないし喪服女——  
あまち　しずね  
天地　静音が置いていた荷物も見当たらない。

しかし嗅いだ空気、せせらぐ音、草履に伝わる土の感触。これらは着いた場所は違えど確かに向こうへ赴く前にいた場所と相違がない。恐らくは座標がズレただけなのだろう。

だがズレてしまったものは仕様がな、仕方ないとその静音は散策がてら地表を確かめていく。

「おおーい、誰かいないのー!?　戻ったわよー!」

声を張り上げ、記憶を掘り起こしては一定の速度で草履をあっちへこっちへと足を向かわせる。

「返事がない。ただの屍のようだ」

「えいつ!　……しかし、なにもおこらなかつた」

独り三文芝居の寸劇とも呼べない代物を披露するもしんとした空  
気の中に女の声、空しく霧散するだけだった。

「いい加減かくれんぼ止めて出て来てくれないとわたしが痛い女と思  
われるじゃないー！」

……………。

「せめてツツコミぐらいいれてよオーー！」

……………。

誰かしらの声を期待してみせたが望むものは返ってこない。ただ  
静寂が四十女の寂しさを募らせる。

「マジでいないのお……………ん？」

嗅ぎなれた微かな臭気を嗅ぎ付け臭いの下へと差し向う。

「これは……………」

目にしたのは呆れるほどゴミの集落と化した空き缶や空き瓶と食  
ベカスのついたトレー達。

中身は当然のことながら無いが元となったのはアルコール類にほ  
かならない。

鬼を殺す日本酒や温泉水を使った焼酎、サラリとした紙パックの梅  
酒は当たり前。他にも生やドライを謳う金色にレモンやライム、桃に  
ブドウ、グレープフルーツのストロング系の缶。

果ては白いラベルに緑の文字が印字されたアルコール度数が96  
度の瓶。

醸造酒、蒸留酒、混成酒、とより取り見取りの墓場を前に飲むなら  
自分も飲みたかったと涙ぐむ静音。その集落の内から絶対に忘れる  
ハズのないボトル達を見つける。まさか空いてはいないだろうと僅  
かな希望に藁にも縋る思いで手に取り確かめるが――



を嗅ぎ取る。

「あら、いるじゃない」

金色の双眼がより一層の輝きを増し、匂いの元へとその場から消える。

「ああ、飲み過ぎた」

「飲み過ぎた、じゃないわよ！ 静音の分まで飲んじゃってー」

呑気にゲップをかます半裸にパンツ一丁スタイルな男の隣でフアンタジー然とした修道服を着た赤髪の女が頭皮に編み込んだ——コーンロウヘアの男を見上げるように苦言する。

若い二人の男女。どちらも両手にはギチギチに詰められたコンビニ袋で塞がっていた。中身は缶、瓶、紙パック——つまりはアルコール類なのだがどう見てもアルコール臭とともに不審者臭を醸し出すこの飲兵衛ども、あろうことか水を買っていない。

それもその筈。持参した酒を飲み干したのだから補充することにはか頭が回っていないのだ。買い忘れたことなどつゆ知らず、二人はゴミの集落へと足を運び続ける。

「お前だつてえ、チヨオオオット頂☆戴、つつつて一口のハズがコップになみなみ注いでたじゃねえか」

「アンタがあんなに美味そうにオーバリアクションすれば誰だつて飲みたくなるわよ！」

ジロリ恨めしそうに小言を吐くと本来話すべき重大な、こと命に係

わる話に戻すため赤髪の女は軽々しい口調を止め、真っ直ぐに半裸男の目を見、言葉を続ける。

「それより、本当に誤魔化せるんでしようね？」

「まあ、大丈夫じゃね？ あのオバサン、なんだかんだ求めてるのは質より量だろうし。偽装した酒を飲ますにしてもちゃんぽんしてから飲ませりや味なんてわかりやしねえよ」

怪訝そうに顔を向けてくる修道女を余所にブツの入ったコンビニ袋を持ち上げ、誰に見せるワケでもなく白い歯とともにしたたり顔を晒す。

半裸男のプランはこうだ。

予め本命の空きボトルに買ってきたコンビニで一番高い酒を入れ栓をする。その前にはシャンパンタワーの如くピラミッド状に残りの酒を陳列する。なんやかんや言って安酒を飲ます。程よく酔い始めたら本命を飲ます。

なんということでしよう。匠の偽装により味音痴のオバサンはそれが高級酒から安酒に変わったと気付かない。

「ふっ、完璧だな」

……などと思い描いてはいるが所詮は一人で描くペーパープランゆえガバガバなのは誰も指摘できない。

「なにが完璧よ。そのおかげでアタシの財布すっからかんなんですけどー」

「職無し宿無しの身にたかるなんていつの間にかオマエも随分金欲まみれに成長したよなあー。あつ、支払いはノアに回しておいてくれよ」

「どう言おうとツケはチャラにしないわよ。それと、一旦スルーしたけど静音のことオバサン呼びはヤメテ美魔女って言いなさいよ。一

度死んでるとはいえああ見えて肌のハリとか小じわとか気にしてるんだから」

「ハイハイ。そういうのまだ気にするような歳でもねえのに。女のそういうところ全く理解できんわ」

「アンタが女心を理解したら世も末よ」

「そりやそうだ」

「ホントそうよねえ」

二人が言い終えたところで言葉とともにガシツ、と逃がす隙を与えぬように二人の首に腕を絡み付かせ静音は真つ直ぐと見据えて同調し出す。音も無く声もかけることなく捕縛したのだから二人の会話する内容を聞いていたに違いない。チラリと視線だけを向けても愛嬌も何も感じさせない真顔が遠くを見据えている。

激昂しているワケでも不興に満ちた顔でもなくただ無表情に、ただ真つ直ぐと景色を見ているだけだった。

この様子だと黙って酒を飲んだことに気付いているな。

声の冷淡さといい締める腕の強さは増していく。付け加えると男と同じく締め上げられた女は背の低さもあつてか視線が男と同じくらいまで上っている。

これは確実に激怒している。何せ怒りの主たる静音の双眼はかつてないほど金色に輝き、男女の首には緑の結晶体が徐々に徐々に覆うように浸食してくる。

ヤバいな、ここは――

「はははッ！」

笑って誤魔化すか。

「……………」  
「……………」

僅かばかりに訪れた静寂に自然も風を吹くのを止め、鳥は羽ばたかず、虫は鳴くのを止めて空気を読んでくれた。お陰で三人は音無しの世界へと入り込む。

これを千載一遇のチャンスと判断し、囚われの半裸男と修道女はアイコンタクトで示し合った。今だ、と。

「あー用事思い出したから一旦拠点先に戻るわ」

「アタシも化粧直してくるわ」

「ちよつと待ちなさい」

だがそれも元の木阿弥。

ギリギリ……………止まっていた時間とともに腕が締まる強さと結晶体の進行は動き出す。

「あなた達わたしに何か言うことはなあい？」

「ナ、ナ、ナンノコトデシヨウ」

「白を切るつもりかしら」

「いやあ？ マジでなんのことか……………」

しらばつくれようと言葉を濁すが男の額にはダラダラと脂汗が酔いとともに流れ出す。さらには視線を背ける素振りからこの発言は嘘だと確定したようなもの。さあ、どう誘導しようか。

悪巧みを思案しているともう片方の腕から言葉が漏れる。

「静音に黙ってお酒を飲みました……………」

「あッ!? てめえなにゲロってるんだ」

「煩っさい！ アンタと違ってワタシはこんな事で死にたくないのッ!!」

「偉いわく。『ピオ』、ご褒美にあなたは最後に殺してあげる」

「ちゃんと自白したじゃないッ!!」

「誰が自白したら無罪だって言ったのかしら? 大切に育てた45年モノと滅多に手に入らないプレミアムを断りもなく飲むなんて私刑、いえこれは死罪……万死に値するわよね?」

「ヒッ!」

グルリ、と関節の可動域を無視した静音の首がピオと呼ばれる修道女に向けられる。先ほどまでの金色の瞳はどこえやら。目と目が合った瞬間、ハイライトの消え失せたその瞳で修道女を凝視し続け――

ヤバいやババ! これマジな時のヤツだ!!

――言葉は繋ぐ。

「わたしが飲むハズだった酒を飲んだこと、わたしが食べるハズだったまみを食べたこと、終いにはバツイチババア呼びしたこと、ついでにわたしの酒を飲んだことその全てを胃から吐き出してもらおうよ」

「中央じゃあるまいし、そんなホイホイおいそれと吐けるかよ」

「さつきまで飲んでたんだから子供のお使い程度には簡単でしょ………ん? 何でここで中央? え……なに、ひよつとしてあのバカまだ生きてたの? てつきりわたしと同じであの時死んだと思ってたんだけども」

酒飲み、酒乱、上戸……心当たりある武芸者どもは大勢いるが半裸男も自分も死人に対して感傷に浸るタイプの人間ではない。精々、口には出さず記憶のどこかその辺に追いやるだろう。ならば当然挙げるのは生者の誰かだろうがまさか中央だとは思ってもよらなかった。

戦になれば師共々我先にへと戦場に突っ込むあのバカが、生きている。敵の首級くびを獲ることよりも一体でも多く、一秒でも長く戦いたがるあのバカがだ。

やだ、ちよつと、楽しみ増えちやつた――

「――じゃない」

「アイツがそう簡単に死ぬタマかよ。バカは死なねえって言うだろ」「バカは風邪引かない、でしよ」

予想外の事実にも口の端を吊り上げては凡そ善意とは真逆の邪悪な笑みを浮かべる。流石はアレの弟子。いや、『よもひろ東西南北の血筋』と言うべきか。人生一度ぐらい死んでみるものだ。

などと自分の世界に入り込み、半裸男と修道女のやり取りは馬耳東風といった具合で静音の耳には入らない。

「よかったわねあなた達、また三バカ名乗れて」

酒の事などどうでもよくなる程静音の心は晴れ晴れとした。殺し合いを楽しめる相手が新木あらき 聖ひじりの他に増えたのだ。幸先のいい、実に上々上々。そのお陰で半裸男と修道女も漸く解放される。

「ぐえっ！ チョット！ なんでバカの中にワタシも含んでるのよ！」

「いいじゃねえかアル中イコールバカの図式で。当たり前のように毎日こんだけぐ飲みしてりゃあ頭も肝臓もバカになるだろ」

突然放された所為で尻餅をつく修道女オと首に手を当てる半裸男。痛たたた……と臀部でんぶを摩り、悦オに浸る静音を見上げ文句を口にし、半裸男はそのまま首を摩っては答える。

「毎日じゃないわよ！」

「そんなこと言ってるが酒瓶を抱き枕代わりに抱えて寝てるじゃないか」

「レデイの就寝姿見るなんてサイテーね」

「こんなな身体中血生臭いヤツがレデイなんて名乗るかよ」

「失礼ね、こちらはまだ二十代！ うら若き乙女！ レデイよ!!」

「もう面倒だからいつそのこと、世界四大バカと名乗ればいいじゃない」

次から次へと言葉のラリーが返されるもそのやり取りが飽きたのか横やりが入り中断する。

「なによ世界四大バカって」

「いいねえ、世界四大バカ。オンリーワンって感じがして」

——カチツ、パコツ。

ガサゴソと袋の中から取り出した180mlの広口瓶の金属蓋を開ける。

「よくないわよ。ただ単に軽蔑されてるだけじゃない。バカなんじゃないの?」

——カチツ。

修道女も同じように取り出したワイン瓶の底を握り、スクリュウキヤップを捻ると示し合わせたかのような絶妙なタイミングで男女の喉は潤う。

「いいじゃねえかバカで。同じバカでも飲まなきや損損」

「それは踊る阿呆に踊らぬ阿呆おなじ阿呆なら踊らにやそんな、の間違いではないですか?」

阿波踊りの歌詞では、と金髪の壮年が声を掛けてくる。

「あら、あなたも来ちゃったのね詐欺師クソ野郎」

——スパンツ——プシユツ。

一秒たりとも目にしたくない男を目しては露骨に悪態をつくと手刀で瓶の飲み口を吹き飛ばし、時を移さずステイオンタブを引く音が鳴る。

「なんだ結局アンタも飲みに来たのか。でも残念だったなアンタに飲まず酒はもう無いんだ」

相手から紡がれる言葉を待たず半裸男——ハジメは缶底を空に向け一気に飲み干す。

「……………やれやれ、まさか早々にこの有り様とは嘆かわしい。来て正解でしたよ」

「い、言っておくケド、コレはワタシの所為じゃないわよ！勝手に飲み始めたのはコイツだし、次から次へと開けたのもコイツ、大丈夫大丈夫って何の根拠もなく飲み干したのもコイツ」

誰に言い訳しているのやら。既に大口を開け広口瓶についた最後の一滴を舌で受け止める半裸男ハジメを指差し、チラチラと静音を見やつてはノアへ自己弁護を申し開く修道女オ。

「でも、飲んでしまったのですよね？」

「うゝっ……………」

「そもそも大半の物を買って持ち込んだのも、アナタなんですよね？」

「うゝうゝ……………」

「ちなみに最終的には耳元でステイオンタブの開ける音を聞かせたらものの見事に堕ちたぜ」

「あれはASMRとタメを張れる音だったわね……耳から全身へと駆け抜ける衝撃。まさに脳が欲し求めたもの」

表情は静音とは違った圧を放ち、じりじりと言葉で迫るノアに修道女は後退る。

やはりこの男との口論では勝ち目がない。どう謝罪すべきか言葉を選んでいくとハジメからの援護射撃が思いもよらぬ形で自白をさせせてしまう。

「いい歳した大人が揃いも揃ってこの体たらく……恥も外聞もないとはまさにこのこと。アナタ達には恥の念というものがありませんか?」

やはり期待すべきではなかったか。これ見よがしに嘆息して到ってシンプルな質問を投げかける。

「オレは始めからないな」

「死んでからは一欠けらも無くなったわね」

「体面なんて気にしていたらこのご時世で武芸者なんてやってないわよ」

ああ、もう犬に論語。分かり切った回答が同時に返ってくるの事など分かり切っていたのにどうして、ああどうして質問を投げってしまったのか、聞いた自分が愚かだった。

これは今一度三人の認識を改めさせなければならぬ。

「揃いも揃ってどうしようもないクズですね」

「アンタに言われたくはないわな」

「アンタが言うな」

「流石今世紀最大のクソ野郎、特大のブーメランを投げるわね。それで、わざわざそのくっさい息撒き散らしに来たワケじゃないでしょ。サッサと要件言いなさいな」

わざとらしく鼻を摘み、もう片方の手でシツ、シツ、と犬を遠ざける仕草を向ける。

「ええ、ええ。言いますとも」と、そう言つて一呼吸した後、人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げると先ほどまでの落ち着きは打つて変わりだす。

それは突として訪れもたらされた静寂。

ブリッジから離れた指先が地面を向くのに呼応し、ひんやりとした風がさーつと木々を揺らし身体をすり抜ける。

「東西南北 中央と百合園 小百合、そしてその関わるモノ達と接触、各々で力量を図り出来得る限りコチラに引き入れろ、そう『上』からの命令です。」

「中央はアンタが見てきたんじゃないのか?」

「目にはしましたよ。しかし互いに剣は交えてはいませんか。交えていない以上にはどう取り繕うとも周りには身最真に聞こえてしまう。まあ、こればかりは仕方ありませんね」

「なら中央とその周辺のヤツラはオレがいかせてもらおうぜ」

コレばかりは誰にも譲れない。新たに空けた発泡酒を空にすると握り潰し手の甲で唇を拭うと定めた標的の名を口にすると

「ええ、この中だと彼と仲の良きアナタが適任でしょう」

「……………」

無言は肯定。誰も異論を唱えずよしとする。では残る百合園 小百合の相手は――

「じゃあ、小百合はあなたが行きなさいな」

推薦人として静音が赤髪の修道女に視線を向けて口を開く。

「アンタはどうすんのよ。例のS装備とかいうのも持ち帰らずこのまま帰る気い？」

「そんなワケないじゃない。今はまだ様子を見る必要があるってだけ。手に入れるなら完成品を手に入れたいでしょ？ だからそれまでの間、わたしは新人の付き添いをしてくるのよ」

「新人……ああ、そういういえばそいつも刀使だったわね」

「未成年者なんだから保護者がついていないとね」

「そう言つて暇つぶしにその新人とイチャつくつもりなんですよ。ヤメテよね、コツチはただでさえ小百合リッリイの相手しなきゃならないのこれ以上の仕事を増やすのは」

ぶんすかとふくれっ面を晒し訴えかける。

「いいじゃねえか後処理ぐらい。どうせ目撃者を軽く消すだけなんだから」

「小百合リッリイじゃないんだから隠蔽するのにどれだけ苦労してると思ってるんのよ！」

ゴクツ、ゴクツ……………

「ぶはあっ！」

冷蔵されてから外気に触れて時間が経つとはいえ口と喉を潤おすには十分な冷たさ。これから背負い込むであろう苦労も吹き飛ばすというものだ。

「……いや、やっぱりワタシが行くよりもノアが行けばよくない？  
変装するなり何なりして」

口と喉が冷えたお陰もあるだろう。酔った思考も冷め、ふと冷静に

考える。小百合との戦い。どうやっても無傷とはいかなくなるのは明白だろう。そこからプラスしての隠蔽行為。何より他のと比べて仕事量が多い。

「彼女の許に行けば必然的に『彼』に遇ってしまうのもありますが立場的にワタシは不味い、と言うよりもバレればあの二人——特に『女史』の方は不要と判断し容赦なくワタシを切り離すでしょう。誰も彼も逆鱗には触れたくありませんよ」

「違えねえ。オレもパスだわ」

「わたしもパス。いくら何でも勝てる気がしないわ」

続々と早々に辞退という名の拒否が出てしまい必然的に出遅れた修道女シオが小百合の相手を務めることになる。拒否するのをしなかったのだ、仕方ない。

「というわけでアナタには人柱になってもらいますよ。異論はありませんね?」

「大ありよ。ワタシもあの二人とは顔見知りなんだから問答無用で殺さるわよ!」

「了承も得たことですし、では皆さん——」

そう思うのは当の本人を除き三人だけでやはり納得などできるはずもないが……。

「ちよっ! まだ了承してな——」

「開始はじめしましょう。人類の為——自分達の為に思う存分、なすがままに」

次回、刀使ノ武芸者—修羅流転録

第25話 一触即発前 —其ノ壺—

## 25. 一触即発前 ―其ノ壺―

「――つつうワケでえ、来たぜ」

とある外食チェーン店。

六人席の空いていた席へ勢い良く割り込んで着席するとテーブル席の端で汚く井ぶりをかっ食らう女装男おとこ――東西南北よもひろ 中央なかおに對面席で向かい合い、ハジメは凡そ2年振りとなる言葉を交わす。

今さらだ。このバカに遠慮などいらぬ。

手にしたタブレットからメニューを手早く選んで戻すと中央のお冷を搔つ攫つては喉を潤おす。

「何がつつうワケだボケ。意味がわからんからさっさと失せろ」

白米を頬張りながらシツ、シツ――と隣に座る三人の視線が集まる中でも不快感を催した顔でぞんざいにあしらう。

「そう嫌がんなよ。いいじゃねえか、減るもんじゃねえし。それに久しぶりだろ？ 面子は違うにしてもこうして一緒に飯食うのは」

「イラついて余計に腹が減るわ」

そう言いながら中央の箸は休む暇もなく進む。

一心不乱に牛肉、玉ねぎ、唐揚げ、そして白米を口中調味で胃に押し込むがその途中、にわかにタブレットを操作し出す。

「……………キミの知り合いか？」

「知らねえ、ただの住所不定無職の不審者だ」

要らぬ来訪者に食欲が増した所為で尋ねた真希に目もくれず答えた。しかし、中央がこうも露骨に毒突くのは以外だ。

この反応から知り合いであるのは間違いないのだろうがトゲトゲ

しい雰囲気にも包まれ、否応なしに真希達の箸は止まったままだ。

「ガキの頃から互いに切磋琢磨してきた仲なんだ知らねえワケねえだろ」

「こう言っていますわよ?」

「知らねえ」

「……………とてもそうには見えませんか?」

「知らねえ」

「なんでそう強情になるかねえー。自分の過去を黒歴史にでもしてえの? だがそんなもん変わりやしねえぜ?」

言葉が一区切りするとタイミングよくお盆を持った定員が近付いてくる。無言の中央は空になった丼ぶりを定員に差し出すと御代わりの丼ぶりを受け取り黙食にいそしむ。

次いで注文した定食を今度はハジメが受け取り、箸入れから取り出しておかずを摘まむ。

「どういった御用でしょうか?」

中央の言う通り夜見達にとっては未だ素性の知らぬ相手。だがそれ以上にこの男が来た目的もまた不明のまま。物怖じすることなくいつも通りの無表情さで初対面の男に話しかける。

「ちよつとした野暮用ってやつだな。お嬢ちゃん方は席を外してもらえると話がスムーズにいくんだが。どうせこのバカ自分の身の上話なんて喋ってねえだろうしよ」

「野暮用?」

「今さら用なんてねえだろ」

味噌汁が入っていたお椀が音を立てトレーに置かれる。こちらにはこれ以上会話する意思はないぞと意思表示のつもりなのか中央の

口の中に牛肉が運ばれる。

「それでもないさ。スカウトしに来たんだよお前達を」  
「スカウト？」

普段なら不用意に口を挟むことを控えているところだが見知らぬ男からの聞き捨てならない言葉に思わず寿々花はオウム返ししてしまう。が、発言した本人も気付かないのを他所に見知らぬ男は言葉を続ける。

『間陣』のオツサンから命じられてな。どうしてもお前をウチに引き入れたいんだとき。理由は言わんでもわかるだろ」

その名を耳にすると忙しく動いていた中央の箸が突として止まり、持ち上げていた丼ぶりがテーブルに近付き咀嚼も止まる。まだ胃が満たしきらないにもかかわらず。

だがそれも間を置かずして喉を鳴らし、口を開く。

「あの戦いで生き残ったからか？」

「オレはてつきりそのままぽっくり逝くと思ってたんだがな」

「早々楽に死ぬるかよ」

そう言つてケタケタと笑いながらもハジメは箸を進め、中央も胃を満たすことを再開する。

遅かれ早かれいずれ来るだろうと踏んでいたことだ、別段驚きはしない。

だが袂を分かった奴に声をかけるのだハジメの話しに乗れば当然、いや必然的にあの二人を敵に回すことは必至。人類の存亡やら大荒魂の問題など自身には関係などなくなってしまう。

欺き、裏切りという行為を働いたモノの末路。

それ即ち——死。

だがまだ死ねない。死ぬべき場所はここじゃないし、闘う相手はヒトではない。

だから返答はこう答えてやろう。

「じゃあ、来るか？」

幾度目かの咀嚼の後、ハジメの目の前で箸を握りハッキリと瘥けいれん攣でもしそうならいに右中指を立てる。

「そんな拒絶すんなよ。これはチャンスだと思わねえか？ オレらの下に来れば二年前の意趣返しができるんだぜ？ それにオツサンの下には各国から選りすぐりのバカ共が集まるし『島』の連中とも共闘できるんだ。二年前の様にごっそり抜けた状態で戦うワケじゃねえし、数も質も比べ物にならねえハズだぜ？」

「クドイ」

色々と説得しようとしているが中央の答えは変わらない。今度は拒絶の形を声に変えてみせる。

「じゃあ仕方ねえ。力尽くでわからせるしかねえよな」

するとハジメはアプローチを変えたらしくわざとらしい嘆息を零し言葉を続ける。

「あくあ、折角穩便にいくと思っただがな」

「なら次いでだ。付かなかった昔からの決着も兼ねてやるよ」

「フツ、いいぜえ。あのまま白黒ハッキリさせずに終わっただ。俺もそれは望むところだ」

中央とハジメ、武芸者同士の視線が衝突する。

沸き上がった闘志は固唾を？むだけだった蚊帳の外の三人にもそ

れは伝わり、漸くことの顛末を理解し出す。決着と言ってはいるが始まろうとしているのは決闘。真希達三人は中央の力の一端を目にしている。恐らくこのハジメという男も中央と同じ強さを持つのだろう。身体の奥底からそれは感じ取れた。だからこうと確信を持つ。

これは——殺し合いになると。

「オ、オイ中央、なにを勝手に……………」

「心配すんな三分で終わらす」

「そんなインスタント麵を作るみたいに……………」

「だがその前に」

「ああ……………」

呼応しそれに頷くハジメ。両者の口が一齐に開き同じタイミングで声が発せられる。

《box: absolute (0/0), z9》「定員ッ！ 御代わりまだかッ!!」  
だかッ!!」 「定員ッ！ 御代わりまだかッ!!」

《box》

注文を忘れた二人の強い語気その日、店内で幾度か食器の割れる音が厨房の方で鳴ることになったことを中央達は知る由もない。

次回、刀使ノ武芸者―修羅流転録  
第26話 一触即発前―其ノ式―

## 26. 一触即発前 ―其ノ式―

「本当に送って行かなくていいの？」

「別にええで、少しやらなあかん事が出来ただけやから。それに貴様も疲れたやろ。サツサと帰って休みや」

厚い雲に覆われた中、プレジチャーボートからコンクリートの地面へと足場が変わる二人の女性。

長く続いたデータ採りも終え、とあるマリーナに戻り隣にいるヒルデガルトへと小百合は意を介すがそんなものは無用と言わんばかりに碧眼に映った漆黒の髪に目を背け、ひらひらと手を振る。拒絶ではなく単に自分のことは構うな。そういった意思表示を込めているのだろう。

「貴女がそれで良いのなら構わないけど………」

「コレなら気にせんでええで。色々とやらかした分ただ働きさせるだけやから」

ヒルデガルトの肩に担がれグーグー、と然程大きくもない寝息を立てる聖。<sup>ひしり</sup>

来た道中と同じようになおも夢の中へ深く潜り込んでいる。

「まあその子の自業自得だし私からは特に言及する気はないけど。貴女も無理しちやだめよ」

「言<sup>ゆ</sup>うたやろ？ もうはしやいでいい歳じゃなくなったて」

「そうだったわね。じゃあ、その子のことお願いね」

「ああ。貴様も気を付けてな」

「ええ」

牽引車としての役目を終えたクロスカントリー車を見送ると取り出したスマホからある人物へと連絡を入れる。

「もしもし紗南さん？ 今戻ったで。そうや、先にメールで伝えたS  
装備、それと——外のことについてや」

通話相手は長船女学園の代表者たる真庭 紗南。

事を運びやすくするためヒルデガルトは既に彼女へと海上で大方  
の用件を伝え済ませていた。

「小百合は一緒なのか？」

「あ？ ちやうちやう、あんな状態で付き合せたら過労死させてまう  
わ。かと言つて一人やないでオマケも一緒や……バレても問題ない  
バカや」

小百合以外でヒルデガルトと行動を共にする、且つ彼女のバカとい  
う発言からそれは考えるまでもない。直ぐに理解したとスピーカー  
越しからその当人の名が短く発せられる。

「聖か？」

「せや」

「わかった。今日は私も長船にいるから着いたら直で学長室こっちに来てく  
れ」

「了解」

—— 街道 ——

信号機が黄色から赤色に変わったタイミングで小百合が走らすく  
ロスカントリー車が交差点を通過する。普段の彼女であれば停車す  
るのだろうが今日ばかりはそうはいかない。睡魔が襲ってくるのも

あるがそれよりも理由は別にある。

天地あまち 静音しずね。彼女が生き返ったこと、それこそが小百合が法定速度を超えてまで急ぐ理由。

このことを『彼』、そして『彼女』に伝えなければならぬがしかし、伝える為には自分が持つスマホでは連絡が取ることが出来ず、唯一の手段が美濃関学院——その施設内に構えた拠点にある。故に小百合は美濃関学院へと戻るため急ぐのだが距離も時間も節約できるインターチェンジはまだ先の先。

焦りはダッシュボードのスピードメーターの針が示している。

一分一秒でも早く戻りたい。強張った身体からハンドルを握る手に一層力が入る。

だがふと速度違反自動取締装置オレビが目映りそれと同時に聖の顔も思い浮かぶ。

「ふう……」

速度超過は後々面倒なことになる。聖で嫌という程思い知らされているではないか。徐々にアクセルペダルを緩める。

一度休憩した方がよさそうね……冬眠打破、あつたかしら。

減速しつつもその速度は猛スピードと呼べるほどにまだ速い。

コンビニのサイン看板を目すと左の歩道に渡ろうとする猫を蛇行運転で避け、タイヤが歩車境界ブロックをギリギリでかすめるとパーキングブロックの数センチ手前でクロスカントリー車は急停止する。

「ウオツ!?! なんだ!?!」

「What!?! 何ごとデス!?! ……アレ? サユリン?」

車から降りると見覚えのある金髪の少女が御刀を佩刀し聞き覚えのある声と渾名で小百合の名を呼ぶ。

「古波蔵さん？ それに益子さんもこんな所でどうしたの？」

ドアを閉め振り返るとつい先日あった二人の刀使の少女達。  
古波蔵 エレンと益子ましろ 薫かおるの二人、そしていつも薫と一緒に荒魂——  
ねねがいる。

「オレもエレンも荒魂討伐の任務に駆り出されてな」

「その帰り道デス！ 決してサボりじゃありませんヨ？」

「そう、お疲れ様。何か飲む？」

そう言つて小百合はおもむろに財布を取り出す。キヤツシユレス  
決済でもよかつたのだがこちらの方が意図は伝わり易いだろう。

「いいのか!？」

おかげで思いの外、薫が目を輝かせて食いつく。

「私も一仕事終えたばかりだから、その次いでよ。何がいいかしら」

「エナドリ！」

「抹茶ラテがいいデス！」

「ねねさんは何がいい？」

ねねの目線に合うよう屈む小百合。

「ね——！」

「……………」

返答が戻ってきてきても案の定、何を言っているのか分からない。表情  
から察するに喜んではいらぬのだろう、少なくとも怒ってはいないこと  
は確かである。

自分から訊いておいてなんだけど、やっぱり何を言っているかわからないわね。

「あー、コーラがいいって」

「この子炭酸系大丈夫なの？」

「今までに何回か飲んだことあるし大丈夫だろ」

小百合の中で荒魂に対する知識が新たに更新される。

350mlだともいだろうし160mlミニサイズなんてあったかしら。

手早く目当ての商品をレジに通し、それぞれが所望するドリンクを二人に渡す。

以外にもこのコンビニでは160mlを扱っていたお陰で短く切ったストローを缶にさすとねねも破顔した顔でそれを受け取った。

「かあー！ 生き返るー！ 五臓六腑に染み渡るー！」

「ねーねー！」

「そんな大袈裟に飲まなくても」

「ネネまでマネして。その言い方だとビールを飲んだ中年オジサンみたいデスヨ」

エレンの指摘したとおり薫とそのピンク色の頭髮に乗るねねはテレビCMでよく見るテイスティングの誇張表現をそっくりそのままの素振りで見せる。

薫とねね、それぞれが舌先と喉ごしに染み渡らせた。

「いいだろ、実際身体に浸透してるんだから。改めて、ゴチになります！」

「ねー！」

「そういう事は子供が気にしないの」

そう留意すると小百合自身も50mLの小瓶からカフェインを喉へと流し込む。睡魔から覚醒させるのが目的である以上やはり舌に残る薬品染みた苦みは如何ともしがたい。

「サユリンはもう帰っちゃうんデスカ？」

「ええ、徹夜明けだったから」

「えッ!? それは引き留めてしまって申し訳アリマセン……」

太陽のような明るさはどこえやら。頭部に生えた金色のアホ毛とともに申し訳なさから見る見るうちにしゅんと意気消沈しだす。

「いいのよ休息するつもりでここに立ち寄ったのだし。それよりもこっちこそ引き留めてしまったわね。時間大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。次の授業に遅れなきや問題ない」

「そう、ならいいのだけれ——」

突如としてそれを小百合は察知する。

肌だけではない。漆黒の髪に、爪先に、払っても払っても直ぐに纏わりつく……とにかく小百合にへばりついた視線を体全体で感じ取った。見知らぬ誰かではない。これは覚えのある視線だ。他人に悪意をぶつけることに躊躇しない……いつも、すぐそばで感じていた視線は——

アンナ……？

その名とともに脳裏に浮かぶ記憶にあった少女の像。

ゆっくりと、だけど恐る恐るではない。彼女が確かにここにいる。そう確信を持ってコンビニの敷地内から道路へと——反対側の歩道を越え——それを確かめるように向けた視線が気配の送り主と交わ

る。

瞬間——見開くセピア色の瞳は二年前と何一つ変わらないままでいる赤髪の修道女——『アンナ』の姿を映す。

「どうしまシタ？」

なんで、ここに……。

エレンの尋ねる声も小百合の耳には入らず彼女の意識はアンナに奪われたまま。

互いに認知したところでアンナはニヤリと口角を上げるとすぐさま駆け出してその場から立ち去ってしまう。

「——ッ」

声をかけようにも離れ過ぎているし何よりアンナの姿は脱兎のごとく走り姿を消してしまった。

普段の小百合であれば何か企みがあるのは明白だろうとアンナの行動に疑いの目を向けるだろうがしかし、今の小百合は不眠と溜まる疲労の所為で正常な判断は無いに等しい状態。

であれば彼女の取るべき行動はただ一つ。アンナを追い駆けるべく車内から御刀——七支刀を取って佩刀し、ロングカーデイガンを羽織る。

「荒魂デスカ？」

何も言わず佩刀した小百合を目し、エレンはスペクトラムファインダーを立ち上げるがその反応はない。

「いないな」

自分のスペクトラムファインダーを立ち上げるよりもすでに確認している相棒エレンのを見る方がはるかに速い為、薫はひよつこりと隣で覗き見る。

「ただの私用よ。それよりも貴女達は早く学園に戻りなさい」

「ワタシたちも手伝いま……ス……ヨ……」

最後まで言いかけるも既に小百合は豆粒に見えるまで小さくその速度はまるで迅移並み。

二人の少女と一匹の荒魂ベットは走り去る小百合を見送るしかなく、呆然と立ち尽くす。

「……どーする？ この前の任務の時に羽織ってたカーデイガンも着てたし結構ヤバめな事か？」

「シー、ソウデスネ。これは気になりマスネ。荒魂ではないことは確かデスがああも焦っているのを見ると只事じゃないデスヨネ」

「しゃーない、じゃあ決まりだな。面倒だけど」

「ねー！」

残りを一気に飲み干す二人と一匹。そのままゴミ箱へダストシュートする。

—— とある公道 ——

アンナを追跡中幾つかの妨害に小百合は遭ったものの内容は至極単調で、よくある洗脳された人間による襲撃。修羅との戦闘に比べれば待ち伏せ——それも一般人が数人程度なら苦も無くあしらうなど造作もない。そうして、アンナとの距離が近づく。

「ハア……ハア……」

息を切らして彼女の見慣れた足跡に染みついた血の匂い、不快な空気を頼りに道中を辿ってきた。しかし、どれもがわざとらしい。この程度の情報などなくても辿り着けるがそこまでしななければならない程……それ程まで嫌悪の情を抱き下に見ていたのか。だから私達の元から去ってしまったのか。

所々空白が目立つビルのテナント看板を通り過ぎ、バリアフリー化された玄関ドアの前で止まる。彼女のやり口は今でも覚えている。その性格も。だから入って直ぐに罠に嵌められることはなく、こうやって時間をかけて呼吸を整え、ゆっくりと一歩ずつ進むことができる。

「……………答えて、何故ここにいるの」

玄関ドアがスライドするのを終えて漸く、かつてのパートナーと再会を果たす。

「——アンナ」

エントランスホールの中央で待っていたのは赤髪の修道女。鼻歌を交じらせては飽きもせずその場で幾度もつま先立ちを繰り返しては必ず来るだろうと確信を持ち、今か今かと待ち人を気長に待っていた。その甲斐もあってか待ち人——小百合から久々に聞く一声でクルリと振り向き、不敵な笑みを見せる。

「あら、感動の再開を果たしたのに開口一番に出る言葉がソレエ？ 随分と薄情な子ね。もっと気の利いた言葉はないの？ え、ない？ もうしようがないなあ〜ドラマやアニメからのセリフの引用でも我慢するから玄関のところからハイ、リテイク！」

「真面目に答えてッ!!」

弾む声をかき消したのは子供が駄々をこねるときのような大声。発声先の小百合は整えたはずの呼吸も綺麗だった漆黒の髪とともにかき乱されている。

「まあ、余裕ないのも仕方ないか。いいわよ、ワタシとアンタの仲だもの教えてアゲル」

無邪気さを残してはクスクスとどこか可笑しそうに忍び笑うが上がった口角は一瞬で消え去り、一転して表情は凍り付き散瞳する濁った青で小百合を凝視するとアンタの口から次いで言葉が発せされる。

「参謀として様子を見に来たのよ。もちろんアンタの今をね」

「参、謀……?」

「アレ? 言ったことに対して脳の理解が追いついてない感じ? 珍しいわねアンタにしては。それともワタシの言葉を疑ってる? アンタと同じ位の力量なのにその地位にいるのはオカシイって」  
「どういう、こと……?」

アンタは何を言っているのだろうか。ただ一つ言えるのは理解してしまえば想定していた最悪の事態が訪れるということ。

「アゝララ、ホントに混乱しきってるわねコレ。なら脳ミソが理解できるように伝えてアゲル。立ち上げたのよ新しい流派を、その当主たる『間陣』の下で」

「間陣さんが……立ち上げた? そんな、どうして……」

「どうしてって、そんなの決まってるでしょ」

そんなことは言わなくてもわかっている。知りたいのはそこじゃない。

「ワタシたちは武芸者。戦うことが存在意義であり、存在証明のために戦う」

「戦う……?」

今さら何と?

「決まってるじゃない。奴らと、2年前アンタたち残留組が仕損じた……アイツら『天魔』どもとね」

「戦うって、今さらどうこうできるわけないでしょ。大体『人類軍』も今は立て直している最中よ。どうやって戦うつもりなのよ?」

「さあ? そこは間陣と参謀長サマが考えること。ワタシが口を挿むことじゃないわね。まあ、どんな状況になろうとも最後まで戦うだけよ」

何をぬけぬけど。

「戦って、戦って戦ってぐちゃぐちゃに潰して引き裂いて八つ裂きにしてやるだけ」

理由も言わず勝手に去ったくせに……。今度も勝手なことやって……!

「真面じゃない、真面じゃないわよ貴女……!」

予期せず握られた拳からギユギユ……と音、そして血が漏れ出す。童心に帰ったように楽し気に破顔するかつての戦友を見て小百合の奥底から沸き上がるどす黒いナニカに染まろうとするが小百合自身はそれに気付かない。

——ピチャ

——ポタ

——ピチャ

垂れた雨水のように塩ビタイルの床に血液が沈む。時折それが跳ねて靴に付着するがそんな些細なことなどどうでもいい。しかし、アンナはそんな小百合の心情など察することもなく言葉を続ける。

「何で？ 何がイケないの？ まあ分からないでしょうね親もいて、住む場所もあって、食べることも困らない、今日すらどうなるかわからない……………アンタじゃワタシ達の気持ちなんてさあ……………!!」

今度はアンナが握り拳を形作る。

「戦いでしか生きる術がないんだからいいじゃない。それとも何？ 初めから何でも持つてるアンタが否定するの？」

「待って、別に貴女を否定なんてするつもりは——」

——バチツ!!!

長めのブーツで踏みつけた床に亀裂が生じ陥没させた。

「アンタの存在そのものが言ってるのよ……………その、目がアツ！ 声があツ!! 子供の頃から憐れむような目で見やがってツ!!! 汚ねえ手でアタシに触れんじゃネエ!!!」

今まで押さえつけていたモノをここぞとばかりにグツと堪え続けた感情が怒鳴り声となり曇らせた表情の小百合に吐き出す。

「……………だから壊してアゲル。アンタの大切な物全部、壊して壊し

て……全部ワタシのコレクションにしてアゲルわ」

「アンナ……」

「ホント、無自覚が過ぎるわよね今でもそんな目をするんだから。でも安心して。お別れを言う時間ぐらいは待つから。サア、ホラ。後ろのギャラリイ達に言わなきゃ。お別れの挨拶を」

「ギャラリイ……達……ッ!？」

コチラ 小百合へ手をと開き差し出すようにアンナは向ける。

この状況で何を言い出したのか、そう思ったのも束の間——手の先から侵入してきた三つの気配に漸く気付き、アンナのことなど失念してグルリと急旋回し背を向けて彼女達へと視線を移す。

「コレどういう状況デス?」

「ゼエ、ハア、ゼエ、ハア……速<sup>はえ</sup>ーよエレン。こっちは柵々切丸、担いでるんだっ、ぞ」

「古波蔵さんに益子さん!？」

感情を吐き出した相手に背を向けるのは迂闊だが当人は宣言通り今はまだ何かをする素振りはない。そのお陰で小百合はエレン達と対面を果たすことができた。

「貴女達何故来たの!？」

「先輩がア………気になっ、ゼエ………からにい、ハア、ハア………決まっつてン………だろオ」

「そちらの方はどなたデス?」

「初めましてー。ワタシはヨハンナ・ピオニー・パイエオン。そこにいる小百合<sup>リッ</sup>の元同門でーす」

「元、同門?」

「その元同門がセンパイになんの用だよ。まさか久しぶりだから挨拶しに来ただけじゃないだろ………お前、なんか禍々しいぞ」

それなりの距離を走り体力も底を尽きかけた短軀だが既に肩から息を吸うのを止め、どうにか普通に喋れるようになる。と薫の言葉よりも先にねねが威嚇をするように唸る。

その矛先のもととなる作り笑顔から醸し出されるのはアルコール臭だけではない。それだけならねねもこうまで警戒はしない。なにか別のモノが混じっている。敵意なら幾分かマシだっただろう。ペテン師のような悪意溢れるモノでまだあればかわいい方だ。

赤髪の修道女から漏れだすモノの正体——それは鉄と腐敗した臭い、即ち……血と死臭。

香水のようにアルコール臭でどれだけ誤魔化そうとしても血生臭さ、それも別段濃い臭いともなれば普段から嗅ぎ慣れている小百合以外でも感じ取れるし今に至ってはそれらに荒魂であるねねと刀使である薫が真っ先に反応を示すなど可笑しなことではない。

「ええ、そうよ。見に来たのよ。小百合リッリィがどれだけ強くなってるのかを。まさか昔と同じまま停滞してるワケじゃないだろうし」

「それで、もしお前の言うところの停滞してたらどうするんだ」

——ッ、これはマズい！

アルコールと血と腐敗が入り混じる中、急速に変わる空気を察知すると同時に小百合の靴底は既に床を蹴り上げていた。

「そんなの、決まっているじゃない——」

次回、刀使ノ武芸者——修羅流転録

第27話 御刀ト西洋槍バルチザン